
明日は晴れるだろ

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日は晴れるだろ

【Nコード】

N2191D

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

天下泰平・江戸時代。江戸っ子たちが泰平を謳歌していたそんな頃、ある発明家が居りました。その名は変迅堂。その名の通り変なモノばかり発明する無粋者なんです。蓼食う虫も好き好きと申しまして、そんな無粋者を好いておる女の子が居りました。その娘の名前はちあき。そんな二人が繰り広げる、ラブコメ風味時代劇、始まり始まり。

第一話「opening」【1】

今日も、江戸八百八町の空は晴れである。

じりじりと輝く太陽がこれでもかと言わんばかりに灼いた道の上を、カランコロンと履物を鳴らして浴衣を綺麗に着こなした女の子が、すらりとしたその体を持って余すように歩いていた。地面を灼く陽光は、見事にその女の子の首筋も焼く。女の子は、手で顔を扇ぎながら、「ああ、あぢいなあ」とつぶやく。ここが往来じゃなかったら、今着ている浴衣をバタバタさせるのになあ、と、同じく道を歩く、どこぞの店の丁稚や職人さんを眺めながら、その女の子はため息を吐いた。

風が、一瞬抜けた。夏特有の湿気を含んでモワツとした風ではなく、爽やかな、ステキな風。そんな風は、女の子の頬をかすめたあと、江戸八百八町に抜けていった。

「やっぱり、風はいいわね！」

そのお淑やかそうな外見とは裏腹に、やけに気風のいいことを言う女の子なのだった。

ふと女の子が端を見ると、道の前に立つ小店の女将と思しき女の人が、打ち水をしていた。少し埃っぽかった往来は、その水によって湿り、土ぼこりが少し収まった。

「へえ、打ち水！ 気が利くってもんだね！」

女の子は、ニコツと笑った。

打ち水というのは、結構涼しくなる。科学的には気化熱を奪うからだ、とか言われているが、それ以上に見た目の涼しさも結構あるのではなからうか。その女の子も、「打ち水」というシチュエーションに、反射的な涼しさを感じているのである。それが証拠に、小店の女将（と思しき人）が打ち水を止めた途端に暑がりだした。

「だああああ、あぢいいいいいい！」

ね？ 言った通りでしょ？

さて、読者の皆様はお気づきのことだと思いが、ここは、江戸の街である。もちろん、現在の時代ではない。社会科の歴史の教科書みたいな表現を使うなら、「江戸時代後期」と呼ばれる時代である……え？ どういう時代か知らない、って？ 大丈夫！ 大体、現代人がイメージする「江戸時代」というのは、この江戸時代後期だからだ。

刺青したお奉行様が講談というメディアで取り上げられてトンドモない人気者になっていたり、歌舞伎がブームになっていたり、それにあやかつて、人気歌舞伎役者の役者絵（今でいう、アイドルのプロマイド写真みたいなもの）がバカ売れしてたり……、とまあ、比較的平和で、現代と似ていないこともない、そんな時代、それが江戸時代後期である。

「おお、ちあつちゃん！」

さて、往来の向こうから、声が響いた。ちあつちゃん、と呼ばれた件の女の子は声のした往来の方に振り返った。

「あ、その野太い声は……火消しのカツちゃんだ！」

ちあつちゃん、と呼ばれた女の子がそう言つと、人が流れる往来から、またもや声がした。

「あゝあ、当たりだよ。……まったく、ちあつちゃんにはかなわねえな」そう呟いて、この暑いのに半纏をまとつて鳶口（先にくちばし状の鉤がある長柄の棒）を持った男の若者が、女の子の前に立った。

「よお」ちよつと気取つたように、カツちゃんは言った。「結構、似合うじゃねえか、その浴衣」

すると、女の子はくるりと回つた。「ありがと。お父に買つてもらつたんだ！」回転にあわせ、女の子の着る浴衣の袖が、ヒラヒラと舞つた。だが、やがて、その女の子、ちあきは、カツちゃんが見慣れない半纏を羽織つていることに気づいた。

「あれ？ カツちゃん、半纏、ようやく貰えたんだ？」

と、ちあきが笑顔で訊くと、カツちゃんは満面の笑みで答えた。

「おうよ！ようやく、この火消し半纏貰えたんだよ。オレっちもようやく一端の火消しだあな」カツちゃんは、人差し指で、鼻の下をこすった。

「へへ、カツちゃん、よかつたじゃん！」そう言つて、ちあきはパチン！とカツちゃんの背中を叩いた。ちあきの小さな手の先には、「お」と大きく書かれた半纏があつた。

「おお、いつてえな！馬鹿力で叩くんじゃねえやい！ちあつちゃん！」口から出る言葉とは対照的に、なぜか嬉しそうなカツちゃんそして、そのカツちゃんの背中を叩くのを止めないちあき。

この二人、カツちゃんとちあきは、いわゆる幼馴染、というヤツである。

二人とも鳶職人の子供で、たまたま同じ長屋で生まれたこともあり、まるで兄妹のように育つた。それこそ、子供の頃は一緒に水浴みをしたものだし、一緒に寝たりもしたものだ。二人は数え歳で今年十五になるのだが、その間ずっと、兄貴のような位置づけで、ちあきはカツちゃんと付き合ってきた。

「へっへ！だつてさ！カツちゃんに会つて、久し振りなんだもん！」

カツちゃんは、どうしたわけか十四歳のとき、オヤジさんと喧嘩したとかで、ちあきたちが住む貧乏長屋を飛び出してしまった。とはいっても気楽なもので、喧嘩をしたオヤジさんとはもかくとして、お袋さんやちあきには時折顔を見せながらも、鳶職人の仕事をこなしながら、遂には今日、鳶職人の憧れ、町火消し「お組」の一員に任命されたのだ。

だが、たまには顔を見せてくれるとは言え、カツちゃんが最後に顔を見せたのは大体今年の春、桜舞う季節だったから、大体五ヶ月くらい前のことである。

だから、ちあきは久し振りに、「兄貴」にじゃれたくなつた。その結果が、ちあきの背中連打である。

「おいおい……痛い痛い……お、おい、本気で痛い……！」

いい加減、ちあきの背中連打が痛くなってきたカツちゃんは、悲鳴をあげた。だが、ちあきはまるでそんなことを意に介さず、まるで飼い犬のように、「兄貴」に必死でじゃれている。その結果が……バシバシ。

「……！！ ぎゃ……！！ ぐうう……！」最早声にならないカツちゃんであった。

「ふう！ 叩きすぎたら疲れちゃった」

ちあきはようやく背中を叩くのを止め、首元を扇いだ。そして、しばらく経ってから、自分の背中連打のせいで背中を痛め、地面に芋虫のように悶絶しつつ転がるカツちゃんの姿にようやく気づいた。「カツちゃん！ どしたの？ 動悸、息切れ？ 引き付け？ そんなときには救 だよ……！」

おいおい、ちあき。それはまだこの時代には無いだろう。それに、この娘は気づいていないのだ。自分の暴力行為によって、カツちゃんがまるで芋虫のような醜態を晒している、ということに。

「はあはあ、死ぬかと思った……。それに、道行く人の、視線が冷たくてしょうがねえ」

ようやく立ち上がったカツちゃんは、アゴに溜まる汗をグイと腕で拭いた。

「まったく、暑さでやられたのね？ 確かに今日は暑いけどさ、めまい起こして倒れるほどじゃないと思うんだけど？ つつかさ」ちあきはビシツと言った。「火消しが暑さに負けちゃダメでしょ……！」

「あー」

カツちゃんの、開いた口がふさがらないのは、言うまでもない。

ちあきは、どうも昔からこういうところがある。昔から猪突猛進、というか、一つのことと頭がいっぱいになるクセがある。そして、そのアオリを受けるのは、いつも周りの人間なのである。周りの人間が彼女の尻拭いをするはめになるのだ。

きつとそんなんで許されているのは、と、カツちゃんは思った。

それはきつと、コイツが可愛いからだろう。

そう、今更ながらだが、ちあきはものすごく可愛い。スラリとした上背。日本人形のような手足。そして、雪のように白い肌。そして、蝶のように舞う唇。

男だったら誰もが「うわあ、あの娘可愛いのうち」と鼻の下を伸ばすこと必至で、女の人として、「あら、可愛い子ねえ」とその可愛さを認めざるを得まい。そう、ちあきのお可愛さには、イヤミがないのだ。普通美しい人、というのは結構鼻につくものなのだが、なぜかちあきにはそれが無い。

そんなちあきを今まで「幼馴染」として見てきたカツちゃんも、その可愛さは否めるものではない。いや、むしろ。ちょっと、今までは違おう、ちあきへの感情を感じながら、カツちゃんは切り出した。

「ああ、そうだ、ちあつちゃん。おめえ、今日暇か？ 一緒に隅田川の花火でも見に行こうぜ。今日、花火、初日だろう？」

今は夏。夏と言えば花火に夕涼み。これは、日本人の頭にインプットされた行動のようだ。いや、実は今日の「夏と言えば花火に夕涼み」というのはこの頃の江戸っ子の楽しみ、隅田川の花火がルーツだったりもするのだけれど。

江戸時代の中ごろに始まった隅田川の花火大会は、江戸っ子の性なのか、どんどんその規模を大きくしていき、やがては夏の風物詩にまで成長していた。そして、ちあきたちが生きる時代には、「女の子を誘うには絶好の行事」と男たちの間で認識されていた。

そんなわけだから、カツちゃんもちあきを誘ったわけだ。

だが、ちあきは言った。

「ごめ〜ん、先約があるんだ！」すこし、ちあきの頬に紅がさした。少しムツとしてから、カツちゃんは訊いた。

「誰と行くんだ？ まさか、変の字と行くんじゃないやねえだろうな？」

「変の字」という言いように、ちあきは笑った。

「へ、変の字って……。そんな省略しなくてもいいじゃない。うん、

変迅堂先生と行くんだ」

ちあきの顔は、きゅんとするくらいに可愛い笑顔だった。

「おいおい、変の字の誘いなんて断つちまえよ」ちよつと悪意を込めつつ、カツちゃんは吐き捨てた。すると、ちあきはちよつと眉を吊り上げて言った。

「だって、誘ったのはあたしだもん。ほら、変迅堂先生、いつも部屋に籠ってきりでしょ？だからたまには外に連れ出さないと、と思つて。……あくまでそれだけだからね！」

最後の一言を、取り繕うように言うちあき。

はあ。カツちゃんはため息を一つ吐いた。そして、手に持つ鳶口を肩に担いだ。

「だがよお、アイツ、なんか胡散臭くねえか？　だって、毎日長屋に籠ったきりなんだろ？　絶対におかしいつて。なあ、ちあつちゃん、アイツと付き合うの、止めたほうがいいぜ」

そうカツちゃんが悪意たつぷりに言うと、ちあきは遂に怒った。

「何言つてるの！！　変迅堂先生は確かに胡散臭くて野暮天で意気地なしで無風流な人だけど、悪い人じゃないもん！　それに、あの人が長屋に籠ったきり出てこないのは、薬とかカラクリの発明をしているからだもん！」

カツちゃんも、売り言葉に買い言葉、語気荒く言った。

「は！　薬やらカラクリの発明してる、つて時点で怪しいじゃねえか！　ああ、抹香くせえ上胡散くせえの！！　おい、ちあつちゃん、やめとけよ、あんなのと付き合うのはよ。お前、まだ嫁入り前の身だろうが。そんなヤツが、変な噂立つちゃ困るだろ？　悪いこたあ言わねえよ、あの変の字との付き合いは、やめとけて」

最後は諭すような口調で話すカツちゃん。だが、ちあきはそんなカツちゃんとは反比例するように怒りの程を上げていく。

「うるさいうるさい！！　もう、馬鹿！！」

そして、ちあきのグーが、カツちゃんの頬に突き刺さる。カツちゃんの体はちあきのグーで浮かされ、宙できりもみ回転をしたあと、

地面にドンガラガツシヤンと音を立てて崩れた。まったく、さつきからよく地面に倒れるヤツである。

「ふんだ！ カツちゃんなんて、知らない！！」

「ま、待て、ちあっちゃん……」

「フン！」

ちあきは、カラコ口と履物を鳴らしながら、行ってしまった。残されたカツちゃんは、呆然と空を眺めた。青い空。西の方に入道雲。そして、頭上には、カツちゃんを唾うように、太陽が燦々と輝いていた。

第一話「opening」【2】

さて、ちあきはそんなカツちゃんを置いて、そそくさと歩いていった。道中目立つもので、よく男の子に声を掛けられるも、ちあきは適当にかわす。ちあきは、「なんであたしってこんなに声を掛けられるんだろ?」と疑問で疑問でしょうがなかった。

そう、ちあきは気づいていないのだ。「自分は、目立つほど可愛い」ということに。まあもちろん、今日が隅田川花火大会で、男の人が（もつと言えは「があるはんと」をしようとしている男が）多い、という点も見逃してはならないのであるが。

まったく、本当に可愛い子というのは、「そもそも可愛いのが当たり前前」だからいけない。自分の犯罪的な可愛さを理解していないが故に、自分が周りからどう見えるか興味ないのだ。普通の人には理解しにくいことではあるがとんでもなくキレイな人間というのは、周りと比べる必要も、張り合う必要もないのだ。

そんなこんな言っているうちに、ようやく着いた。いわゆる、「文人長屋」に。

文人長屋、とは、文字通り、文人しかない長屋だ。口汚い職人連中なんかは蔑んでこの長屋のことを「浮き草長屋」とか呼んでいるけれど。大家の長介という人が、なぜか文人、物書き、絵描きといった文化人だけに長屋を貸したことで、そういう人間が集まった、現在でいうトキワ荘のような場所である。職人や貧乏医者、売り子さんが雑多に住む普通の長屋とは違って、なんだか独特の雰囲気がある。

普通、長屋というところは、真ん中にある井戸で女房たちが洗濯しながら自分の夫の罵倒合戦に明け暮れたり、子供達がおいかけてこをしていたりと結構うるさい。だが、この文人長屋には、その手の喧騒がない。

それは、この長屋に住む人たちが貧乏な文人達、要はまだ駆け出

しの文人が多く住んでいるからである。というのも、文人、というのは、非常に金にならない商売で、妻を娶る余裕がない者が大半だからである。だから妻たちの井戸端会議の声も聞こえなければ、子供達のきやつきやという声も聞こえないのだ。

ちあきはそんな文人長屋をコロコロと音を立てて歩いていく。昼間だというのに、シーンと静かな長屋。そんな長屋でも、時折「ああ〜！」と悶絶するような声が聞こえる。きつと、ネタに詰まった戯作家の卵が騒いでいるのだろう。確か、そんなことをあの人が言っていたな、とちあきは思い出した。

やがて、文人長屋の一番奥にまでやってきた。ちあきの前には、変に丸の印が書かれた引き戸。

「ふう、ようやく着いた……」ちあきは、息を吸って、続けた。「変迅堂先生〜!〜!」

ちあきの声に、部屋の中にいる人は反応した。

「ああ、開いているよ。入っておいで」優しい声が、響いた。

「入るね〜、先生」ちあきは、引き戸を思いつきり開いた。

すると、部屋の奥からモワツとした空気が漏れ出してきた。ま、まさか、こんな暑い日に、障子を閉めっぱなしで作業してたんじゃないでしょうか……。と、ちあきは瞬時にこの長屋の住人の行動をおもんばかる。

ちあきは、もわつとした空気に少しのぼせながらも、言った。

「先生？ どこにいるのさ!？」

「ああ、ここに」

部屋の奥から、紺の着流し姿の若い男が出てきた。中肉で長身、細面。まるで役者のような整った顔立ち。だが、目が悪いらしく、丸いレンズのメガネを掛けている。あゝあ、もし目さえ悪くなければ、外見上悪いところはないのになあ、とちあきはいつもこの顔を見るたびに思う。

この人が、さつき話にも出た、変迅堂である。

ちあきは、長屋に上がりこむと、すたすたと閉まりっぱなしの正

面の障子の前に立った。そして、パツと開け放った。その先にはちよつとした庭があり、目にも涼しい上、爽やかな風が吹きぬけていく。

「ねえ」ちあきは変迅堂に詰め寄った。「なんで、こんな暑い日に障子閉めっぱなしにしてるのよ！ おかしいでしょ?!」

すると、変迅堂はカラカラと言った。

「え？ 今日、暑いんだ？ 実験に夢中で、まるで気づかなかつたなあ」

そう言いつつも、変迅堂の額には玉の様な汗が浮かんでいた。

「もう!」ちあきは、ばたばたと部屋を駆け回り、部屋の隅にある水瓶から水を採り、変迅堂に差し出した。「先生つたら、ほら、水!」

「ああ、ゴメンゴメン」

水の入った碗を受け取ると、変迅堂は口につけ、一気に傾けた。

それを、ちあきは嬉しそうに眺めているのだけれど、当然変迅堂には見えない。変迅堂は、ただゴクゴクと水を飲んだ。

「ぶは〜。やっぱり夏と言えば水だねえ」

碗から口を離れた変迅堂は、間延びした声で当たり前のことを言う。すると、ちあきは頬を膨らませて噛みついた。

「あのねえ、先生！ 発明もいいけれど、自分の体のことくらい自分で推し量ってよ!」

すると、変迅堂は思い出したように手をポンと叩いた。

「……あ、発明! そうだった!」

変迅堂は、思い出したように奥の部屋に消えた。

「え？ え？ ちょっと、先生!？」ちあきも変迅堂の後を追う。

変迅堂の住む長屋は、長屋としてはちよつと特殊である。なんと、二部屋あるのだ。……いやいや、特殊なんですよ？ 現代の感覚で、2DK住宅を考えてはいけません。

当時の江戸の住宅事情というヤツは、トンデモなく悪いものだったのである。俗に百万都市とか言われるお江戸には、人が溢れかえ

っていたのである。しかも、現代のように、多摩地方に家を持つ、なんてことは制度上も、交通上からも不可能だった。結局、江戸時代は、現代で言う東京二十三区内で百万人が働き、遊び、寝ていたのである。

しかも、当時の江戸の街は、武士が生活する土地が多かった。それこそ、幕府のお偉方や、大名、あるいは大名の家臣の家。そういう類の土地が非常に多かった。だから、町人が住んでもいい土地（難しく言うと、町人地）はかなり限られた範囲だったのである。

なので、変迅堂の長屋のように、部屋が二部屋、その上小さいながらも庭付きなんて、豪勢な話なのだ。

とにかく、変迅堂は、もう一方の部屋に消えた。この部屋は変迅堂が「らば」と呼ぶ部屋である。その心をちあきが訊くと、変迅堂は「実験室、つてことだよ」と答えたことがある。えげれす、という国の言葉だと教えてくれた。

ちあきは、その部屋の前に立った。なんだか部屋の奥が暗い。そしてその上、紫色っぽい煙が溢れている。……な、ナニコレ……？紫の煙を足で蹴りながら、ちあきは思う。でも、これもいつものことなのだ。

ちあきは、いつものように感じる薄気味悪さを心の中で払いのけ、「らば」部屋の奥に足を進めた。

「先生、どこ〜!？」

まだ暗さに目が慣れないちあきは、暗い部屋の中で変迅堂を呼ぶ。「ああ、こつちこつち」

変迅堂は闇の中で声を発した。ちあきは、それを手がかりに、変迅堂を手探りで探す。まるで、目隠し鬼さんみたいね、と、能天気なちあきは思うのだった。

やがて、ちあきの目が慣れてきた。部屋の隅の座卓の前に座る変迅堂の姿がぼおつと浮かび上がってきた。

「ああ、なんだ先生、そこにいたの」ちあきは、変迅堂の背中にそつ語りかける。

そう言われ振り返った変迅堂は、ちあきにニコつと笑顔を見せた。そして、手に持つ透明な筒をちあきの鼻先に差し出した。

「ほら、これが手に入ったんだ」そう嬉しそうに呟く。

「な、ナニコレ？ 切子？」

ちあきは、かつて見た江戸切子の輝きを思い出した。

「ただ、あんまりキレイじゃないなあ。と、ちあきは思った。

切子というのは、所々カットを入れて、まるで宝石のような輝きを持たせたガラス細工の器のことである。そういったガラスと比べてしまうと、今日の前にある透明な筒は、そういう美しさはまるでない。

「うん、惜しい！！これはね、試験管、って言うんだ」

「しけんかん？」ちあきが訊くと、変迅堂はちあきの方に向き返って言った。

「そう。薬とかを発明するときね、使うんだ。ほら、こういう風に透明だと、中の薬の状態が丸わかりになるから、すごい便利なんだ。今までお椀とか、お銚子でやってたからもう便利で便利で……」

心から嬉しそうな声をあげる変迅堂。だが、ちあきはじっとした目をして言った。

「で？」

「“で？”って？」

変迅堂は、キョトン顔で訊いた。すると、ちあきはギリッと奥歯をかみ締めてから叫ぶように言った。

「せっかくあたしが訪ねてきたっていうのに、茶の一つも勧められないの！？この、無粋者！」

「お、出たね。ちあき殿の、『無粋者』」茶化す気はないのだろうけど、結局茶化すようにしか聞こえない変迅堂の返答に、遂にちあきはキレた。

「まったく、この無粋者！ わん！」あらあら、遂に泣き出しちゃったよ。

「ななな、なんで泣く！？ うんうんわかった！ お菓子出してく

るからさ、泣くのは止めて〜!!」

アワアワとそんなことを言う変迅堂ではあったが、遅ればせながらも戸棚から秘蔵のお菓子をとり出し、茶を沸かし始めた。

そんなちあきのやかましい泣き声に、「おい、うるさいぞ!!」

「まったく、昼とは言え困ります!」文人長屋に住む儒者風の男や、一見するとどういいう仕事をしているのかわからない住人たちが、文句を言いやって来だした。

「ごめんなさいごめんなさい」

変迅堂は、茶を沸かしながらも、彼らに頭を下げ続けた。

さて、ようやくお茶が沸き、変迅堂はちあきに茶を差し出した。

すこし小汚い茶碗には、毒々しいほどに緑色のお茶が満々と湛えられていた。その横には、御茶請けの、お饅頭。

ちあきは、出された茶菓子をため息と一緒に飲み込む。

「ああ、せつかくのお饅頭」

今日の茶菓子、お饅頭を、ちょっと残念そうにそれを眺める変迅堂。そんな変迅堂をよそに、ちあきは暖かいお茶でお饅頭を流し込む。

「いいふあふあいふおの!」お饅頭に被り付きながら反論するちあき。

「え? なに? なんて?」

ちあきはお饅頭を飲み込んだ。ごっくん。

「いいじゃないの、って言ったの!」と、さっき言った言葉を説明した。

「……いや、まあいいけどもさ」変迅堂は、少し肩を落としつつも言った。

ちあきは、半分くらい食べ残したお饅頭を眺めてため息を吐いた。そして、「なんでいつもこうなっちゃうんだろ」と、心の中で呟く。

先生は、ちあきは半月のような形のお饅頭を眺めながら続ける。

先生は、あたしに興味がないみたい。

ちあきだつて、別に茶菓子が出ないくらいで怒り出すほど幼くはない。むしろ、ちあきがああして怒つたのは別の理由からである。

先生は、いつも研究ばかりで、あたしのことなんて興味ないんだ。ちあきは、今日のために新調したあでやかな浴衣の袖を眺めた。ちよつとは褒めてくれてもいいのにさ。と、ちあきは心の中で恨み言を言った。

変迅堂は、いつも怪しげな研究ばかりしており、あまり周りに興味がないうちに見える。それは、ちあきに対してもそうなのだ。時折訪ねてくるちあきを、邪険にはしないまでも、そこまでもてなしてはくれない。それが、ちあきには不満なのである。

要は。ちあきは、変迅堂のことが好きなのである。ちあきは、今年日数えで十五歳。初恋なんかを経験する、甘酸っぱい季節の只中にいるのである。

はあ。胸がいつぱいで、これ以上お饅頭が進まない。ちあきはため息を吐いた。

第一話「opening」【3】

「ん？ ちあき殿？ どうしたの？」

変迅堂は、ちよつと心配そうに、お饅頭を手に持ったまま固まるちあきに訊く。

「ごめん、食べきれないや」ちあきは、うつむきながら答えた。

「いや、遠慮しないでいいんだよ？」変迅堂は続けた。「子供が遠慮なんて、かわいくないよ？」

あゝあ。神経逆なでだよ。

ちあきの気持ちに全く気づいていない変迅堂は、言うてはならぬことを言ってしまった。よく考えてみよう。好きな人に、面と向かって「子供」と言われるのが、どんな気持ちか。アイタタタな気分になりはしないか。

無論、ちあきもアイタタタな気分になったひとりである。

ちあきは、うつむいたまま、あでやかな浴衣の端を左手でぎゅぎゅっと掴んだ。そして、しばらくはそのままの姿勢で我慢していたが、ある瞬間に、まるで堰を切るように、感情があふれ出た。要は、感情が噴火したのだ。

「先生の、本っ当に無粋者！！ もう知らない！」

そんな言葉と一緒に、グーが出た。ちなみに、そのグーの手の中には、食べかけのお饅頭が握られていたので、当然……。変迅堂の頬に、ちあきのグーとあんこと小麦粉の塊がぶつかる羽目になった。「ぎゃあゝ！！ あんこが、あんこが！！」

頬を右ストレートでぶち抜かれ、正座の姿勢から一気に上半身を倒された変迅堂。その勢いそのまま頭を床にぶつけた。めきや、という音が、部屋に響いた。どうでもいいけれど、今の変迅堂の姿勢、太もものストレッチに効果的な姿勢である。本当にどうでもいいけど。

「ぶん！！ 先生なんて知らない！！ フンフン！！」

ちあきは立ち上がると、のっしのっしと土間まで歩き、履物を履いた。

「あれ、もう帰っちゃうの？」太もものストレッチの姿勢のまま、変迅堂は訊いた。

「フン！ もう二度と来てやんないよ！！ 一人で勝手に発明でもしてりゃいいのよ！！」

そう吐き捨てるように言うと、引き戸を力一杯引いて、ちあきは出て行ってしまった。

「あ、ちあき殿！ ……行っちゃった」

なんで殴られたかもわからない変迅堂は、頭をポリポリ掻いた。

変迅堂は上体を上げ、立ち上がった。そして、土間に下り、引き戸を開く。そして、長屋の細道をきよろきよろ見るも、そこにはもうちあきの姿は無かった。

「うゝむ、また怒らせてしまった」変迅堂は、力なく呟いた。

一瞬、風が吹いた。さっきまでの爽やかなものとは違う、湿り気を帯びた風。変迅堂は、それを鼻で嗅いだ。この風は……。変迅堂は、今までの天気統計から、この風の正体に、そして、これから起こる気象上の変化に気づいた。

「これは、夕立が来そうだな……」

ふと変迅堂は、西の方を見た。江戸の西には山々が広がっているのだが、まるでそんな山々に腰を掛けるように入道雲が立ち上っていた。

「と、いうことは……」変迅堂は、途端に真面目な顔になった。

「はやく、あれを完成させなきゃね」

そうつぶやくと、変迅堂は「らば」室に引きこもった。ちなみに、あんこその他を頬に付けたまま。

一方その頃、ちあきは一人荒れていた。

はあくあ。またやつちゃった。どうしてあたしってこうなんだろう……。

反射的に手が出てしまう自分の右手を、恨めしそうに眺めるちあき。そして、ため息を吐いた。

ちあきは、ふと往来を眺める。今日は隅田川の花火大会、ということもあり、街の老若男女は皆心なしか浮かれている。きつと隅田川の河原には、気の早い江戸っ子連中が花火の場所取りをしていることだろう。

さて、この時代の人間たちは、お祭好きである。いや、お祭好き、というより、お祭くらいしか娯楽がない、ということなのであるが、それだけに、この時代の人間達のお祭にかける情熱は並々ならないものがある。それは、歌舞伎や浄瑠璃などの娯楽施設が軒を連ねる江戸でも例外ではない。江戸っ子、つまり江戸の職人の殆どは、今でいう日雇い労働者である。だから、そういった人はお祭の日なんかは仕事を早く切り上げたり、あるいは休んだりして祭に備えた。隅田川の花火大会なんていうビッグイベントの前なんかは、昼だというのにプラプラ遊ぶ大人をよく見かけるものなのだ。

そんな、江戸中が浮かれている空気の中、ちあきは一人沈んでいた。そんなちあきは、往来を楽しそうに行く職人の家族連れや夫婦の姿を見てはため息を吐いた。

先生、そもそも、今日が花火大会だつて覚えているかな？ ていうか……。

ちあきは、心の中で、変迅堂の顔を思い浮かべた。

そもそも、あの人はあたしとの約束、覚えているだろうか。ちあきは、それすらも心配になった。

一ヶ月前、ちあきは変迅堂と約束したのだ。「隅田川の花火、一緒に見に行こうね」と。随分と気が早い気もするが、そこは江戸っ子の血である。江戸っ子は気が早いのだ。その時、変迅堂はなにやら薬を薬研で擦っていたのだけれど、「うん、いいよ」と結構色よい返事を貰ったのだ。ちあきが内心喜んだのは言うまでもあるまいけれど、その花火大会当日だというのに、今日の変迅堂は、まったくそのことをおくびにも出さない。それどころか、せっかくちあ

きが浴衣を着てきたというのに、まるでスルー。普通の男の人だったら、「おお、きれいだな」とか、「似合ってるね」とか言いやがれってんだ、と、ちあきは心の中で毒づいた。

こんな目立つ格好なのに。あの無粋者は……。もう！ ちあきは、ちよつと寂しくなった。

でも、どうしようかな……。ちあきは、江戸市中でふと考えた。

まだ、花火大会には時間がある。でも、あの無粋者に顔を合わすのも癪だな。

実は、ちあきの頭の中には、「大体、先生と夕方くらいまでおしやべりでもして、そのあと二人で会場に向かおうかしら」という予定が立っていたのである。ところが、あの「無粋者」のせいで、そんな予定が丸つぶれである。よつて、まだ時間がたつぷりある。

なんだか、空気が入れ替わった。さっきまでの爽やかな空気とは違う、湿り気を帯びた、まるでぬるま湯の中にいるような心地悪い空気に。ちあきの額に汗が沸いてくる。

もわつとした空気に、ちあきの心まで萎えてきた。はあ。

「……帰るか」ちあきの結論はそれだった。

結局お金もあんまりなく、かといって暇の潰し方をあまり知らないちあきは、結局家で暇を潰すことにしたのである。情けないが、ある意味健全とも言える。

はあ、あたしつて、だめじゃん。

ちあきは心の中でそう呟きながら、陽光眩しい江戸の往来を抜けていくのだった。

「カア、情けないねエ！ 結局それで帰ってきたってエのか！」

「……ふん！ しょうがないじゃない」ちあきは、春吉の言い分に頬を膨らませた。

ちあきが家に帰ると、そこには父の春吉、母のお冬がいた。

春吉は鳶職人なのだが、今日は隅田川の花火なので、仕事を自主休業しているようだ。狭い長屋で寝転がる春吉と、忙しそうに家事

に追われるお冬に今日の顛末を話したところ、春吉からこんなことを言われた、という次第なのである。

「ていうかよ……。想い人を殴るなィ……」

あきれ顔を浮かべつつ、春吉はキセルにタバコを詰めた。

「なに言ってるのよ、お父！ べ、別に、先生のことを、べ、別にそんなんじゃ……。」「隠し切れてませんよ、ちあきさん。まったく、バレバレである。」

「へいへい……」春吉は物分り顔で合槌を打つと、タバコに火を点けた。「だがよおお？ こう、口より先に出る癖は、一体誰に似たんだか……」

すると、ちあきとお冬の視線が、一気に春吉に集まった。その視線に気づいた春吉は語気荒めに言った。

「おいおい！ 俺っちのせい、つてか!？」

「そうですね」お冬がキツパリと言った。「だってアンタ、この前も魚売りの厳太さんと大喧嘩したじゃないの」

そう、あれは三日前のことである。春吉が道を歩いていると、威勢がいいのと喧嘩っ早いので有名な魚売り、厳太と肩がぶつかった。幸い、どちらもその接触で怪我は無かったのだが、「どっちが悪いか」で大喧嘩になった。ちなみに、その喧嘩、今年齡四十の、春吉が勝った。

そうでなくとも、「鳶の春吉」と言えば、江戸の喧嘩師の間で知らない者のない「喧嘩師の中の喧嘩師」なのである。俗に、「火事と喧嘩は江戸の華」というが、江戸の華のうちの一翼を、このオヤジが担っている、とでも言えばよろしかろう。それが、ちあきの父、春吉である。

「むむむ……」

春吉はキセルの吸い口をガリガリとやった。これは、春吉が何かを思索するときの癖である。だが、すぐにそれを止めた。きつと、何か言い返す手が思いついたのだろうか。

「……だがよお、変迅堂のヤロウも、はっきりしねえヤロウだよ

な……」

あ、見事に話の方向を逸らした。それはちあきもお冬も気づいてはいるが、あえて突っ込まない。それが、家族の優しさ。あるいはちあき一家の「礼儀」なのだろう。

まあ、ちあきとしても、本当に話題にしたいのはその話題なので、あえて突っ込まなかった、というのもあるのだけれども。

「まったく、ホントにあの無粋者ははっきりしないの!!」ちあきは、無粋者の意気地なさにガリガリと奥歯を鳴らして嘆息した。それを、お冬はたしなめる。「アンタ、女の子が奥歯鳴らすもんじやないよ」って。

そんなちあきに、春吉は合いの手を打つ。

「まったくなあ、はっきりしねえ男はダメだよなあ。……それに、年頃の娘がこうしてあでやかな格好してる、つつうのによ、まるで反応がねえとは……。男として問題があらあなあ!!」

すると、お冬が冷ややかな視線を春吉に浴びせかけた。

「な、なんでえ、お冬……」そんな視線に気づいた春吉は、お冬に訊く。

すると、お冬は嘆息してから答えた。

「アンタも似たようなもんでしょ! アンタだって、若い頃は気が利かない木偶の坊だったでしょが!!」

「な、なんだとべらぼうめえ!!」口からタバコの煙を唾と一緒に吐きながら、春吉は声を張り上げる。

売り言葉に買い言葉。お冬はズバツと切り捨てた。

「アンタがまだ若い頃は、あたしがどんなにおめかししたって気づかなかつたじゃないのさ。それに……」

「それに……? なんでエ?」春吉は訊いた。

第一話「opening」【4】

「今日だって気づいてないじゃない！ 今日にはあたしもちよいとおめかししたんだからね！！」

そういえば。ちあきと春吉は顔を見合わせたあと、お冬の姿を眺めた。

ちよつと、いや、かなり太めの体型。いわゆる、肝っ玉母ちゃんの典型的なフォルムだ。だが、いつもと違う（ような気がする）……一体何が……。二人は、腕を組んでウンウンと考えた。そんな二人に、お冬はため息を吐いた。

「ほら、今日は髪の毛の結び方を変えたのよ！ 髪洗ったついでにさ！ まったく、二人とも、人のことを言う暇があったら、まずは自分の目を磨くこつたね！！」

言われてみれば、お冬の髪の毛の結び方が、いつもの島田結とは違い、後ろに髪を束ね、軽く流した髪型に代えていた。娘さんがやれば、あでやかな髪型なのだろう。でも。二人は心の内で同じことを考えた。

いや、アンタの髪形の変化なんざ、誰も興味はありやしねえよ、と。

春吉からしたら古女房、ちあきからしたら十五年一緒にいる母である。そんな二人にしてみれば、お冬の些細な変化なんて、首席ご老中（現代でいうと、首相くらいの地位にある人と考えると判りやすい）が変わった、とか、さる大店の娘さんが結婚した、とかいう話題以上にどうでもいい話題である。

そんな二人の白けた感じは、空気を伝わり、お冬にも伝わる。恐るべし、空気。

「何さ！ なに二人とも白けてるんだい！！」お冬は一喝した。

すると二人はシャキンと背筋を伸ばした。そして、白けた空気を放つのを止め、二人はお冬の髪形を誉めそやした。「おお、似合うじゃねえか」「うん、見た目の印象が随分変わったよねー」無論、二人の言葉に感情がビタイチこもっていないことは、言うまでもない。

だが、それでもお冬は満足したらしく、おほほほ、と奇声を発しながら表に出て行った。恐らく、洗濯物を仕舞いに行ったのだろう。

「ねえ、お父」ちあきは、お冬の後ろ姿を目で追いながら、春吉に訊いた。

「ん？ なんでえ？」

「よく、あの人と夫婦になったね」しみじみと呟くちあき。

すると、春吉は笑った。「いや、あんなんでも、いいトコはあるもんさ。……ま、そりゃ、どんな人間にも言えることだとは思うがね」

「え？」ちあきが思わず訊くと、春吉はキセルを吸ってから、言った。

「何、粗忽者でもよ、無骨者でもよ。無粋者でもよ。いいトコはあるってもんさ。……いや、あの変迅堂のヤロウのことを言っているわけじゃないけどもよ」

「……ふ〜ん」ちあきは、何か得心したように唸った。

「なんだよ？」煙を吐きながら、春吉はちあきに訊く。

ちあきは、満面の笑みを見せてから答えた。「お父も、いいところあるな、と思つてさ」

「はは、コイツ」春吉は、キセルを火皿にトントン、と落としたり。

「おめえの親だぞ？ いいトコが無えはずはねえだろがよ」

「うん、そうだね」ちあきはわざと素っ気なく言った。

ふと、風が長屋に入り込んだ。

「あ？ なんだ、この風はよ？」春吉は、ふと、嫌な顔をした。

「ん、どうしたの？ お父？」ちあきは、そんな春吉の顔を覗きこ

む。

「あ〜、そうだなあ　　」春吉は、頭を掻いた。「おい、お冬！
！」

呼ばれたお冬は、外で声を張り上げて答えた。「なんだい！　今
忙しいんだけど?!」

春吉も、声を張り上げて訊いた。

「おい、多摩の方角によ、入道雲ねえか？」

多摩、とは現代で言つと、東京都の西部のことである。つまり、
江戸から見ると西にある地方のことである。つまり、春吉は「西を
見る」と言つたのである。

「あいよ！」お冬はそう答えてから、少し間を置いて、答えた。「

ああ、入道雲!!!　あるねえ!!!」

「そうかい!!!　ありがとよ!!!」春吉は、そんなお冬の返答にお
礼を言つた。

そして、春吉は腕を組んで、うんうん唸つた。

「どうしたのさ、お父？」

ちあきは春吉の顔を、嫌な予感とともに覗きこんだ。

「い、いや、もしかしたら、かも知れねえけどもよ」なんだか歯切
れの悪い春吉の言葉に、ちあきは嫌な予感が高まるのを感じていた。

「もしかしたら、よ」春吉は言いにくそうに、ちあきに言つた。「

今日の花火大会、中止になるかも知れねえな。いや、きつと中止に
なるだろうぜ」

「な、なんで?!」ちあきは、春吉の肩を掴んでさする。

「ああ、きつとな、今日、雨振るぞ」春吉は、きつぱりと言つた。

隅田川の花火大会は、無論、雨が降つたら中止である。とは言っ
ても、江戸時代の隅田川花火大会は、花火の出資者が集まる限りに
おいては何度も何度もやってきた。現代のように、川開きの日だけ
に行なわれるイベントではないのである。

だが、今日の花火大会は初日。もう一回書くが、初日なのである。
江戸っ子、という生き物は、初物に弱い。初鰹、初詣、その他もろ

もろ。とにかく「初」とついでしまえばなんでも買ってしまったし、行ってしまふ。それが江戸っ子の性質なのである。ああ、江戸っ子って、単純。

そんな江戸っ子の一人であるちあきにとって、今年の「初」花火も当然見たいものであるし、恐らく、他の江戸っ子たちも同じ気分であろう。そんな江戸っ子たちに、「今年の初花火は雨天のため中止です」なんて言ったらどうなるか。想像するだに恐ろしい。フリーガン化するんじゃないか。

「入道雲が西にある、しかも、湿った風が吹きすさんでる、ってこたあ」春吉は、火がついていないキセルの吸い口をガリガリ口で弄びながら言った。「きつと、夕方から雨が降るぞ。しかも、すげえ大雨だ」

「う、嘘!? じゃあ、今日の花火は? 初花火は?」

「きつと、中止だろうな」

いやだ。そうちあきは思った。もちろん、「初」花火が見れない、というのも、ちあきにとっては痛い話である。でも、それ以上に、ようやく変迅堂と逢引できる機会なのだ。ようやくあの意気地なしを、花火大会に引っ張り出す約束を取り付けたのだ。この機会を、雨なんかでフイにしたくない。……でも、グーでその相手を殴っている時点で、もうかなりフイにしているような気もするんですが……。というツツコミはナシの方向でお願いしたい。

とにかく、ちあきはスツクと立ち上がった。拳は、拳固で固められている。おお、娘が燃えている! そう、春吉が思うほど、闘志に満ち溢れたちあきだった。

「お? 行くのか?」ちあきに、春吉は訊いた。

「当然でしょ! 江戸っ子は初物が好きなのよ!! 初花火も外せないでしょ!!」

やれやれ、おめえが好きなのは初物じゃなくて、意気地なしの無粋者だろうがよ、と春吉は言いたかったが、ちあきの反撃を恐れて、口には出さない春吉だった。「鳶の春吉」と恐れられている喧嘩師

も、家にいる限りにおいては女二人に負けてしまっ、一般的な父親なのだ。

「傘、持ってけよ、きつと、雨降るぞ」

春吉が、立ち上がったのもう出かけようという娘に言葉を掛けた。

すると、ちあきは思いつきり啖呵を切った。「これから花火を見ようってヤツが、傘をもって出かけるのは無粋ってもんでしょー！」

「はは、違えねえや」春吉は娘の言いように、思わず噴き出した。

第一話「opening」【5】

夕方。

いつもなら、ミンミンセミがガンガン鳴いているのだけれど、なぜか静かだ。ミンミンセミも、雨の二オイに敏感なのだろうか。そんな、ミンミンセミさえ敬遠するような天気の中、晴れを信じて待っている硬骨な娘がいた。

他ならぬ、ちあきである。

人間、というのは、頭ばかりが発達してしまい、「自然を感じる」という力を失ってしまったらしい。ミンミンセミさえ雨の気配を感じて形を潜めているというのに、人間はその願望のままに天候が変わると信じているのである。ちあきと同じく、今日の晴れを信じる、いや、願う人間達が、隅田川の兩岸に集っていた。

けれど、それが人間なのだ。

雨が降る予兆現象があってもなお、やはり自分の思いのままに晴れて欲しい、と願う。ある意味で不毛とも言え、ある意味で切ないそれが人間なのだ。でも、そういう人間の願いが、人間を前進させる力の正体だし、人間を人間たらしむ「本能」なのだ。

さて、ちあきは、隅田川の、両国側の河原にある、杉の木の前で立ち尽くしていた。

変迅堂と一緒に行くつもりだったちあきは、もちろん落ち合う場所を決めていなかった。けれど、かといって変迅堂を迎えに行くのもなんだか癪だから、ちあきは先に花火の会場にやってきたのだ。

はあ、あたしって、意地っ張りなのかな？ ちあきははあ、とため息を吐いた。

別に、変迅堂をこれから迎えに行ってもいいのだ。けれど、ただかそれはちあきの自負が許さない。こんなステキな浴衣姿をしているのにまるで寝てくれない上、あたしのことを子供扱いするなんて。そういう、哀しいやら悔しいやらの気持ちで、どうしたわけか

ちあきの本当の気持ちを押さえ込んでしまつ。

はあ。ちあきのため息は止まらない。

ようやく、少し薄暗くなってきた。

そろそろ、金魚売やら飴売などの行商人たちが現れ始めた。やはり、隅田川の花火大会の初日は、行商人にとつても大事な書き入れ時なのである。気が早くも、それらの商品を買う江戸っ子の姿もちらほら見られる。いわゆる、「お祭モード」が出始めた、のである。けれど、皆が皆、空を気にし始めている。やはり春吉の言うとおり、さつきまで西の山に鎮座していた入道雲が遂に下りてきたようだ。丁度今は入道雲の「袈裟」がヒラヒラと江戸の街の上を漂っているのだらう。薄い雲が出始めた。

むむむ……。ちあきは空とにらめっこをする羽目になった。

できれば。ちあきは心の中で願った。あの無粋者との逢引を、邪魔しないですよ、この入道雲！……願う、というよりは、罵倒する、といった感じのちあきのモノローグであった。

そんなちあきの心の願い（？）にヘソを曲げたのか、入道雲はどんだん江戸の街を包んでいく。西から風が吹いた。それは、雨の二オイと土のおいを孕んだ、嫌な予感を助長させるような風。

さすがに、人間達も、こうなればさすがに雨が降ることには気づく。どんなに江戸っ子がお祭好きの初物好きであろうと、やはり入道雲には勝てない。というか、花火が、雨に勝てないのである。

そんなわけで、まだ中止が決まらないうちから、パラパラと人が減っていった。

杉の木の前で空を眺めるちあきの横を、家族連れが駆け抜けて行った。

「雨降りそうだね」

「ああ、こりゃ、淹みたいなヤツが来るな、きつと」

とか何とか言っつて。

でも、ちあきは動かない。この娘は、まだ諦められないのだ。初花火を。そして、変迅堂との逢引を。けれど、そこは意地っ張りの

ちあき。変迅堂の家に訪ねていく、という屈辱的なまねはしたくない。結局、「花火会場で変迅堂を待つ」という、本音と建前の最大公約数的な落とし所を選んだちあきであった。

そんな頃だった。

「おお！ ちあつちゃん！」ちあきを呼ぶ男の声。

ちあきは思わず振り返った。変迅堂が来たと思ったのだ。だが。

振り返った先には、火事半纏姿の、カツちゃんが立っていた。思わず、ちよつと拍子抜けするちあきだった。

「ああ、何でえ何でえ！ 人の顔見た途端、「なんだ、カツちゃんか」みてえな顔しやがって！」

事実そう思ってしまったていたちあきは、何も言えず、黙っているしかなかった。

「で、どうした？ たしか、変の字と花火見に来る、とか言ってたよな」そう言つて、カツちゃんは周りを見渡す。

「それがさ」ちあきは、今日あったことをカツちゃんに話した。

「へえ、そんなことが……」カツちゃんは、腕を組んで歯軋りした。「どう思う？」ちあきは、カツちゃんに訊いた。

どうつて……、決まってる！！ カツちゃんの言うことは決まっている。

「こりゃあ、どう考えても変の字が悪い！！」

「そうなの？」ちあきはさらに訊く。

「そりゃそうだ！ ちあつちゃんの浴衣姿を褒めない上に、子供扱いだど！？ 俺たちと七つしか違わなくせに、ナマ言いやがってよ！！」

今更だが変迅堂は、今年二十二歳。ちあきたちの七つ年上である。けれど、七つしか違わないとはいえ、明らかに変迅堂は大人びていた。まあ、ちあきたちが子供、ということもあるうが、それでもなお大人びている。

「それに」カツちゃんは言った。「ちあつちゃんが怒って飛び出したときに、アイツはちあつちゃんを追っかけるべきだったの！」

ちなみに、皆さんはお分かりのこととは思いますが、カツちゃんがこんなに口を辛くして変迅堂のことを非難するのは、当然ある種の下心があるからである。それはどんな下心かというと、「ふん！ あんな無粋者なんて知らない！！……あ、カツちゃん、どうせここまで出てきちゃったし、雨宿りに甘いものでも食べに行く？」という、極めて自分自身に都合のいい展開に持って行きたいなあ、というファンタジーな下心である。ふ。カツちゃん、まだまだ子供だね。さて、そんなことを言われたちあきであるが、なんだか沈んでしまった。カツちゃんの言葉が、なぜかザクザクと心に刺さるのだ。何でだろう？ 何てこんなに痛いんだろう？

ちあきは、なぜ？を心の中で繰り返し返した。

ちあきはきつと、哀しいのだろう。というのも、ちあきは、カツちゃんの言葉で気づかされたのだ。

何に、って？ それは、変迅堂が、あんまりちあきに興味を持っていないことに。

だって、普通人を怒らせたのに、理由を問いただしたり追いかけてもせぜずにいる、というのは「別にお前なんか怒らせても、痛くも痒くもないよ」という意思表示である。要は、「お前なんかどうでもいいよ！」という意思表示である。もし、大事な人間だったなら、後を追いかけてでも弁明したり、あるいは謝ったりするだろう。そっか。そういえば、そうだな。ちあきは俯いた。

今にも泣き出しそうな気分だけど、それでも、涙は流さないんだ。そう、ちあきは心の中で決めた。

そんな時だった。

「ちあき殿？」

思わず、ちあきは顔を上げた。

そこには、汗だくな上、肩で息をしている変迅堂の姿があった。うつそ……。ちあきは、声も出なかった。だから、変迅堂が息を整えながら、先に言葉を発した。

「はは、はあはあ……。ちあき殿もおつちよこちよいだな、待ち合

わせ場所を言ってくれないんだもの……。結局、会場中を探し回る羽目になっちゃった。遅れてごめんね」

ちなみに、隅田川の花火見物、と聞いて、当時の人が連想する範囲は結構広い。隅田川の両岸を探さねばならないし、河原だけでなく、町民地の一部も含むのである。

ちあきの隣にいたカツちゃんが口を挟んだ。

「おい、変の字、今まで何してたんだよ！ ちあっちゃんを待ちぼうけにさせてよ！」

すると、変迅堂は微笑んだ。

「なに……。ちよつと発明をね」

「はあ！？ おめえ、女の子との約束より、発明かよ！！」今にも変迅堂に殴りかかりそうな剣幕のカツちゃんであった。

「いや」変迅堂は、手を横に振った。「この発明は、今日のために何としても必要なんだ。花火をしつかり見るためには、ね」

「でもさ」ようやく、ちあきは口を開いた。「雨、降りそうだから、多分見れないよ」色々あって、これからの空模様を先取りしたような顔を見せるちあき。

すると、変迅堂は指を一本立てて、ふっふっふ、と笑った。これは、変迅堂が何かをしでかすときに見せる、独特の仕草および行動である。

「心配ご無用！！」変迅堂は、懐から変なものを取り出した。「これがあれば、どうにかなる……！！」

第一話「opening」【6】

変迅堂が懐から取り出したのは、変な玉だった。

大体大きさは瓜くらい。なんか、紙を何重にも巻かれ、それが球状になっている。そして、その球体から、一本タコ糸のような糸がチヨロリンと出ている。ん？ なんだかこれって。

「花火の尺玉みたい、ね？」ちあきがそう言った。

そう、まさに花火玉のような外見をしている。

「なんだよ、これ？ 花火か？」思わず訊くカツちゃん。

「ん、これかい？ 勝次殿」

変迅堂は、カツちゃんに向き直って言った。あ、カツちゃんって、勝次って言うんだア。……皆さん、覚えておいてください。彼の名前は、勝次君です。

「これはね」変迅堂は続けた。「雨雲を払う尺玉なんだ」

へ！？ 二人は思わず顔を見合わせた。

「どういうこと？ 雨雲を払う、って！？」

そうちあきが訊くと、変迅堂はふふん、と言わんばかりの顔で続けた。

「雨雲、って言うのはね、簡単に言えば霧みたいなものなんだ。さらに言えば、水が宙に浮いた状態、それが雲だと思えばいい。その水の量が異様に多い状態の雲が」変迅堂は西の空を眺めた。「あの入道雲なんだ」

うゝむ？ 二人は首をかしげた。水が宙に浮いてるの？ ていうか、水って白いの？ まだ「科学」という学問が板についていない江戸時代の住民にとって、今の変迅堂の話は、夢の世界のように整合性の取れない、馬鹿げた話だろう。だったらまだ、入道雲には雷様という神様が住んでいて云々という話の方が信じられるというものだ。

「水、ということだね」変迅堂は続けた。「凍らすこともできる。……この尺玉はね、強烈な冷気を発するように出来ててね、しかも推進力もあるんだ。つまり、雨雲の水を全て凍らせた上、全てかなたに飛ばしちゃうことが出来るんだ」

「ええと、とにかく」ちあきは、こんがらがりそうな頭を整理しながら言った。「この尺玉を使えば、あの」ちあきは、西の空に浮かぶ、入道雲を眺めた。「入道雲を吹き消すことが出来る、ってことね」

「そう！ その通り！！」変迅堂は、指をちあきに向けた。

「で？」カツちゃんは訊いた。「どう使うんだ？ この尺玉」

「え？」変迅堂は頬を掻いた。「もちろん、専用の、打ち上げ台を使うんだけども？」

「で？」カツちゃんは続けた。「その、打ち上げ台とやらはあるのか？」

「え？ ………………」変迅堂から、不敵な笑みが消え、無表情に近い顔になった。

妙な沈黙。もしやコイツ……。ちあきとカツちゃんは顔を見合わせる。

「おい……もしや、変の字……」カツちゃんは、げっそりした声で訊いた。

「いや、あたしが訊く」そんなカツちゃんを手で制して、ちあきが訊いた。「……もしかして、発射台、作って無いのね？」

しばらく思索してから、悪びれもせず、満面の笑みで変迅堂は答えた。

「あ！ しまった！！ そうですねば作ってなかった！ いやあ、失敗失敗！」

……。ちあきとカツちゃんはげんなりとした顔を見合わせた。そして、同時に叫んだ。

「発射台作らなきゃ、意味ねえだろうが……！！」

二人の右手が拳固を作り、変迅堂の頬に突き刺さった。さすが幼

馴染同士。ツツコミも一緒ならば、暴力的行動も同じである。もう一度書くけれど、さすが幼馴染。

「ぐえ！」

地味な声を立て、変迅堂は地面に崩れ落ちる。だが、すぐにシャキーンと立ち上がる。おお、なんたるリカバリー能力！！

「ふふ、安心したまえ、考えがある」

そう言つと、変迅堂は、どこからか傘を取り出した。「もし、私の発明が失敗して、大雨が降ったら、二人で使ってください」その傘を、ちあきに差し出す。

そう言い残すと、変迅堂は尺玉を持ったまま走り出した。

残されたちあきは、手に残された傘を眺めた。ん？ でも……。

ふと傘を開いてみた。すると……。

「おいおい、これア……」カツちゃんのげっそり声は最高潮だ。

「うん。所々破れてる……」変迅堂の貸してくれた傘は、大穴小穴がボコボコ開いていた。その穴越しに、江戸の曇った空を拝むことが出来た。こんな傘では、大雨どころか小雨にも耐えられそうもない。

結局、二人は祈るしかなかった。変迅堂の発明が、あの入道雲を払うのを。そうじゃないと……。片やちあきは新調した浴衣が、片やカツちゃんはやつとの思いで手に入れた火事半纏が、水浸しになってしまうのだ。二人は、これ以上ないくらいに祈った。神でもなく、仏にでもない、ただの発明家、変迅堂に。

一方その頃、神でも仏でもないのにやけに熱烈な祈りを受けている発明家、変迅堂は、隅田川の河原をひたすらに走っていた。空はもう大分暗い。それは、もう夜に差し掛かっているからでもあり、それ以上に、入道雲が西日を隠しているからでもある。

さすがに、もう、花火を期待している江戸っ子は少ない。大体の者は、「今日の花火はもう中止だろう」と言わんばかりに帰途を急いでいる。そのおかげで、河原に陣取る人もまばらになっている。それも、変迅堂に味方している。

「たしか……この辺に……」

変迅堂はきよるきよると周りを見回した。

変迅堂は、探しているのだ。何を、って？ それは、花火の発射台である。

雨雲を払う尺玉は、花火の尺玉をモデルに作られている。その大きさは形などは、殆ど花火の尺玉そのままである。ということは……。

そう、花火の発射台からでも発射できるはずである！ そう考えた変迅堂は、花火の発射台を探す、という行動を取っているわけである。

そんなこんなしているうちに、遂に変迅堂は目当ての物を見つけた。周りにいる花火職人が、丸に鍵が染め抜かれた揃いの羽織をしていることから見て、鍵屋の発射台であろう。

だが、職人達は、その発射台を片付けようとしていた。それは、西に控えるあまりに大きな入道雲と、その方角から流れる、湿った風を思えば当然のことだろう。

江戸には、花火屋が二つある。一つは老舗・鍵屋。もう一つは鍵屋からのれん分した玉屋である。隅田川の花火大会は、その二つの花火屋が競い合う形で展開していた。だが、どうしたわけか玉屋の方が人気であった。きっとそれは、玉屋が新進気鋭の企業だったこともあり、活力があつたからだろう。

「おい、鍵屋……！」

変迅堂は駆け寄りながら花火職人達に呼びかけた。

「ああ？ なんでえ、おめえは！ 素人衆は立ち入り禁止だよ！ あぶねえからな……！」

鍵屋の花火職人の一人が、そう叫んだ。

「すまないけれど！」 変迅堂は走りながら叫んだ。「その発射台、貸してください……！」

「なんだと！？ おめえ何言ってるんだ！ バカか……！」

職人達は、口々にそう言った。だが、変迅堂も負けていない。

「こつちも事情があつてね！ なんとしても、この花火大会を中止させちゃ不味いんだ！ じゃないと、大雨になっちゃうもんでね！」

職人達は首をかしげた。いや、順序が逆だろ、と。大雨になるから、花火大会は中止になるんだろ？ と。

煮え切らない態度の鍵屋たちに、変迅堂は挑発を飛ばす。

「鍵屋さん！！ あなたがた、玉屋に負けてばかりで悔しくないんですか！？」

「んだと！？」職人達は一気に厳しい顔になった。

「この尺玉は」遂に発射台の近くに到達した変迅堂は、すうつと息を整えた。そして、思いつきり啖呵を切った。「とんでもない尺玉なんです！ これ使えば、きつと玉屋に負けない評判になりますよ！！」

「なに言つてんだよ！！ この素人が！！」

職人の一人が、変迅堂に駆け寄つて拳固を浴びせかけようとした、丁度そんな時だった。

「やめねえか！！」

職人たちの後ろの方から声がした。拳固を固めた職人は、振り上げた手を無理矢理収めた。

「あんた、いい啖呵切るじゃねえか」

そう言つて、若い職人たちを掻き分けて出てきたのは、鍵屋揃いの羽織をまとつた老人だった。きつと、鍵屋の親方さんだろう。

「だがよお、あんた」親方さんは続けた。「花火師じゃねえだろ？ いくら啖呵を切つてみたところで、素人の作つた花火じゃ、夜空に咲きやしねえよ。ましてや、あんな入道雲が控えてるとあつちやあな」

「違つんです」変迅堂は言った。「これは、あの入道雲を払う、尺玉なんです！」

「何バカ言つてるんでえ！！」鍵屋の若衆が騒いだが、親方はそれを目で制した。

「……あんだ、名は？」親方は訊いた。

「……私は、変迅堂です」

「ほう、訊いたことがある……。たしか、さる殿様のところで、トンデモない性能の火薬を開発したっていう武家様の話だ。確か、その武家様の号が……変迅堂……でしたな」親方は、そう呟くように言うと、若衆に命じた。

「おい！ 発射台を準備しろ！！ この方の言うことをトクトクと訊いて、台座を設置するんだ！！」

鍵屋の若衆たちは、顔を見合わせた。全く事情が飲み込めていないのだ。

「おい！ 聞こえねえのか！！」親方は、ちつと舌打ちしたあと、老人とは思えないほどの野太く、大きな声で叫んだ。「早くこの変迅堂さんの言う事聞いて、台座を準備しろっていうのが聞こえねえのか！！」

「へ、へい！！」

ようやく、鍵屋の若衆が動き始めた。

「しかし、いいのですか？」変迅堂は、親方に訊いた。

「何が、ですか？」

「もし、私が、変迅堂を騙る偽者だったらどうするおつもりなのです？」

そう訊くと、親方は笑った。

「別に、あんだの尺玉を試せば判ること。試すだけは無料だしな。

それに」

「それに？」

「変迅堂、なんて名前、ただの素人が知ってる名前じゃねえよ。その名前を知ってる人間は、花火師じゃないにしろ、火薬を扱うような商売のモン、しかも結構な立場の人間じゃねえことには聞けねえ名前だからな。あんだが変迅堂じゃなかつたら、少なくとも火薬にや明るいだろうことはわかるよ」

「それに、なんで見も知らない私の尺玉を？」

「ああ、それは」親方は言った。「お前さんの心意気こもった啖呵に、惚れたのさ」

「……そういうものですかね」変迅堂は苦笑いするしかなかった。

第一話「opening」【7】

さて、変迅堂の指示で、台座が据えられた。

普通、花火の筒先は真上を向けるものだが、今回は変迅堂の指示で、入道雲の中心に筒先が向くように据えられた。こんなことをすれば、花火が暴発しかねない。だから、鍵屋の若衆の中にはこの計画を危ぶむ声もあったし、「やっぱりコイツ、素人だわ」という声も出た。一度は許可を出した親方さえ事を危ぶむ事態となってしまう。だが、変迅堂は親方をなだめすかしてなんとかここまでやり遂げた。

しかし、さすがに点火作業はみんな怖がってしまい、すったもんだの末、変迅堂がやる羽目になってしまった。

変迅堂は、筒の中に、推進用の火薬を、目にも留まらないほどに手際良く入れ、例の尺玉を入れた。一応、尺玉そのものにも推進力はあるのだが、念のための推進力である。

「ああ、皆さん、離れててくださいね！ 怪我したくなかったら変迅堂は、そう叫んだ。

普通の花火師から見れば、明らかに暴発必至の花火だ。言われずとも、皆筒から距離を置いた。だが、親方は火種を持つ変迅堂の近くに腰を掛けた。

「いいんですか？」

そう変迅堂が訊くと、親方は笑った。

「はっは、この花火、失敗しねえよ。……だつてよ」親方は、自嘲気味に笑った。「ワシよりあなたの方が、花火の据え方が上手えかな。いやあ、この業界に入ってウン十年になるが、こんだけ手際がいいヤツは見たことなかったよ。なら、こうやって近くで見たほうが、勉強にならあな」

「いや、そんな大層なものでは」

「謙遜はいい。見せてくんな。火薬を扱う人間の間じゃ伝説の、変迅堂作の花火をよ」

親方は、深く頷いた。

「じゃ、点火します」

筒先は、まるで巨人のように西に立ち上る、入道雲の中心を捉えていた。真つ暗な空。そして、入道雲を中心に渦巻く空気。

変迅堂は、導火線に火を灯した。

ジジジジジジ……。導火線が、音を立てて燃えていく。そして、火は見る見るうちに筒の中に吸い込まれていった。変迅堂も、親方も、その導火線を眺めていた。

一瞬の間。

そして！

ドーーーーー！

それはもはや、音ではなかった。筒先から、空気の波、いや、壁が飛び出して、周り中のものにぶつかっては消えていくような感じ。その「壁」は、親方と変迅堂の体をビリビリと振動させた。でも、不快ではなかった。

そして、蒼い光の矢が筒先から放たれた。

その光の矢は、妙な風切り音をさせ、一気に空中まで達した。だが、見る見るうちに速度が落ちていく。あのままでは入道雲には届かない。

「あア?! 失敗か!?!」

見る見るうちに速度を落とす光の矢に、親方が嘆息しかけた。だが。

「まだまだ!?!」

変迅堂は光の矢を睨んで、叫んだ。

そんな変迅堂の声に呼応するかのようになり、青い光の矢はまた速度を上げた。さっきまでの速度とは比べ物にならないほどに速い。そして、蒼い光の矢は、一気に入道雲を突き破った。

瞬間、入道雲が、青く光った。

次の瞬間、光の矢は雲を吸い込むようにしてその大きさを増し、空のかなたに消えていった。まるで、流れ星のようだった。

入道雲があつた場所には、もはや何も無かつた。あつたのは、天に瞬く星くらいなものだった。

そう。入道雲は、姿を消したのだ。

しばしの沈黙。変迅堂の隣にいる親方もアゴをガクガクといわせ
ているし、さつきまであれだけうるさかつた若衆たちも、言葉は無
かつた。

結果、沈黙があたりに立ち込めていた。

「ね？」変迅堂は皆が黙りこくつた中、親方を横目に言つた。「入
道雲、消して見せましたよ」

その変迅堂の言葉を皮切りに、職人たちは歓声を上げた。おお
！！ という、男たちの歓声が、まるで大雨のように降りしきる。

そして、その雨音が、心地よくあたりに響いた。

「はあ……、まさか、これほどとは……」親方は、若衆の歓声
の渦の中で、呆けたように空を仰いでいた。

「どうしたんですか？ 親方さん」変迅堂は訊いた。

「はは、眼福、つてえのはこういうことを言うんだな」親方は、し
みじみと言つた。「いい冥土の土産が出来たぜ」

「何を呆けてるんですか、親方さん」変迅堂は言つた。「江戸の皆
さんが、花火を待ちわびてますよ？ 花火、上げなきゃ江戸っ子連
中に怒られちゃいますよ」

そう指摘された親方が周りを見渡すと、鍵屋の若衆たちが、花火
よりもぎらぎらした目でいまや遅しと親方の指示を待っている。

親方は張りのある大声で叫んだ。

「よっしゃ！ この天気なら花火出来るぞ！！ 野郎共！ 台座あ
据えろ！ 尺玉を持って！！」

「へい！！」若衆たちは、声をそろえて応じた。

晴れた空の下、若衆たちが活気溢れて作業をしている。皆の笑顔
は、空模様と同じく何処までも晴れ渡っていた。そして、若衆たち

の手によって、てきぱきと花火の準備が進められていた。そして、その隅っこの方で若衆に檄を飛ばす親方は、不意に言った。

「いや、きつと、玉屋はもう撤収しちまつてるだろうから、ワシ達鍵屋のバカ勝ちだね、今日は。それもこれも皆、変迅堂さんのおかげだよ、ありがとな、つてあれ!? 変迅堂さんはどこ行った?!」

変迅堂が横に居るものと思って話をしていた親方は、がくつと肩を落とした。

「え? 変迅堂、つて、あの素人さんですか?」

若衆の一人が親方に訊いた。

「ああ、あの人だ。どこ行ったか知らねえか?」

「たしか……」若衆の一人が思い出したように言った。「なんだか隠れるようにして帰っていかれました」

他の若衆は、こんなことを言った。「あの人から、親方へ伝言を預かりましたよ」

「あ、なんだ、言ってみろ」

「ええと……」若衆は、変迅堂の顔を思い出しつつ言った。「今日の花火、盛大におねがいますよ。今日を楽しみにしている娘がいるもので」とのことだ

「そうかい」

親方は、若衆たちを指示して、台座の設営に精力を傾けるのだつた。

そして、親方は、その作業の合間のほんの一瞬、変迅堂に言いそびれた言葉を呟いた。

「ありがとよ、変迅堂先生。勉強になったよ」

親方は、雲ひとつ無い空を仰いだ。

第一話「opening」【8】

「あ、先生!!」

変迅堂が戻ってきた頃には、人手も随分戻ってきた。だから、少しあき達を見つけるのに難儀したのだけれど、ちあきが唐傘を振ってくれたおかげですぐにその姿を見つけた。

「ああ、ただいま」穏やかに、変迅堂は言った。

「ねえ! 先生でしょ?!」ちあきは、興奮気味に言った。「入道雲に向かつて、流れ星みたいな光が向かつていくのが見えたよ!!」
「そしたら、入道雲が消えちゃって! あれ、先生の発明でしょ?!」

変迅堂は頬を掻いた。

「うん、まあ……そうだよ」

「しかし、随分とまあ、派手なことをしゃがるもんだな」少し顔を横に背けながら、カツちゃんと言った。

「派手?」変迅堂は訊いた。

「まさか、雲を消すとは思わなかったぜ」

「ああ、花火を中止させないためには、雲を消すしかない、って思っただんだ。……今日の花火を楽しみにしている娘のために、ね」
そう言つて、変迅堂はちあきの顔に目を向けた。

「え?」ちあきは、素っ頓狂な声を上げた。

変迅堂は一瞬微笑むと続けた。「ちあき殿、一ヶ月前から花火を楽しみにしていたからね」

「覚えてたの? 先生」ちあきが訊くと、変迅堂は頷いた。

「うん。……でも、今日昼ごろから雨が降る兆候が出たから、あの尺玉の完成を急いだんだ。いやあ、あの尺玉を作るときに、試験管が役に立ったよ」

ちあきは、変迅堂が見せてくれた、透明な筒を思い出した。

「今回の発明のキモは、強烈な冷気を出す薬品の開発だったからね。」

外からでも薬品の反応が確認できるあの試験管はすごい役に立ったよ」そう言つて、変迅堂はきししし、と笑つた。いつもは大人っぽい変迅堂には似つかわしくない、すごく子供っぽい笑顔だつた。

「てことは……」ちあきは言った。「今日あたしのことをそつちのけにしたのは」

「ん？ そつちのけにしたっけ？ でも」変迅堂は答えた。「今日、発明で忙しかつたのは、あの尺玉の完成を急いだからだよ」

「そつだつたんだ」

ちあきは、ちよつと身をすくめた。

「ん？ どうしたの、ちあき殿？」

まるで恐縮するように身をすくませるちあきに、変迅堂は訊いた。すると、ちあきは悪戯っぽい笑顔を見せて言つた。

「なんでもないよ〜！」

ちあきは、嬉しかつたのだ。

確かに、変迅堂はちあきが怒つて出て行つたときに、何もしなかつた。でもそれは、変迅堂がちあきに興味が無かつたからではなく、ちあきの願いを叶えるために、やるべきことをやっていたのである。それは、確かに普通のやり方ではない。でも……。

ちあきは、思わず呟いた。

「ま、無粋者相手に、普通の反応を期待するだけ野暮なのかも」
「は？」

変迅堂は、事情が全く飲み込めない、といった顔をした。

「だから」ちあきは続けた。「許してあげる」

「んん？？」

いよいよ、変迅堂は頭をかしげまくるのだった。

さて、こんな空気の中、非常に肩身の狭い思いをしているヤツが居ることに、皆様お気づきでしょうか。……当然、カツちゃんである。

……おいおい、なんだよ、この空気は。まるで、オレア邪魔虫じやねえかよ。ていうか、オレって、負け犬？ ていうか、オレって

惨め？ ちくしょう！

負け犬で惨めでちくしょうなカツちゃんは、なんだか「いい感じ」の二人の空気を邪魔するように言い放った。

「……あゝ、オレ、先に帰るわ」カツちゃんは心の中で、馬鹿馬鹿しい、と付け加えた。

「え？ 帰るんですか？ これから花火なのに？」変迅堂は言った。おめえには引き止められたくはねえんだよ、とカツちゃんは心の中で毒づきながらも言った。

「どうやら、今宵の花火はオレの頭の上ではキレイに咲いてくれねえらしいからよ。……もう、帰って寝る！」

「んん？ どういう意味か判らないんだけども……」

さすが無粋者。変迅堂、どうやら、カツちゃんの言わんとするところがビタイチわからないらしい。

カツちゃんは、踵を返して、言った。

「要は、今日のところは、負けを認めてやるよ、って話でえ」

そう言うと、カツちゃんは、宵闇の中に消えた。

「変なカツちゃん」

ちあきは呟いた。なんと、ちあきもカツちゃんの気持ちを理解していないのである。変迅堂の事を無粋者、と呼ばわるクセには、ちあき自身も結構な無粋者なのだった。……はあ、この、無粋者たち、どうにかならないもんかね。

そんな頃、宵闇を切り裂くように、高い音が響き渡った。

「あ、花火の尺玉の上がる音！ てことは……」

ちあきの言葉が終わる前に、夜空に大輪の花火が咲いた。

赤、青、白。それらの炎で構成された夏の華が、江戸の夜空に咲いた。一瞬遅れて、「ドーン」という、ビリビリと肚に響く、地響きのような破裂音が広がる。

「うわあ……！」ちあきは、ため息を漏らした。

続いて、ヒュルヒュルという音が響く。そしてまた、華が咲いた。宵闇に沈む江戸の街を一瞬照らした夏の華は、その美しさに未練も

残さず、すぐに枯れていく。

「きれいだね、先生」

「……あ、ああ。そうだね」

きれい、とか言いつつ、実はちあきはあまり花火を見てはいなかった。

え、何を見てたのか、って？ いやいや、それは聞くだけ野暮っでもんでしょ？ え、せめてヒントをくれ、って？ しょうがないな、ではヒント。

それは、もちろん、ちあきの横で夏の華を眺めている、どこぞの無粋者の横顔である。

「鍵屋〜！！」「鍵屋〜！！」江戸っ子たちが、声を掛けている。

当時、隅田川の花火は鍵屋と玉屋が取り仕切っていた、という話はしたと思うが、江戸っ子達はその二社の花火の品評もやっていたやり方は至極簡単。二社の花火が出揃ったところで、きれいだった方の社名を叫べばそれでいいのである。

だが、今日は玉屋が出遅れていた。きつと、雨が降るものと思っ

て撒収をしてしまったから、大掛かりな花火が出来ないのだろう。

その結果が、見事に江戸っ子たちの「品評」に響いていた。

「あらら、今日は鍵屋が優勢ね」

ちあきは、江戸っ子達の品評を聞いて、思わず洩らした。

「はっは、そりゃそうさ」変迅堂は言った。

「え？ なんで？」ちあきが訊くと、変迅堂は言った。
「そう相場が決まってるのさ。世の中つてさ、諦めなかつた者勝ちなんだよ。どんな場面でもそう。諦めなきゃ、結構何でもできるもんさ。……だから、私は発明が好きなんだと思う」

「どういうこと？」ちあきは訊いた。

「発明っていうのはね」変迅堂は言った。「人間の望みをそのままかたちにしたものなんだ。例えばあの花火」

花火がまた、宵闇を切り裂いた。

変迅堂は続けた。

「あれはきつと、“夜が明るくなればいいのに”っていう、人間の祈りが形になったものなんだ。……でもね」ちよつと変迅堂は哀しそうな顔をした。「その間には“そんなもの、できるわけないだろう”みたいな周りの声とか、“意味無いじゃん”とかの評価を受けちやうんだよね。それでも、発明家は挑むんだ。人の夢を叶えるために。諦めたくない、っていう人の声に答えるために。」

発明家はね、諦めないことが大事なんだ。自分の夢をかなえるために。だから、私みたいに、諦めが悪い人間には、相性がいいんだ」そして、子供のような笑顔をちあきに向けた。

そう語る変迅堂の顔を眺めながら、ちあきは思った。

やっぱりあたし、この人好きだわ、と。

なんだか、まるで子供のように嬉々として発明のことを語る変迅堂を、可愛いと思ってしまうているちあきなのであった。

ちよつとズレてはいるけど、でも、好き。だから、ちよつと人と比べてズレてるところは、我慢しよう。

ちあきは、そう心に決めるのだった。

「そういえば……」

変迅堂は、思い出したように声を上げた。

「え、何？ 先生？」

ちよつと照れくさそうに、変迅堂は頭を掻いた。「実は、ずっと言おうと思ってたんだけど……」

「え、な、なに？」若干の期待を込めて、ちあきは訊いた。

すると、意を決した変迅堂は、口を開いた。

「うん、言おう言おうと思って言えなかったんだけどさ……」

「だから、何！？」焦らさずに早く言えよ！ と心の中で毒づくちあき。

「うん、その浴衣、似合うね」

ちあきは、まるで九回まで投げきつたにも関わらず味方の援護がなかった高校球児のようにがっくりと肩を落とした。どうやら、ちあきが期待していた言葉は、変迅堂が言った言葉以上のものらしい。

見事に肩透かしを食らった格好になったちあきの心には、さつきま
でとは違う思いがふつふつと沸きはじめるのだった。その思いとは
……。殺意。

「まったく！ 遅い！！！」

そして、ちあきは持っていた唐傘を振り上げ、スパコーンと変迅
堂を叩いた。

「え？ なんで？ 褒めてるのに！！！」

なんで殴られているのかよく判らない変迅堂。

「ああもう！！ この無粋者！！！」

ちあきはスパコーンスパコーンと変迅堂の頭に唐傘をお見舞いす
る。

「ななな、なんで！！！」

ちあきの唐傘乱打から頭を守りながら逃げる変迅堂に、それを追
いかけるちあき。まるで、安いコメディである。

「あ、喧嘩か！？」花火見物をしている江戸っ子たちが二人の喧
嘩に注目しだした。だが、そんな中で、気の利いた江戸っ子が、こ
う言ったから、周りは爆笑の渦になった。

「はは、喧嘩は喧嘩でも痴話喧嘩だなありや。夫婦喧嘩と痴話喧嘩
は犬も食わねえや！」

ちあきは、そんなひやかしに顔を真っ赤に染めながら、変迅堂を
追い掛け回した。うーん、さつき、「ちよつとズレてるのは我慢し
よう」とか心に決めたのはどこのドイツだ、と突っ込みたくはなる
だろうが、やはりそこは年頃の娘なのだ。年頃の娘は、複雑怪奇、
そういうものなのですよ。

そんな、今にも唐傘で殴られそうな変迅堂、変迅堂を唐傘をぶん
ぶん振りながら追いかけるちあき、それを遠巻きに見て笑う江戸っ
子連中、そして、お江戸八百八町を、一瞬だけ輝く花火の光が照ら
し出していた。

さて、このお話、まだまだ続きます。この二人がこれからどうな

りますかは、また、次のお話にて。

第二話「海を見に行こう」【1】

「ちわつす！ ちあつちゃん、いますか？」

例の花火大会から数日後、うだるような暑さを代弁するような暑苦しい形相で、カツちゃんはちあきが住んでいる長屋の戸の前で叫んだ。外にはどこからか聞こえるセミの声。そんな中でもうるさく行商を続ける水売りの声。その二者が、まるで競い合うように声を張り出し合っている。

「あらあらあ！ 勝の字じゃないのさ！！ 久しいねえ！！」

長屋の戸を開いたのは、ちあきの母、お冬だった。出てきたのが、視覚的にも暑苦しいお冬だったこともあり、なんだかカツちゃんは全身から汗が一層沸いてくるのを感じた。ほとぼしる汗を手ぬぐいで拭いながら、カツちゃんは唇を伸ばして訊いた。

「あのう、ちあつちゃんは……」

そんなカツちゃんの質問に答えず、お冬はカツちゃん長屋の中に上げた。そして、全然質問に答える風もなくまくし立てた。

「あらあら……見ない間に、こんなに大きくなっちゃって！ しかも、火消しになったんだって？ うちの子から聞いたよ！ ちよつと待つといで、今、水あげるから！！」

お冬には悪気はまったくない。ただ、「久し振りに顔を見せた、最近出世したという顔馴染が家にやってきた」という状況に舞い上がってしまい、その人をもてなすことで頭がいつぱいになっていて、結果として人の話を訊いていない格好になっているのだ。

カツちゃんは、ちあきの長屋の三軒向こうの長屋、鳶の遥吉の一人息子である。だが、どうしたわけか一年前、その遥吉と喧嘩をしてみたい、この長屋を飛び出してしまったのである。当時、数えで十四歳の少年だったが、遥吉が居る現場とは違う所で必死に働いて、ついには今年、町火消しにまでなったのである。

そんな、出世頭のカツちゃんだから、なお一層のこと、もてなし

に頭がいっぱいになってしまふのだ。

「あらあら、息子みたいに思ってた勝の字がねえ。立派になって……」口には出さないが、お冬にはそんな気持ちがある。

長屋、というところは、現代で言うプライバシーなんて殆どない。厠は共用、井戸（水道）は共用。その上、洗濯干し場までも共用。しかも、薄い壁のせいで、それこそ隣の家の夕餉が知れる、という環境である。だが、そういう環境だと、仲間意識にも似た連帯感をも生まれるものなのである。

「で？」お冬は水と昨日の夕餉の残り、きんぴらごぼつを出して、訊いた。「今日はどうしたんだい？　こんな、長屋に来るなんてさ。あんた、忙しいんだろ？」

とりあえず、カツちゃんはきんぴらごぼつをつまみ、水を飲み干した。

「あ、おばさん、このきんぴら、うめえよ」笑顔でカツちゃんは言った。

「あら、世辞も上手くなっちまって……もつと食ってって！」まんざらでもなさそうなお冬。

カツちゃんとお冬は、ニコニコとにらめっこを続けていたが、二人とも、「何か忘れてないか？」と思い始めていた。それに先に気づいたのはお冬だった。

「……あ、そういや、今日は、何か用があつて来たんだろ？」

「あ、ああ！　そうだった！」手をポン、と打つカツちゃん。

「どうしたんだい？」

カツちゃんは、ちょっと顔を紅くしながら頭をポリポリ掻いて言った。

「ちあつちゃんを、見世物小屋にでも誘おうかと思ってたんだけど……、今日オレっち、休みでさ。でも、ちあつちゃん居ねえみたいなあ。どこ行ったんでえ？」

すると、お冬は声のトーンを落として答えた。

「……あの娘は、今日居ないんだよ」

「え！ 何で？ どこ行つたの？！」

そうカツちゃんが訊くと、お冬は吐き捨てるように言った。

「……あの、へんちくりんな発明家の、あの、変ナントカ、ってヤツんトコだよ」

「え！？ それってもしかして、変迅堂のヤロウのことか！？」

カツちゃんがそう訊くと、お冬は自分の額をぴしゃりと叩いた。

「そう！ その変迅堂！！」

カツちゃんは思わず立ち上がった。

「ありがとう、おばさん！！ ちょいと変の字の家までひとつ走り行つてくらあー！！」

だが、お冬は首を横に振った。

「ダメなのよ」

「なんで！？」

すると、お冬は頭を手で支えながら、苦々しげな顔をして続けた。

「……あの変ナントカ、ちあきと連れ立って九十九里に行くって」

「何！？」

九十九里、とは、当時の地名でいう下総・上総二国、現在でいうと千葉県にまたがる浜、九十九里浜のことである。太平洋に面した、現在では海水浴場が多い浜である。

「ってえことは……」カツちゃんは露骨に嫌な顔をした。「泊りがけ、ってことかい！！」

当時、江戸から九十九里まではかなり時間を食った。それは当然であろう。昔は、現代のように、電車も車もない。移動手段は、大抵が徒歩。良くて馬である。だけれど、それでも、九十九里まで行って帰れば一泊はせねばなるまい。無論、飛脚のような健脚の持ち主なら話は別であるが、ちあきも変迅堂も、ごくごく普通の人である。

当時の一般的江戸っ子であるカツちゃんのその見立ては、別段突飛なものではない。というかむしろ、妥当な判断である。だが。

「でもね……あの娘が言うんだよ……」お冬は、ハア、とため息を

吐いてから言った。「夕方までには帰るから」ってさあ。明らかにおかしいよねえ。騙されてるよねえ、きつと」

うん、絶対に騙されてる。と合いの手を打とうとして、ちょっと考え込んでしまうカツちゃん。なぜなら、この話の言いだしっぺが、あの変迅堂だからだ。

変迅堂は、たしかに変なヤツだ。だが、うそつき、詐欺師の類ではない。それに、出来ないことを言う男ではない。要は、「もしかしたらアイツなら、九十九里まで、日帰りで行って帰れる発明を作れるのではないか」という懸念が、カツちゃんの脳裏を掠めたのだ。そう、アイツは昔からそうだった。「透明になる薬」や「雨雲を消す尺玉」など、普通に考えれば眉唾な発明を今までやってのけていたのである。それを、まざまざと見せつけられているカツちゃんとしては、「もしかしたらアイツ、そういう発明をしたんじゃないかねえか？」という疑念は払拭できないのだ。一概に、「お宅の娘さんは騙されてますね」とは言えないのである。

むむむ……。カツちゃんは腕を組んで唸った。

「まったくねえ……」

お冬も腕を組んだ。とはいっても、カツちゃんとは違う意味で、なのだけれども。

「あの娘ったら、誰に似たのか騙され易くてねえ、あんな山師まがいの男について行っちまって……。まったく……。早めに嫁にやっちまうしかないかねえ……」

そう呟いて、お冬はため息を吐いた。

「あ……アガアガ」

“じゃあ、オレが貰いましょうか!!”という言葉が、喉から出掛かって、それでも出ないカツちゃん。そんな、アガアガと言葉にならない言葉を吐き出しているカツちゃんに、お冬はため息を吐いた。

「あんたも、奥手だねえ」

「め、面目ない」カツちゃんは恐縮したように頭を掻いた。

「あたしやね」お冬は続けた。「あの娘が良けりゃあ、あの娘を、あなたにくれてやってもいいと思ってるんだからさ。……ま、うちの父ちゃんが反対するかもだけどね」

「……それはそうかも」

カツちゃんは春吉の顔を思い出して苦笑いした。

カツちゃんと、春吉は仲がよくない。それは昔からそうで、なぜかいがみ合う関係である。どうしてかはよくわからない。でも、どうしたわけか、春吉はカツちゃんのことを買っていかない。もしカツちゃんのところにちあきが嫁に行くことがあれば、きっと春吉は花嫁泥棒をしてでもその祝言を阻止することであろう。

そういえば、子供の頃、あの人に理由もなく海老反りを極められたこともあったな、とカツちゃんは昔を思い出して苦笑いをした。

「……さて、と」

カツちゃんは下駄を履いた。

「おや、もう帰るのかい？ ……ああ、目当てがないなら、こんなところに用はないさね。野暮訊いて済まなかったよ」

普通に聞けばイヤミにさえ聞こえる言葉だが、そんな言葉をイヤミ気無しに、お冬は言つてのけた。それは、江戸っ子の大事な能力である。

「そんな、イヤミなこと言わんでもよオ……、あ、そうだ」

江戸っ子式の皮肉混じりのお言葉に、ちよつと苦笑いを見せたカツちゃんだったが、不意に真面目な顔になった。

「どうしたんだい？」

お冬がそう訊くと、カツちゃんは力カトをトントンしながら言った。

「いや、ちよいと小耳に挟んだんだけどもよ」

「まったく、勝の字は喋りも上手くなつたねエ！」呆れたように、お冬が言った。

「はあ？ どういうこつたイ？」

「そのココロは」お冬は言った。「聴き手の興味を先延べにするの

が上手い」

「い、いや、そんなつもりはなかったんだけどもよ……」

お冬は笑った。

「はは、冗談、冗談。さて、話を先に進めてくんないな」

「あ、ああ……。二つばかり、おばさんの耳に入れておいたほうがいい話があつて」

「二つ？」

「一つ目は」カツちゃんは指を一本立てた。「泥棒の話だ。ここん所、泥棒が出てるつてよ」

「そりゃあ」お冬はお齒黒を口から覗かせながら言った。「イヤミかね？ 泥棒に盗まれるようなものは、この長屋にゃあ無いだろうに」

二人は長屋を見渡した。確かに、金目のものは無さそうだ。というか、長屋住まいで、宵越しの金を持っているヤツなんてそうは居ないし、金目のものを買い集めるほど、長屋住まいの人間は粹ではない。

第二話「海を見に行こう」【2】

だが、カツちゃんは言った。

「それがよお、どうしたわけか、長屋に押し入って物を盗る、無粋なこそ泥が流行ってるらしいんでえ。とは言っても、盗られた額は団子一個分の代金程度の小銭らしいんだけどもよ。でも、気をつけておくと越したことはねえ。泥棒を見つけたら、自分でどうにかしようとは思わねえで、男衆を呼んだほうがいいぜ」

お冬は言った。

「そんな、ケチなこそ泥なんざ、あたしだけでも捕まえられるよ！」
そう啖呵を切るお冬。どうでもいいが、恰幅のいい体格のおかげで、啖呵が非常に映える。

「だがよ」カツちゃんは真面目に言った。「窮鼠猫噛みつていう言葉もあるからよ。そんなこと言わずに気をつけてくんない」

「で？」お冬は訊いた。「一つ目は泥棒の話。じゃあ、二つ目は何なんだい？」

「ああ、そうだった！」カツちゃんは、指をもう一つ伸ばした。「火付けの話」

「火付け？」お冬が訊くと、カツちゃんは言った。

「ああ、火付け。ここんとこ、江戸の街で小火ほやが流行ってるんだけどもよ。どうもそれが、火付けの作業らしいんでえ」

「あああ、こんな時期に火付け？」お冬は首を傾げた。

火付けとはつまりは放火魔のことだ。そういう類の人間の気持ちなんてよくはわからないが、でも、彼らが愉快犯だ、ということはわかる。そういう「愉快犯」にしてみたら、やっぱり盛大にものが燃えてくれた方が嬉しいのではないだろうか。だから、こんなムシムシした夏にはあまり火付けの話は聞かない。事実、火付けが出てくるのは、空気が乾燥し、風が出てくる冬に入ってからである。

「そうなんでえ」カツちゃんは、手で顔を扇いだ。

「不思議な火付けだねえ。こんな夏の時期じゃ、火つけても面白くなかるうに」

「ま、とにかく」

カツちゃんは外の景色をちよつと眺めて言った。あゝあ、まるで滝のように、太陽光が落ちてきてやがるよ……。外に出るの、やだなあ。心の中で呟きながら、ミンミンセミがうるさい外の景色に、ちよつとため息を吐く。

「火付けには注意してくれや。オレ達火消しも頑張るからさ」

「ああ！ 期待してるよ！！」

「んじゃ、もう行くわ！！」

景気をつけるように言うと、カツちゃんは長屋を飛び出した。ちなみに、戸を開けっ放しのまま。

「はあ、全くあの子も、鉄砲玉だねえ……」

そう呆れたように言いつつも、お冬はカツちゃんに好印象を抱いている。それは、根っからの江戸っ子であるお冬にとって、カツちゃんの「全身是江戸っ子」なキャラクターが好ましいからである。お冬にしてみれば、少々粗野であろうと考えなしであろうと、どこぞの無粋者よりは、はるかに好ましいキャラクターなのだ。

お冬は頭を抱えた。

「まったくはあ、うちの娘も、どうして近くにあんなイイ男が居るっていうのに……」

お冬はため息を吐いた。

「どうしてあんな、無粋者になびくのかねえ」

お冬は、どこぞの無粋者の顔を思い出して、ため息を吐いた。

長屋には、きんぴらごぼうが少し残された皿と、空っぽの茶碗が残された。

そんな景色を彩るように、ミンミンセミがガンガン鳴いている。そして、風が、一瞬吹いた。

「あ、洗濯物乾かさなきゃー！」

思い出したようにそう言うと、お冬もまた外に出て行った。

さて、そんな長屋のやりとりの三刻ほど（大体六時間くらい）前、ちあきは両国橋の前に居た。

まだ、太陽が昇らず、空気も心なしか冷たい。朝を知らせる風物詩、鳥のさえずりや、豆腐売り、青物売りの声も聞こえない。そんな朝早く、こんなところに呼び出すなんて、と、ちあきは少し不機嫌な気分になった。

でも。ちあきは考え直した。

先生が、珍しく誘ってくれたんだから！

そうなのだ。今回の、九十九里浜行の言いだしっぺは変迅堂なのだ。

それは二日前、変迅堂の長屋でのことだった。変迅堂が、ちあきに出し抜けにこんな事を言ってきた。

「海でも見に行こうか。二人でさ」

え！？ 先生の方から、逢引のお誘い！？ 心中穏やかでなかったちあきだったが、あえて斜に構えてみせた。

「とは言っけどさー、先生。どこの海に行くのさ！！ 江戸の海なんてヤダからね！？」

江戸湾、現代で言う東京湾だけれど、当時は遠浅の湾だった。海苔の生成や、小魚の漁が盛んな、なんだかダサく、垢抜けない海なのである。砂浜などはあまりなく、海遊びには適さない。ちあきが、「江戸の海はイヤ」と文句を言うのはそういう意味なのである。

すると、変迅堂は茶箆笥の中から無造作に丸められた紙が取り出した。そして、それをちあきの座る前にある卓の上に広げる。

「これ……、地図？」ちあきは、訊いた。

緑色と水色で塗り分けられている図。そして、「江戸」だの「宇都宮」だのと地名が書かれている。これは、どう見ても地図である。でも。

「なんかこの地図さあ……、細くない？」

古地図などを見れば判るのだけれど、江戸時代の地図、特に日本地図のように広い範囲をカバーしている地図は、なんだか所々いい加減な図である。というのも、当時そんな大きな地図など必要とする人は誰も居なかったからだ。現代のような精密な地図というのは、「国家」というものが外国との摩擦の中で必要とするものだからね。「はつは、この地図はね」変迅堂は言った。「測量、っていう作業をして取られた地図だからね。すごい正確なんだ。まあ、普通に生活する分にはここまで細かい必要ないけどね……」

地図の上の江戸が、ほかの地域と比べて小さかったのが、ちあきには印象的だった。

「さてと……」

変迅堂は地図の上に指を置いて、それを彷徨わせる。しばらく変迅堂の指は関東の辺りを彷徨っていたが、やがて下総国に止まった。「そうだ！ 九十九里浜なんてどう？ あそこの浜はきれいらしいし」変迅堂は言った。

「え！？ 九十九里！？」

……おいおい、それって日帰りじゃありえないよな。だって、九十九里まで結構距離あるもんね。てことは、さては先生、暗に泊りがけだ、って言いたいわけ！？ 先生ったら、まったく大胆なんだから……。そうちあきが思った、というのは嘘だけれど、ちあきは怪訝な顔を浮かべた。

「……泊りがけになっちゃうよ？ さすがにそれは、お母が許してくれないと思うしなア」

さすが我らがちあき！ やっぱり、物語のヒロインが、あんなモノローグをするのはマズイものね。

「ああ、大丈夫だよ」変迅堂はしれつと言った。

「え？ お泊りが！？ お母を丸め込んでくれるの！？」……あー、微妙にお泊りを期待していたのがバレバレではないか、ちあきよ。すると、変迅堂は笑った。

「いやいや、九十九里浜だったら日帰りだよ」

「え？ 何言ってるのよ！」ちあきは言った。「九十九里までかなり距離があるじゃない！ どんなに急いでも、片道半日はかかるわよ！ そんなところに日帰り？ ってことは、半日かけて海まで行って、ちよつと海を見て、それで帰るの？ そんなのヤダよ！」
そんなんだつたら江戸の海でいい、と思うちあきなのだった。
すると、変迅堂は言った。

「なになに。私を誰だと思ってるんだい？ 私は大発明家……あ、中発明家？ いやいや、小物発明家？ まあいいや。ともかく発明家の変迅堂だよ？」

ちよつと肩肘を張って、見得を切る変迅堂。どうでもいいけど、変迅堂の体は薄っぺらいので、どうにも見得が映えない。

そして、続けた。「そんな発明家の手にかかれば、九十九里浜くらい、日帰りで行って帰れるさ」

そんなわけ……という言葉が喉から出掛かりつつも、ちあきは考えた。

いや、先生ならありえるかもしれない、と。

一番近くで変迅堂の発明を見ているちあきにとって、「九十九里浜まで、日帰りで行ける」という変迅堂の言葉には、「発明」という裏づけがあるのだ。

「本当に日帰りでいけるの？」

ちあきがそう訊くと、変迅堂は、満面の笑みを見せた。

「もちろん！」力強い言葉であった。

そう屈託もなく宣言されてしまえば、ちあきにはそれを疑う必要はない。

というわけで、お冬には「九十九里浜に先生と行ってくるね。でも、日が暮れるまでには帰るから」という、江戸時代の人間からしたら明らかに矛盾したことを言った。すると、お冬は明らかに眉唾な顔を見せた。そして、「アンタ、絶対に騙されてるわよ！」と何百回も連呼される羽目になった。

そんな、想定外の範囲内のお冬の横槍に、意外にも助け舟を出した

のは、父・春吉であつた。

そんなお冬の連呼を訊いていた春吉が、こう言ったのだ。

「いいじゃねえか。別に。もし何かあつたんなら、向こうも大人なんだ、責任取らせりゃいいんだからよ」

まったく、一人娘の父親のセリフとは思えないけど、春吉はこういう男なのである。よく言えば、子供の意思を尊重しているということなのだろうし、悪く言えば、ただの放任主義なのだ。……まあ、ただの考えなし、伸るか反るかの男だつてことなただけだ。

この春吉の言葉に、お冬は噛み付いた。「あんたね！ 年頃の娘を持つ父親として、そういう態度はどうなのよ！」と。すると春吉も売り言葉に買い言葉、「なんだとべらぼうめえ！ もうちあきも大人なんでえ！ 少しは我が子を信用しやがれ！」と大喧嘩になつた。そして、気がつくとちあきの九十九里浜行の話はどこへやら、なぜか夫婦の罵り合いに発展したのであつた。……ま、そのおかげでお冬も、九十九里浜行の件に表立っては文句を言わなくなつたのだから、良しとしよう。

そして今日、九十九里浜行の当日なのである。

第二話「海を見に行こう」【3】

「だけど、先生遅いなあ」

「ちあきは、待ち疲れたのか、そんな声をあげ、目をこすった。

そんな頃、聞きなれない爆音と共に、江戸の街の方から、霧をまとった人影が両国橋に向かってやってきた。

「ああ、お待たせ！」

その人影は手を上げて言った。朝靄と闇のせいでよくは見えないが、その人影は何かを引いているようであった。そして、その声は、見慣れた人間の、つまりは変迅堂のそれだった。

「遅いよ！ 先生！ あたし結構待つちゃったよ！」

「ちあきは口を尖らせて言った。

近づいてきた影が、やがてどんどんその形を明らかにしていく。ちあきの思ったとおり、その影は変迅堂であった。いつも通りの眼鏡に長身。けれど、珍しく袴姿だ。

「いやあ、ゴメンゴメン」変迅堂は頬を掻いた。「ちよっと、こいつらの整理に時間がかかっちゃって。前日に準備しとけばよかったですよ」

「そう言って、変迅堂は後ろを指差した。

「ナニコレ？」

「ちあきは、変迅堂の横と後ろに控えるものを眺めた。後ろには、大八車に詰まれた、ガラクタの山。それはいいとして……。ちあきは、変迅堂の横に控える、ゴウンゴウンとうるさい音を立てる変なものを見つけた。

木製の車輪があることから見て、車なのだろう。でも、車には絶対にあるはずの引き手がない。いや、正確にはあるのだが、それが、前ではなく後ろに伸びている。しかも、その引き手は、まるで太刀のように湾曲している。それに、車輪が三つある。前に一輪、後

るに二輪ある。さらにおかしいのは、その車、なぜか鞍くらが付いている。

「ああ、これ？これはね、私が発明した……」変迅堂は言った。「自走式車、っていうんだ」

現代風に言えば、バイクである。

だが、二輪バイクではなく、よくピザの宅配に使われる、三輪バイクのような形である。とは言っても、ピザの宅配に使うタイプのようなスクーターではなく、あきらかに大型バイクの大きさだし、ハンドルの曲がり具合も、現代で言うアメリカンバイクみたいな感じになっている。

変迅堂は続けた。

「こいつはね、馬を参考に作った乗り物でね。最高で、一刻あたり60里進めるよ」

一刻は大体二時間、一里は大体四キロであるから、最高時速120 km、というところだろう。

「はあ！？一刻で、60里!？」

ちあきはアゴをガコつと開いて文字通り驚愕した。

当時、徒歩での旅が当たり前だった頃、一刻あたり二里進む、というのが当時の常識である。だから、大体一日に十里くらい進むのが、標準的な旅の姿であった。そんな時代の人間としては、一刻で一日歩く距離の六倍を稼げる道具など、驚愕以外の何者でもないのだ。結果、ガクガク。

「まあ、とは言っても、後ろに大八車をくくりつけてるからね、たぶんその半分くらいしか速度は出ないだろうけどね……」変迅堂は、苦笑いを浮かべた。

「へえ〜！先生、たまにはすごい発明するのね!！」

目をランランと輝かせて、ちあきは自走式車、つつかバイクを眺めた。

最初はランランとした目で見ていたちあきだったが、そのうちアゴに指を絡め、うーんうーんと唸り始めた。

「どうしたんだい、ちあき殿？」

変迅堂は、そう訊いた。すると、ちあきはそのままの姿勢を続けて答えた。

「何かに似てない？ これ……」

ちあきは自走式車を、疑うかのような細い目をしながらも眺めた。「たぶん、馬じゃないかな？ 馬の操作法を参考に作ったからさ」

「いや、そんなゴツツイものじゃなくて、もっと可愛いものに……」
そう呟きながら、ちあきは自走式車の引き手、つまりはハンドルに目をやった。そう。この形……、どっかで……。

「あ！ わかった！」ちあきは手を叩いた。

「ん？ 何？」

「こいつってさ」ちあきは、自走式車を指した。「ウサギさんに似てない？」

この自走式車、現代のバイクで喩えるなら、前半分はアメリカンバイク、後ろ半分はピザ宅配用バイク、といった趣である。イメージをしていただければわかると思うけれど、全体的に丸っこい輪郭を形成している上に、ハンドルの形状がそこはかたなくウサギの耳っぽいのである。アメリカンバイクの特徴として、「ハンドルが後ろに向かってアーチを描くように伸びている」というものがあるが、この自走式車のハンドルもまさにそうなのである。

「ああ、確かにね」変迅堂も、横にある自走式車を眺め、言った。

「じゃあ、こいつの名前はイナバ君、ってことで」ちあきは自走式車を指して、言った。

「因幡の白兔、のイナバかな？」変迅堂がそう訊くと、ちあきは答えた。

「そうそう！ これから海に行くんだもの。おあつらえ向きな名前じゃない？」

因幡の白兔は鰐ふかに騙されて、海水で怪我をした体を洗う羽目になり痛い思いをした、という神話がある。ちあきはそれを引いたのである。でも、よりもよって、そんな縁起の悪い話から名前をつけ

なくても……、と思う変迅堂なのだった。

「なによ、先生！ 不満！？」

変な顔をしていた変迅堂に、ちあきは不服そうに言った。

「あ、いえいえ、なんでもございませんことよ」

縁起悪い名前なんじゃないかな……という言葉が喉から出掛かりつつも、それを何とか飲み込む変迅堂。そんなことを言った日には、きつと、ちあきの拳骨が飛んでくるであろう。変迅堂、そういうところでの頭の回転は速いのだった。

未だに疑念の目を持って変迅堂を見るちあき。そんなちあきの視線に耐えかねて、変迅堂は言った。

「よし！ そろそろ行こうか。それじゃちあき殿、『イナバ君』の背中に乗って！」

イナバ君、というところに強くアクセントを置いて、変迅堂は言った。そんな変迅堂に、ちあきは満足そうな笑みを浮かべて微笑んだ。

「へっへ！ よろしい！」

そう笑うと、ちあきはイナバ君の前に立った。だが、そこから固まる。

「ん？ どうしたの、ちあき殿？」不思議そうな顔をして、イナバ君の前で固まるちあきを眺める変迅堂。

「ねえ、先生」ちあきは、変迅堂の顔を見て言った。「これ、どうやって乗るの？」

「え？ こうやって跨またがって……」ここまで言って、変迅堂はあることに気づいた。「あ、そっか。小袖こそで姿じゃ乗れないよね！」

ちあきの格好は、江戸の娘の標準装備、小袖であった。

小袖、って言っても、現代人はいまひとつイメージが利かないかもしれないけれど、小袖というのは江戸時代の女性の標準的な格好で、丁度振袖の袖を小さくして、装飾を抑えた着物、と言えばわかるだろうか。まあ実は、振袖自体、小袖のゴージャス版なのであるが。

小袖は、もちろん浴衣と同じく下半身がスカート状になっている。そんな服で、バイクに跨げるのか、という話なのである。跨げないことはないだろうが、そんなことをすれば見えてはいけなところが見えかねない。

「ああ、しくつたなあ」変迅堂は自分の額をぺちぺち叩いた。「袴姿で来て貰えば良かった……」

「どうするのよ!!」今にも、グーで殴りかからんばかりの剣幕のちあき。

「はは、心配ご無用!!」少し考えたあと、変迅堂は言った。

「どうするの?」ちあきがそう言うのが早いか、変迅堂はちあきを不意に抱き上げた。

「え! え!?!」

ちあきは戸惑いつつも、心の中でよっしゃ、と思う。

一方の変迅堂は、何の感慨もなさそうな顔をして彼女をイナバ君の鞍の前側に、チヨコンと乗せた。丁度、椅子に座らせるような感じである。

「こうやって、横乗りすれば大丈夫でしょ。……ちよっと危ないかもだけど」

そう言つと、変迅堂は、鞍の後ろ側に乗り込んだ。そして、イナバ君の耳、つまりはハンドルを握った。

「あ、ちあき殿」変迅堂は言った。「鞍の前に、取っ手があるでしょ? 運転中はこれを掴んでね、危ないから」

「あ、うん」

変迅堂に言われたところを見ると、そこにはチヨコンと取っ手がついていた。そして、わかった、と合槌を打つと、ちあきはその取っ手を掴んだ。

それを確認すると、変迅堂は言った。

「よし、じゃあ、出発!」

変迅堂は、まるで馬にするかのように、足でイナバ君の「腹」を蹴った。すると、さっきまでウオンウオン鳴っていたイナバ君の音

がさらに強くなり、ソロソロと動き始めた。変迅堂がハンドルの前についている引き金のようなものを握ると、イナバ君は速度を上げ始めた。

「ななな、は、速い!!」

ちあきは恐る恐る前を見た。普段見慣れた江戸の街が、少しずつ後ろに流れている。こんな光景、この時代の人間にはそうそう見られるものではない。この時代、車のような感覚が味わえる乗り物と言えば駕籠か馬であろうが、江戸から出る用事のないちあきには用がないものである。

「すごいでしょ？」

変迅堂は言ったが、ちあきには聞こえない。というのも。

ウオンウオンウオンウオン……………。

そう、イナバ君がうるさいのである！まるで、稲妻のような轟音を響かせるイナバ君、かわいいフォルムのクセに凶悪な音を響かせるのである。

「ねえ！なんでコイツ、こんなにうるさいの?!」

速度を上げているイナバ君の上で、ちあきは訊いた。だが。

「え？なに？なんか言った？全然聞こえない！」イナバ君の騒音のせいで、まるで聞こえない変迅堂。

「だ〜か〜ら〜!!」ちあきはすこしイライラし始める。

「なに？なに？」まったく聞こえていない変迅堂。

ちあきは、少しため息を吐いた。そして、ちよつと考えた。

むむむ、どうやって伝えよう？

普通、現代のバイクには、マフラーという部品がついている。そのマフラーによって、騒音の原因である排気音やエンジン音を消しているわけであるが、このイナバ君にはそんな装備はついていない。だからこんなにうるさいのだが、そんなこと、ちあきは知る由もない。

そこで、ちあきは一計を案じた。

第二話「海を見に行こう」【4】

ちあきは、後ろにいる変迅堂に肩をぶつけるように寄り添ってから、耳打ちしたのだ。

「だから、なんでコイツ、こんなにうるさいの？ って訊いてるの！！」

変迅堂は、ああ、と言わんばかりの顔を見せた。ようやく通じたか、とちあきは思った。

変迅堂は答えた。「しょうがないんだ。これ、中で臭水くすいを爆発させてるからね」

「く、くそうず？」ちあきは思わず訊いた。

「そう」変迅堂は目線を前方に目を遣ったまま続けた。「臭い、に水で臭水。越後の国なんかでよく採れる水なんだけどね、これ、おもしろい性質があつてさ」

「ど、どんな？」好奇心のこもった声で、ちあきが訊いた。

「水のクセに、黒くて粘々して、ものすごい勢いで燃えるんだ。：

…もしかすると、油の一種なのかもしれないね」

「フウン？」判ったような相槌を打つちあき。

臭水。現代人ならその恩恵に預からない人は、きつといない。臭水、とは、石油のことである。だけれど、江戸時代後期に、その有用性に気づいていた人間は恐らく少ない。人間が明り採りに使うには燃焼が強すぎるのだ。石油に有用性が生まれるのは、内燃機関の発明以降である、と言っても過言ではない。……え？ ということは？

変迅堂は続けた。

「この、ええと……イナバ君？ こいつのなかで、臭水を強烈に燃焼、つまりは爆発させたその力で車輪を回して動いているんだ。だからこんなにうるさいんだよ」

な、なんと、変迅堂は内燃機関を作り出していたのだった！ 内燃機関の発明は、19世紀の中ごろのヨーロッパ。それが、実用的なレベルに達するのは20世紀直前まで待たねばならない。それを、変迅堂は、独力で、しかも100年近く早く開発したのである。あわわわわ、只者ではない、変迅堂。

それを発明したのにも関わらず、飄々としている変迅堂、そして、そんな世紀の発明を前にして、ただ「うるさい！」と感じているちあき。どちらものんびり者としか言いようがあるまい。

でも、そんなものなのである。発明、なんてものの価値は、発明した本人が気づくものではないのだ。きっと。

そんな、のんびり者の二人を乗せ、イナバ君は稲妻のように、まっすぐな街道を駆け抜けていく。ようやく朝日が昇り始めた時分だったこともあり、まだ街道を歩く人はいない。風が、二人をすり抜け、消えていった。まだ、ムシムシした暑苦しい空気ではなく、朝の、爽やかな空気。その空気がちあきの髪を揺らし、抜けていく。ウオンウオンウオン、という奇妙な脈拍を街道筋に響かせ、砂塵を舞い上げながら、イナバ君は街道をひた走っていく。その上で、横乗りしているちあきは、あることに気づいた。

もしかして、今の体勢って、かなりオイシインじゃなかるうかと。

よく想像してみて欲しい。鞍の前で横乗りしているちあき。その後ろで、ハンドルを掴むために前に手を伸ばして座る変迅堂。これって……客観的に見たら、「あらあら、あのカップル、ラブラブねえ」みたいに言われてもしょうがない図ではないだろうか。子供に冷やかされても、文句は言えない。

その事に思い至ったちあきは、ちょっと赤面してキモチ変迅堂と距離を置いた。

ところで、読者皆様の中には「変迅堂、さてはちあきと密着したいがためにこんなバイクを発明したんじゃないかあるまいな？ このエロスめ！！」とお疑問の方もいらっしゃると思うけれど、それは違う

んである。

変迅堂は、このイナバ君を開発するにあたって、馬をそのモデルとした。イナバ君の背に鞍が備え付けられているのがその証拠の一端である。また、足でイナバ君の腹を叩いて速度を上げるといったシステムも、まさに馬の操作法を参考にしている。

なので、その騎乗法も、馬を参考にしている。背筋をピンと伸ばした、馬乗りスタイルである。さて、ここで問題になるのが、馬における「二人乗り」である。

実は、変迅堂が知っていた馬の二人乗りは、「前に同乗者を乗せ、後ろに操縦者が乗る」というスタイルのものだったのだ。実を言うのと、普通のバイクのように、操縦者が前で同乗者が後ろ、というスタイルの馬術もあるのだが、それを、変迅堂は知らなかったのである。

まあ、いくら独力で内燃機関を発明した天才とはいえ、何でも知っているというわけではない一つの証拠ですね。

「ん？ どうしたの、ちあき殿？ あんまり前に出ると危ないよ？」
変迅堂は何も無げに言った。

「だだだ、だって……」ちあきは口ごもった。

だって、後ろに体を寄せると……。ちあきは思った。先生の息遣いがわかるくらい近くなっちゃって、恥ずかしいんだもの。そう思ったちあきではあったが、そのまま言うわけにもいかず、ちょっとオブラートに包んでみるのだった。

「だって、先生の息が臭いんだもん！！」

あー、ちあき。それはひどくないか。って言うか、今の言葉はとも「オブラートに包む」というレベルではない。

「え……！？」

変迅堂は、コキーンと固まった。やっぱり、さすがに衝撃的なのだろう。つうか、面と向かって「息臭い」って言われてショックじゃない人間なんて、居ないと思うけどね。

「え?! あ、ああ、ウソウソ!!」慌てて前言を撤回するちあき。

そんなちあきに、変迅堂は怪訝な顔をして訊いた。

「じゃあ、なんだってそんな距離を置くんだい？ 危ない、って言うてるのに」

そう変迅堂が言うか言わないかの間に、ちあきは頭をぐるぐる回転させて考えた。え、何を、って？それは、話を繋ぐ方法である。

「だって、先生とくつついてるのが恥ずかしいんだもん！」と正直に言えてしまえばいいのだけれど、ちあきは花も恥らう乙女。そんなこと、恥ずかしくて言えないのだ。うーん、乙女って大変ですねまさに命懸け。

「あ！」

素っ頓狂に、ちあきが叫んだ。きつと、何か思い浮かんだのである。そんなちあきを不審がって眺める変迅堂に、ちあきは訊いた。「ねえ、先生。さつきからこの道、いやに真っ直ぐな気がするんだけど、なんで？」

そう、ちあきは話を逸らすことにしたのだ。けれど、さすがは無粋者。ちあきの、話の転換の強引き、不審さに気づくことなく、変迅堂は答えた。

「ああ、この道はね……」

変迅堂が話した話を要約するところである。

江戸幕府の初代將軍・徳川家康公は鷹狩りが好きで、ある日家臣に、「九十九里浜の鷹狩り場まで、まっすぐな道を作れ！」と命令し、作られたのが今二人がひた走っている道だ、ということだ。

実はこの道は、鷹狩りに事寄せた軍事道であった、という説が現代では優勢である。いくら幕府を創設し、国一番の権力者であった家康とはいえ、そんな自分のわがままのためだけに道を作ったりはしない。

まあなんにしる、この道は「天下人の意思」という、何者よりも強い力が働いて作られた道だという性質上、とにかく障害物はもちろん、曲がり道も屈曲もなく、まっすぐに造られているのである。

「へえ、神君家康公がねエ」感慨浅そうに、ちあきは呟いた。

「うん。ま、今となつては江戸と房総を繋ぐ大事な道だけどね」変迅堂はそう言つて軽く笑つた。

そんなこんな言つているうちに、二人を乗せたイナバ君は、街の景色から離れていた。二人の目に飛び込んでくるのは、稲穂の青。そして……。

「あ、お天道様!!」ちあきは思わず叫んだ。

そう。早出してきた二人を、ようやく太陽がお出向かえしたのだ。まるで、「しゃきつとせんかい!」と言わんばかりに、まだ眠りに落ちたままの大地に、陽光が落ちる。その陽光を待つてましたと言わんばかりに、青い稲穂たちがさわさわ騒ぐ。そして、その様を、太陽が笑う。

「先生!太陽だよ!!」

まるで初めて見るかのような声を上げるちあき。それをほほえましげに眺めながら、変迅堂は言った。

「ああ、そうだね。……でも、急がなくなっちゃ、だね。そうじゃないと、この街道に人が溢れちゃうからね」

「溢れちゃマズイの?」ちあきは変迅堂の顔を覗きこんで訊く。

「そりゃそうさ」変迅堂は答えた。「こんなすごい速度で、街道を駆け抜けたら人を撥ねかねないからね。ほら、ちあき殿、しっかりと掴まつてね! 速度、上げるよ!」

そう言うと、変迅堂はイナバ君の腹を足で叩いた。イナバ君は稲妻のような嘶きいひなひをさらに強めたかと思つたら、またその速度を上げた。

「きゃ!!」ちあきは、思わず叫んだ。速度を急に上げると、慣性という物体の運動法則のくびきにより、後ろに引つ張られるような感覚になる。ちあきの後ろには当然……変迅堂が。

そんなちあきの小さな体を、変迅堂は上半身で受け止めた。そして、まるで子供を軽く叱るような口調で、こう言った。

「ね? 危ないでしょ? 息が臭かろうと、こうやっていた方が安全だよ」

そう子供をあやすような口調でちあきに話しかけ、前方を眺める変迅堂の顔を、彼の胸に体を預けながら見上げるちあき。なんだか心地いい。そう思うちあきなのだった。

「さ、急ごうか！！ ちよっと速度上げるからね！！ おりゃあ！
」

変迅堂は、またイナバ君の腹を蹴って、さらに速度を上げた。

慣性によって後ろに体が押しつぶされるような感触と、変迅堂の胸の鼓動に挟まれた形になったちあきは、「ああ、けっこう今、幸せかも……」とか、うっとりと思い、結局は変迅堂に寄りかかるようにするのだった。

だが、一方の変迅堂は、そんなちあきのことなど知る由もない。なぜなら、こんなことを考えていたからだ。

「うん、この車、なかなか乗り心地もいいし、しかも心配していた揺れもさほどじゃない。うんうん。なかなか、上々上々！……こんなモノローグ、ちあきには見せられませんな。ていうか、ちあきが知ったら、きっと流血沙汰になるだろうね、きつと。」

そんな二人を乗せたイナバ君は、目覚めたばかりの太陽に向かってただただひた走るのだった。

第二話「海を見に行こう」【5】

「先生！ 海風！」ちあきはそう変迅堂に声をかけた。

イナバ君が走り始めて一刻と少し。太陽はもう顔を覗かせ始めていた。そんな時分には、周りの風景は農村の風景から、漁村のそれに変わっていた。吹く風にも、潮臭さが混じる。

「ああ、そうだね、多分、もうそろそろだよ」変迅堂は、ふっと笑った。

そう変迅堂が言うか言わないかの間に、二人の視線の先に、松林と砂っぽい地面が見えてきた。松と砂。この組み合わせは、海が近い、という印である。変迅堂は、イナバ君の速度をガクンと緩めた。それと同時に、イナバ君の嘸きも弱々しくなった。

「おつかれさま」

そう言うつと、変迅堂は殆ど停まってしまったイナバくんから降りた。そして、ハンドルを手に持ったまま、イナバ君を押ししていく。

「先生？ なんでイナバ君に乗らないの？」

ちあきがイナバ君に横乗りしたまま訊くと、変迅堂は答えた。

「ああ、車輪と砂浜、っていうのは相性が悪いんだ。多分、砂浜だと車輪が空回りしちゃうからね」

ちあきは、イナバ君から降り、イナバ君を押しした。

「大丈夫だよ、ちあき殿は押さなくても。重いでしょ？」そう、少し心配そうな顔をして変迅堂が言う。

「平気。それに」ちあきは続けた。「イナバ君を、ちよつとはいたわつてあげないかね」

そう言うつて、ちあきはイナバ君を押し続けた。ちあきは、ここまです二人を運んでくれたおんの思いと共に、イナバ君を押し続けた。

そんな二人とイナバ君は、松林の間にある道を抜けていった。松林というものは、太陽光をふさぐ上、風も遮る。だからこそ、風に対する障壁として松が用いられるのだけれど、どうにも薄気味悪い。

足元でじやりじやり響く砂も、なんだか薄気味わるい。

やがて、二人の前に、光の扉が見えてきた。松林の闇を切り裂くような光。きつとあの先には、あのお目当ての景色が広がっているのだらう。二人は、イナバ君を押しながら、その光の扉を眺める。そんなこんなしているうち、やがて二人の目が光に慣れてきた。

だから、その先の景色もようやく見渡すことが出来た。二人の視線の先には、白っぽい砂、そして。

「先生！ 海だ海だ！」ちあきは叫んだ。

二人の視線の先には、空の青を映して青く輝く、夏の海が広がっていた。

「やった！ 海！」

ちあきは、思わずイナバ君を押す手を離し、砂浜へ走っていつてしまった。

「ち、ちあき殿？ 走ると危ないよ！」

「子供扱いするんじゃない！」

ちあきは振り返り、変迅堂のはるか前方で振り返って叫んだ。けれど、その顔は子供扱いされた不満げな顔ではなく、「わーい！ 海だ！」と言いたげな、弾けんばかりの笑顔だった。……ふ、ちあきよ、まだまだ子供だね。そんなちあきの顔を眺めながら、変迅堂は、「ああ、連れて良かったなあ」と、しみじみ思うのだった。ただし、その思いは、喻えるなら、「家族サービスを達成した父親」みたいなものであった。要は、「仕事休んで、娘の喜ぶ顔が見れて良かったよ」とでもいう感慨に似た気分であった。頑張れ、負けるな、ちあき。

さて、そんな感慨にちよっと浸りつつも、変迅堂はイナバ君の後ろに括りつけてある、大八車の上に載っている荷物がガサゴソとした。そして、その荷物を取り出すと、風呂敷に包んで背負い、ちあきがいる砂浜の方へ歩いていくのだった。

「なあに、その荷物！？ そういえば、イナバ君の後ろに大荷物積んだ大八車があったけど、もしかして、その荷物？」ちあきは、大

荷物を背負う変迅堂に言った。

「そつだよ」変迅堂は言った。「私の、発明だよ」

「は、発明？」

え、また変なものを作ってきたのか、と言わんばかりに、ちあきはどこまでも訝しげに訊いた。

「うん、そう、発明。……実はさ、光州屋さんから“海で遊べる遊び道具を開発してくれ”って頼まれちゃってさあ。そんなわけで今日海にその道具の試作品を試しに来たってわけ」

光州屋、というのは、江戸っ子の間では知る人ぞ知る雑貨屋である。というのも、珍品やら、何に使うのかよく判らない道具ばかり売っており、好事家や珍品好みの客しか来ないからである。

変迅堂は、この光州屋主人、又兵衛と懇意なのである。又兵衛は商売柄、変なものを作る発明家とのツテがあり、たまたま共通の知り合いの紹介で出会った。それからというもの又兵衛は、変迅堂の作ったよくわからない発明を買い取ったり、発明のアイデアを出したりしてくれるのである。

そんな又兵衛、今回も変迅堂にアイデアを持ってきたのである。

「海で遊ぶための、遊具を作ってくれ」と。

ちなみに、当時、海は遊び場としては認識されていなかった。やはり、海といえば漁場、それが常識だった。当時、当然「海水浴」などというものも一般的ではなかった。

しかし、光州屋、商売に関しては勝負師である。そういう、まだ誰も目をつけていないところに目を遣るのが上手い。ま、そういう目があるから、そんな悪趣味な雑貨屋を経営していても潰れたりしないのだろう。

「てえことは……何？」ちあきは、フルフル震えながら言った。「先生が、あたしを海に誘ったのは、もしかして、ついで？ その発明を試す、そのついで？」

ゴゴゴゴ……。どこかから、地響きのような音が聞こえる。恐らく、ちあきのある感情が、空気を揺らして響いている音なのだろう。

う。その感情とは……、もちろん殺気。

さすがに空気の読めない変迅堂とはいえ、「はいはい。ついですよ」と言つてのけるほどに空気が読めないわけではないらしい。もつとも、ちあきの肩から出る青い炎のようなヤバイ殺気に、気づかないはずはないけれども。

「……はははは、そ、そ、そんなわけないじゃないか」目を逸らせながら、そう答える変迅堂。

「本当に!!?」そんな変迅堂に詰め寄るちあき。

「……」

「……」

お互い、にらめっこする形になる二人。ただ、普通のにらめっこと違うのは、一方がまるで夏の牡蠣かきに当たった人みたいな青い顔をして、もう一方が彼氏の浮気に気づいたときのような夜叉の顔をしている、という点だ。

「嘘つきー!!」

ちあきのグーが、変迅堂の右頬にブチ込まれた。

「ぐはあッ!!」ちあき殿、強い……!!」

そう言つて、変迅堂は砂浜に倒れた。まるで、砂で作った城のように、ぐしゃっと崩れ落ちた。

だが、そこは変迅堂である。すぐに、立ち上がる。この男は、打たれ強いのだ。そして、変迅堂は風呂敷を砂浜の下に下ろし、広げた。まるで、おもちゃ箱をひっくり返したかのように、変迅堂の風呂敷からはガラクタばかりが出てきた。そして、ちあきにそのガラクタを手で示した。

「ま、何はともあれ、遊んでみようよ」

「な? ナニコレ?」ちあきは思わずそう言った。なにに使うのかよく判らないものが、風呂敷からあふれ出ている。ちあきは、その中で、丁度ちあきの背丈ほどの大きさの板を手を取った。木の葉型で平べったく、そして大きい。色は桃色。何に使うんだろ……。ちあきは思った。

「それ？」変迅堂は言った。「それはね、波乗りまな板、って言うてね。海の波に押されて動く、簡易舟みたいなものかな」

現代でいう、サーフボードである。

「でも」変迅堂は続けた。「その格好のままじゃ、乗れないよ。だって、濡れちゃうもん」変迅堂は、ちあきの地味な柄の小袖を眺めて言った。

「え？ 舟なんだから、濡れないんじゃないの？」ちあきが訊くと、変迅堂は答えた。

「いや？ これは水に入って濡れるのが前提だから」

「じゃあ乗れないよ！！」

ちあきは唇を伸ばした。すると、変迅堂はふっふっふ、と不敵な笑みを浮かべてから、風呂敷をまさぐり出した。

「心配ご無用！！……ええつと、あつたあつた！」変迅堂は風呂敷から手を引き抜いた。その変迅堂の手には、小さな風呂敷があった。「これに着替えれば、大丈夫！！」

「なに、これ？」ちあきの訝しげな顔。そんな顔を眺めながら、変迅堂は答えた。

「これ？ これは海水浴着。略して、水着だ！」

当時、まだ海水浴の習慣がなかった。ということは、当然の事だけれど、海水浴に付随するものもまだ未整備なのである。つまり、この時代には、「水に入って泳ぐための衣服」というモノすら存在しなかったのだ。

「さ、これ着ておいで！」変迅堂は言った。

「……ど、どこで？」ちあきは思わず訊いた。

「え？ どこで、って？ それは……そこらへんの小屋でも借りて……」

と言いながら、変迅堂は辺りを見渡す。だが、辺りの浜には、小屋どころか人工物一つ見当たらない。

あちゃあ。変迅堂は、そう言わんばかりの顔を見せた。

「ねえ」やけに優しい声で、ちあきは言った。「考えて、なかった

の？ そんな大事なことをさあ？」

江戸時代の女性は、肌を陽光に晒すのを嫌がった人たちである。夏でもロングスカートのような浴衣を、暑い暑いと言いながらも手放さない人たちであるからして。

「……い、いやいや、考えてたよ？ ええつと……確か……。あつた！」

変迅堂は、風呂敷から、六尺（180cmくらい）ほどの高さがある、屏風のように蛇腹じやばらな板を取り出した。そして、変迅堂はそれを口の字型に立てかけた。

「ほら、これ！ これは簡易着替え小屋、っていうんだ……！」
やけに言葉が泳ぐ変迅堂。

実は変迅堂、着替えについては全く考えていなかった。自分自身が男だということもあり、そこまで頭が回っていなかったのである。だが、そこは天才・変迅堂である。たまたま持ってきていた、「波乗り板・5人乗り用（試作品）」を着替え小屋の替りとして用いたのである。なかなか機転が利いてるね、変迅堂。でも、二人しかないのに、なぜ5人乗りのサーフボードを持ってきたのかは、永遠の謎である。……つうか、そもそも5人乗りのサーフボードって何だよ、っていう突っ込みはやめて欲しい。

第二話「海を見に行こう」【6】

「わあ、さすが先生！ 考え無しって訳じゃなかったんだね！」
ちあきは飛び上がった。……ごめん、ちあき。実は変迅堂は、ただの考えなしなの。

「んじゃ、着替えてくるね！ ……先生、覗かないでね！」キツとした目を変迅堂に向けるちあき。

「あゝ。はいはい」最初から、そんなことに興味なさそうな変迅堂であった。

とにかくちあきは、その簡易小屋の中に入った。

一方の変迅堂は、松林のほうに置いてあるイナバ君の前で水着に着替えると、また砂浜の方に戻った。変迅堂が着ている水着は、袴を丁度ハーフパンツくらいの丈にしたものだった。だが、その素材が特殊なもので出来ている。このテカテカの素材は、水を弾くのだ。水着だから、上半身は裸。そうそう、海で泳ぐつもりだから、眼鏡は外している。

変迅堂が浜に出ると、ちあきは既に着替え終えて、浜に立っていた。「先生遅いよ！」とが言つて。

ちあきの着ている水着は、浴衣の袖を大胆にも落として、裾を膝上くらいにまで高めたものである。イメージは、上半身ノースリーブの、下半身ミニスカートといったところだ。そして、脚にはスパッツのようにびっちりとした、膝ほどまである黒いパンツを履いている。

「どう、ちあき殿？ その水着？」変迅堂が訊いた。

ちよつと水着をきよるきよると見ながら、ちあきは答えた。「悪くないけど……、ちよつと恥ずかしい、かな？」

現代の感覚で見れば、ちあきの今の服装はそこまで露出が多いものではない。だが！ だがである。当時の人からしたら、この格好はかなり恥ずかしい格好のはずである！

現代はやれキャミソールだあ、ミニスカートだあ、見せブラだあ
と、女性の肌の露出にあまり違和感がない。だが、さつきも書いた
と思うけど、江戸っ子は、夏でさえ長袖のロングスカート、つまり
は浴衣で日々を過ごしている。そういう人たちにとっては、ちあき
が今している格好は、相当に刺激的で、鼻血ブーものである。

それに、ちあき自身の体も、（別にやらしい意味ではなく！）美
しいものだった。すらりと長く、程よい肉つきの手足。長く細い首
そして、弾けんばかりの笑顔。そう、ちあきの美しさは「健康的」
という形容が出来そうな美しさなのだ。もしここに、浦島太郎がい
たならば、ここを竜宮城と間違えかねない。……あ、いや、ごめん、
褒めすぎた。

さて、当時の基準からすれば刺激的な格好で、しかもその格好を
している本人が刺激的なボディをしているとあっては、男は黙って
見てはいまい。現代で言えば、ビキニを着た、ポインな（死語）女
の子が目の前に立っていると思えばいい。そんな状況下で、男とい
うモノは、理性を保ちきれるものか！？

だが、やっぱりそこは変迅堂、理性という平均台からまるで落ち
るようなそぶりを見せず、むむむ、と唸った。

「やっぱり、ちよつと恥ずかしいか。だよねえー。でも、これ以
上布地を増やすと水の抵抗を受けちゃうからなあ、難しいなあ、う
む……」変迅堂は、アゴに指を沿わせた。

変迅堂は、あくまで商品になる水着を開発しようと躍起なのだ。

商品を買うのは、あくまでちあきのような江戸っ子の女性。いく
ら泳ぎ易い服を作ったとしても、買い手が敬遠してしまうようなデ
ザインでは困るのである。かといって、水着というのは実用性、つ
まり「泳ぎやすさ」も求められる。「機能性と、客のニーズの両立」
という、永遠の難題に挑む変迅堂なのだ。

実は、変迅堂がちあきの水着姿に何の反応も示さなかったのには
理由がある。それは、眼鏡を外していたからだ。だから、ちあきの
姿が殆ど見えず、コーフンもしないのである。ま、どうでもいいけ

ど。

「……まあでも」ちあきは少し頬を染めながら言った。「……すこし、恥ずかしいくらいだから、きつと平気だよ」

「そう?」変迅堂はアゴから指を離した。「じゃあ、いいか」

とりあえず納得した変迅堂は、風呂敷から黄色い波乗りまな板サーフボードを取り出して抱え、海に駆けていった。

「ちあき殿! 波乗りをしよう!」変迅堂はそう言って、海の中に入ってしまった。

「もう、待ってよ!」

ちあきはふうとため息をついてから、ピンクのサーフボードを小脇に抱え、それに続いた。

砂浜は、まだ朝とはいえもう結構太陽光によって焼かれている。そんな砂浜の熱を足の裏で感じながら、ちあきは駆け抜けていく。そして、浜と海の境目にまで足を入れた。

「ひゃ、冷た〜い!」

足の裏をくすぐる冷たい波に、ちあきは思わず声を上げた。

ふとちあきが変迅堂の方を見ると、既に変迅堂は沖合いの方にまで出ている。そして、波と波の間から「早くおいでよ!」と言わんばかりに、ちあきに手を振っている。そんな変迅堂に、ちあきは手を振り返すと、どんどん海に入ってしまった。

冷たい海水の感触。少しずつ、水に浸かるところが濡れていく、気色悪いような心地いような不思議な感覚。そんな感覚を紛らすように、ちあきは海にばしゃばしゃと入っていく。でも……。ここで、ちあきは思った。

これ、何に使うんだろ? ちあきは、ふと自分の小脇にあるピンクのサーフボードを眺めた。

「あゝ、その波乗りまな板ね!」変迅堂は、波の向こうから叫んだ。「まるで木の葉みたいに水に浮くんだ! だから、その板を浮かべた後、上にうつ伏せで乗って!」

ふんふん、なるほどね。

ちあきは、言われたとおり、板を海に浮かべ、その上にうつ伏せに飛び乗った。

「それで!？」ちあきは、波の向こうの変迅堂に訊いた。すると、変迅堂は言った。

「あとは足を水に入れて、バシャバシャやれば前に進むよ!」
よし! バシャバシャ。

ぎこちないバタ足でも、ちあきを乗せたピンクのサーフボードは、少しずつ前に進んでいった。途中やって来た、小波を乗り越え、大波をかわしながら、変迅堂の元に急ぐ。

「お、ちあき殿、早いなあ」

ちあきに変迅堂の元につくと、変迅堂は自分のサーフボードに乗ったまま、ちあきの手を掴んで、ぐいっと側に引き寄せた。どうでもいいが、変迅堂の腕は、ちあきが思っていたよりも遅しい、男の人の腕だった。……ま、それにちあきの心が少しキュンと動いたのは、言うまでもないね。

「さて、この波乗り、っていうのはね」変迅堂は、浜の方にサーフボードの頭を向けて、言った。「名前の通り、波に乗るんだ」

「波に?」変迅堂に倣って、サーフボードの頭を浜に向けたちあきは訊いた。

「うん。説明よりも、やって見た方が早いね。……うん、来た!」
後ろの方を眺めていた変迅堂は、そう叫んだ。ちあきが後ろを見ると、かなり大きな波が、二人に迫っていた。二人を一瞬沖の方に引っ張りながら、巨大化する波。だが、この波はまだ崩れる様子は無い。これは……大波だ。その波が、二人を飲み込もうとしている。
「今だ!!!」

変迅堂は叫んだ。そして、バタ足で浜の方へ泳ぎだした。変迅堂は後ろで戸惑うちあきに声をかけた。

「ほら、ちあき殿も!!!」

「う、うん!!!」

一瞬遅れて、ちあきもバタ足をはじめめる。まるで、巨人から逃げ

る小人のように、必死でバタ足するちあき。だけれど、所詮小人の全力疾走は、巨人ののんびりな一步には敵わない。波が、ちあきに追いついた、その瞬間だった。

不意に、ピンクのサーフボードが海を切りはじめた。なに？この感覚。押し流されてる？

そう、ちあきは波に押し流される、つまり、波に乗りかけているのである。

「ちあき殿！ここで、バタ足をやめて、板の上でうつ伏せになるんだ！」

ちあきはそれに従った。すると。シャーッと海の上を、ちあきが、いや正確にはちあきを乗せた板が滑っていくのがわかった。ナニコレ！面白い！！ちあきは風を切りながら進む板の上で、笑顔になっていた。

だが、すぐにちあきは板の上でバランスを崩し、バチャーンと大きな音を立てて水の中に落ちた。

「だ、大丈夫？ちあき殿!?」

もう既に岸に着いていた変迅堂は、ちあきが水に落ちたところに板で水を切り分けながら進み、その地点まで急いだ。

「ちあき殿?!」

そう叫ぶ変迅堂の横で、水しぶきが立った。その水しぶきを上げたのは、人影だったが、眼鏡をつけていない変迅堂には誰なのかはわからない。

「ぶぱ〜〜!」当然ちあきだった。

変迅堂は、一瞬ほっとしたような顔を見せ、言った。「怪我はない?」

すると、ちあきは自分の板に掴まって言った。「全然!!水に落ちても痛くないし怪我は無いよ!!」

「どつ?この波乗り?」

変迅堂が訊くと、ちあきは答えた。

「すっごいおもしろい!!なんか、ゴー、って感じで、フワッて

感じて……」感じたままを素直に語るちあき。

「ははは。そうなんだ。なんだか後ろから押された感じがしたでしょ？　これが波乗り。クセになるよ、きっと」

そんな変迅堂も、まさかこの波乗りが、後に日本中で楽しまれるレジャーになるとは、まさか思うまい。とは言っても、変迅堂の考えた波乗りではなく、外国で考案、発達した「サーフィン」というスポーツではあったが。

「さ、また行こうか。波乗りに」変迅堂は笑って問いかけた。

「うん！」ちあきも、満面の笑みで返した。

それから、二人はえんえんと波乗りを繰り返した。

ちあきはきゃっきゃと、子供のような声をあげて喜んでいたり、変迅堂も変迅堂で、「うん、この板、もっと浮力を上げるともっと疾走感が出るかも……。でも、これ以上軽くしちゃうと、材質の問題がなあ」と、板の上で考えていた。

「先生！　なにしてんの？　早く早く！！」

「ああ、はいはい！！」

ちあきの呼び声に、変迅堂はさっきまでの板の浮力問題を忘れ、また海に漕ぎ出していった。

ちあきの弾ける声を聞いて、ああ、やっぱりちあき殿を海に連れてきて良かったなあ、と、家族サービスしているパパのような気分で思う変迅堂なのだった。本当に、がんばれ、ちあき。

そして、そんな波乗りが、日が真南に昇るまで繰り返された。

第二話「海を見に行こう」【7】

さて、そんな頃になると、ちあきのおなかの虫が、辺りで鳴く蝉よりもうるさく鳴きはじめた。そして、その虫の言わんとしていることを、ちあきは代弁する。

「先生！　なんか、おなか減ったよ！」
「さんざん遊んで、疲れが見え始めているのだ。」

というか、そもそも、二人は朝早く江戸を発った関係で、朝ごはん抜きにしてここまで来てしまったのである。道中に何も食べてないし、午前中はずっと波乗りをしていたから物を食べる余裕は無かった。

おなかグーグー鳴る、ちあきを見て変迅堂は声を立てて笑った。「女の子なのに、はしたないよ、ちあき殿！」って、指を指すばかりに。

「何がおかしいのよ！　おなか減ったの！　それがなにか！？　出物腫れ物、っていうでしょ！！」

口を尖らせて変迅堂に噛み付くちあき。だが、そんなちあきを笑うように、またちあきのおなかきゆるきゆると鳴った。むむむ…。ちあきは、自分のおなかすら恨めしくなる。

「ふふふ、心配ご無用！」

そう言つと、変迅堂は松林の中に消えた。そして、両手の指で数を数え終わらない間に戻ってきた。

「どこ行つてたの？　先生？」

ちあきが訊くと、変迅堂はちあきの目の前に、両手に収まるほどの大きさの木箱を差し出した。その木箱は、蓋がしてある上、紐で巻かれている。

なにこれ、とちあきが聞くと、変迅堂はニコニコと笑いながら紐を解いた。

「これ？ これは、寿司だよ」

「え、寿司……？」 ちあきは明らかに嫌そうな顔をした。

「あれ？ 寿司苦手？」 変迅堂が訊くと、ちあきは答えた。

「うん……、どうにも、あのニチヨニチヨした触感がどうも……」

ちあきがここで話題にしている「寿司」とは、馴れ寿司のことである。

馴れ寿司、というのは、押し寿司の一種なのだけれど、発酵させることで旨みをあげた寿司のことである。発酵食品独特の触感と酸味がおいしい、という人がいる反面、それを嫌う人も多い。ちあきは、嫌うクチなのだ。

だが、そんなちあきに、変迅堂は言った。

「大丈夫！ これ、馴れ寿司じゃないから！」

え！？ ちあきは耳を疑った。そしてちあきは、変迅堂の持つ箱を凝視する。

そんな視線を意識してか、変迅堂は砂浜に腰掛けた。そして、少し焦らすようにして紐を取り、蓋を開いた。ちあきは、変迅堂の持つ木箱を凝視しながら、変迅堂の横に腰掛けた。それを見計らって、変迅堂は、二人の間に、その木箱を置いた。

「はい！ 新しいお寿司、確か名前は……お稲荷寿司さん！」

変迅堂は、まるで、某猫型ロボットのような口調で、新型の寿司を紹介した。

当時、「寿司」と聞けば、「馴れ寿司」が浮かぶのは至極当然であった。と、いうのも、理由は至極簡単。当時は、まだ馴れ寿司しか無かったからである。え？ 江戸前寿司みたいな握り寿司は？ と疑問に思う方もいらっしゃるでしょう。だが、江戸前寿司が一般化するのには江戸時代後期の末、もはや幕末の風すら吹き始めた頃まで待たねばならないんです。実は、江戸前寿司が“発明”されたのはちょうどこの時代なんです。まだ、変迅堂たち町人の口に入るような、一般的な食品ではなかったのですよ。

「え？ これが寿司？ ……先生が発明したの？」

ちあきがそう訊くと、変迅堂は箱を持っていないほうの手を横に振った。

「ははは、まさかあ。いくら私でも、食べ物まで発明できないよ……。ちあき殿、半助さん、って知ってる？」

半助。ちあきは記憶の底を浚うようにして思い出そうとする。……そういえば。ちあきの記憶の網に、引っかかるものがあつたらしい。

確か……文人長屋で……。あ！！ちあきは、記憶の底から半助を浚いだすのに成功したらしい。

「ああ、あの文人長屋でちよつと浮いてる人ね！」

「浮いてる、って……」変迅堂は苦笑いをした。

「だって、儒者さんとか戯作者とか、発明家とかが集まって住んでる長屋の中だと、なんだか浮いてない？」ちあきは、半助の風体を思い出しながら言った。

「まあ、職人風の格好だからね彼は。それに、彼の言葉使いは、まさに江戸っ子のそれだしね」

変迅堂の言うとおり、半助はまさに江戸っ子気質の男だ。声はでかいし、宵越しの金は持たない。喧嘩はするし（魚売りの巖太と喧嘩して勝つたらしい）、ばくちも打つ。確かに、文人長屋では少し浮いた存在ではある。

「そういえば、あの人って、何やってる人なの？」ちあきは訊いた。「あの人は、寿司職人さ。でも、彼は枠にとらわれない創作寿司を作るっていうんで有名でね、大家さんに気に入られて文人長屋に住んでるんだ」

変迅堂の話と、箱に入っている茶色の「寿司」を交互に思い浮かべたちあきは、ポンと手を打った。

「ああ、ってことは、この寿司は、半助さんの“発明”ってこと？」

「そう！」変迅堂は言った。「昨日の夜、半助さんに貰ったんだ。」

“試作品なんだが、良かったら食べてみてくんねえかね、あ、アンタ一人じゃなんだから、よくアンタん家に来る嬢ちゃんといっしょ

に”ってさ」

「ふうん、でも、これって本当に馴れ寿司じゃないよね？」恐る恐るクンクンとニオイを嗅ぐちあき。おいおい、いくら何でも、はしたないぞ、ちあき。

「うん。確か、酢で香り付けしたご飯を、油揚げの中に詰めた、って言ってたから」

むむむ……。しばしちあきは考え込むが、やはり。
グー。

空腹には勝てないらしい。恐る恐る稲荷寿司に手を伸ばし、口に放りこみ、あむあむと噛む。

「どう？」

あむあむと稲荷寿司を噛むちあきに、変迅堂は訊いた。すると、ちあきは変迅堂の顔を見つめ、値百万両の笑顔を見せ、言った。

「うふ。おふいふいふいふお〜！」

口の中に稲荷寿司が入っているせいで、何を言ったのかはわからなかったが、ちあきの、満足したような満面の笑みを見れば自ずと答えはわかるというものだ。変迅堂は何も訊かず、稲荷寿司をつまみ、口に放り込む。

「おお、なかなか旨いじゃないか」ちあきとは違い、完全に飲み込んでから感想を言う変迅堂、さすが、大人である。ま、当たり前だけ。

さて、二個目でも……。そう思い、変迅堂は海を見ながら木箱に手を伸ばした。だが、なぜかつまめない。つまもうとしてもなぜか指が宙を泳いでしまう。

変迅堂が視線を海から箱に戻すとアラ不思議、箱の中にぎゅうぎゅうに入っていたはずの稲荷寿司が、全部なくなっていた。も、もしや……。変迅堂は、ふと横を見た。

そこには、「ああ、食った食った」と言わんばかりに膨らんだおなかを叩く、ちあきの姿があった。

「あのう……ち、ちあき殿……？」恐る恐る、変迅堂は訊く。

ちあきは返事の変わりに、ゲップを返してきた。なんだか、もう訊く気が削がれてしまった。そして、変迅堂はため息を吐きながら、さっきまで稲荷寿司が入っていたはずの木箱恨めしそうに眺めて、その視線をまた海に向けた。

「なあに？ 先生」

ちあきの言葉に、また変迅堂はちあきに視線を向ける。ゲップと声を発するちあき。

「なんだか、不意に眠くなって、あくびをする変迅堂であった。

「もう！ 人の顔見てあくびしないでくれる？！ もう！！」

「やっぱり、ちあきの右手からグーが飛んだ。ちあきの稲妻のようなパンチは、お約束のように変迅堂の左頬に突き刺さる。突然ですが、ご存知でしょうか？ 本気で頬をぶち抜かれると、メキヤツて音が聞こえるんですよ？ ……いや、別に変迅堂にその音が聞こえた、ってわけじゃないんですよ？ た、多分……。」

「ぎゃあ！！ 今、『メキヤツ』って聴こえた！！ ヤバイ！ 死ぬかもしれない！！」

「どうやら、変迅堂の耳にも、『メキヤツ』という音が聴こえたようです。」

ちあきの右ストレートによって、砂浜に倒れていた変迅堂は、あまりの激痛にうめいている。

「ただだ、大丈夫、先生！！」

「しまった、やりすぎた。そう思ったちあきは変迅堂の顔色を伺おうと、ちよつと屈みこむ。変迅堂は、悪夢でも見ているかのように、うっろっろんと呻いている。……まあ、変迅堂が見ているのは、悪夢ではなく、痛い目なのだけれども。」

「先生！ 先生！」

ちあきは、一向にダメージから回復してこない変迅堂を必死にさせる。そんなとき、ちあきは変迅堂の顔を見て、思った。

「やっぱり、この人、眼鏡をしない方がかっこいいよなあ、と。」

変迅堂は、細い眉につり目の、けっこう人懐っこい顔をしている。

年下のちあきでさえ、「かわいい」「かつこいい」とため息をついてしまうような顔。けれど、そんな変迅堂の顔を封じてしまうものがある。それは眼鏡。眼鏡が顔の印象を覆ってしまうせいで、一番の特徴であるつり目が隠れてしまうのだ。

だが、今日は眼鏡を外している。おかげで、その顔を見ることが出来る。

「ん？ ち、ちあき殿、痛いよ」寝転びながら、間延びした声で変迅堂は言った。

「ごめん、先生」ちあきは、不意に真面目な調子で謝った。

「何が？」変迅堂は、視線を青い空に向けて優しい声で訊いた。

「先生のこと、殴っちゃって」

第二話「海を見に行こう」【8】

ちあきは、手が出るのが早い。口より先に手が出るクチである。けれど、変迅堂への暴力は他のものとはちよつと違う。変迅堂に対する暴力は、「好きな人に対する愛情表現の一種」なのだ。好きだから、殴る。こう書くと、なんだかバイオレンスでアングラで、デートDVな感じがするけども、それはしょうがあるまい。だって、本当なんだもん。

でも、もちろん、ちあきは心の中でそういう自分の「性向」を、理解はしているのだ。そして、こんなあたしじゃダメだ、っていう気持ちもある。だから、謝ったのだ。

すると、変迅堂はカラカラと笑った。

「なんで笑うの？ 先生」神妙そうに、ちあきは訊いた。

変迅堂は上体を起こして言った。

「だって、ちあき殿が謝るなんて、おかしくておかしくて」

「何おお！！？」

さつきまで神妙な顔をしていたことも忘れ、ちあきはまた頬を膨らませる。

「そうそう、その顔」不意に、変迅堂は、ちあきのそんな顔を指して続けた。「ちあき殿は、そうやって感情のままにしていたほうがいいよ。その方が、ちあき殿らしいからさ」

「むむむ……」

褒められているのかバカにされているのかよく判らないちあきは、煮え切らない反応を返した。そんなちあきに、諭すように変迅堂は言った。

「ちあき殿はそうやって、感情を周りにぶつけても大丈夫なんだ。

……だって、ちあき殿は優しいから。ちあき殿にはね」変迅堂は、笑顔で続けた。「人を思いやったり、慮おもんばかったりするチカラがある。

だから、大丈夫。感情のままに動いても」

そんな変迅堂の発言に、ちあきは何とないよそよそしさを感じた。きつと、それは、「君は感情のままに動いても大丈夫だけど、私は……」という、半ば諦めにも似た感情がこもっているせいじゃないのか。

ちあきは、言った。

「先生も、そうだよ」

「ん？ どういうこと？」

変迅堂は、ふと海を見た。そして、またあくびをした。

まったくこの人は、自分の話になると興味がないそぶりに変わるんだよねえ、と、ちあきはため息を吐いた。

「先生だって、心のままに生きて、いいんじゃない？」ちあきは、言った。

正直、山勘だった。ちあきと変迅堂が出会ったのは2年前。それ以前の変迅堂のことは、正直ちあきは全く知らない。けれど、その二年の間にちあきは、変迅堂の心に、どこか変な歪みを見つけていたのだ。それが何なのかはわからない。けれど、わかりたい。ちあきはそう思っていた。

すると、変迅堂はカラカラと笑った。まるで、その場の空気を取り繕うような笑顔だった。

「ははは、私ほど心そのままに生きている人間はいないと思うけど？」

むむむ……。素直じゃないヤツだなあ、とちあきは思ったけど、これ以上の追及を諦めた。

「ま、いいや。そのうち、わかるし」

そう匙を投げるように言うと、ちあきは立ち上がった。

「ん？ もう遊ぶの？」変迅堂が訊くと、ちあきは満面の笑みを湛えながら言った。

「当然！ 午後も遊びまくるよー！」

「うん、そうだね。遊ぼうか。まだ、帰るには時間がある。それに、お天道様も」変迅堂は空で輝く太陽を眺めた。「まだ、帰るな、っ

ておっしやってるよ、きつと」

「なんでそう思うの？」ちあきは訊いた。

変迅堂はちよつと腕を組んで考えてから答えた。

「ん？ だって、こんなに燦々さんさんと輝いてるんだもの。きつと、私達に、もつと海を楽しんで行け、っていう神の思し召しだと思ったんだけど？」

「へえ、意外」ちあきは言った。

「何が？」変迅堂は訊くと、ちあきは答えた。

「いや、先生の口から、『神』なんて言葉を訊くなんてさ」

「そうかな？」変迅堂が訊くと、ちあきは指を変迅堂に指して言った。

「だって、発明家が神様信じてるなんて！」

すると、変迅堂は笑った。

「なによ、先生！」

ちあきが笑顔の変迅堂を嗜めると、変迅堂は答えた。

「はっはっは、そういうもんなのさ。いくら現実的なものの考え方をする人間でも」変迅堂は立ち上がってから続けた。「少しは非論理的なものを信じたくもなるのさ」

「フウン？」

「さて」変迅堂は、腕を組んだままのちあきに言った。「また、遊ぼうか。まだ時間あるしね」

いまひとつ納得できないちあきだったが、変迅堂の言葉に促され、また海に向かって走り出した。

さて、午後は変迅堂のほかの発明品で遊ぶことになった。

だが、いまひとつ芳しいものがなかった。例えば、「火縄銃式水鉄砲」。読んで字の如く、思いつきり火縄銃の形をした水鉄砲の細部だけど、どうにも重い。それは本物志向の変迅堂が、火縄銃の細部にまでこだわったからなのだけれど、あまりに本物に近づけたがために、実物とあまり変わらない重さなのだ。それに、ちあきに、「こんな本物っぽいと、関所とか通れないんじゃないの？」と言われ

てしまった。当時、俗に「入鉄砲出女」といって、戦の主力武器である鉄砲と、実質徳川幕府への人質である大名の奥方の移動は、かなり警戒されていた。そのことをちあきは言ったのだ。すると変迅堂は、「……あ、そういえばそうだねえ！」と頓狂な声を上げた。あとは、「撥水型手毬」。砂浜で遊べるように、水を弾く仕様になっっている手毬である。だが、「海にまで来て、手毬なんかやんないでしょー！」というちあきのもっともな意見によって却下されてしまった。

けれど、マシなものもあった。

その一つが、「浮き袋」。

要は、ただの袋である。だけど、水の中にその袋を入れると……。当然浮く。それを利用した遊具である。

けれど、残念なことに、それだけ。基本的な企画そのものはいいのだけれど、そこからのプラスアルファがないのである。ちあきも少し遊んだけれど、すぐ「つまらない！」と向こうの方へ行ってしまった。

まあ、でも、全体的にこんな感じで、スマッシュヒットな発明は出てこなかった。

しょうがあるまい。変迅堂は発明家だからである。

「発明家」というのは、技術の基本原理を発見し、それを形にする生業のことだ。だけれど、その形になった発明品に、さらなる価値をつけるのは、もはや発明家の仕事ではないのだ。そういう仕事をするのは、いわゆる売人たちのだ。そして、売人達が改良したり付加価値をつけた後、その商品を買う買い手もまた、そういう仕事に参画することになる。とにかく、発明家、というものは作ったら最後、もうその発明品が世の役に立つかどうか、世にニーズがあるかないかなんて、あまり興味がない話なのだ。

そんなわけで、発明の成果はあまり芳しくなかった。

「先生……」ちあきは、傾きかけた太陽を眺めて言った。「こう、尻つぼみ、って感じだね」

まるで、肩に背後霊でも憑いているように、ちあきは肩をつなだれている。きつと、めちゃくちゃに疲れているのだろう。

「ご、ごめんなさい」変迅堂も、同じく肩を落として謝った。

「いや、先生のせいだけど、先生のせいじゃないし……」ちあきはよく判らないことを言った。

変迅堂は、心なしか傾きかけた太陽を眺め、言った。

「……帰ろっか？」

ちあきも太陽を眺めた。

「……帰ろっか」

顔を見合わせて、申し合わせたようにため息を吐くと、帰りの支度が始める二人なのだった。

第二話「海を見に行こう」【9】

ウオンウオンウオン。イナバ君が、帰途で嘶いななく。

太陽が、若干黄色味を帯び、二人を照らした。もう、昼間のよう
な強い光ではないにせよ、二人は目を細くした。

へっへ、楽しかったね」

ちあきは、イナバ君のハンドルを握る変迅堂の顔を覗きこむよう
にして言った。ちなみに言っておくけれど、もうちあきも変迅堂も、
元の格好に着替えている。当たり前でしょう。一体読者の君は、何
を期待してるんだい？

「うん、そうだね」

変迅堂は、前を見たまま相槌を打った。

ちあきは、ふと流れる景色を眺めた。黄色い太陽に照らされて、
少し黄色味を帯びる田園風景。そして、髪を吹き抜ける、心地いい
ほどに暖かい風。

そんな景色の中に、だれもいない道がただまっすぐに続いている。
そして、その上を、二人を乗せたイナバ君が走り抜けていく。イナ
バ君の後ろに括りつけられた大八車が石にでも躓いたのだから、車
の上の発明品たちが暴れてガタガタと鳴った。

「ねえ、先生？」

ちあきは、不意に間延びした声を出した。

「ん？ なんだい？」

「江戸まで、あとどれくらいかかるかなあ？」

変迅堂は、前方の空を少し眺めて、答えた。

「そうだなあ、あと、一刻くらいじゃないかな」

するとちあきは、ちよつと残念そうな顔をした。ちえ、とでも言
いたげな、そんな顔。だけれど、変迅堂は前を見ていたので、そん
なちあきの顔には気づかなかつた。

ちあきは、変迅堂の腕に寄りかかりながら言った。

「先生、あたしね、思うんだ」

「？」

変迅堂はちあきの顔を見た。おいおい、前方不注意ですよ、変迅堂さん。

ちあきは、変迅堂の顔を見つめた。ちあきは、頬から火が出てるんじゃないかしら、と思うほどに自分の頬が熱くなっているのを自覚していた。

ちあきは続けた。「この道がさ、もっと長ければいいのに、ってそれだけ言っと、ちあきは前の方を向いてしまった。

一方、変迅堂は、首をかしげた。

何で、道が長いほうがいいんだろ？ 短いほうが早く帰れるし、そもそも長く海で遊べるはずなのに。

……うーん、やはり、この無粋者に、乙女の感情の機微を計らせるのは無理のようです。

けれど、そんな無粋者の変迅堂も、さすがにひとつだけ気づいた。あれ？ ちあき殿……、耳が赤いな。

前をぶいっつとして眺めているちあきの耳は、まるで夕日のように赤くなっていた。けれど、なんでちあきの耳が赤いのかは、無粋者の知るところではなかった。

不意に、ちあきが変迅堂にもたれかかってきた。

「ん？ ちあき殿？ どうしたの？」

変迅堂が、まるで保護者のような優しい声で訊く。

「……ん、疲れちゃった。寝ていい？」

ちあきは、変迅堂を見上げて子供のような声を上げた。ちあきの顔は、まどろみと必死に戦っているように見えた。そんなちあきを、黄色い太陽が優しく照らす。

「……ダメ」変迅堂は言った。「一人で運転してるの、つまらないんだ」

まるで子供みたいな言い分に、ちあきは笑った。

「なに？ おかしなこと言った？」変迅堂は、ちあきに訊いた。

「いや、別に。でもね」ちあきは、ものすごく眠そうな、間延びした声で続けた。「先生って、時々子供っぽくて、好きだよ」

実はちあき、「好きだよ」というところにさりげなく全身全霊をかけてみたのだけれど、変迅堂はそれに気づいた様子もなく、前を見て運転している。そんな変迅堂に、ちあきは頬を少し膨らませる。そして、恨み言でも言うように、吐き捨てた。

「この、無粋者！」

「え？ 何が!？」やっぱり判っていない変迅堂。

「フン！ いいもん！」

今はいいもん、と心の中でちあきは呟く。今はいいけれど、いつかは……。そう心に決めるちあきなのだった。

「何の話!？」

まったく乙女の事情が飲み込めていない変迅堂は、一人でギャーギャー騒いでいる。

そんな変迅堂に嫌気が差したように、ちあきはげんなりした声で言った。

「……ううん、なんでもない。先生、あんまり悩まないほうがいいよ。先生の頭じゃ、きつとわからないからさ。だって先生は「ちあきは、これ以上ないほどに苦々しい顔を変迅堂に晒しながら続けた。」「日本一の無粋者だもん。……もう寝る！」

そう言いきると、ちあきは変迅堂にもたれかかったまま、スースーと寝息を立てて寝入ってしまった。この間、わずか刹那の間。

「ありや、寝ちゃったか……」

変迅堂は、スースーというちあきの寝息を聞きながら、そう呟いた。

変迅堂の鼻に、ちあきの髪の毛の香りが届いた。女の子特有の、甘い髪の毛の香り。さすがに無粋者の変迅堂とはいえ、それくらいはわかる。

ああ、子供子供と思っただけだけれど。変迅堂は、自分の胸に寄りかかったまま寝息を立てるちあきの顔をちらっと見て、思った。気がつくところの子も、大人になってるんだな。この時期の子供は、

知らぬ間に子供の殻を脱ぎ捨てるものなんだな、と大人の感想を持つ変迅堂なのだった。

変迅堂は、ちあきの顔をまた眺めた。

気づくとこの子は、ここに来て大人のような顔を見せるようになったな、と変迅堂は思った。時々見せる、憂いを帯び始めた顔。ちあきにはこのところ、子供では絶対にありえない翳を帯び始めていた。そういう「翳」というのが大人の魅力の正体なのだけれど、一方で、子供のような天真爛漫さは引き換えに失ってしまう。

不意に、にこつと変迅堂は笑った。そして、誰に言うでもなく言葉の口から漏らした。

「ちあき殿には、出来るだけ子供の時期を楽しんで欲しいな。後悔はして欲しくないな」

そんな変迅堂に、ちあきは寝言で頷いた。

イナバ君に乗って走り抜けていく二人のはるか前に、江戸の街が点のように小さく見えてきた。

夕日は、もう大分傾きを見せていた。

後日談として、変迅堂が発明した海水浴グッズがどうなったか、お知らせしよう。

結果から言えば、全く売れなかった。

そもそも、海水浴、というものが、江戸っ子たちになじみがないのもその一因であったが、なにより、その一番の原因は水着であった。当時としては、変迅堂が発明した水着はあまりに露出が多かった。だから、保守的な江戸っ子たちには受け入れられなかったのである。

「はあ、ダメだったか。変迅堂さん、濟まないねえ、無駄な発明させて」

「あ、いえいえ。私の力及ばず……」

光州屋又兵衛と変迅堂は、二人売れ残った海水浴グッズを前にため息を吐くのだった。

こういうもんなんです。あまりに先進的過ぎる発明は、こうやって世間から無視されてしまうものなんです。発明をするのは天才でも、その発明品を使うのは普通の人たちなのですよ。なにが言いたいのかというと、結局、発明の真価を決めるのは発明家ではなく、その発明品の買い手の方々なのです。

と、いうわけで、変迅堂にとって海水浴は、もはやちあきへの「家族サービス」行事だった、という印象しか残らない事態に陥ってしまったのであった。

第三話「文人長屋の面々」【1】

カッコーン。

「ははははは、そうですね。あなたの発明、売れませんでしたか」
そう何の感慨もなく、穏やかに長介は言った。変迅堂は苦笑いを覗かせて頭を掻いた。

「いやあ、やっぱり海水浴っていうのは、まだ早すぎたのかも知れませんか」

長介がははは、と上品な笑い声を上げると、それを押し込むように茶をすすった。変迅堂も、出されたお茶をズズズ、とすする。
カッコーン、と音が響いた。

長介は、今いる部屋から、広くはないまでも手入れの行き届いた庭を眺めた。この庭は長介自慢の庭で、本人が言うには、「老後の楽しみ」だそうである。小さいながらも、その庭には日本庭園の基本がそろっていて、なんと、必要もないのに猪威ししあどしさもある。その庭に、暑い風が吹き込んだ。それにたられ、軒下にくくりつけられている風鈴がチリンと涼しい音を立てた。

「まあ」長介は間延びした声で言った。「発明家、というのは難儀なものですな。必ずしも新しいものを作ればいいって訳じゃないですからなあ。……あまりに新しすぎると、皆、理解できないからの」
「はは、そうみたいです。あんまり常識を超えたものを作っても、みんな飛びつきませんからね」変迅堂は、ため息を吐いた。「けれど、その按配あんばいが難しいもので……」

ほっほっほ、と、顔の皺しわをさらに深くして、長介は笑った。団扇で体を扇ぎながら。

「つまり、今日あなたが此処にいらしたのは、家賃の納めの期限を待ってくれ、ということですか？ 変迅堂さん？」

変迅堂は、顔を赤くして頭を掻いた。

「……め、面目ない」

そんな変迅堂に、長介は老人特有の、朗らかな調子で言った。

「ほつほつほ、しょうがありません。『大家は親も同然、店子は子も同然』と言いますからね、待ちましよう。ただし、絶対に払って下さいな」

さて、長介さん、というのは、変迅堂の住む「文人長屋」の大家さんである。

以前は、さる大店の旦那様だったらしいのだけれど、後進に店を譲り今では楽隠居の身である。ただ、引退するに当たり、店で持っていた長屋と、江戸の高級住宅地を貰い受けたい。そんなわけで、貰い受けた一軒家の住宅地（当時、町人で一軒家を持っている者は、かなり恵まれた者だと言ってもいい）で隠居生活をする傍ら、大家として仕事をしているのだ。

だが、長介さんは大家としては極めて変わった人であった。

普通、大家というのは、口うるさいものである。と、いうのも、店子（長屋に住む人）の起こした不祥事や過失が、「大家の監督不行届き」という名目で、大家の責任にもなってしまうからだ。だから普通、大家という商売者は、店子の生活ぶりや素行に注意を払うようになる。

それに、大家というものはがめつい生き物である。「家賃を払えない」なんて店子がいたら、「じゃあ質屋を紹介しましょうか」と切り返す者もいるくらいだ。

だが、長介にはそれがない。生活態度に対しても、「いや、あなたたち店子のことを信用しているからね、別に干渉せんよ」と言っているのけてしまう人だし、家賃に対してもさっきの如しである。

長介は、八畳にもなる部屋を見回した。掃除が行き届いた部屋。床の間には花まで生けてある。そして、青い畳がこの部屋の主人、長介の鼻をくすぐる。

「ん？ いかがしました、大家さん。そんなきよるきよるなさって」
そう変迅堂は、きよるきよるとあたりを見渡す長介に訊いた。だ

が、変迅堂には判っていた。そんなに長介が、きよろきよろしているわけを。

そう訊かれた長介は一瞬ビクつとして、変迅堂の目を眺めた。そして、一瞬の沈黙のあと、意を決したように、長介は言った。

「……ああ、言いにくいことなのだがね……」

言いにくいことを言おうとしているんだ、ということとは変迅堂にも判った。と、いうのも、長介がきよろきよろと辺りを見渡すその時には、何か言いにくいことがあるときなのである。

「なんでしよう?」

変迅堂が話を先に促すと、長介は皺に苦渋をにじませて言った。

「最近なあ、ほかの長屋から文句が出ておつてな、特に、隣の大家、大吉さんから」

大吉さん、というのは、文人長屋の隣の長屋の大家さんである。

だが、とにかく小言キチベエな男で、ケチだというのも有名な人であった。それに、どうしたわけか文人長屋のことが気に食わないらしく、よく文人長屋にクレームを寄越す人である。

「どういった?」

変迅堂がさらに話を先に促すと、長介は続けた。

「ああ、うるさいんだと。特に、女の子の泣き声とか話し声、あとトントンカンテン物を作る音、そして、雷みたいな轟音、だと。変迅堂さん、あなただね」

うむ。変迅堂は考えた。

きつと、「女の子の泣き声」はちあき殿だ。それに、「物を作る音」、これは発明のときに出る音だし、「雷みたいな轟音」は、イナバ君の内燃機関を作ったときの実験の際に出た音だろう。

全部身に覚えのある変迅堂は、頭を掻いた。

「すいません」そして、頭を下げた。

「はは、構いませんよ」長介は笑った。だが、少し厳しい顔をして続けた。「けれど、そんなにうるさい音を出されてしまうと、こちらも大家の手前、『おやかまし』を取らないとなくなってしまう

うからねえ。注意してください」

おやかまし、というのは、長屋で大きな音を立てるような商売をしている者（例えば、小物の細工師など）から家賃の上にとる、「迷惑料」のことだ。最初は音を出す人が、近隣の店子たちに配っていたらしいのだけれど、気がつくとな家へ収めるものに変わっていったらしい。この時代には、もう大家に収めるものとされていた。

「え、おやかまし……こ、困ります……。家賃もキツイのに」

変迅堂は、また頭を下げた。

「あ、いやいや、大丈夫ですよ」長介は元の笑顔に顔を戻して、皺皺の顔を手で拭いた。「誰も彼も、音を出さないと生活することは出来ません。ですが、その音を出るだけ抑えることはできません。……まあ、隣人に対して慎みを持っていただければそれで構いませんよ」

「ああ……申し訳ない」変迅堂は正座のまま頭を下げた。

「それより」長介は、さらに笑顔を弾ませた。「今月の、『お楽しみ』は何かな？」

「ああ、そうでした」

思い出したようにそう言うと、変迅堂は後ろに置いてある、刀袋に入れた棒状のものを引き寄せた。そして、自分の前に置くと、刀袋の紐を緩めた。

「これです」

変迅堂は、刀袋から火縄銃を取り出した。

「ん？ 種子島かい？」長介は拍子抜けした声を出した。

種子島、というのは、火縄銃の通称である。戦国時代、種子島に鉄砲が伝来されて以来、火縄銃のことを「種子島」と言い表すようになったのだ。

「これが、今回の発明かい？ 種子島じゃ、発明とは言えないんじゃないかねえ」

長介がそう呟くように言うと、変迅堂は反論した。

「あ、いえ、これは銃じゃありません。これは、鉄砲は鉄砲でも、

水鉄砲なんです」

「水鉄砲、とな？」

「んじゃ、ご覧下さい」

そう言うと、変迅堂は火縄銃を構えるように、その鉄砲を構えた。火縄銃は、頬に銃身をぴとつと密着させるといふ特徴的な構えを取るのだけれど、変迅堂も、まさにその構えをしたわけだ。変迅堂の構える銃の先は、庭の方に向いた。

変迅堂は狙いを探そうと銃先をふらふら漂わせたが、やがて庭にある、石灯籠に照準を合わせた。そして、引き金を絞るように引いた。

ピュー。

銃の発射音とは明らかに異なる間の抜けた音とともに、銃先から水の筋が伸びていき、石灯籠に当たった。

「おお」長介は団扇で顔を扇ぎながら、感嘆の声を出した。「水鉄砲の割に、結構正確な弾道だね」

変迅堂は構えを解いてから答えた。「ええ、水圧をかなり強くしているんです。恐らく、5間（約9m）くらいだったら正確に飛ぶと思いますよ」

「ほう、君の言っていることはよく判らないけれど」そう前置きしてから、長介は言った。「とにかく5間は飛ぶんだね？」

「ええ。はい」変迅堂は呟いた。

「これは、火事なんかのときに役に立ちそうだねえ」

当時、消火法としてポピュラーだったものは、火事の出た家屋の周りの家屋を破壊することで延焼を防ぐ「破壊消防」という方法であった。それは、江戸にはあまり水が無かった、ということも関係しているし、水道が確保されてからも、今度はその水を吸い上げるポンプが無かった、ということもあり、水による消火が一般的じゃなかったためだ。

けれど、そんな江戸時代でも、部分的にとはいえ、水を使っていた。その一つに「水鉄砲」というものがある。これは、火消しが火

傷しないように水をかけるための道具なのだけれど、その仕組みは完全に竹のおもちや、水鉄砲と同じものであった。

え？「竹の水鉄砲」を知らない？ あれですよ、青竹の筒に、棒が突っ込まれたような感じのあれです。水に沈めながら棒を引くと水を吸い上げて、棒を押すと水が出るアレである。

話が少し横に逸れた気もするけれど、とにかく、そんな素朴な道具を使っていた江戸時代人からしたら、変迅堂の水鉄砲はかなり脅威な代物である。引き金を引いたら水が飛び出るなんて、棒を押し引きして水を出す水鉄砲と比べるまでもあるまい。

第三話「文人長屋の面々」【2】

「そうなんです。これは……」変迅堂は言った。「火の中で作業する火消しさんを濡らすことも出来るんです。それに、これを大型化すれば、水で火を消すことができるかも……」

「ほう……。そのほかに、一家に一台置いておく、という手もあるぞ」長介は団扇を扇ぎながら言った。

「え？」変迅堂が訊くと、長介はほっほっほ、と笑った。

「いや、なに」長介は続けた。「台所に置いておいて、いざ火が出そうになったら、その水鉄砲を使えばよいのではないかね？」

この長介の発想は、まさに消火器の発想そのものである。いや、というか、「初期消火」という考え方である。

「どうやら、変迅堂はそういう使い方には頭が回らなかつたらしく、「はあ〜！」と嘆息し、手をポン、と叩いて言った。「そういえば、そうですね。小火くらいなら、この水量でも消せますからね」

「にしても」長介は、頭巾を少しずらして言った。「変迅堂さん、あなたも随分機を見るのに敏な人だね」

「？」変迅堂は、首をかしげた。すると、長介は呆れたような顔をした。

「おや、ひよっとして、変迅堂さん、知らないのかい？」

「？ 何の話でしょう？」変迅堂は、首を傾げた。

「おやおや、いやですね」

長介の言うところはこうである。

最近、火付けが流行している、とのことなのだ。普通、火付けというヤツは秋から冬にかけて流行するものだけれど、なぜか夏真っ盛りの今流行しているらしい。しかも、おかしなことに、長屋や武家地、町人地などを狙って火付けが行なわれているらしい。

「おかしな火付けですね」変迅堂は腕を組みながら呟いた。

「そうですね？ おかしな火付けですよ」長介も同意した。

火付けは当時大罪であった。言うまでもないけど、現代でも大罪であるが、なにしろその罰のスケールが違う。火付けが捕まったら、火あぶり。これが当時の決まりであった。それに、場合によってはその家族にまで累が及ぶことさえあったのである。

で、あるからには、喻え愉快犯であれなんであれ、「火付け」はアシがつくのを嫌がる。まあ、火付けであろうとなんであろうと、アシがつくのは誰も嫌がるけれども。とにかく、できるだけアシが発覚しにくいように事に及ぶ。

だから、火付けは人通りが減る秋冬に増えるし、寺社に火付けをするのである。

当時、寺社領での犯罪行為は、寺社奉行という奉行が取り締まることになっていただけけれど、この寺社奉行、その「ザル捜査」ぶりでも有名であった。江戸八百八町を取り締まる町奉行や、苛烈な捜査で知られる火付け盗賊方と比べてしまったら、それこそ雲泥の差がある。だから、火付けの愉快犯たちは寺社を狙う。

それを考えると、やはり長屋や武家地を狙う今回の火付けは、相当に変なヤツだと言わざるを得ない。

「なるほど、この火付け騒ぎにかこつけて、私がこれを作ったのだと思われたのですね？」

変迅堂は手をポンと叩いた。すると長介は申し訳無さそうに頭巾の上から頭を搔いた。この仕草は、まさに商人特有の、職人連中から見たら「卑屈」とまで取られかねない態度だ。

「いや、申し訳ない。気分を悪くされました謝りますよ……すみません」

長介は、なんの翳も見せずに、ひょいっと、自らの店子に頭を下げた。

「あ、いえいえ、別に嫌味を言ったわけじゃありませんよ」

変迅堂には、そんな気持ちはなかった。だがその言い方では嫌味を言ってるものと勘違いされてもしょうがあるまい。だが、繰り返し返して言うけれど、変迅堂にそんな気持ちはない。やはり、客との関

係を大事にする商人らしく、長介はそういったところに敏感なのだ。「んじゃあ、何のためにそんな水鉄砲を？」長介が首をかしげると、変迅堂は指を立てて言った。

「ほら、光州屋さんに頼まれた話、あれに際して作ったものなのですけど……」

「ああ、海水浴の遊具として作ったのだね」

そう長介が思い至ると、変迅堂は頷いた。だが、すぐに恥ずかしそうな顔をして続けた。

「それが……、連れの女の子に、この発明をバカにされましてね。

“これ、関所なんかで止められちゃうんじゃないの？”って……たしかに、ここまで本物志向だと、さすがにまずいんですかね」

変迅堂は、どっしりと重い水鉄砲を持ちながら、うぐむとうなる。

一方の長介は、変迅堂の話の、別の所にひっかかりを覚えたらしい。長介はニヤニヤしながら言った。

「おや、変迅堂さん、お付き合いしている方がいたのですかい」

「は？」素っ頓狂な声を上げる変迅堂に、長介は続けた。

「いや、今、“連れの女の子”と今言っていたではないかい。その娘、恋人か何かなのdarou? はっは、変迅堂さんも隅に置けないねえ」

すると、変迅堂は顔を真っ赤にし、手をぶんぶん振って反論した。

「そそそそ、そんなんじゃありませんよ！ あくまで近所の娘さんで……」

変迅堂は「近所の娘」とちあきを指して言ったけれど、実際にはちあきの家までかなり距離がある。大体、変迅堂の長屋からちあきの家まで大体半刻くらいはかかるのではないか。

それを見越したように、長介はケケケ、と笑った。まったく、老人の癖に、こういう好いた惚れたの話が好きなお人だな、と変迅堂は苦々しく思った。そんな変迅堂を、まるで何か愛おしいものでも見るかのように長介は眺め、続けた。

「はっはっは、顔を赤くして……へっへっへ、変迅堂さん、ごま

かすのが下手なお人だね。きっとあなたは、商人になっちゃあいいかないお人だね」

「どうして？」

「それは」長介は穏やかな笑みを崩さないまま、まるで縁側で伸びをする猫のような顔をして続けた。「商人、っていうのは、嘘の付き合い、本音の隠しあい、そして、本音の探りあいだからさね。あなたみたいに顔に出やすい人間は商人になつたら損をする」

はは。変迅堂は心の中ですこし嗤った。いや、大家さん、それは違いますよ。顔に出やすい人間は、どんな境遇にあつても損をするに決まつてる。変迅堂は、そう、心の中でつぶやいた。だが、変迅堂はそんな本音を心の奥底に隠して、長介の言うことに曖昧に頷いて見せた。

「はは、そういうものなのかも、しれませんね」

「はつは、それがダメなんですよ、変迅堂さん」長介は、団扇で変迅堂を指して、続けた。「まだまだ、隠しきれませんなあ」

むむむ……。変迅堂は、己の頬をぎゅっとつまんだ。

「で？」長介はニヤニヤとした顔で訊いてきた。「その“連れの子”って言うのは、どんな娘なんだい？」

「いや、だから、好きだとかそういうわけじゃなくって！」

すると、長介は「ほ？」とでも言いたげな顔を見せ、続けた。

「別にワシは、変迅堂さんの想い人を訊いてるわけではないだろう？　ワシはあくまで、水鉄砲をけなした“連れの子”のことを訊きたいだけさね。まあ、変迅堂さんの想い人が、その“連れの子”だというなら、今の変迅堂さんの反論も意味があるんだけどねえ」

……ち、ちくしょう。このじじい。変迅堂は、これでもかというくらいニヤニヤ笑う老人の老獪な話術にイライラを感じつつも、本音を言った。

「……正直、分からないんですよ」

「わからない？」長介が、ニヤニヤを表情から消して、変迅堂を眺

めた。

一瞬の間。二人の固唾が、ごくつと響いた。それを破ったのは変迅堂だった。

「……ま、それはさておき」変迅堂は立ち上がり、庭の方に歩いていった。「お気に召されましたか、その水鉄砲」

「……あ、ああ。まあまあだね」

話をずらされた形になった長介だったが、そのことを突っ込むことはなかった。なぜ、って？ それは……、長介は気付いてしまったのだ。変迅堂が「分からない」と答えたときの、変迅堂の心の混沌に。

ああ。長介は、その言葉を聞いた時点ですべてがわかってしまったのだ。きつと、こいつは本当に自分自身の気持ちを理解してないんだな、と。ならば、これ以上訊くこともあるまい、まったく、無粋な男だ、と心の中で長介が嘆息したのは言うまでもない。

そんな長介の心の動きを知る由もなく、変迅堂は続けた。

「今回の“文人料”、お納めした、ということでもいいですか？」

文人料、というのは、文人長屋のオリジナルの家賃体系である。

文人長屋は長介の趣味で、文人や発明家、寿司職人や画家などが集められた長屋のだけれど、ユニークなのはそれだけではなかった。文人長屋は、その家賃の支払いも変わっているのだ。

文人長屋の家賃は、それこそ安い。普通の長屋の倍以上の広さがある長屋なのに、その家賃は大体三分の一くらいなのだ。だけれど、それは大家さんに収める「現金」のみの話である。

実は、文人長屋に住む者は、もう一つ払わねばならないものがある。それが、文人料なのである。文人料とは、店子の作った文章や発明を、月に一度大家、つまり長介に披露する、というものである。別に、その発明品を大家に納める必要はないし、大家もその出来不出来に文句を言わないから、意味があるのかないのか良く分からない家賃のだけれど、文人長屋の面々は必ずこれを欠かさない。文人たちにも矜持、プライドがあるのだ。「文人料を払わないなんて、

文人の名折れだ」とか言つて。結局、普通の家賃を滞納してでも、文人料を支払おうとする店子は結構多い。……ま、変迅堂もその一人ではあるが。

だが、その傾向を、大家の長介は喜んでいる。大店の楽隠居の身である長介からしたら、別に長屋の家賃などどうでもいいのだろう。むしろ、一月に一度店子が見せてくれる「芸術品」のほづが、はるかに楽しみなものに違いない。

第三話「文人長屋の面々」【3】

「ああ、今月の文人料、確かに頂きましたよ」長介は、満足そうな笑顔を浮かべて、うんうんと頷いた。「今月も、なかなか良かったですよ」そう言って、長介は笑った。

丁度そんな頃、玄関の方から声が響いた。

「大家さん！ 入っていいかねエ！」

変迅堂と長介は顔を見合わせた。あの、職人風の江戸言葉は……。

「半助さん、ですねえ」間延びした声で、長介は言い、今度は声を張り上げた。「お入りなさいな、半助さん！！」

すると、廊下からバスバス音が響いてきた。いや、バスバスというより、ドガドガ。そして、長介たちの居る部屋の、襖がガラツと開いた。

「ども！ 大家さん。今月の家賃を払いに参りました……。お！ 変迅堂さんも居たのか」

松屋、という半纏をまとった、見るからに職人風の男。年恰好は大体変迅堂と同じくらいだろうか。この男が、文人長屋の住人にして創作寿司職人・半助である。

変迅堂は苦笑いした。

「半助さん、その言い方はないでしょ？」
すると、半助は笑った。

「ああ、スマンスマン。……さて、これ、家賃です」
そう言って、半助は長介に手に収まるくらいの大きさの紙包みを差し出した。

「おお、濟まないねえ。……で、今回の“文人料”は？」

長介の手にある包みは、恐らくお金のだろう。手に持っている重さでお金だと長介にはわかるのだ。そんなわけで、長介はその包みを懐にしまってからもう一方の家賃、「文人料」を催促した。

「あ、へえ。これでさあ」

そう言つて、半助は木箱を長介の前に差し出した。そして、木箱の蓋を開いた。

「ほお」思わず長介は声を発した。

「ああ、これ……」変迅堂は横から木箱を覗き込みながら言った。

「稲荷寿司じゃないか。この前のヤツだね」

「おう、そうだ」半助は言った。

この前、とは、ちあきと行った海でのことである。あのとき、二人で遅い朝ごはんを頂いた、あの稲荷寿司、あれは半助が作ったものだ。

「これ、おいしかったんですよ」変迅堂は、包みを指して、長介に言った。

「ほう、では……」長介は、木箱の中に入った稲荷寿司をつまみ、口の中に放り込んだ。

んむんむんむ。あむあむと咀嚼する長介を、心配そうな顔をして窺う半助。やはり、大家の評価は気になるものなのである。いや、むしろ、評価が気になるのは、「寿司職人」としての、本能のようなものだろう。

んむんむ、ごつくん。

思わず、半助も固唾を呑んだ。そんな半助のことを知ってか知らずか、長介はお茶をズズズ、と勿体つけるようにすすする。……むむむ。半助の心配そうな顔は、もはや最高潮だ。そんな、半助の顔を見て、長介は難しい顔をして言った。

「ああ……、この新しい寿司な……」

長介の表情が硬い。ま、まさか……。

「お、お気に召さなかつたかい？」

「いや！」長介は、ニパツと笑った。「すぐくおいしかった！ 馴れ寿司よりもはるかに口当たりがいいし、言うことないなあ」

半助は、塩を浴びたナメクジのように、へによへによとその場に崩れた。

「はあ、気を揉ませんでくださいよ！ まったく……」

「ほっほっほ」長介は笑った。「ワシは頭がよくないもんでなあ、一瞬でもものの美点を誉めそやせやしないし、そもそも良さもすぐには判らん」

……はは、何言ってるんだ。変迅堂は思った。

何が「頭が良くない」だ。謙遜もいいところでしょ、と。

文人長屋に入居するには、大家の首を縦に振らせなければならぬ。それは、どこの長屋においても一緒だけれど、文人長屋の場合、普通の長屋の入居条件である「果たして家賃の支払い能力のある、素行のいい者か」という条件のほかに、もう一つ条件がある。それは、「文人長屋に入れるだけの特殊技能を持っているか否か」。

家賃の支払い能力やその素行についてなら、何回か面談でもすればすぐにわかるうというものだ。けれど、「特殊技能」というヤツはそうは行かない。

特殊技能、というものは、一般的でないから「特殊」と名がついている。そんな技能の持ち主の内で、キラリと光るものを見つけるためには、その特殊な技能に対する知識が要求される。例えば、文章は誰でも書けるけれど、その文章の良し悪しは文章をたくさん読みこなした人間でないとわからない、ということだ。

そう、長介にはその力があるのである。

初めて長介の元を訪ねたときのことを、変迅堂は今でも覚えてい

る。一目見るなり、「おお、あなたには力があるね」と言っ

て両肩をバンバン叩き、さつさと文人長屋への入居を決めてしまったのである。変迅堂本人も、そのあまりの電光石火ぶりにあんぐりと口を開いたものだったが、どうやら、それは皆同じらしい。

今長介と会話している半助も、初めて長介の元を訪ねたときのことをこう語った。

「いやあ、あの人よ、俺っちの目を見るや否や、“ウチの長屋に来ないかい？”って言ってくるもんだからたまげたよ。まあ、家賃も安いから、すぐ引っ越してここに来たけどよ」

読者の中には、「さては長介さん、適当に人を選んでるだけじゃないの？」という向きもあるだろう。けれど、それは断じて違う。

今、文人長屋には変迅堂を含め6人の店子がいるが、その6人が6人、皆その分野では知られた人物に成長している。もちろん、有名人を招いて長屋に住まわせる、ということもあるのだが、それは少数派。大抵は、無名の特殊技能者を住まわせている。

そう、長介は「違いの判る男」なのだ。

それはきつと、大店で旦那をしていた、いう経歴に負うところもあるだろう。人を使う仕事というヤツは、どうしても人材と常に対峙する商売なのだ。「この人材はここに、あの人材はここに」と差配していくうちに、その人材の良し悪しが一瞬でわかるほどの眼力を身につけてしまったのだ。

そんな風に思いながら、指についたご飯粒を唇でつまむ長介の様子を、変迅堂は奇異な目で眺めた。もしかしたら、この長介という人は、本当に目の前の「稲荷寿司」の良さはわからないのかもな、と思った。

きつと。変迅堂は思った。

長介という人が見ているのは、モノではなく、そのモノを作った人なのだろうな、と。

そう思うと、老人然としつつ、箱の中の稲荷寿司をよそに、半助と世間話に花を咲かせる長介のことが少し恐くなる変迅堂なのだ。

「ん、どうしたんですかな、変迅堂さん？」長介は、そんな変迅堂に、声をかけた。

「あ、いえいえ、何でも……」そう言っつて誤魔化す変迅堂に、半助がカラカラと笑って茶々を入れた。

「へっへ、変迅堂よお、アンタも随分ボケたヤロウだねえ」

変迅堂は苦笑いを浮かべた。

「ははは……、半助には言われたくないですね」

「何おう！」言う割に、笑顔な半助。

変迅堂と半助は年齢が近いこともあり、まるで友人のように付き合っている。ほかの長屋の住人がどこか変人で気難しいという事情もあるにせよ、ときには飲みに行ったり、こうやって冗談を言い合うような仲である。とは言っても、二人が二人忙しいので、こうやって特別なことがない限り会えないのだけれど。

「まったく、変迅堂さんは、“野暮天”ですなあ」長介はカラカラと笑った。

「や、野暮天？」言われた変迅堂が首を傾げると、半助は手を叩いた。

「ああ！ 蜀山人の「調布日記」ですねエ！！ さすが大家さんだ、博識だねえ！」

変迅堂は眼鏡を上げてから首をかしげた。「え？ なんですか、それ？ ショクサンジン？ チョウフニツキ？」

すると、半助はやれやれ、とでも言いたげな顔をして、大仰にため息を吐いた。そして、指を一本立てて、変迅堂に言った。

「ああ？ 知らないのかい？ ……まったく、まさに野暮天なヤロウだねえ。よっし、じゃあ説明したらあ。耳の穴かつぼじってよく聞けよ！」

半助が言うことには、「野暮天」とは最近の流行語で、「野暮な野郎」のことを指す言葉らしい。

この言葉を発明したのは、当時江戸の文壇、特に狂歌の世界で活躍していた武家文人、蜀山人なのだという。この人の紀行文「調布日記」という文章の中に、「野暮天」という言葉が出てからというもの、江戸っ子の間で流行っているのだという。

「はっは、半助さん、それじゃあ説明が足りないよ」

横から、長介が口を挟んできた。そして、半助の言葉に接木でもするかのように、言葉を付け加えた。

「狂歌の世界でね、大田南畝という人が居てねえ、まあその人は、最近「蜀山人」の号で紀行文を書いているんだ。それが、話に出た

「調布日記」。その日記、江戸近辺を散歩して、その風情を文章に起こしたもののなんですがねえ。その中に、谷保、というところに行つた話がありましたな。谷保、というのは、武州多摩（今でいう東京西部）にある、甲州街道沿いの村なんですがね、そこには、天神様が鎮座しておるのさ。それを、江戸育ちの蜀山人さんが面白がつて、「こんな片田舎に鎮座するなんて、野暮な天神様だ」つてその日記に書きたてたんだ。それで……」

「はあ、つまり」変迅堂は言葉を接いだ。「その、谷保に鎮座する、野暮な天神様みたいに「無粋な」ヤツのことを、野暮の天神様、縮めて野暮天、と呼んでいる、つて訳ですね」

「へっへ、そういうこつてえ！」

自分で全て説明したわけでもないのに、半助は鼻の下をこすつた。そんな半助に苦笑いを浮かべながら、長介は続けた。

「まあ、そういうことです。……さつき、変迅堂さん、ぼつとなすつてたでしょう？ ああいう風になさるのはまさに野暮天。たとえ目の前の二人が興味の無い話題で盛り上がっていたとしても、それをさも興味があるかのように聞き入る振りをする、それが粋人、つてものです」

第三話「文人長屋の面々」【4】

「はあ、そういうものですかね」

変迅堂は、頭を掻いた。すると、半助はずいずいと顔を变迅堂の顔に近づけて言った。

「そういうものなんでえ！」

「いや、半助さん、顔が近い……近いですって。野暮天な人だなあ」「え!？」

半助は、ジャツジを求めるように、長介の顔を見た。長介はわざとしかめツラをして頷いた。一瞬の沈黙。そしてすぐにその顔を元の穏やかな顔に戻してから、言った。

「はっは、半助さん、こりや変迅堂さんに一本取られましたなあ」

「ぐぐぐ……」

半助はちよつと悔しそうな顔をした。そんな不穏な空気を認めた長介は、矢継ぎ早に、だけれど、さも今気づいたように声を上げた。

「……おやあ！ 半助さん、お時間は大丈夫かね？ 前も言ってたではありませんか。“松屋の旦那は時間に厳しい”って」

松屋、とは、半助が働いている寿司屋のことだ。

最近おいしい創作寿司を出すということで、江戸っ子の食通の間でもその名を知られた寿司屋なのだけれど、その創作寿司の殆どはこの半助が作っている。その主人の松屋徳吉は寿司に関して、「おいしければそれでいい」と公言して憚らないバーリトワードな考え方の持ち主ということもあり、半助の寿司のアイデアは握りつぶされずに済んでいる。だけれど、その松屋徳吉、そういう物分りのいい男である反面、時間にはとんでもなく厳しいので有名である。

松屋の旦那、という言葉を読んで、半助は顔を真っ青にした。

「ん？ どうした？ 半助さん、顔真っ青」変迅堂は、半助のデコをペチペチ叩いた。

「あ、ああ……」

半助の顔から、赤みが消え、ツウつと冷たい汗が流れている。いわゆる、冷や汗というヤツだ。そして、ちよつと人よりも出たデコを叩く変迅堂の手を叩いた。

「も、もしかして……半助さん」長介は、訊いた。「まさか、仕事を途中で抜け出してきたんじゃないやあるまいね」

「……そ、そのまさか、です……」言いにくそうに、半助は言った。「ほお」

長介の肩に、老人とは思えないほどの、猛烈な殺気が陽炎のように巻き上がっていたのを、半助の変迅堂も感じていた。皆さん、信じられますか？ 殺気というヤツが巻き上がると、空気が揺らめくんですよ？

「半助。」

いつもは絶対に「さん」付けするのになあ……。半助と変迅堂は顔を見合わせた。なぜか、二人の耳には「ゴゴゴゴゴ」という地響きにも似た音が響いていた。変迅堂は結局他人事なので、「ああ、イナバ君の音に似てるなあ、この音……。あ、イナバ君のあの音をどうにかしないとなあ」とか漫然と考えていた。

その横で、半助は、内燃機関を内蔵しているはずも無い人間から、確かに聞こえる地響きに震えていた。

不意に、地響きが雷鳴に変わった。

「早く、お帰りなさい!!!」

江戸八百八町に響き渡るかのような長介の怒号。それに、半助は飛び上がるように立ち上がり、挨拶もそこそこに部屋から逃げた。おお、まるで韋駄天の如し。

ドバビュンと半助が去っていった後には、変迅堂と長介と、稲荷寿司が残された。果たして長介の怒りが解けているのか、変迅堂には判りかねたから、声をかけかねていた。

だけれど、長介は稲荷寿司をひよいつとつまみ、口に入れた。そして、さっきまでののんびりした口調で言った。

「ほっほっほ、この寿司、旨いな。……変迅堂さんもいかがかな」

いつもの長介の顔に戻っていた。

「あ、はい、いただきます」実はあんまりおなかが減っていないかった変迅堂だけでも、長介の言葉に従うことにした。というのも、これを断つて、さっきの雷が変迅堂にその矛先を転じないとは限らないからだ。

変迅堂は、稲荷寿司をパクつきながら、長介の顔を観察した。

さっまままでの怒りが嘘のように、長介は穏やかな顔をして稲荷寿司をパクパクと無心に食べ続けている。うくん、さっきの怒り、なんだったんだろ、と変迅堂は心の中で首をかしげた。

これは、恐らく変迅堂のような人間にはわかるまい。変迅堂のように、組織に属さずに生きていく人間にも、半助のように、組織の末端として生きている人間にもわかりにくいことだ。

組織を動かす人間にとって、「時間厳守」というのは最低限やらねばならないことだ。たとえ商品の質が多少落ちようとも、たとえ採算が合わなくなってしまおうとも、納期は守らなくてはならないし、開店時間は厳守しなくてはならない。

だけれど、組織の末端に居る人間や、そもそも組織に属していない人間は、「やっぱりクオリティ勝負でしょ!!」と言いがちだ。やはり、時間が少々かかろうとも、いいモノを作りたいと願うのは物作りの現場の人間の本音だ。

そんな立場の変迅堂にとって、「時間を守れ!」という言葉は、そんな烈火のごとく怒ってまで、言挙げする価値のある言葉とは思えないのだ。

「むむむ……」

変迅堂は、思わず手に持つ稲荷寿司を睨みながら、声に出して唸る。そんな変迅堂を、長介は怪訝そうに見つめる。

「ん？ どうしました？ 稲荷寿司、君はダメかな？」

「あ！ いえいえ」変迅堂は手を振った。「おいしいです」

「ほっほ、ならそれっぽいや顔をしないでね」

長介は笑った。それを合図にしたように、暑い風が二人の居る小

部屋に吹き込んだ。風鈴が、ちよつとチリン、とだけ鳴った。

またそんな頃、玄関の方から声が響いた。

「大家殿、参りました！」「長介殿、参ったぞ！」

今度は二人組だ。片方は張りのある若々しい声。もう一方はもうそろそろ老境に近そうな男の声。

「ほつほ、あの声は……」長介は手に残っていた稲荷寿司を口に含み、飲み込んでから言った。「式部さんに修静庵だね」

そう言うと、長介は茶をすすつてから声を張り上げた。「二人とも、入つておいで！」

「はい！上がらせていただきます！」「ふん、上がるぞ！」

二人の声に少し苦笑いしながらも、長介は二人の足音に耳をそば立てる。きつと、ドスドスという足音が式部、スツスツ、という足音が修静庵のものなだろうな、と変迅堂は思った。

「どうも、大家さん」「うむ、来たぞ」

がらつと襖を開いて、二人が入ってきた。一人は筋骨隆々で上背の高い若い男、そして、もう一方が中肉中背で、総髪（ものすごくザックバランに言うと、現代のポニーテールみたいな髪形）に白髪が混じる、中年の男だった。若い男の方は着流し、中年男はこの暑いのに袴を履いている。

変迅堂は、二人の顔をみるなり頭を下げた。「あ、どうも、式部殿。修静庵殿」

「おいおい」中年男の方が、苦笑いを浮かべ少しイヤミつたらしく言葉をかけた。「儒教的観念だと、年上の人、目上の人を立てる意味で、先に私に対して挨拶してしかるべきだがなあ、変迅堂くん」げげ、また儒教の話か……、と変迅堂が辟易しかかったところに助け舟を出したのは長介だった。

「ははは、まあまあ修静庵」

普段は年下にも必ず「さん」付けするのに、長介は中年男、修静庵を呼び捨てにした。そして、長介は式部にも声をかけた。

「やあ、式部さん。最近どうだ、絵の方は」

「まあ、ぼちぼちですね！」張りのある大声で、若い男、式部は答えた。

障子を破りそうなほどの声の大きさに、式部を除く三人は辟易したが、いつものことなので誰も文句は言わない。なので、当然式部の声の大きさはスルーされた。

「さて」長介は修静庵と式部に言った。「二人とも、家賃を払いに来たんだね」

二人は、首を縦に振った。

「では」長介は二人に言った。「払ってください」

だが、二人は首を横に振った。

「まさか」長介は少し呆れながらも言った。「二人とも、お金が工面できてない、と？」

二人は、示し合わせたようにポリポリと頭を掻いた。

「修静庵」長介は訊いた。「どうした？」

修静庵は白髪交じりの頭を掻きながら言った。「い、いやあ……、実はさ、最近儒学の大先生の本が出てな、それを買っちゃったんだ。本って高いからなあ」

「それだけじゃないだろ」長介は、まるで弟の悪戯を咎める兄のような口調で問いただした。「酒代にも相当消えてるだろう？」

すると、修静庵は、ただポリポリと頭を掻くばかりだった。

修静庵は儒者だ。儒者、というのは、今日の意味では「儒教を専門に研究している人」という感じだが、当時「儒者」と言えば、「文系の学者」程度の意味であつたと言つても良い。修静庵も、「儒者」と名乗る割に、古代の法律について研究をしている変り種である。とはいっても、当時、文系の学問の基礎にある学問が「儒学」とされていたため、どんな儒者も儒学には詳しいし、儒学の新知識には目さどい。そんなわけで、もし修静庵の肩書きを現代風に言い換えるなら、「儒学者・法律学者（古代法専攻）」とでもなる。

だけれど、この修静庵という人は貧乏学者だ。まあ、学者というヤツは、スポンサーでもない限り結構貧乏な人種なのだ。なにせ、

学者が生産する「物」は、普通の市場では価値が出ないものだからだ。修静庵もその例に漏れず、やはり貧乏なのだ。

しかも、この貧乏儒者には悪癖が二つあった。一つは目についた本を片っ端から買いあさる癖。そして、酒好きという悪癖である。この二つの悪癖は、「金を湯水の如く使い切ってしまう」という点で一致する。なにが言いたいのかと言えば、修静庵という人は、とにかく金というものに縁のない男だ、ということである。

「まったく」長介は、修静庵を嗜めた。「“儒教的観念”とか人に言う前に、払うものを払えるようにならないといけないよ」

「むむ、め、面目ない」修静庵は、額の皺を深くして呟いた。

第三話「文人長屋の面々」【5】

「さて」長介はその目を式部の方に移した。「で、式部さん、いかなすった？ 修静庵はともかく、あなたは毎月払いを欠かさなかつたじゃないですか」

「それが……」式部は言いにくそうに口をこもらせた。「修静庵さんと事情は似たようなものです」

「とは？」

「前に頼んでおいた絵筆の払いに全ての収入が飛んじゃいまして……」

式部は、その大きな体を、居心地悪そうに縮ませた。

「ん、そうですか……」長介は嘆息した。

式部は、絵師である。

絵師、とは言っても、まだまだ駆け出しで、絵を描く仕事だけで食べていけるような段階ではない。だから、日雇いの力仕事をこなしているのだけれど、元々持ち合わせた上背と、筋肉のつきやすい体質、それに今年花の17歳という条件が相まって、もはや日雇い労働の方が本業なんじゃないか、と思われるほどに、力仕事が板についている。

以前、変迅堂はこの式部と飲んだことがあるが、その時、彼は自分の来歴をこう話してくれた。

「いやあ、自分は奥州（東北地方）の百姓の三男坊だったんですがねえ。昔から絵が好きで、絵の好きが昂じて村を飛び出して江戸にやってきたんです。……ま、右も左もわからない田舎モノに何が出るはずも無く、日雇いで糊口をしのいでいたとき、長介さんに出会った、という次第で」

長介と出会ってから、ようやく自分が何をすればいいのかわかったんだ、と式部は言った。

「長介さんは、右も左もわからない俺に、絵師の先生を紹介してく

ださった。そして、“その人に絵を教えてもらうがいい”と云ってくださって……”

そう語る式部の目は、少し潤んでいた。

そんな式部にとって、長介はまさに“親も同然”なのだ。だから、どんなに貧乏しようが、式部は家賃を滞納したことは無かった。だが、今月に限っては、滞納している。

長介は言った。「まあ、いいでしょう。今度は気をつけてください」

「めんぼくない」式部は、その大きな体を折り曲げるようにして頭を下げた。

「おいおい」修静庵が話に割って入った。「どうして式部くんは良くて、私はあんなに怒られるんだ!? 不公平だろう?」

その修静庵の言葉に、長介はピシヤリと言った。「それは、信用、つてヤツです。それに、お前の今までの素行と比べれば、式部さんははるかに信用に足るってことです!」

「ぐむむ……」修静庵は言い負かされた格好になった。

修静庵は素行が悪い。とくに、お酒が入ったときなどは手を付けられないほどに素行が悪くなるという。それを抜きにしても、どうも修静庵という人は素行が悪い気がする。ただ、それは「素行が悪い」というよりは、「世間の常識に合わせる気がない」という方が近い。つまり、修静庵は、家賃を払うという「世間の常識」に、まったく興味も意味も見出していないのだ。まあ、どっちにしろ、困った人である、という評価は揺らがないのだけだ。

それに対し、式部はその行動一つ一つに折り目がついてるんじゃないか、というくらいに折り目正しい。基本的に約束は守るし、節度がある。だから、日雇いの現場でも、親方にひどく可愛がられているようだし、この通り、長介にも可愛がられている。

どっちの生きの方が得かは判らないけれど、ただ、言えることは一つ。どちらの生き方にしろ、なんとか生きてはいける、ということだ。

「で」長介は二人を交互に見てから言った。「二人とも、文人料も滞納かね？」

すると、二人は首を横に振った。

「いやいや!」「これだけは持つて来ました!」

長介はそんな二人の返答に嬉しそうな顔を覗かせた。「うんうん、それでこそ文人長屋。やはり文人長屋の住人たるもの、家賃を滞納してでも文人料は支払わねばね」

「同感だな」修静庵は言った。「あまりこんな言葉は使いたくはないが、文人料を支払わないのは、文人の名折れだろう」

そう言つて、修静庵は懐から冊子を取り出した。それを、長介が受け取る。

「これは……?」

長介が訊くと、修静庵は頭をポリポリ掻いて答えた。

「ああ、これか?　これは、老中様に提出するつもり、経世書の下書きだ。お前にまず見せるのが、店子としての礼儀だろう」

経世書、とは、政治向きに関する本のことである。

例えば、「こここのところの不景気は幕府の政策のせいだ」という文章も経世書だし、「最近の治安がよろしいのは幕府の治安対策が素晴らしいからだ」という文章も経世書だ。だけれど、大抵経世書、というのは、それが書かれた当時の治世を批判するものが殆どである。

当時、幕府を批判する、というのはほとんどないことだった。運が悪ければ首が飛ぶ。だから、経世書、という語を聞いただけで不穏な顔をする者も多い。

だけれど、長介はそんな様子をおくびにも見せず、その冊子をパラパラとめくった。

「ふんふん」

パラパラとめくりながら、長介は漢文で書かれた文章を読んでいく。その様子を、ハラハラとした顔で修静庵が眺める。

「ど、どうだ?」修静庵は、思わず訊いた。

「……んむ」長介はちよつと思案した後言った。「なかなかいい文章だった。それに、論旨も明快だった。だが……」

「だが？」修静庵は訊いた。

「あまりに明快すぎて危険だな」長介は言った。「この文章をこのまま老中様に見せたら、確実に首が飛ぶぞ。かなり明快に、幕府の施策を非難してるからな」

「や、やはりか」修静庵は言った。「確かに、やりすぎた」

「それに」長介は冊子に目を通しながら言った。「国を閉ざす政策に文句を言つと碌なことがない。以前、国を閉ざす政策を批判した経世家がいたが、その人は確か……」

修静庵は言った。

「ああ、蟄居を賜った」

修静庵が書いた冊子は「鎖国政策」に茶々を入れる内容のものである。

現代でこそ、「鎖国政策」という言葉が存在するが、当時にはそんな意識は無かった。当時、中国や朝鮮とは交易をしていたし、オランダとも交易を行っていたからだ。ただし、港として開かれていたのは長崎だけだった。開いている港がある以上、「鎖国」という表現は正しくないのです。長介も、「鎖国」などとは言わず、「国を閉ざす政策」と回りくどく言っている。

だが、その「鎖国政策」（ここでは便宜上使わせていただく）はこの時代になると、ほころびを見せ始めていた。西洋列強が、アジアに本格的に進出し始めたのである。

だから、このころより異国船がよく現れるようになった。それに脅威を感じ、異国船へ注意を払うように論を発展させる経世家も多かった。

長介は頭に指をキリキリと押し当てながら、何かを思い出すかのように続けた。「ああ、たしか、その経世家の名前は、確か……」「林六無斎だ」修静庵はまるで暮敵の名前でも出すかのように言った。

林六無齋、一般には、林子平として知られる人物だ。

ロシアの南下政策に警鐘を鳴らした「海国兵談」という本を著したことで、当時の老中・松平定信に目を付けられ、蟄居（適当に言えば、自宅謹慎）を賜ることになってしまった人物だ。この時代から、約10年ほど前の話だ。

「へえ、林六無齋」変迅堂は口を挟んだ。「海国兵談、読んだことがありますか、やはり大学者だけあって、なかなか鋭い論旨でしたね」

「フン！」修静庵は明らかに不機嫌な顔をした。「あんな男、大学者でもなんでもない！」

「ああ！」思い出したように、長介は声を上げた。「そういえば、修静庵、林殿に会いに行ったことがあったんだね？ 随分昔、東北は仙台に」

「フン！ 嫌なこと、思い出さしてくれ！」修静庵は立ち上がった。

「おや、もう帰るのかい」

「嫌な気分になった！ 酒でも引つ掛けんことには収まりそうも無い！ 帰る！」

そう言つて、修静庵は、部屋からズカズカ出て行ってしまった。

式部と変迅堂は事情が飲み込めず、「どういうことだ？」と言わんばかりに顔を見合わせると、長介は悪戯っぽく笑った。

「ここだけの話だけだね」

長介によると、どうやら修静庵は、林子平と会ったことがあるらしい。だが、そのとき、ものすごくイヤな思いをしたらしく、その話を振ると途端に気分を悪くするらしい。

「なんで」変迅堂は訊いた。「わざわざ修静庵殿を怒らせるようなことを言つたんです？」

その疑問はもつともだ。相手を怒らせることを、わざわざ言上げる必要があるまい。だが、長介はカラカラと笑つて言った。

「いや、修静庵相手だと、どうしても悪戯心に火が付いてねえ……」

えてしてそういうものなのだ。どんなに折り目正しい人間でも、
全ての人間に対して折り目正しいなんてことはない。「親しき仲に
も礼儀あり」とは言うものの、そんなことを実践できる者などこ
にもいないのである。

変迅堂は頭を掻いた。

第三話「文人長屋の面々」【6】

「さあ」式部は、気を取り直して言った。「こんどは、俺の文人料ですわね」

「おお、そうだったね」長介は呑気に言った。「今回は、どんな絵を見せてくれるのかな」

式部は、懐から丸められた紙を取り出した。「下書きみたいなもので、申し訳ないんですが……」

そう言つて、式部は紙を広げた。

「おお！ これは……」「へえ、すごい」

長介と変迅堂は広げられた紙を覗き込んで、ほぼ同時に感嘆の声を上げた。

「へへ、ちよつと新しい画法に挑戦してみたんですがね……」式部は、恥ずかしそうに頬を掻いた。

紙の上には、一羽の鶴が描かれていた。水面に足とくちばしをつける、鶴。けれど、その鶴の絵は、まるで次の瞬間には他のポーズでも取りそうなくらいに躍動感に溢れた、確かに”良画”だった。

「へえ、腕を上げたねえ……」長介は目を睨りつつ続けた。「まるで、絵から飛び出しそうなくらい、この鶴はイキイキとしている。

本物の鶴よりも、はるかに力がありそうだね」

「まったくです」変迅堂も同意した。「墨だけで描かれているのに、なんでしよう、この躍動感は」

「はは、これ、俺が開発した新画法です」式部は、微笑んだ。「とにかく、目に見えたものを、そのまま紙の上に写し取る、っていう、ただそれだけのものなんです……」

日本画に限らず、絵というものは、大いに形式、様式に左右される分野である。

鶴はこう描くべし、山はこう描くべし、竜はこう描くべし……。結局、形式に縛られすぎた絵は、没個性の、同じような絵になって

しまつ。

そこで、ある者が考える。「もつと別の描き方でもいいのではな
いか」と。そして、その思いつきを突き詰め、新たな形式の絵画が
生まれる。そして、その形式が、やがて他の形式を駆逐するに至る。
そして、その形式すらも、やがては他の形式に駆逐される。それが、
絵画なのだ。

式部が描いている絵は、まさにその流れの中にある絵なのだ。古
い形式を駆逐する可能性を秘めた絵。その「種」とでも言える、そ
んな絵なのだ。

「だが……」長介は腕を組んだ。「はたして、この絵は認められる
かね？」

古い絵画形式は新しい絵画形式によつて駆逐される、と簡単に書
いてしまったが、その間には当然新旧の軋轢あつれきがある。当然、新しい
ものを「邪道」とみなす人間と、古いものを「旧弊」とみなす人間
の軋轢、というのはどこにも見られるものなのだけけれど。

長介が言ったのは、まさにそれである。

あまりに先鋭すぎる芸術は、どうしても旧来の芸術界から握りつ
ぶされてしまうものなのだ。

だけれど、そんな長介の心配をよそに、式部は笑つて見せた。

「ははは、それは、頑張るしかないでしょう？ 俺が、どんどんい
いものを描いて、どんどん色んな人に認められていくしかないでし
ょう」

「そうですね」変迅堂も言った。「結局、新しいものを作るつてこ
とは、大変なことなんです。だから、新しいものを作る人間は、頑
張る。ただ、それだけですよ」

「そうかね」長介はただ一言言い放った。

だがね。長介は、心の中で続けた。頑張るだけじゃダメなんだ、
新しいものが認められるためにはね。認められるためには、時代と
向き合わなくちゃならない。そして、その時代の色に、自らを近づ
けなくてはならない。がんばるだけではダメなんだ。

そう、心の中で呟いた長介だったが、あえて口にはしなかった。失意の内に歳を食って、ようやく気づいたこの真理、簡単に教えてなるものか、という、老人の、ちよつとした意地悪心がなせる業だった。店子である変迅堂たちは可愛い存在でもある。だが、一方で、自分の成せなかったことを成している変迅堂たちが悔しくもあるのだ。

だが、長介はそんな感情の機微を心の海の奥底に沈めてから、まるでそんな感情が無かったかのように、長介はほっほっほ、と老人然な笑い声を上げた。

「どうしました？」

そんな長介を覗き込んで、変迅堂は訊いた。

「いやいや、なんでもないですよ、ただ……」長介は、笑顔を湛えながら、呟いた。「私はね、あなたたちのことが可愛くてしょうがないんですよ」

「？」「？」

変迅堂と式部はわからない、とばかりに顔を見合わせた。

ふふふ、わからないだろうよ、若い者には。長介はそんな二人の顔を眺めながら、心の中で呟いた。そういうものなんだ。可愛いものには意地悪もしたくなるもんだ。可愛いものを愛でるだけが、愛情ではないんだよ。そういうもんさ。二人に話しかけるように、心の中で長介は呟いた。

長介は、また茶碗を傾けてすすり、空の茶碗を地面に置いた。

「おやおや、お茶が切れてしまった。……ちよつと淹れてくれますか」

ちよつと白々しい口調で足早にそう言うと、長介は立ち上がり、奥の部屋に入ってしまった。

「……なんなんでしょうな、今の発言」怪訝そうな顔で、式部は変迅堂に訊いた。

「私にだってわかりませんよ」変迅堂は答えた。「そもそも、長介殿自体、私にはよく判りませんから」

長介、という人間は、非常に掴みづらい人間だ。

もう二年の付き合いになる変迅堂でさえ、いまひとつ掴めないところがある、そんな老人が長介なのだ。でも、それはもしかすると、大店の旦那として生きてきた、その来歴がもたらしたものかもしれない、と変迅堂は思い始めている。

当時、商人、という商売人は独特の人間だった。商売のためには、好かぬ人間にさえ頭を下げる。宵越しの金を持たないなんて粹な真似は決してしない。場合によっては、大名とも対等の関係になりうる。江戸っ子の気質とはまるで違う、それが商人なのだ。

そんな商人だった長介。恐らく、長介は、必要とあらば好かぬ人間に頭を下げ、無駄使いはせず、大名にお金を貸したりして、どんな本来の自分を見失っていったのだろう。その結果、複雑な、そして怪奇な人間になってしまったのだろう、と変迅堂は考えたのだった。

「済まんね」

長介が、急須とお茶碗を持って戻ってきた。そして、お茶碗を式部の前に差し出した。

「ほら、おあがりなさい」

長介はそう言うと、お茶碗に急須を傾けた。緑色の液体が、式部の前の茶椀に満たされていく。そして、自分のお茶椀にも茶を足した。

「あ、ありがとうございます、でも……」式部は、申し訳無さそうに言った。

「ん？ どうした？」長介は、訊いた。すると、式部はいよいよ恐縮した格好になった。

「実は……」言いくそうにして、式部は切り出した。「俺、猫舌なんですよ」

長介はカラカラ笑い、お茶を注ぐかのように、言葉を継いだ。

「ははは、いけませんね。お茶は熱いのに限りますよ」

変迅堂はふと、「それが長介の本当の姿なんだろうか」と思った。

普通、商人は相手の固辞したものをそれ以上勧めたりはしない。

それは、相手に対してあつかましい、失礼に当たることからである。だから、今の長介の発言は、「茶は熱いのに限る！」っていう、長介の本音のように聞こえたのだ。もし、長介が職人になっていたとしても、「ああ！？」茶は熱いのに限るんでえ！！」と啖呵を切るんじゃないか、と変迅堂は思った。

「はは、式部殿。私の茶を飲んでください」

自分の想像を頭の端に押しやってから、変迅堂は式部に言った。

「え？」

「いや」変迅堂は続けた。「私のは温ぬるいですから。それに、まだあまり手をつけていないから」

「じゃあ！」

そう言つて、変迅堂の茶椀に手を伸ばそうとした式部を、長介は制した。しかも、その顔は、悪戯いたづらっぽい笑顔。

ま、ま、ま、まさか……。長介を除く二人は顔を見合わせた。

悪戯いたづらっぽい、いやらしい笑みを浮かべつつ、長介は言った。あくまで穏やかに。「おやおや、温ぬるくなってましたか。それは迂闊うごんだったねえ。それじゃあ、地獄の釜かまよりあつあつつついお茶と取り替えてこようかねえ」

こ、このジジイ……。なんて意地悪なジジイだ。二人は、苦笑いしつつ、まるで般若のような笑顔を浮かべる長介を睨にらんだ。だが、長介はそんな視線はどこ吹く風、変迅堂の茶椀を取り上げて、また奥の部屋に消えた。

二人は、暑い部屋の中で、顔を見合わせてハア、とため息を吐いた。

「す、すいません、変迅堂さん」

「な、なにが？」

「いや、俺のせいで、熱いお茶が……」

「いや、構こわらないさ」変迅堂は式部を慰めた。「だって、私は別に熱いものを飲めるもの。むしろ差し当たつての問題は……」

そう言つて、変迅堂は、地獄の釜ほどではないにしろ、それなりに熱そうな液体が注がれた茶碗に目を遣つた。

「うーん、なんて熱そうな……」そう言う式部は、半ばげんなり顔だ。

むむむ……こんなときのために、瞬間的にものを冷やす発明でも考えるかねえ。と、変迅堂は薄ぼんやりと考えるのだった。

「ほっほ。ただいま」

いじわるじいさんが帰つてきた。

そして、なみなみと熱いお茶が注がれたお茶碗を、式部の前に差し出した。

「おや？ これは変迅堂さんのでは？」

そう呟いた式部に、いじわるじいさん、もとい、長介はどこまでもいじわるを言った。

「いやいや、たしかさつき、変迅堂さんと茶碗を交換したでしょう？ だから、これはあなたのですよ」

こう言つたときの長介の顔は、値1000両の笑顔だったそうないよいよ変迅堂は、「早く瞬間的にものを冷やす発明をせねば」と心に決めるのだった。それは、社会の発展への寄与のため、とか世のため人のため、といった目の前に見えにくい目的ではなく、「今日の前にいる、いじわるじいさんに対抗するため」というきわめて個人的な事情のためではあるのだけれど。

第三話「文人長屋の面々」【7】（前書き）

更新が遅れて、申し訳ありませんでした。

第三話「文人長屋の面々」【7】

そんな変迅堂の決意をよそに、いじわるじいさんはほっほっほと笑いながら、熱いお茶を赤い顔しながらすすっている。なんだ、長介さんも熱いのか、と、二人は思った。

またそんな頃、玄関から声が響いた。

「大家さ〜ん、鵜狩借遥が参りました！」

そんな口上に、長介はカラコ口と笑った。「ははは、まったく、鵜狩さんも律儀なお人だねえ。名前まで言わんでも、分かるというに……、鵜狩さん、上がっておいで！」

「へ〜い!!!」

そんな返事を返して、玄関から、町人風の男が上がってきた。黒の着流し。それに肩に手ぬぐいをばしっとかけている。まさにそれは、遊び人の風情。

「おお、変迅堂に式部じゃないか！ 久し振りだね！」

入ってくるなり、長介への挨拶をよそに、変迅堂と式部に気さくに話しかける男。この男が、鵜狩借遥である。そんな鵜狩に、変迅堂は皮肉混じりに言った。

「だって、鵜狩さん、『取材』と称して遊びに行っただけ、帰ってこないんですから。そりゃそうですよ」

「まったくまったく」式部も首を縦に振る。「時々帰って来ては、長屋にこもってウンウン唸ってるんですから」

「そんなにいじめないでくれよ。それに、実際に取材なんだし、締め切りもあるんだから閉じこもって当たり前だろ？」

と、そんな二人の言い分に文句を言う鵜狩であった。

鵜狩借遥は、戯作者である。

戯作、というのは、現代でいう小説のことであるから、戯作者というのは小説家のことである。江戸時代、特に江戸時代後期になると、出版業界もその萌芽を見せ始める。それにより、様々な小説、

戯作が世に出るに至るのだけれど、鶉狩はそうした出版業界の萌芽の風を受け、世に出た戯作者である。

ただ、まだまだ駆け出しの戯作者であり、その名はまだ知られてはいない。けれど、本人は、「そのうち有名になってやらあな！」と意気軒昂に嘯うそぶいてはいるけれど。

「おう、大家さん！ 久し振り！」

まるで、幼馴染にでも久し振りに会ったかのような物言いで、鶉狩は長介に挨拶した。そんな鶉狩の挨拶を咎めせず、「ああ、久し振りだねえ」と返す長介も長介だけれど。

「いやあ、濟まなかつたな、家賃」鶉狩は切り出した。「いやあ、ちよいと取材に、生国に帰ってたもんでね、家賃を払いそびれちまつて……。出来るだけ早く帰ろうとは思ってたんだが、気が付いたら江戸に帰り着いたのは夏の頭になってたんだ」

「まつたくですよ」咎めるような口調ながら、長介は笑顔を崩さないまま続けた。「連続三ヶ月、大家に顔を出さない店子がどこにいるんですか」

鶉狩は、ここ三ヶ月姿を消していた。

鶉狩がよく『取材』と称してほつき歩いている話は変迅堂の口から出たけれど、それはせいぜい十日、長くて二十日くらいのことだった。だが、どうしたわけか、三ヶ月まえ、鶉狩はふらつとどこかに行つたきり帰ってこなかったのだ。とは言っても、元々放浪癖のある鶉狩のことだから、と皆あまり気にしていなかった。

「そつえば」変迅堂は鶉狩の顔を覗き込んだ。「鶉狩さんつて、生れ国、どちらでしたっけ？」

すると、鶉狩はちよつと下を向いてから答えた。「ああ、越後だよ。いやあ、この時期の越後はいいぞ！ 稲穂がゆらゆらゆれてなあ」

「そつでしようね。稲穂が青くて、綺麗なんでしょうね」

変迅堂は、九十九里の道中見た、青い稲穂の海を思い出した。そして、その海に浮かぶような道の上を、イナバ君にまたがって走っ

ている。そして、自分の胸のところには……。あわわわ！

稲穂の海を思い出していたはずの変迅堂は、気付くとその光景と一緒に見た女の子（言うまでもないと思うけど、それは当然ちあきのことである）の感触、甘い匂いを思い出していた。ふ、まだまだ青いね、変迅堂。

そんな、アワアワしている変迅堂に、他の三人は首を傾げたけれど、変迅堂抜きで話を進めることにした。

「で、家賃、払ってくれるのかい？」話の口火を切ったのは長介だった。

「お、おう！ さ、さ！ これだ！！」

そう言つて、鵜狩は着流しの懐から無造作に小判数枚と、冊子を取り出した。

「ほれ、この小判が今まで滞納してた、10ヶ月分の家賃。んで、こつちの冊子が、この三ヶ月の文人料だよ」

え、この人、10ヶ月も家賃滞納してたのかよ……。と式部はげんなり顔をした。そして、小判数枚なんて大金、どう稼いだんだろ、と式部は妄想でアワアワしている変迅堂の横で思うのだった。

そう疑問に思ったのは、当然式部だけではなかった。長介も、疑問に思つたらしい。

「鵜狩さん、こんな大金、どこで手に入れなさつた？ 小判三枚なんて……」

小判、というのは、結構な大金である。少なくとも、文人長屋に居る人々の手に入るようなものではない。しかも、それが三枚など、全うに働いていたらとてもひねり出せるお金ではない。

「……あゝ、いやいや。稼いだんだよ……な？」

誰に対する「な？」なのか分からない「な？」を発する鵜狩。怪しい、と思つたのは読者だけではあるまい。無論、この場に居るだれもが疑問を抱いていた……。つて、変迅堂だけは、自分の妄想を振り払うのに必死で、それどころじゃないか。

「さては……、鵜狩さん……。このお金、後ろめたいお金だね？」

じとつとした目で、長介は詰問した。式部も、じとつとした目で、同じく鵜狩を眺めている。

「あゝいや、これは原稿料で……」

「嘘おつしやいー!」ぴしゃりと、言い逃れめいた鵜狩の言い分に、長介は一喝した。「さてはあなた……。このお金、賭場か何かで巻き上げたお金だね?」

ギク!この音は、いわゆる「擬態語」という、「音には聞こえない様子を表す語」なのだけど、確かに長介と式部には聞こえた。それほどに、鵜狩の驚きが大きかった、ということだろう。

二人はいよいよ、じとつと滑るような視線で鵜狩を押しさえつけた。そんな視線のプレッシャーに負けたのか、そのうち、ぼそつと白状した。

「……賭場で、稼ぎました……」

長介は、大きくため息を吐いた。そして、「情けない……」と呟いてから、言った。

「鵜狩さん……。賭場で稼いだお金を、家賃に当てないでくれ。

まったく、不粹ったらありやしない。それに、賭場に入りにするのは重罪だよ」

「だがよお、大家さん、丁半つて面白いんだよ。伸るか反るかの勝負ってさ……」と、食い下がる鵜狩。

「面白いのはわかるけども」長介は、げんなりとした口調で鵜狩を叱る。「賭博は天下の御法度。やるなどは言わないけれど、そういうところで得たお金を生活費に回すものじゃないよ」

当時（現代でもそうだけど）、賭博は法に触れる行為であった。というのも、賭博、という娯楽は、もの一夜で、それこそ年収以上の金が手に入りかねないものだからである。そんな「金儲け」が転がっている中で、誰がまじめに働こうと思うだろうか。そういうわけで、賭博は禁じられた遊びであった。

普通、店子がそんな禁じられた遊びをしていたのならば、大家はそれに介入して、なんとか真人間になるように指導しなくてはなら

ない。繰り返すが、店子の不祥事は大家の失態にされたからだ。

だけれど、そういう意味では、長介は物分りのいい大家だといえる。「賭博やつてもいいから、それを生活費に使っんじやない」と店子を叱る大家なんて聞いたことがない。

「で、というわけだから、このお金は受け取れないよ」

そう言うと、長介は転がる小判をまるで埃を掃き捨てるかのように、小判を手で押しやった。そして、その小判を鶺鴒は拾い、懐にしまった。

「ちえー。せつかく、借りを返せると思っただがな……」

その口を尖らせてぶつぶつと言う鶺鴒に、長介は厳しい視線を向けた。すると、まさに「蛇に睨まれた蛙」のように、鶺鴒はピタリと不平不満を述べるのをやめた。式部の側からは、その長介の視線を垣間見ることは出来なかったけれど、「うわー、すごい顔してるんだろーうな、大家さん……」と式部は長介の鬼のような顔を想像して身震いするのだった。

「そそそそ、それよりもさ」長介の怒りを躲かわすかのように、鶺鴒は話を切り出した。「この三月分の、文人料、読んでくれよな。結構な自信作なんだからさ。わざわざ越後に取材に行って書いたやつだ」

「ああ、そうだったねえ」

長介は、わざと怒りの矛を収めたのか、それとも話に乗ったからなのかは分からないにせよ、とにかくさっきまでの怒りを納め、畳の上に置かれた鶺鴒の文人料を手にとった。

「ふむ……」

長介は冊子の表紙を眺めた。表題には、「女怨男死」と大書されていた。

「へえ、おんなづらみおとこしに、ですか、この表題」

長介の横ににじり寄った式部は、長介の手にある冊子の表題を読んで唸った。

「違う」鶺鴒は首を横に振った。

「え？」頓狂な声を上げる式部。

「だから」鵜狩は続けた。「この表題、読み方が違うんでえ。こいつは“おなごうらみてしぬべきおとこ”って読むんだよ」

当時の戯作の題名、というものは、とんでもなく読みにくいものが多い。

と、いうのも、当時の戯作、大衆小説にはルビを振るのが通例で、それを利用して、漢字にとんでもないルビを振っていたからだ。それこそ、漢字だけでほんと出されても、全然読めない、ということがありえるほどに、である。

「ってことは、心中ものかい？」そう長介が訊くと、鵜狩は首を横に振った。

「いやいや、そんな古臭いもんじゃねえよ。これは、新しい形式の戯作だ」

「へえ」そう感心したようにつぶやくと、長介はパラパラとそのページをめくっていった。

冊子の中で展開されていた話は、今で言う推理物であった。江戸の町で医者をやっている「画衆院」が、ある長屋で起こった殺人事件の謎を解く、という筋書きのようだ。

第三話「文人長屋の面々」【8】

ちなみのこの時代、まだ推理小説、なんてものは無かった。当時あったのは、現代風に言えば、恋愛小説、ファンタジー、コメディ小説、実録小説の4種類だった、と言っても過言ではない。なんで他のジャンルの文芸が誕生しなかったのか、と疑問に思う向きもあるだろうけれど、きっとそれはそういう小説にしかニーズが無かったからなのだろう。それはつまり、「人がどう死んだか」よりも、「人が、どういう心情で死んだのか」の方に、江戸っ子たちは興味を持っていて、ということなのだろう。

だが、この鵜狩借遥という戯作者は違った。「人はどういう心情で死んだのか」なんて、結局生きる人間の手には書けねえよ、というのがこの男のスタンスなのだ。だから、この戯作者は、江戸っ子があえて興味を払わない「人がどう死んだか」にスポットを当てるのだ。

当然、ニーズの無いものを仕事で書いている、ということは、金つ氣がまるで無い、ということだ。売れない文章を仕事として書いている、ということは、そういうことなんですよ。

そういう人間にとって、賭場とは稼ぎ場なのだ。生活費の。

「ど、どうだい？」心配そうに、長介の様子を探る鵜狩。

「まあ、長いからねえ。あとで目を通すとして」長介は、冊子をパタンと閉じた。「ときに、鵜狩さん、訊きたいことがあるんだけども」

「なんだい？ ネタバレは厳禁なんだが？」

「この話」長介は、心なしかやさしい声で続けた。「江戸が舞台、ですよねえ」

「ん、ああ。江戸の医者が、江戸の長屋の殺人事件に挑む、って話だもの」

「ふ〜ん、じゃあなんで」

長介は、猫なで声を出した。顔は笑顔。だが、肩からフルフルと何かか吹き上がっている。それを目撃した式部は、それとなく長介と距離を置いた。

「なんで？」

鵜狩は、そんな長介の変化に気付かなかつたらしく、長介の言葉をオウム返しにした。

「なんで……三月も越後に帰ってたんだけ！ 『取材』とか言う割に、まったく越後と内容が関係ないだろうが……！」

あ、そっぴやそっぴですね。

あちやちやという顔をして、鵜狩は耳をふさいだ。式部も、長介の怒りを察知していたから、耳をふさぐのに成功した。だが、約一名は見事に失敗した。

変迅堂である。

ヤツは、妄想の世界に遊んでいたせいで、長介の怒りに対し、反応が一瞬遅れたのである。長介の怒号が、容赦なく変迅堂の耳と、妄想の世界を爆破した。皆さん、怒っている人の近くで、妄想を膨らませてはいけません。

「ぐはあ……！」

そう叫んで、変迅堂は耳を塞ぎつつその場に崩れた。

「へ、変迅堂さん!?」式部が変迅堂の体をゆするも、反応がない。つづか、目が白目。

そんな式部と変迅堂をよそに、長介は、耳を手で塞ぎながら「ああ、聞こえない……！」とか言っている鵜狩に、バスバスバスバス怒鳴りまくる。

「まったく！ お前というやつは……！」

二人称が、あなた、から、お前、に代わっている長介。温厚そうに見えて、案外怒りっぽいのだ。まあ、その怒るポイントは、ずいぶんズレているけれども。

「あ、あ、あ、聞こえない聞こえない……！」

「大丈夫ですか変迅堂さん……！ 変迅堂さん……！」

そんな長介の怒声に、聞こえないふりをする鵜狩の声に、変迅堂の気付けをしようと必死の大声を出す、元々大声の式部。そんなてんやわんやの大騒ぎ。平和ですね。

さて、そんな喧騒に包まれた長介の隠居屋敷。そんな屋敷に、誰にも気付かれずに入り込んでいく人影があつた。その影は誰にも気付かれないままに玄関をあがり、廊下を抜け、みんながわいわいと騒いでいる部屋にまで入り込んだにも関わらず、だれもその人影に気付かない。

長介は相変わらず怒鳴り続け、鵜狩はそんな長介の怒鳴り声を文字通り聞き流している。そして、変迅堂は長介の怒鳴り声にやられ意識不明、そして、人のいい式部はそんな変迅堂の気付けをしようと、長介よりもはるかに大きな声で、変迅堂に叫びかける。

そんな喧騒の中、その人影は言った。

「あ、あのう……写狂、参りました……」

そう、袴姿の男、写狂はボソボソと言ったが、誰にも気付かれな

い。
実は、玄関に立った時点で、写狂は声をかけたのだ。「写狂、参りました。あがってもよろしいでしょうか……」と。だが、写狂のまるで蚊が鳴くような声など、4人の喧騒にかき消されてしまった。これもいつものことなので、写狂は無断ながら玄関から上がりこみ、この部屋までやってきた、という次第なのだ。

さて、写狂は、書道家である。

この書道家は、こんな蚊のような声を上げる青年とは思えないほど、ダイナミックな書を書くということで、江戸中の趣味人の間ではその名が知られた男である。きつと、文人長屋の面々の中では、一番名が売れている男であろう。

「……あ、あのう……」

そんな写狂なのであるが、どうにも覇気がない。というか、口下手である。文人長屋の最年長・修静庵に言わせれば、「書の雄大さの割に、人間が小さい」ということらしい。なお、戯作者・鵜狩の

目から見れば、「言葉をつむぐ才能を、書を描き出す才能の方に振り分けた」と写るらしい。

何が言いたいのかといえ、とにかく写狂は、口下手なのだ。その結果。

「変迅堂さ〜ん!!!」

「まったくお前は昔からそうだったよなあ!!　そういえば……」

「あああああああ!　聞こえない!!」

そういう、約三名の言葉に、自分の言葉がかき消されてしまうという結果になるのである。　う〜ん、かわいそうな写狂。

写狂は、ふう、とため息を吐いた。これも、いつものことなのだ。文人長屋の面々で、こうやって顔を突き合わせたり、皆で花見などの集まりになったりすると、必ず写狂はこういう羽目になる。文人長屋の面々は、皆が皆、人として破格の者たちばかりで、どうにも存在感が大きい。というか、大家の長介でさえ、あんなに存在感が大きいのだ。そんな中に、普通程度の存在感を誇る人間が放り込まれたらどうなるか。それは火を見るより明らかだ。きっと、多くのきらめく個性に囲まれた結果、その人の存在感は空気同然になってしまうだろう。

そもそもがそんな状況だった上、写狂本人の責任、というものもある。

そもそも、写狂という人間が、決して存在感がある人間ではないのだ。要は、写狂は、影が元々薄いのである!　そんな人間が、文人長屋で生活するようになったのが運のつき、というものなのだろう。

だがまあ、こういう芸術家なんてものは、本人には存在感がないくらいがちょうどいい。要は、芸術家が紡ぎ出す「作品」に存在感があればそれでいいのだから。

「あのう……、お家賃を」

そんな写狂の声は、誰の耳にも届かない。あ〜、いや、やっぱり、少しは必要ですね、存在感。

また、写狂は喧騒あふれる部屋の隅でため息を吐いた。しょうがないな。そんなため息だった。

「……大家さん」聞こえないなら言わなくても良さそうなものだけれど、写狂は言った。「今月の文人料とお家賃、払っていきますからね……」

そう言つと、写狂は手に持っていた包みを開いた。

「ええつと、まずこれが……」まるで、軒先で荷物を開く行商のような手つきで、包みからお金を取り出した。「これが、今月のお家賃です。あと……」

また、写狂は包みをまたまさぐり、半紙を一枚取り出した。

「これが、今月の文人料です……」

半紙には、「案山子」と大書されていた。その字、まるで案山子そのものを見た時のような、哀愁と郷愁、そして、幼年期の甘酸っぱさを連想させるような、力を持った書だった。そんな力を持った書とは対照的に、細身で存在感も薄い写狂は言った。

「では、大家さん、今お取り込み中ですので、ここで失礼します……。あ、あと、式部さん、鶉狩さん、変迅堂さん、ごきげんよう……」

そう言い残すと、写狂は部屋をあとにし、玄関へと向かった。そして、玄関で履物を履くと、まったく音も立てずに、玄関の戸を開け、江戸の街に消えていった。

ようやくそんなころ、部屋の混乱は終息に向かおうとしていた。

「はあはあ……怒鳴りすぎて疲れたよ……」

「変迅堂さ〜ん！！ あ、良かった、目を覚ました！」

長介が怒鳴り疲れ、変迅堂が目を覚ましたのだ。

「ふう、まったく、大家殿、そんな大声を出さないでくださいよ」

変迅堂が半ばボーっとした頭で文句を言つと、長介は頭を掻いた。

「ああ、すまないねえ。にしても、のどが乾いた、さて……」

そう言つて、そこらに置いてあった茶碗を手に取ると、長介はそれをぐいっと一気飲みした。

ん？ あれって……。式部と変迅堂は「あり？」と顔を見合わせた。あれって確か……。二人の思うことは同じだった。あの茶碗の中には、熱いお茶が入ってるんじゃないか？

果たして、あのお茶碗に入っていたのは地獄の釜ほどではないにせよ、それなりに熱いお茶だった。それを一気飲みした長介は、最初こそ何でもないような顔をしていたが、顔がみるみる真っ赤になり、最後には跳ね上がった。

「あ、あちい！！！！ み、水！！！！」

ここぞとばかりに、そんな長介を鵜狩がそやす。

「はっは、茹蛸みてえだなあ！！ はっはっは！！」

真っ赤な顔をしていた長介はさらに赤い顔をした。

「ふざけるな！！ 早く、みみみず！！」

「ミミズ？」

わざと長介の言葉を聞き間違える鵜狩なのだった。鵜狩は鵜狩で、結構いい性格なのだ。

第三話「文人長屋の面々」【9】

「んなわけないだろう！ 水だ水！ ってあれ？」

ようやく、長介は気付いた。畳の上に、見慣れないお金と書が置かれていたことに。長介は、そのお金と半紙を取り上げた。

「ほう……、いい字だねえ……」長介は、半紙の字を読み上げた。

「かかし、か。写狂、来ていたのかね」

「ああ？ 写狂のヤロウ、俺たちに挨拶なしかよ！」

そう怒る鵜狩。いやいや、むしろ君たちが写狂に気付かなかっただけでしよう。というツツコミはさておき。

「いや、たぶん……」頭を振りながら、変迅堂は言った。「あの人、影が薄いから皆気付かなかったんでしょ？」

「そういうお前もずいぶん影が薄いがな」鵜狩はそう皮肉っぽく笑った。

「でも」式部は、長介の手にある半紙を見て呟いた。「あの人、影は薄いけれど、すごい雄大な書体で字を書きますよね……。いつそ、かわいそうですよ」

「何がかわいそうなんだい？」長介が訊くと、式部は少しうつむきながら答えた。

「自分の創造物のほうが、本人よりも存在感があるなんて悲しくないですか？」

すると、長介は嫌味っぽく言った。

「そんな台詞は、自分の創造物に、確固たる存在感を持たせてから言うんだね。書に限らず、作品に存在感を与えるのは大変なことだ。それこそ身を削って、必死で努力して成すことだ。それを、そんな風に茶化すのは良くないねえ」

変迅堂も、鵜狩もうんうん、と首を縦に振っている。

「……すいません」

式部が謝ると、長介は変な顔をした。

「いやいや、これは誰に謝る、って話ではないんだよ」

長介は、心の中で続けた。これは、自分の問題なのさ。お前たちのように、後世にもものを残す人間は、身を削^{ちへ}つてでも、血反吐を吐いてでも、自分の創造物に存在感を持たせなくてはならない。果たして式部さん、あなたにそこまで頑張るだけの力があるのかな？

そう、心の中で式部に問いかけたけれど、当然式部はそんなこと知る由もないので、わからない、とでも言いたげな顔をしている。

「さて」鵜狩は立ち上がった。「じゃ、俺はこれで。……おい、式部！」

「……え？ なんですか？」式部は聞いた。

「帰るぞ！ 確か今日、二人で甘いもの食べる約束してただろ」

式部は首をかしげた。「え？ そんな約束してましたっけ？」

「ああもつ！」鵜狩は長介の横に座る式部の手を強引に引^ひつ張り、立ち上がらせた。「約束してただろ？ な？」

鵜狩は、式部に助け舟を出したのだ。

今の長介、どうしたわけかカリカリしている。そんな状況で、一番若く、どうにも野暮な式部がここにいては、どうなるか分からない。そう思った鵜狩は、式部にここから出る口実を作^{つく}ってやることにしたのである。……まあ、変迅堂も結構な野暮だけれど、もう22歳になるやつだ。大人なんだから、てめえでどうにかしやがれ。そういう気持ち^{きもち}が鵜狩にはあったのだ。

ようやく助け舟が出されていることに気付いた式部は、調子を合わせた。「あ、ああ！ そうでした！ 今日、二人でお汁粉を食べる約束でしたね！」

この暑い最中に、しかも猫舌のお前が熱い汁粉なんて、嘘^{うそ}っぱちもいいところだろ、もっと良いイイワケが出来ないのかよ、と言わんばかりにため息を吐^つこうとした鵜狩だっただけれど、そんなため息を無理やり飲み込んで、そんな式部の言い分に合わせた。

「そうなんだよ〜！ この暑い最中には、やっぱり熱いものを食べるに限るからねえ！」

そう言うと、鶉狩は式部の手を引つ張って、玄関の方に足を向けた。たぶん、これ以上ボ口を出さないための手段だろう。

「んじゃ、大家さん、俺たちはこれで」

式部の頭をつかんで無理やりに頭を下げさせた鶉狩は、そそくさと玄関のほうに消えた。

「おやおや、まったく、一つどころに居つかない男だねえ」

鶉狩の思惑に気付かないのか、それとも気付かない振りをしてい
るのかはわからないにせよ、長介はなんともつかない苦笑いをして
見せた。

結局、あれだけ喧騒に包まれた長介の屋敷には、変迅堂と長介の
二人が残された。さっきまでの喧騒はどこへやら、長介の屋敷には、
風に揺れチリンと鳴る、風鈴の音だけが響いていた。

「さて……、変迅堂さん」

不意に声のトーンを下げ、長介は変迅堂ににじり寄った。

「ん？ 何ですか？」

「ああ……、実はお願いがあつてねえ……」

「は？ お願い？」

「ええ……。あなたにしかお願いできないんですよ。素行の良い、
あなたにしか。それに、たぶん発明家のあなたなら、きつといい案
を出してくれると思いましてね」

「はあ……」

大家のお願いほど、面倒なことはない。だが、もう既に断ること
は出来そうもない。

「実はね……」長介は、変迅堂に耳打ちをした。

熱い風が、一瞬二人の居る部屋を抜けていった。チリンチリン。

第三話「文人長屋の面々」【9】（後書き）

これにて、第三話、終幕。

第四話は多少ダークな内容になりますので、ご注意ください。

第四話「サスペンス八百八町」【1】

1

変迅堂が、長介の屋敷にいる頃、ちあきは甘味処にいた。

「あゝ、やっぱり甘いものはおいしいっ!!」

両国・隅田川沿いの甘味処・小鞠屋特製の、冷製しるこをすすりながら、ちあきはニコニコと笑った。そんな様子を眺めながら、火消しのカツちゃんは微笑んだ。

「な?おいしいだろ? 普通、汁粉っていうのは暖かいけども、ここのは冷たく売るってんで有名なんだ」

カツちゃんは、お茶をすすった。あまり広くはない、小鞠屋店内。本来なら、昼過ぎの今この時間帯は、「ちよつと小腹も減ったし、甘味でも食べようか」という時間帯のだけれど、この日はなぜかガラ空きだった。居る客といえば、あでやかな小袖を纏まとった商家の娘と思しき女の子二人組と、屈強な男と遊び人風の男の二人組くらいなものだった。まあ、ちあきを甘味処に誘ったカツちゃんとしては好都合なのだけれど。

「でもさあ、カツちゃん」ちあきは箸をカツちゃんに向け訊いた。

「いいの? こんなところで油売っててさ。だって、火消しって忙しいんでしょ?」

「……ああ、平気平気。今日は非番なんだ」

ちよつと弱々しい口調で答えるカツちゃん。そんなカツちゃんの声の変化に気づかず、ちあきはただ「ふくん」と相槌を打って、汁粉をすすった。

「非番」とカツちゃんは言ったが、本当は、もちろん今日、カツちゃんは非番ではない。だけれど、今日のために、お組の先輩達に頼み込んで、なんとか休みにしてもらったのだ。だけれど、そんなカツちゃんちゃんの努力、ちあきは知る由もない。

「でもさあ」ちあきは思いついたように訊いた。「なんかさ、火消しになってから、カツちゃん、暇そうになったね。火消しって、暇なの？」

あゝあ。ちあき。わかってやってよ、カツちゃんの努力。

「ははは……」カツちゃんは苦笑いするしかなかった。

さらに、ちあきは追い討ちをかけた。

「だってさあ、鳶をやってたときには、あんまり顔を見せてくれなかったじゃん。なのに、火消しになってからは良く顔を見せてくれるようになったじゃない？」

普通、「火消し」という仕事は、副職だ。大抵、火消しという仕事は、高所での仕事を担当する鳶職の副職となっていることが多い。なので、普通火消しに任命された人は、相当に忙しくなる。今までの鳶の仕事に、火消しの仕事も乗っかってくるのだ。

むしろ、カツちゃんがちあきに顔をよく見せることが出来るようになったのは、別の理由である。

カツちゃんが12歳で親元を飛び出し、鳶になった話はしたと思う。12歳、そんな年齢で、鳶の世界に入ったカツちゃんは、当然下働き。しかも、一人暮らし。そんな状況ではおいそれと休みを取ったりは出来なかったのだ。けれど、今やカツちゃんは15歳の社会人三年生。現代でもそうだが、社会人三年生くらいになると、仕事とプライベートの折り合いの付け方がわかってくる。

要は、ようやくカツちゃんにもわかってきた、ということだ。なにが、って？当然、「仕事とプライベートの折り合いの付け方」があるので。

それに、ようやく自信がついた、というのが大きい。

きつとカツちゃんは、火消しになれたことでようやく自信が持てたのだ。少なくとも、ちあきと釣りあう男になるためには、そのくらいのステータスが欲しい、と思ったのだ。

そういうことを、トクトクと説明したいカツちゃんだったけれど、そんなことを説明したところで、きつとちあきはわかってくれない

だろうし、そもそも、カツちゃんはそこまで口が達者ではない。結局、カツちゃんは「ははは……」と誤魔化し笑いを浮かべるしかなかった。つうか、そんなことを説明してしまったら、事実上の告白ではないか。あわわわ！

チリン。店の軒先に吊られた風鈴が、川の二オイを帯びた風に揺れる。汗が、少し乾くような感触を、二人は全身で味わった。

ああ、この風。ちあきは、風の吹きこむ窓の方に目を遣りながら思った。あの無粋者も、この涼しい風を浴びて「ああ、風ですね、涼しいなあ」とか言っているんだろうか。そんなことを考えて、ちよつと嬉しい気分になった。

「ん？ どうした？ ちあつちゃん？」怪訝な顔をして、カツちゃんが訊いた。

「え？ え？ 何が!？」

ちよつと自分の想像の世界に足を踏み入れかけていたちあきは、不自然な大声で言葉を返した。

「いや、だつてさ」カツちゃんは怪訝な顔を崩さずに言った。「顔、赤いぞ」

「え!？ え!？」

ちあきは、思わず両手で頬を覆った。そして、ちあきたちがさつき浴びたのと同じ風を、江戸のどこかで浴びているだろう無粋者の姿を、頭を振って想像の世界から追いやった。

「なにしてんだよ」「ぶつきらばうに、カツちゃんは訊いた。

「……」ちあきは、ぼおつとして押し黙ってしまった。

ふ、恋の病というのは、時を選びませんな、ちあき。

でも、恋心、ってこんなものじゃないかな。恋心ってというのは、その想い人に対面していない場面でも、なぜか胸をきゅんとさせるものだ。いや、もしかしたら、想い人に会っていないときの方が、きゅんとしたりするものなのではあるまいか。

その、きゅん、という胸の痛みは、当然痛いんだけど、同時に甘い感触を残す。なんだか、心臓をつかまれたかのような痛みも

あるんだけど、同時に、まるで今ちあきが食べている汁粉のように甘く、なんだかクセになる。痛いことだと知りつつも、その甘みを求めて人は恋をするのだ。

「おいおい、癩にでもなったのか？」

カツちゃんは、心配そうにちあきの顔を覗きこんだ。

「ううん……、なんでもない」

ちあきは、まだ顔が赤いような気がしてしょうがないので、まだ頬を手で覆っている。

「まあ、夏だからなあ」カツちゃんは、窓から外の、隅田川の河原を眺めた。キラキラと輝く隅田川の水面。そして、その水面に向かって走っていく子供達。そんな子供達を、陽光が容赦なく照らす。

「夏だから、何よ？」ちあきは、訊いてみた。

「……」カツちゃんは、腕を組んでしばらく考えてから答えた。「

……ごめん、言ってみただけ。夏だからって呆ける、ってわけじゃねえしな。むしろ、ちあっちゃんは年がら年中呆けてるしな」

「なんだとお!？」

ちあきは、袖をたくし上げ、「今にも殴ってやるぞ!」という戦闘体勢のポーズを見せた。だけれど、カツちゃんはそんなちあきのポーズに恐さは感じず、むしろたくし上げられた袖からこぼれた、しなやかに細く、ほどよく白いちあきの腕が印象に残るのであった。まったく、エロカツちゃん!

だが、いつまでもちあきの細腕に見とれているわけにいかず、カツちゃんは言った。「……いやいや、冗談冗談! それより、年頃の子が二ノウデなんか出すもんじゃないだろ!」

「むむむ……」

ちあきは、悔しそうにたくし上げていた袖を元に戻し、「戦闘態勢」を解いた。

「でもさ」ちあきは席に座ってから、訊いた。「一体、どういう風の吹き回し?」

「なにが」カツちゃんは、茶をすすってから聞き返した。

「だってさ」ちあきは、汁粉を少しすすってから言った。「ケチなカツちゃんが、汁粉奢ってくれるなんてさ、珍しいじゃない？」

ケ、ケチ……。おいおい、俺って、そんな風に映ってたのかよ、と、ちよつとカツちゃんは傷ついた。

確かに、カツちゃんが人にモノを奢るのは珍しいといえる。

それは、カツちゃんがケチだからではなく、無い袖は振れない、つまりお金がないからだ。現代でもそうだけれど、男の一人暮らしは何かと入用なのだ。

カツちゃんは、ちあきの顔を指して言った。「ちあつちゃん、口にあんこがついてる」

「え！？ え！？」

ちあきは、袖から手ぬぐいを取り出し、すつと口元を拭いた。そして、その手ぬぐいを卓の上に置くと、ちあきは続けた。

「ねえ、話逸らさないの！」

ば、ばれたか……。話を逸らしたこと……。心の中で、カツちゃんは苦笑いをする。

「訊いてる？ カツちゃん！ ……ひよつとして、汁粉をダシに、あたしに何かさせようって算段じゃないでしょうね？」

ギクギク。そこまでバレてるのか……。ちあつちゃんには敵わねえな、と心の中で、カツちゃんは頭を掻いた。もうそこまでバレてるならしょうがないか。カツちゃんは腹を括った。

「ああ……ちあつちゃんに話があるんだ」

「なによ」

「ああ、変迅堂のことなんだがな……」

「え？ 先生の！？」

ちよつと声のトーンが明るくなるちあき。そんなちあきにイライラしながらも、カツちゃんは続けた。

「もしかしたらよ、アイツ、火付けなのかもしれねえ」

「ハア！？」ちあきは、思わず立ち上がり、怒気混じりにまくし立てた。「あの先生が！？ あの人畜無害で無粋者の先生が？ 火付

け！？ 何言ってるのよ！」

「まあ落ち着けよ」カツちゃんは、そんなちあきを宥めた。「とりあえず、座りねえ。他の客に迷惑だろ」

ちあきが周りを見渡すと、他の客がちあきの顔を覗きこんでいる。ちあきは不意に恥ずかしくなって、まるで干からびた朝顔のようにおずおずと席に着いた。

カツちゃんは続けた。「ちあっちゃんは信じられねえかもしれねえがよ、見ちまったんだからしょうがねえだろ」

「何を見たのよ」目立たないように、小声で訊くちあき。

「それはな……」カツちゃんは、話を始めた。

第四話「サスペンス八百八町」【2】

それは、三日前の夜の出来事だった、という。

この日、カツちゃんは火消しのお勤めをしていたのだという。お勤め、というのは、つまりは火の用心の見回りである。普通、その仕事は二人で行なうものだけでも、その日はカツちゃん一人で見回っていた。と、いうのも、カツちゃんの相方の佐吉というヤツが、水に当たって腹痛を起こしたからとのことだ。とにかく、その日、カツちゃんは一人で見回りをしていた、ということだ。

その日は、少々肌寒い夜だった。現代でこそ、やれ熱帯夜だあ、ヒートアイランドだあと騒がれるけれど、当時はそこまで暑くなかった。それは、まだ道路がアスファルトで固められていないこともあるし、クーラーのように、強烈な熱源もないからでもある。

「ああ、もう少し厚着すりゃ良かったかな」と、晒しに半纏姿の力ツちゃんは後悔した。

そんなときでも、仕事はキチンとしなければならない。カツちゃんは、お組の管轄区域を見て周った。そして、一通り見回って、「そろそろ帰るかな」とカツちゃんが考え始めたころ、闇夜の中に、ある人影を見つけた。

全身黒づくめの男。しかも、頭には、顔をすっぽりと隠す頭巾。どう考えても怪しい。

そう思ったカツちゃんは、その男を尾行した。

その頭巾の男、いかにも怪しかった。

その黒づくめの服装もさることながら、周りを、まるで何か品定めでもするようにきよろきよろと見回している。

「あ、怪しい……」思わず、カツちゃんは呟いた、という。

そんな、江戸の街を徘徊する男は、そのうち、人気の無い長屋の横で足を止めた。

「ん？ なんでえ？ なにを……」物陰で様子を窺うカツちゃん。

すると、男は長屋の板塀の前に立ち、またきよるきよるを周りを見渡すと、急にかがみ込んだ。

「これは……」

その男は、カツちゃんにばつちり見られていることも知らず、徳利のようなものを取り出し、板塀のところに徳利のなかに入っていた、ドロツとした液体を撒いた。そして、おもむるに、懐から手に収まる大きさの石を二つ取り出した。

「おいおい……あれは……」

現代人からすれば、石を二つ懐から出したところで、なんの感慨も抱かないだろう。だが、当時の人は、「二つの石」というのは、あるモノを連想させる。

それは、「火」だ。当時は、火打石で火を付けるからである。

板塀の前にかがみこみ、どろつとした液体を撒いた上、火打石を取り出す。これはもう、十中八九間違いない。アイツ、火付けだ！

カツちゃんは、物陰から躍り出て、叫んだ。

「おい！ おめえ！ なにしてんでえ！！」

その「火付け男」は、そんなカツちゃんの声に一瞬ビクつと体を逸らせたけれど、すぐに立ち上がり、向こうに走り出した。

「おい！！ 待て！！ 待てつて言つてんでえ！！ 火付けの野郎！！！！」

もちろん、待てといわれて待つ火付けではない。火付けは重罪。

捕まれば火あぶりだからである。火付けは、まるでウサギのような俊足で、江戸の街を抜けていく。

「あいつ、速ええ！！ オレが追いつかねえなんてよ！！」

追いながら、思わずカツちゃんは叫んだ。

カツちゃんは、仲間内で「韋駄天勝」と渾名されるくらいの俊足を誇っているし、本人にもそのプライドはある。だけれど、離されはしないまでも、追いつくには至らない。な、何でえ、アイツは！？

カツちゃんは、半纏を脱いで、右手にぐるぐる巻きにした。もちろん、ヒラヒラする半纏が、走るに邪魔だからだ。そして、さらに

走る速度を上げていく。だが、それでもあの火付けに追いつけないのだ。

ちくしょう！！ 歯を噛みながら、カツちゃんは追いかけた。

どれだけ走ったろうか、長屋の密集地帯に差し掛かったころ、その火付けは長屋へ続く道を曲がっていった。

「や、野郎！！ まだ逃げるのか……だが、夜中だからな、逃げ場はないはず」カツちゃんは、思わずニヤツとほくそ笑んだ。

江戸時代、普通の都市では街の入り口に門があり、防犯上の理由から夜はその門を閉めるのが通例だ。大都市・江戸の場合は、ちょっと事情が違うのだが、それでも長屋の門は、夜は閉じられるのが決まりである。

カツちゃんがほくそ笑んだのは、長屋の密集地帯は、夜は戸が閉じられてしまい逃げ場がないからである。

「へっへ、袋のネズミとは、まさにこのことだな……」

しかも、火付けが逃げ込んだ道は、長屋の門が開いていなければ袋小路。追い詰めた。

カツちゃんは、ふう、と息を一つ吐くと、右手に巻いていた半纏をビシッと広げ、また着込んだ。そして、腰に手を当てて、道に入ってしまった。

そのさして大きくない道は、宵闇に沈んでいた。

昼間であれば物売りや職人が往来する道も、門が閉じられた夜になるとまるで活気がない。そんな道を、月に照らされカツちゃんが歩く。そんなカツちゃんを咎めるように、道の両側には、長屋の高い門が、口を閉じて鎮座している。

この道は、長屋を往来するための道なのだ。イメージとしては、分譲住宅地帯の小道を考えて頂ければいい。そういった小道は、道に沿うように、密集して分譲住宅が並んでいるだろう。今カツちゃんが歩く道は、その分譲住宅を長屋に置き換えたような光景だと思っただければいい。

だが、長屋は塀が高い。それに夜は門も閉じてしまうから、さな

がら高い塀に囲まれた一本道のような状況だ。何が言いたいのかと言え、この道には逃げ場がないのだ。

だからこそ、カツちゃんは余裕綽々で火付けを追っているのだが。

どこまで行っても、その火付けは見つからなかった。

「ど、どういふことであ……」

まったくの一本道。逃げ場はない。なのに、見当たらない。

「なんで……」

そう呟いたカツちゃんは、思わず辺りを見渡した。すると……。夜だというのに、戸を閉じていない長屋があるのを発見した。

「おいおい」カツちゃんは独り言を言った。「夜だつてのに、なんて無用心な。待てよ、まさか」

カツちゃんはその長屋の戸を、まるでおぞましいものでも見るかのように覗んだ。逃げ場のないはずの道に、一箇所逃げ場がある。てえことは……。カツちゃんは、一人胸を叩いた。

「ここに、火付けが隠れているかも、か」

そんな時だった。門の開いている長屋の中から、人影がこちらに向かってくる。思わず、カツちゃんは身構える。当然、火付けの可能性だつてあるからだ。だが、その人影は、いかにも呑気そうな声を出した。

「あれ？ 勝次殿？」

ああ？ カツちゃんは思わず首を傾げた。オレのことを本名で、しかも殿をつけて呼ぶやつは、江戸広しと言えども、一人しかいない。

「なんでえ、変の字か」

その人影は変迅堂であった。黒衣着流しを着て、両腕を組んでいた。

「勝次殿、こんな夜中になんでこんなところに？」

「それはこっちのセリフであ……」カツちゃんは語気荒く続けた。

「おめえ、なんでこんな所に……」

すると、変迅堂は変な顔をした。

「私がここにいちや不味いんですか？」

「ああ？」

半ば喧嘩腰なカツちゃんをよそに、変迅堂はどこまでも穏やかに言葉を返した。

「だって、ここは文人長屋。私の住む長屋ですよ？」

「へ？」カツちゃんは、変な顔をした。

「いや、だから」変迅堂は言った。「ここは文人長屋、私の住む長屋なんです」

しばし、沈黙。

その沈黙を破壊したのは、カツちゃんだった。

「おい、変の字、この長屋の出入り口って、ここだけか。それに、おめえ、さっきまでどこにいたんだ？」

「ハア？」と間拔けた声を出す変迅堂に重ねて訊くと、変迅堂は答えた。

「この長屋の出入り口はここだけです。さっき？ そうねえ、ずっと長屋の「らぼ」に籠って発明をしていたんだけど……、いやあ、その発明ってというのがまた秀逸でね、空気中の水気を結露させて……」

「んなことはどうでもいい！」変迅堂の発明自慢を訊く暇のないカツちゃんは、話を遮りつつ怒鳴った。「おい、変の字！ この戸を閉じて、見張ってる！！ だれも通すんじゃないぞー！！」

「は？ なんで……」

「だまってヤレー！！ この無粋者オー！！」

「は、はい……」

もちろん、カツちゃんがこんなことを命令したのには訳がある。この長屋に、火付けが逃げ込んだ可能性が高いからだ。変迅堂の話によれば、この長屋の出入り口は一つ。その門を変迅堂が守っている。となれば、今度こそ、火付けを追い詰めたことになる。

カツちゃんはさして広くはない長屋の小路を走り回った。長屋の

道は、やはり一本道。だが、どこにも火付けの影は無かった。それどころか、長屋の中の空家も全て改めたのに、火付けの影は無い。

「おかしいな……」カツちゃんはアゴをしゃくった。

「おい、変の字」門の方に戻り、門を閉じてその前に立っている変迅堂に訊いた。「本っ当に、この長屋の入り口は一つしかねえのか？」

すると、変迅堂は頷いた。「ええ。この一つだけです」

「むむむ……」カツちゃんは、腕を組んで唸った。

「か、勝次殿？」

変迅堂の問いかけにも答えず、カツちゃんは考え続ける。火付けはここに逃げ込んだに違いねえ。だが、その影が見当たらねえ。てえことは、まさか……、この長屋にいる人間が、火付けなのか？

カツちゃんは、変迅堂に訊いた。「オイ、変の字、さっき、変な物音を聞かなかったか？ 誰かが帰ってきたような気配とかよ、誰かが走ってきたような気配とか……」

変迅堂は頭を掻いて答えた。「ああ、ごめんよ。さっき話したとおり、私は「らぼ」に籠もって発明に没頭していたもので……、よくわからないんだ」

うむむ……。カツちゃんは、疑いのまなざしを以って、変迅堂の顔を眺めた。

第四話「サスペンス八百八町」【3】

「なあんだ、そんなんじゃない、先生が火付けじゃないかも知れないじゃない」

話を一通り聞いたちあきは、安心したような口調で呟いた。そんなちあきに少々イライラしつつ、カツちゃんは懐から二枚貝を取り出した。

「なに？ それ」

ちあきが訊くと、カツちゃんは二枚貝をおもむろに開いた。その貝の中には黒っぽい、粘性の強い液体が満たされていた。これは……？ ちあきがカツちゃんの顔を覗き込むと、カツちゃんは答えた。「これな、その火付けが撒いていた液体ものなんだ」

「こ、これが？」

カツちゃんは頷いてから続けた。「件の火付けを取り逃がした後、オレは火付けが火をつけようとした現場に戻った。それで、あの火付けが撒いていた液体を回収したんだ。これが……」

「ねえ、なんなの、これ？」ちあきは、黒い液体を指していった。

「ああ、町一番の物知り、光州屋の主人によるとだな……」

ちなみに、「光州屋」とは、変迅堂と組んで海水浴グッズを作った、あのアイデア店主である。変迅堂の発明という、めちゃくちゃ奇抜なものを売り出す店主だけに、やはり知識は豊富なのだ。

カツちゃんは、まじめな顔をして続けた。「……これは、臭水なんだそうだ」

「く、くそうず？」

どこかで訊いたことあるな、とちあきはぼけ〜と頭の中のメモリーをさらいだす。

「あ？ ちあつちゃん、覚えてないのか？」

「え？ くそうず……？ 記憶に無いや！」

ちあきは、デコに指を立てつつ、満面の笑みで返した。

ハア。これ見よがしにため息を吐くと、カツちゃんは続けた。

「ちあつちゃんが言ってたじゃないか。先生が新しく作った発明すごいんだよ」ってよ」

あ、思い出した。ちあきは、数日前のカツちゃんとの会話を思い出した。

変迅堂と海に行った次の日、ちあきはたまたまカツちゃんと会った。そして、ものすごく足早に変迅堂と行った九十九里の話をしたのである。無論、まったく面白くないカツちゃんではあったけれど、まるで天使のような笑顔を浮かべながら話すちあきを止めることが出来るほど、カツちゃんは意思が強くなかった。

ちあきは、その話の中で、こんな事を言った。

「あのね、先生だったら、とんでもない発明したんだよ。くそうず、っていう油を使って走る車なんだ！！ そんな車に、先生と二人で乗ったんだ！！ すっごい速いし、すっごい涼しいの！！ あと…
…あ、なんでもない」

先生の胸にもたれかかった話をしようとしたちあきだったけれど、さすがにそれは余計な誤解を与えるからやめておこう、と考え直すちあきだった。

しかし、余計な誤解などするまでもなく、カツちゃんは奥歯を全力で噛み潰していた。ヤロウ！！！ せつかくのオレの計画を、そんな妙ちくりんな車で破壊しやがって…と。変迅堂たちが九十九里浜に出かけているとき、間が悪いことにカツちゃんはちあきを見世物小屋に誘いに行った。その時の空振りの虚しさ、変迅堂へのジェラシーと、その他もろもろの感情を以ってこの話を訊いていたおかげで、カツちゃんはこの会話を記憶していたのである。恐るべし、男のジェラシー。

「思い出したか」カツちゃんは、得心したように頷くちあきに訊いた。

「うん」

「さて、本題はこれからだ」カツちゃんは臭水を卓に置いて、続け

た。「確かに、「文人長屋に犯人が逃げ込んで、しかもその犯人が見当たらなかつた」ってだけなら、変の字が火付けじゃないかもしれない。でもな、「火付けが使つてた油が臭水だった」となつてくると、事情が変わつてくる」

「え？　なんで？」

「これも、光州屋に聞いたんだけどもな」カツちゃんは、椅子の4つある足を、二つ宙に浮かしながらキコキコと漕いで続けた。まるで、小学生みたいですね。「臭水、つていうのは、簡単に手に入らないものらしい。日本広しと言えども、採れるところは少ないらしい」

臭水というのは石油のことだ、というのはどこかで説明したと思う。

現代でもそうだけれど、石油、というのは採掘が難しい。というのも、石油というのは人間なんかまだ影も形もないほどの昔に、微生物の死骸が積もり、油のように変化した物質だから、地下深くにしか存在しないのだ。土木技術が発展途上だった当時、石油の採掘はほぼ不可能だったと言っても言い過ぎではない。

けれど、世に湧き水や天然温泉があるように、石油がコンコンと地表に湧き出る地点はある。仮に、当時の人間が石油の有用性に気づきそれを活用しようとするのなら、そういう石油湧出点の石油を利用するしかない。だけれど、天然温泉が珍しいように、天然の石油湧出点だつてかなり珍しいのだ。

「とにかくだ」椅子をギコギコ漕ぎながら、腕を組んでカツちゃんは続けた。「そんな珍しいものを持つている変の字。そんな珍しいものを以って火をつけようとする火付け。その二人が、同一人物と考えることは、別に突飛でもなんでもねえだろ」

「そりゃそうだけど……」ちあきは口を尖らせて反論した。「でも、そんな足の付きやすいもので火をつけるなんて、そんなこと、いくら無粋者の先生でもしないって」

は。カツちゃんは鼻で笑った。

「何がおかしいの!？」

ちあきが机を叩いた。店に居る客たちが、またもやちあきたちの席を凝視する。

これ、別れ話か何かだと周りに誤解されちゃいけないよな……、と心の中で余計な心配をする自分自身に苦笑いしながらカツちゃんは続けた。

「確かに、そんな足の付きやすいもので火をつける理由はわかんねえが」カツちゃんは、キリツとした眼で店の天井を眺めながら、間延びした口調で続けた。「とにかく分かっていることは、火付けの“得物”が臭水で、変の字も同じく臭水を持つてる、つまり、一番疑わしい人間だ、ってことさ」

「……」ちあきは、黙ってしまった。

「……おい、ちあつちゃ」ここまで声が出かかったカツちゃんだったが、言葉が出なかった。

それは、ちあきあまりに悲しそうな顔をしていたからだ。まるで、イヤな奴の所に嫁ぐのと、父親の死が同時にやってきたような顔だ。……いや、別に、カツちゃんもそこまで不幸な人間は見たことはないけれど、ちあきの顔はそんな形容をしたくなるほどに沈んでいた。

むむむ……。 「惚れた女の子の悲しい顔」っていうのは、男にちよつとした後ろめたさを与えるものである。それが、自分が原因でそんな顔をさせたのならなおのことだ。

むむ、何とか慰めなくては……。 そう思ったカツちゃんは、心にもないことをたどとどしく言った。

「ま、まあ、だからって、変の字が犯人、って決まったわけじゃないけどな」

ふん！ ちあきは首を横に振ったまま、吐き捨てるように、恨み言を吐いた。

「……先生が犯人だ、って、さっき言ってるように聞こえたよ」

むむむ……。 、へソ曲げちゃったか。これじゃあ、例の件を頼めね

えじゃねえかよ……。カツちゃんは、あちゃー、と心の中で頭を抱えた。でも、実は一方でふう、と安心から出るため息を吐くカツちゃん。そのココロは、「ちあっちゃん、これを機に、変の字のことを嫌いになってはくれないだろうか」という、あさどい、けれど恋する男の子として当然の感情であった。

そんなカツちゃんをよその、ちあきは、首を横にねじったまま、考えた。先生、どっちにしる疑われてるんだ……。でも、あの人がそんな火付けなんかするはずも無い。

なら。

不意に、ちあきの目に力がこもり始めた。なにか、「やってやるぞー！」と言わんばかりの闘志を秘めた目。そんなちあきの目は、天井を眺めて安堵のため息を吐くカツちゃんを捉えた。

そんな、ジトーっとして又メ又メした、青白い霊波動のようなちあきの視線に気付いたカツちゃんは、ちあきの顔を見返して、またため息を吐いた。今度のため息は、安堵のものではなく、「あゝあ、やっちまった」っていう、普通のため息だった。

「で？ あたしは、何をすればいいわけ？ あたしに、小鞠屋名物・冷製汁粉をご馳走してまでさせたかったことがあるのよね？ ね？ ! ねエ?!?!?!」

後半に行くにつれ、どんどん語気が荒くなっていくちあき。

背後に鬼のようなものが浮かんで見えるほどに、ちあきは燃えている。そんなちあきに抗弁する術は、本来なら何者も持ち合わせないのだけれど、カツちゃんは勇気を振り絞って抗弁した。というか、ごまかした。

「ぴ〜ぴび〜 (口笛の音) え、何の話？ 全然覚えてないや……」
不意に、ちあきの腕がカツちゃんの襟に伸びた。そして、襟首を鷲掴みにすると、目を光らせながらちあきは続けた。

「だ、か、ら。アタシに、なにかさせることがあったんでしょ？」
優しい口調。けれど、行動がまるで優しくない。ぎりぎりと、カツちゃんの襟首を締め上げるちあき。なんだか、体が持ち上がった

いるような感覚に襲われるカツちゃん。さすが、江戸一の喧嘩師・春吉の娘、ちあきである。……そんな称号、いらないけども。

後に、カツちゃんはこのときの出来事をこう語ることになる。

「あのとき、確かに鬼が現れた」と。

殺される！ そう思ったカツちゃんは、思わず叫んだ。

「わかった！ 話すから、その手を離して！！」

ちあきは、まるで世紀末覇者のような形相のまま、カツちゃんの襟首を掴む手を離れた。もはや、中腰姿勢のまま宙に持ち上げられていたカツちゃんだったけれど、すっと椅子に腰を下ろした。いや、むしろ落ちた。

第四話「サスペンス八百八町」【4】

「へえ、で？ あたしになにを頼むつもりだったのよ、言っただけよ。分かってると思うけれど、嘘付いたら……」

ちあきは、卓に正拳突きを食らわせた。メキヤ。なんと、卓が割れ、ガラガラと崩れた。その拍子に、汁粉が宙を舞い、なんとおあつらえ向きにも、カツちゃんの頭に降りかかった。なんというか……、しつちやかめつちやか、てんてこ舞いですね。

「こつだからね？」

小悪魔のように、舌をぺろっと出して、かわいく宣言するちあき。相変わらず、言葉は優しいが、行動がまるで優しくない。さすが、ちあきである。どういう意味の「さすが」なのかはわからないけれども。

「は、はい、話します……」

汁粉が髪の毛に沁みこんでいく感覚を、気持ち悪く思いながらも、真つ二つに割れて床に転がる卓のようにはなりたくないカツちゃんは、首を縦にフルフル振った。

「よろしい、言っただけよ」

「ええとね……実は」まるで、悪さをした子供のようなしおらしさを見せつつ、カツちゃんは続けた。「ちあつちゃん、変の字と親しいだろ？ だから、何気なく変の字に探りを入れて欲しかったんだがよオ……」

やつぱりか。ちあきは思った。きっと、こんなことだろうとは思ったんだよね。そうちあきは心の中でうんうん、と唸った。

「あだし、やるよ」

「……あ、うん、お願い……します」この期に及んではこの話を断つて欲しかった（さらに言えば、この件で、ちあきが変迅堂と疎遠になって欲しかった）カツちゃんだったけれど、ちあきの岩をも砕くんではないかしら、という正拳を前に、首を横に振れるわけがな

い。そもそも、この話をちあきにとってきたのはカツちゃんなのだ。本音はともかく、建前上、カツちゃんがこの話を断る理由はないのだ。

「うお〜！ やるぞ〜！」燃えるちあき。

もちろん、ちあきがこの誘いに乗ったのには、理由がある。

それは、「変迅堂に探りを入れる」ためではもちろんない。むしろ、「変迅堂の苦境を助けるため」なのだ。つまりところ、あたしが、先生の無実を証明してやるんだから、ってなわけだ。

「それじゃ、あたし、もう行かなきゃ」

「え？ どこに？」頓狂な声でカツちゃんが聞き返すと、ちあきは答えた。

「決まってるでしょ、先生のところによ！！ 善は急げ、って言うでしょ？」

「ええ？ もう？」

バツと立ち上がり、今にも外に駆け出しそうなちあきにかつちゃんが引きとめようとすると、ちあきは言った。

「そもそも先生に探りを入れさせようとしたのは、カツちゃんの方でしょ！？ もう行くね！」

そう言つと、ちあきは外に向かって走り出した。小袖姿だということ、とんでもなく器用に走り出すのを、カツちゃんは目で追う。

そして、ちあきが出口に差し掛かったとき、一瞬振り返ってカツちゃんに言葉をかけた。カツちゃんの位置から見れば、ちあきは逆光なので、まるでちあきが光背を背負っているようにも見えた。

「冷製汁粉、ありがと。おいしかったよ」

その笑顔は、まさに天女のそれだったそうなの。

それだけ言い残すと、ちあきはまた踵を返し、光に溢れる江戸の雑踏に消えていった。

それを目で見送るカツちゃんは、ちあきの「ありがと」という言葉は何度も何度も噛みしめながら、「惚れた男の弱みだよなあ……」と半ば諦めのモノローグを浮かべていた。やっぱり、しょうがない

んである。やっぱり男の子ってものは、惚れた女の子の笑顔には弱いのだ。それを武器に世を渡る女の子も多いけれど、ちあきはその「武器」の有用性にも気付かず、使っている。それがまた、小悪魔のようで、イイ！のだ。女性諸君、覚えておいて欲しい。男って結構単純、ありていに言えばバカの一種なのだ。

一人甘味処に残されたカツちゃん。さすがに馬鹿馬鹿しくなり、席を立つ。そして、ちあきの置いていった手ぬぐいと、臭水の入った二枚貝を拾い上げ、帰ろうとした。だが。

「お客さん、困りますねえ」甘味処・小鞠屋の店主が、奥から出てきた。

「は？　なんでえ？　汁粉の代金ならもう払ってあるはずだけでも？」

当時、大抵の飲食店では料金先払い制を採っていた。それは、もちろん食い逃げが多かったこととも無縁ではない。とにかく、江戸のそんな飲食店事情に違わず、甘味処・小鞠屋も料金先払い制を採っていた。だから、店主は、食べ終わって、席を立とうとする客、つまりはカツちゃんにはまったく用がないはずなのである。

店主は、頭を掻きつつ言った。

「本来ならそうなんですけれどね。ちよつとあれは……」そう言つて、店主はある1点を指した。

「え？　なんで……」

店主の指すほうを見て、思わずカツちゃんは顔を手で覆った。そうだった、そついや、ちあつちゃん……。

「困るんですよね」店主は苦虫を噛み潰したような顔をして続けた。「騒ぐ、暴れる、あまつさえ、井と卓を壊すなんて、ねえ。困るんですよ、ここは甘味処、娘さんがたくさんいらっしやるお店なんですよ。こんなお店で、こんな暴れ方されちゃあ困るんです」

店主とカツちゃんの視線は、ある1点を見つめていた。それは、ちあきが騒ぎ、暴れ、遂には井と卓を破壊して、それらの残骸が転がる、そんな1点であった。

「でも、あれはそのアンタの店にたくさん来店する“娘”の犯行なんですけど」とは言い返すわけには行かず、ただただ頭を下げるカツちゃん。

「しょうがないですね」店主は、ハア、とため息をついてから呆れるように言った。「今回は大目に見て、井の弁償だけしてもらいますからね」

「はい……で、いかほど？」

店主は、口をカツちゃんの耳に当てた。

「は？ そんなに？」店主の提示した額は、大体豪華な食事一食分くらいの額であった。

「当たり前ですよ」店主は続けた。「陶器なんですから。それに、お客様に出す井が、修理物、つてわけにはいかないでしょう？」

当時、陶器はかなり高価なものであったから、漆などの接着剤を用いて修理する業者が居た。だが、そういう器は家用のものにしか使えない。

それはそつだ、とカツちゃんは妙に納得したけれど、いくらなんでもその額は高いだろ、という反発があるのも事実だ。だけれど、さすがに弁償の代金を値切るのは野暮もいいところだし、第一かつこ悪い。

「払います……」

結局、カツちゃんは店主の言い値を支払うことにした。ハア、今日の夕飯は抜きだな、とか薄ぼんやりと考えながら、カツちゃんは財布の長い紐を緩めたのだった。

第四話「サスペンス八百八町」【5】

2

「ああ、ちあき殿、よく来たね」

この日の午後、ちあきは変迅堂の家にお邪魔した。いつもの如く、ゴミ屋敷か、つてくらいにガラクタ、もとい発明品が散乱している長屋に通されたちあきは、座布団の上に座った。変迅堂は、お湯を沸かしつつ、ぼやいた。

「いやあ、長介さん、今日はやけに機嫌が悪くてね、参っちゃった」
「そ、そうなんだ……」

変迅堂の出したお茶とお菓子（今日は落雁である）にも手を出さず、ちあきはじつと、いや、じつと、いやいや、じつとと変迅堂の顔を眺めている。ちなみに、落雁、というのは、小麦粉や砂糖などを混ぜ、型に入れ、焼くなり乾燥させるなりして作るお菓子で、差し詰め「和風クッキー」といった趣のお菓子である。

そんなちあきの視線に気付かず、変迅堂は世間話を続けた。

「いやあ、こここのところ暑いねえ。やっぱり、夏はこうでなくちゃね」

「……う、うん」

変迅堂の言うこと言うことに、うんうんと相槌を打つだけのちあき。普段だったら、あまのじゃくのちあきのこと、「そうでもないんじゃない？」とか噛み付くのがパターンだ。けれど、今日はそれが無い。

さすがに、無粋者の変迅堂でも、ちあきのそんな不自然さには気付いた。

「ちあき殿？ どうしたの？ 元気ないなあ。普段だったら、お菓子とかお茶とかバクバク食べたり飲んだりするのに」別の不自然さで気付く変迅堂であった。

「んんん？ お、お菓子？ おおおお茶？！ ななななに言ってるのよ、先生！！」明らかに不自然なちあきは、落雁を、カツちやんの襟首を掴む要領で鷲掴みにすると、一気に口に放り込んだ。「ほふあね！！ たべまふつてふふあん！！」

当然、落雁を目いっぱい頬張る羽目になったちあきが、正確な発音など出来るはずもない。ちなみに今は、「ほらね！！ 食べまくってるじゃん！！」とでも言いたかったのだろう。

「あのう……ちあき殿？」

「ふあみふお……ごほつごほ！！！」

当然、そんな頬張った状態で言葉を接ぎ続ければ、そりゃいつかはムセるといふものである。それに、頬張っているものが、ボソボソと粉っぽい「落雁」だったのも、喉を詰まらせる大きな要因だろう。ちあきは、顔を真っ赤にして、胸をトントン叩いている。

「ああ！ そんなに頬張るから！！ ほら、お茶お茶！！！」

変迅堂は、横に置いてあったお茶をちあきに差し出した。ちあきはそのお碗を受け取ると、一気にその中身を飲み干した。

「ぷっはあ！！ ああ、あともう少して、落雁でドザ衛門になるところだったよ！」ちあきは、ニコツと微笑んて言った。

「落雁でドザ衛門」って……」変迅堂は頬を掻いた。「そのココロは、“落雁で息ができない”ってところかな？」

「ご推察通り！」ちあきは、これでもかかってくらいに爽やかな笑顔を覗かせた。

「でさ、ちあき殿……？」変迅堂は、一息ついてから、気になっていたことを訊いた。「なにか、あった？ なんだかさつきから様子がおかしいよ」

「えええええ？ そんなわけないじゃない！！！」

必死に否定するちあき。ていうか、言えるわけがないのだ。「あなた、火付けの嫌疑が掛かってますよ」なんて。そして「あたし、そんな嫌疑の掛かってるあなたを見張るためにここに居るの」なんて。

変迅堂は、眼鏡を中指で持ち上げて、疑いのまなざしをちあきに向けた。

「あのう、そろそろ付き合いも長いんだから、さすがに今日のちあき殿が変だ、って事くらいは分かるよ？　まるで、私に何か隠し事でもあるんじゃないか、って感じの不自然さだね」

……うん、ご名答。

おのれ……無粋者の癖に、こういう勘だけは鋭いんだから……。ちあきは憎憎しげに唸る。けれど、どんなに疑われようと、人に力技、と揶揄されようと、もうゴリ押ししかない。

「なんでもないの！！　これ以上変なことを言つと……」ちあきが最後に頼つたのは己の腕力だった。要は、正拳で床をぶち抜いたのである。「こうだからね？」

口調は可愛いが、行動が凶悪。つうか鬼。そんなちあき、それ以上質問を接ぐことが出来る者などいようはずも無い。変迅堂は、唾を呑み、これ以上ちあき殿の異状について突つ込むのを止めようと、心に決めるのだった。そして、「ちあき殿が帰ったら、とりあえず壊された床を直さなくちゃ……」とちあきのぶち抜いた床を眺めて、ため息を吐いた。

「そ、そういえばさ」ちあきは、言葉に固さが残るまま、変迅堂に訊いた。「イナバ君、元気？」

イナバ君、とは、変迅堂が作ったバイクで、これで九十九里浜まで行きましたね。

「ああ、イナバ君？」変迅堂は続けた。「「らば」に置いてあるよ？　なんなら見る？　こつちおいで」

変迅堂は立ち上がると、「らば」室に入っていった。ちあきは、黙ってそれに続く。そのとき、ちあきの足に何か硬いものが当たり、床を滑って、ちあきがさつき床をぶち抜いた穴に落ちただけけれど、それにちあきは気づかなかった。

「らば」の中は、以前見たときよりは整理されているとはいえ、やはりくず鉄や黒いススのようなもので汚れていた。うん、やつ

ぱりなあ、とちあきは嘆息した。

「ええとね」変迅堂は、「らば」の中の多くを占める、すたれ簾のかけられた物体を指した。「これがイナバ君だよ。今、ちよっと改造中なんだ」

「か、改造？」

ちあきが訊くと、変迅堂は答えた。

「うん。ちあき殿は知ってると思うけど、イナバ君、うるさい音をバンバン出すからね」

ああ。ちあきは、変迅堂に寄りかかりながら聴いた、ヴオンヴオンと耳に残る音を思い出していた。

「あれはさ、車輪を回す推進装置がさ、臭水を爆発させる形式だから不味いんだ。でも、臭水は、どんな油よりもよく燃えるからね」
「はあ、なるほど、火付けが臭水を使うのは、「燃えやすい」からなのか。ちあきが少し合点がいったが、やはり謎が残るのも事実だった。どうして、かの火付けはそんな足のつきやすいもので火をつけたのだろう、という疑問。」

変迅堂は続けた。

「臭水は使わざるを得ない。かといって、臭水を使うと音がうるさい。そんなわけで悩んだんだけど……、排気口に、消音装置をつけることにしたんだ」

「しょ、消音装置？」

「うん。これ」

変迅堂は、鉄くずの山から、金属製の筒を取り出した。

「これがね、音、つまりは空気の波をかき消す役割をするんだ」

「うん、どういふことかは分からないけど」ちあきは続けた。「とにかく、それを使えば、静かになるのね？」

「そう！」

「へえ……、そんな筒でねえ」

妙に黒光りする、消音機なる筒を眺め、ちあきは呟いた。こんなもので、本当に音を消せるのかしら、とばかりに。まあ、発明、と

いうものは、素人からしたら「え？ そんなしょぼいもので、そんな効果が挙げられるの！？」というものも多い。けれど、そんなものなのだ。というか、出る発明出る発明仰々しい発明だったら、現代の家庭はものものしく動く機械に囲まれてしまっただろう。

ちあきは、遂に本題を切り出した。

「そういえばさ、先生、臭水、ってどういうものなの？」

そう。ちあきは、変迅堂の口から、臭水について聞いたかったのだ。いや、正確には、「臭水」と聞いて、変迅堂がどういう反応をするのかを見たかったのだ。もし、本当に変迅堂が例の火付けだとしたら、犯行に使われたもの話を振られて、心中穏やかではいられないだろうし、それが心の外に出かねない。いや、無粋者の変迅堂のこと、もし犯人だったら取り乱すに違いない。

だが、そんな取り乱したような様子も見せず、変迅堂は答えた。

「臭水？ ちあき殿、そんなものに興味あるの？ 臭水、っていうのは、ものすごい勢いで燃える油でね、イナバ君の場合、その爆風を、車輪を回す力に転換してるんだけどね。どうやら、よく採れる越後の方だと、油を買えない貧乏な農家の人たちが、灯明油の代わりに使っているみたいだね」

「そんな燃える油を？」

「うん、そのせいで」変迅堂に、ちょっと暗い影が差した。「そんな臭水のせいで、かの地方だと火事が絶えないらしいよ」

「か、火事？」

ちあきは思わずギクツとしたけれど、変迅堂には悟られなかったようだ。変迅堂は続けた。

「うん。そんな危ない油でも、貧乏な人たちはそんな危険な油を使うしかないらしいんだ。……私は、時折、江戸というところは恵まれません。と思うことがあるよ」

「え？ 何が？」

ちあきが訊くと、変迅堂はさびしそうな口調で答えた。

「江戸ってさ、灯明油なんてあって当たり前。米だって、白米食べ

て当たり前。でも、農村のほうに目をやれば、臭水を灯明油の代わりにせざるを得ない。雑穀を食べて生活せねばならない。白米なんて、祭りのときしか食べられない。農村なら、それが普通なんだ。だから、江戸に居るとダメなんだ」

まるで、何かに絶望したかのように言葉を重なる変迅堂。けれど、ちあきには変迅堂の言うことが、判らなかつた。

「意味分らないよ」

ちあきは、ちゃきちゃきの江戸っ子。だから、江戸の外の世界を知らない。だからこそ、ちあきには判らないのだ。

けれど変迅堂は、首を横に振ってから、元の朗らかな笑顔に戻つた。

「あつはつは、なんでもない。気にしないで。……ええと、臭水の話だっけ？」

強引に、話の方向を元に戻した変迅堂。けれど、ちあきとしても訊きたいのはそっちなので、あえてその話の方向転換に文句はつけない。

「ていうか、実物あるよ？」変迅堂はしれつと言つてのけた。

「え？ あるの?!」

頓狂な声を上げるちあきに、変迅堂は苦笑いを浮かべた。

「そりゃそうでしょ？ イナバ君は臭水で走っているんだから、あるに決まってるじゃないか」

第四話「サスペンス八百八町」【6】

「み、見せて見せて!!」

「うん、ちよつと待って。……ええと……ここに……あつたあつた」
変迅堂は「らば」の中にある棚をかき回していたけれど、そこからスイカくらいの大きさの壺を取り出した。その胴には、「火気厳禁・区僧都」と書かれた張り紙がされていた。

「これが、臭水？」

ちあきが手を伸ばそうとすると、変迅堂はひょいっとその壺をちあきの手から離した。

「なによ! 見せてくれないの？」

ちあきが訊くと、変迅堂は困った顔をして続けた。

「いや、臭水は火気厳禁なの。だから、こんな暑いところでは……」
変迅堂は、夏だというのに閉め切った「らば」の暑さに辟易しながら続けた。「開けられないんだ」

「じゃあ、どこで開ければいいのよ」

「隣の部屋、いや、庭なら……」

「じゃ、行きましょ」

二人は、またもや隣の部屋、つまり変迅堂の生活スペースへと戻ってきた。当然、臭水が入っているという壺を開けるためである。

例のツボを持つ変迅堂は、庭に出た。「ちあき殿、こつちこつち」

ちあきは変な顔をした。「先生、なんで庭なんかで? 部屋の中のほうが涼しくてよくない？」

「いや、だめなんだ」変迅堂は続けた。「部屋の中に、どんな火気があるかわからないから。庭の方が、まだ安全なんだ。臭水っていうのは、それだけ危ないものなんだよ」

「しょうがないなあ」

ちあきは、土間から自分の履物を持ってきて、庭に下りた。

「さて、開けるよ!」

既に地面に据えられている壺に、変迅堂は手をかけた。そして、蓋を右に回す。ただ、螺旋が刻まれているわけでもないから、きつとしっかり密閉されているため、蓋を回さないことには開かないのだろう。それが証拠に、蓋が離れた瞬間、「スポン！」と卒業証書の筒の蓋を外すような音が響いた。……ま、当時、「卒業証書の筒なんて無かったから、その音を聞いて一体ちあきたちが何を連想したかは分からないけども。

「ふう、開いた」

変迅堂は、蓋を壺に立てかけた。

「ほら、ちあき殿、これが臭水だよ」

変迅堂に促されるまま、ちあきはその壺を覗き込む。この中に、あの黒々とした、どろっとした液体が……と、カツちゃんに見せられた臭水を思い出しながら、その壺を覗き込んだ。

「あれ？」

ちあきは、思わず素っ頓狂な声を上げた。

「ん？ どうしたの？ ちあき殿？」

そんな声に変迅堂が言葉を返すと、ちあきは言った。

「ねえ、先生、これ、本当に臭水なの？」

「え、うん」変迅堂は、満面の笑みで頷いた。

「でも……」ちあきは壺の中身を指した。「これ、無色透明じゃない！」

壺の中には、太陽光を反射しながら輝く、粘性なんてほとんどなさそうな、無色透明な液体が湛えられていた。もし、これを甕の中に貯めておいたら、水と間違えて飲んでしまう人が居るんじゃないか、と思ってしまうほどに見た目は水とよく似ていた。

「臭水って、黒くてもっとどろどろしてるんじゃないの？」

すると、変迅堂は、「驚いた！」と言わんばかりの顔をして、不思議そうに訊く。「え？ なんでちあき殿、臭水の元の状態を知っているんだい？ ……これは、臭水の精製品なんだ」

そう言って、変迅堂はこの臭水について教えてくれた。

変迅堂の話を要約すればこうである。

臭水の原液は、たしかにちあきの言うとおり黒くてドロドロした液体なのだ。でも、その原液の状態だと、どうにも燃焼が安定しないので、燃え出す温度ごとに、その原液を分解して用いている。そして、この臭水は空气中に漏れ出す性質を持つ、最も厄介な、「精製臭水」だというのだ。

「んじゃあどうして」ちあきは語気を荒くして訊いた。「そんな“厄介な”ものを作って、それでイナバ君を走らせる飼料にしてるのよ!」

すると、変迅堂は手を振って反論した。「いやいや。この“精製臭水”を作ったのは私じゃないんだ。……越後の縮緬問屋ちりめんどんやのご隠居で、“区僧都”って号してるおじいさんがいるんだけどね。その人立派な人でね、「臭水」から灯明用の安全な油を作れば、安く、しかも安全に灯明油が行渡る」って考えたらしい。そこで、その人、臭水から灯明油を作る研究を始めたんだって。その研究のさなかに偶然発見されたのが、この「変迅堂は、壺を指した。「精製臭水”なんだ”

「ふん

ちあきは、分かったような分からないような顔をしている。

変迅堂は続けた。

「実は、そのご隠居と私は知り合いでね、時々、この油を送ってもらってるんだ。「アンタなら、この油の使い道、思い浮かぶだろ?」ってさ。それで発明したのが、イナバ君、つてわけ」

なるほど、順序が逆だったのだ。イナバ君の飼料として危険な“精製臭水”を選んだわけじゃなく、そんな危険な“精製臭水”の使い道の一つとして、イナバ君が作られた、というわけなのだ。

変迅堂は、きしししと笑ってから続けた。「いやあ、開発が大変だったよ、イナバ君。そもそも、物が燃える力を運動の力に換える、っていうのが至難だったからね。それに、あの臭水、燃えやすいからもう大変で大変で」

「先生！！」これから長いウンチクを垂れそんな変迅堂を、ちあきの大音声が制した。

「……んん？ 何だい？ ちあき殿、そんな大声出して」

「ごめん、でもさ、先生」ちあきは効いた。「先生は、臭水の原液を持ってないの？」

変迅堂は、首を縦に振った。「うん。全く持ってないよ」

「ホント？ ホントにホント！？」ちあきは、変迅堂にすぎるようにして訊く。

「う、うん」そんなちあきにちょっと辟易しつつも、変迅堂は答えた。「さつき話したと思うけれど、臭水の原液って安定して燃えないんだ。だから、イナバ君みたいに精密なものには使えないし、灯明油にも使えない。使えるとしても、例えば焚き火でもするときを使うことが出来る程度かな」

「は？ 焚き火？」ちあきは首をかしげた。

「つまりは」変迅堂は言った。「すべてのものを灰になるまで燃やし尽くす、そういう焚き火みたいな目的でしか使えるものじゃないんだ」

すべてのものを灰になるまで……、ちあきは、そんな厄介極まらない油で火を付ける、件の火付けの本性のようなものを垣間見たような気分になって、少し背筋が寒くなるのだった。

「さて、閉じるよ」

そう言つて、変迅堂が“精製臭水”の蓋を閉じた頃、文人長屋に、招かれざる客がやって来ていただけけれど、それに気付く者は無かった。

その招かれざる客は、一切の言葉も発せず手だけで部下たちに命令を下す。そして、瞬く間に文人長屋の各所に、その部下たちが配置された。

招かれざる客は、配置を眺め得心するように頷くと、配置から洩れた部下を引き連れ、変迅堂の長屋の前に立った。

一方、その部屋の中では、変迅堂が“精製臭水”の入った壺を片

付けていた。

「でも、ちあき殿も、案外博識なんだね」

「何よう！ 悪い!?」

変迅堂が、壺を収め終えてそんな会話をしているころ、招かれざる客は、行動を開始した。

「あゝ、変迅堂さんはいらっしやるか？」

異様なほどに抑揚の無い声。たぶん、昂ぶる感情を抑えようとした結果こうなったのだろう。とにかく、聞く相手に不快感と、警戒心を与えるそんな声だった。

「だ、誰だろう……私に用なんて」

「あからさまに怪しい声だね……誰かしら」

ちあきと変迅堂は、二人して顔を見合わせた。

「変迅堂さん？ いらっしやるのだろう!?」

ちよつと語尾を荒くさせて、招かれざる客は言葉を重ねた。いかに怪しい声とは言えど、客は客なので、変迅堂は答えた。

「はいはい！ 居りますよ。少々お待ちを！」

変迅堂は土間に下り、外に続く戸を開けた。

「あなたが、変迅堂さん、ですね」

戸を開けた先には、年のころ20歳くらいの男が立っていた。

武家鬘を結っているし、刀を二本差しているから、きつと禄を食む侍なのだろう。身なりも割と洗練されたもので、黒の羽織にねずみ色の着流し、といったいでたちだ。そんな格好であるにも関わらず、どうにもしつくりとこない。この男がまだ若いこともあって、服に噛み合っていないのだ。

その男の後ろには、男と同じ格好をした侍が3〜4人。そして、さらにその後ろには町人風の男が続く。正直、一番前にいる若侍より、後ろに控える侍たちのほうが、はるかに威圧感を有していた。

「は、はい。私に変迅堂ですが……」

変迅堂が、侍の大群に少しおびえながらも答えると、若侍は驚いたような顔をして言った。

「へえ、あなたが変迅堂か。意外に、若いんだな」

「いや、お侍様も人のこと言えないんじゃない」

変迅堂はしれつと言つてのけた。その変迅堂の言葉に若侍の後ろに控える侍たちが明らかに殺気立った。あ、やばいかも……。と変迅堂は後悔したが、ありがたいことに、その若侍が後ろの侍たちを目で制してくれたおかげで助かった。

第四話「サスペンス八百八町」【7】

「ところで」変迅堂は、若侍に訊いた。「あなた様はいつたいどういった方で？ それに、私に何か御用でしょうか？ 別に私、お侍様に恨みを買われる覚えもありませんし、こつやつて大挙して詰め掛けられるようなことをした覚えはないんですが……」

すると、若侍は懐に手をつっ込んだ。

「ああ、我々は、こつというものだ」

若侍は、懐から十手をちらりと出して見せた。だが、その十手は、螺鈿細工が綺麗な、とても実用には供しようもなさそうなものだった。

変迅堂は、不意にまじめな顔になって訊いた。

「北の方ですか？ それとも、南の方ですか？」

若侍は答えた。「南、だ」

変迅堂は頭を掻いた。そして、さらに訊いた。「では、南町奉行所の与力様が、私に何の御用ですか」

そこに口を挟んだのは、ちあきだった。「え！？ な、なんで先生、このお侍様が、与力様だつて分かるの？」

「当然さ」変迅堂は続けた。「あんな、華奢で酔狂な十手を持つてお侍様が、同心様のわけないでしょう？」

「なるほど！」ちあきは手を叩いた。

当時、街の治安あるいは訴訟は、「町奉行所」という役所が守っていた。江戸の場合はさらに特殊で、北町奉行所と南町奉行所の二つで江戸の治安を守っていた。

与力、というのは、そういう役所の役職名で、平の役職である同心を纏める役目を負っている。現代で言えば、会社の課長のポストに当たる役職であろう。

今でもそうだが、課長職のポストにある人間は、そんなに外回りをしていないものだ。外回りをする部下たちのバックアップをしたり、

あるいは指示を下したり、アドバイスを授けたりする。それが、平社員を纏める役職の人間の仕事なのだから。

無論、与力もそうだ。平の同心を使い捜査を進め、犯人の検挙に全力を尽くす。その捜査の「頭」を勤めるのが与力の役目なのだ。だから、本来与力はこうやって出張ってきたりはしない。出張してくるとするならば、それは、捜査が最終段階に進んでいるか、とんでもなく大きな大捕物かのどちらかである。

その若い与力は言った。

「変迅堂さん、ご同道願いたい」

「は？」あまりのことに、変迅堂は聞き返してしまった。

「だから」与力は、もう一度言った。「変迅堂さん、ご同道願いたい」

「イヤだと言ったら？」

変迅堂は、冗談っぽく言った。すると、与力はまじめな顔で、きっぱりと言った。

「力づくで、連れて行くのみ」そんな与力の言葉に同調するように、与力の後ろに控える侍（きつと同心）たちが凄みを利かせている。

「はあ、なるほど」アゴに指を添えながら、変迅堂は言った。「どうやら、私は、なにか重要な犯罪の容疑者だということですね？与力様」

ちあきは、思わずどきつとした。もしかして、それって……。

与力は、答えた。

「その通りだ。変迅堂さん。実は、あなたには、火付けの嫌疑が掛かっている。で、あるからには、南町奉行所としても、あなたを放っておくわけにはいかないのだ」

「ひ、火付け!？」

変迅堂は、初めて驚いたような声を出した。

「そそそそ、そんな大それたこと、私がするわけないでしょう!？」変迅堂は、初めて余裕のない口ぶりを見せた。

「そうだよ! 先生が、そんなことするわけないじゃん!!」ちあ

きも変迅堂を援護する。

けれど、与力は固い表情をまったく崩さずに、困ったような口調で続けた。

「ああ、申し訳ないが、某はあなたがどんな人間か知らない。それに……」

「それに？」

変迅堂の代わりに、ちあきが訊いた。

その与力は続けた。「実は今日、南町奉行所に投げ文があつてな
投げ文、とは、文章を書いた紙で石をくるみ、それを目的の場所に投げる行為、または石を包んだ文章のことである。あえてここで、注釈を加えるのはわけがある。

当時、正式な文書ならば、どんな立場の人間であれ町奉行所に出すことができたのである。しかし、そういう正式なルートが無視して寄越される書簡、それが投げ文なのだ。それはつまり、なんらかの事情で正規のルートから出すことの出来ない情報を、誰かがなんらかの強い意志でもって寄越した手紙だということなのだ。

「な、投げ文には、なんと？」変迅堂が恐る恐る訊くと、与力は答えた。

「ああ、詳しい内容は言えないが、あなたが火付けの犯人だと示唆するものだった」

一瞬、冷たい風が、変迅堂の横をすり抜けた。

しばし、沈黙。

この沈黙を、与力の後ろに控える同心の一人が壊した。「あの、
仁杉殿ひとすぎ、そろそろ」

それに、与力が応じた。「ああ、そうでしたね」

……この与力、仁杉さん、って言うのか。珍しい苗字だなあ。と、
変迅堂およびちあきはふと思うのだった。

仁杉与力は、変迅堂に言った。

「ご同道ください、変迅堂さん。……それに」

「それに？」ちあきが訊くと、仁杉与力は答えた。

「この拿捕は、あくまで“念のため”の拿捕だ。……我々とて、何の証拠もなく、火付けに決め付けたりはしない。ただ、あまりに真に迫った投げ文だったもので、こちらとしても無視できなかつたもので。……ご協力ください」

字面の上では丁寧かつ下手なだけけれど、どうにも仁杉与力の言葉には、聞く相手にイヤと言わせない強制力が見え隠れする。一言で言えば、不快な物言いだつた。

「……はい、分かりました」変迅堂は言った。「嫌疑がかかつているのなら、しょうがないですね。ご同道しましょう」

「そうですね」妙な笑顔を浮かべてから、仁杉与力が振り返ると、部下に大声で命じた。「よし！二人は変迅堂さんを確保！残り証拠を押収しろ！！」

「はい！」という、同心たちの声がしたかと思うと、同心たちは変迅堂の長屋に強制突入してきた。まるで雪崩のように狭い入り口に殺到する同心たち。その一番前の二人が変迅堂の体を、乱暴に取り押さえに掛かつた。変迅堂は、なすすべもなく虜になった。

それを合図にしたかのように、他の同心たちが、部屋を物色し始めた。

「どういうことよ！！　いくら町奉行の与力様とは言え、やることがエゲツないわよ！！」

ちあきは、その場に立ち尽くしたまま、仁杉与力を悪し様に非難した。すると、仁杉与力は笑つた。

「ちよつとこちらも、事情があるものでな」

「何よ！　事情つて！」

「町人の、小娘風情に話す義理はない」さっきまでの下手な口調から、掌をかえしたような、冷たく、人を見下すような口調、そして言葉だつた。

「仁杉殿！！」同心の一人が、突然声を上げた。

「どうしました、辻村さん」

辻村、と呼ばれた件の同心は続けた。「こんなものを発見しまし

た！」

同心の辻村の手には、火縄銃のような、というか、火縄銃そのままの物体が握られていた。それを見て、仁杉与力はニヤツと歪むような笑みを浮かべてから、変迅堂の方に振り返り、イヤミったらしく言った。

「いやあ、変迅堂さん、いくらなんでも、火縄銃はまずいんじゃないですかねえ。叛乱を計画していると疑われてもしょうがないんじゃないですか？」

実は、仁杉与力が狙っていたのは、この件での立件だった。

「最近、火縄銃のようなものを持って町を歩く、学者風の男が居る」という情報が、南町奉行所に集まっていたのだ。他の与力は、「この平和な時代に、江戸市中で、火縄銃を持ち歩くオトコオ？」

そんなこと、あるわけねえだろ」と、まるで相手にしなかったのだが、仁杉与力はこの情報にある程度の真実味を感じ、独自に捜査しているうち、街の発明家、変迅堂に行き着いたのである。しかし、証拠が無かった。確かに、変迅堂は銃のようなものを、「光州屋」とかいう商家に持ち込んだところは目撃したのだが、刀袋のようなものに包んだ状態で運んでいたこともあり、手が出せずにいたのだ。

そんな頃、渡りに船とばかりに、今日の昼過ぎに、投げ文があった。それは、「変迅堂が、こここのところの火付け騒ぎの犯人で、それが証拠に、あいつは犯行に使われた臭水を持っている」といった程度の投げ文だったが、かねてより変迅堂に探りを入れていた仁杉与力としては、本当にありがたい渡りに船だった。

確かに、こここのところ江戸を騒がせている火付けは、どうやら臭水を使っている。だが、この情報は、情報提供者の火消し連中のほかに、知るものは犯人と、捜査に当たる町奉行所の人間しか居ないでは、なぜ、この投げ文を寄越した人物が、「火付けが臭水を使って火をつけている」ことを知っているのか、という謎は残るのだけれど、叛乱を計画しているかも知れない変迅堂を「別件逮捕」出来

る、そのことで頭がいっぱいな仁杉与力は、そこまで頭が回らなかつたのである。

「まあ」仁杉与力は、びしっと指を、変迅堂に向けてから続けた。

「この件についても、こつてりと油を絞らせて頂きますよ、変迅堂さん！」

しかし、変迅堂もちあきも、はあ、とため息を吐いた。

だって、その「火縄銃」って、水鉄砲なのだから。光州屋さんに頼まれて作った海水浴グッズ、その一つに、異様にリアル志向な水鉄砲があったけれど、それを、仁杉与力は本物だと誤解しているのである。

第四話「サスペンス八百八町」【8】

「あ、あのう、あの銃はですね……」

水鉄砲であることを説明しようとする変迅堂。だが、そんな変迅堂に聴く耳持たず、仁杉与力は言った。

「まだ言わなくていいですよ。話は」仁杉与力は、ニヒルな笑みを浮かべつつ、続けた。「……南町奉行所で聞こうか」

ははは、こりゃ、訊いてくれそうもないな。変迅堂は、心の中で、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「にしても」仁杉与力はだるそうな声を絞り出しつつ、極彩色の鳥がいつぱいに広がる構図の扇を取り出した。「暑いな」

「当たり前ですよ」両肩を同心に固められた変迅堂は言った。「だって、夏ですから」

「そうじゃないでしょう」仁杉与力は部屋を見渡して呟いた。「この部屋、ごちゃごちゃとガラクタが多いから、見た目にも暑いんですよ」

ガラクタ……。己の発明を「ガラクタ」呼ばわりされた変迅堂は、肩を落とした。

だが、そんな仁杉与力の言葉に、ちあきは噛み付いた。

「何言ってるのよ!!! ここにあるのは、ガラクタなんかじゃない!!! ここにあるのは……」ちあきは、ありったけの力を込めて怒鳴った。「先生の、発明品なの!!! ガラクタに見えても、先生の発明品なの!!!」

「……ち、ちあき殿」

肩を落としていた変迅堂は、ちあきの顔を覗き込んだ。今にも泣き出さんばかりのちあきの顔を。

「ふん、まあいい」仁杉与力は、アゴをしゃくった。「どんなガラクタでも、証拠になるかも知れない。持ち帰るぞ!!!」

「ああ!!! またガラクタ言ったな!!! このサンピン!!!」ちあ

きは、思わず啖呵を切ってしまった。

サンピン、というのは、武士に対する蔑称である。もっとも下級の武士が、三両一人扶持さんりょういちにんぶちの禄（今で言う給料）で生活していたことから、三両一人扶持を縮めて「三一」となり、言いやすく「サンピン」と呼び習わされることになった。

もちろん、与力である仁杉が、まさか三両一人扶持なんてポツキリな禄で働いているわけではない。本来は、下級武士の癖にしばらくらすヤツに対して使う言葉だったのだけれど、そのうち意味が変わってゆき、武士全般をからかう際に使う言葉になったのである。

けれど、怒り出したのは仁杉ではなく、むしろその部下の同心たちだった。

「これ、小娘！！ 与力様になんてことを！！」

そう言つて、与力がちあきに掴みかかろうとした、ちょうどその時だった。

「おい！！」

まるで、雷鳴のようにズバンと響く、しかも、ものすごい怒りを孕んだ声。皆、思わず声がしたほうを振り返った。皆の視線は、声を発した本人、二人の同心に脇を固められた変迅堂に集まった。

変迅堂は一息つくと、静かに穏やかに、しかし、怒気をはらませた声で、続けた。「ちあき殿に手を出すな。ちあき殿は、火付けの件に関係なければ、その銃にも関係ないだろう」

仁杉与力は、アゴの冷や汗を手で拭いた。そして、畏れの色を隠さずに言った。「ははは、そ、そうですね、分かりました。……才
イ」

仁杉が目で、ちあきを掴もうとした同心を制すと、その同心は、ちあきと距離をとり、ちあきに一礼した。

「フン！」ちあきは、そんな同心の礼を無視した。

「とにかく」仁杉与力は、変迅堂の前に立ち、続けた。「火縄銃が発見された以上、このまま放っておくわけにはいきませんよ。ここにあるものうち、めばしいものは全て押収します」

「そうですか」変迅堂は、何の抑揚も込めずに返した。

「じゃあ、変迅堂さん、一足先に行きましょか。南町奉行所へ」
仁杉与力は、変迅堂の脇を固める同心に命令して、変迅堂をその場から引つ立てた。

「せ、先生!!」

ちあきは、思わず変迅堂を追いかけようとするのだけれど、それを、同心たちが阻んだ。

「ちょ、どきなさいよ!!」

ちあきが叫ぶ前で、仁杉与力は言った。

「さて、証拠をすべて押収するんだ。急げ!!」

まだ叫びっぱなしのちあきに、仁杉与力はボソッと言った。

「……彼は、君と恋仲なのかな？」

「ななな、何言ってるのよ!! そんなわけないじゃない!!」

ちあきは、「恋仲」という言葉で恥ずかしさがいっぱいになりながらも、なんとか言葉を返した。

「それは良かった」仁杉与力は言った。

「何だよ!!」

良いわけないじゃない。あたしは先生と恋仲になりたいの!!
と心の中で反発するちあき。だが、仁杉与力は、そんなちあきのモノローグを見事に破壊することを言っただけだ。

「あの変迅堂。彼は死ぬからだ」

「どういう意味よ」

仁杉与力は、続けた。

「まったく、彼は恐ろしい人間です。……奥の部屋で、こんなものを見つけてました」

仁杉与力の手には、尺玉のようなものが握られていた。「某には、これが何かはわからないが、きつと火薬の塊でしょう。そんなものを、長屋で密造するとは……。とんでもないヤツだ。その技量は、感嘆に値するものだろう。だが、そんなことは与力である某には関係の無い話。某からしたら、“一介の町人が、こんな危険な、叛乱

にも使えるものを密造している”という事実、これが見過ごせない。それに、もしかしたらあの男、本当に叛乱を企てているのかも知れない。そんな人間を、この江戸に置いておくのは危険だな」

仁杉与力の目は、正義感溢れた、まさに奉行所役人のそれだった。「だから、殺すって言うの!? 罪も無い、変迅堂先生を?!」

ちあきは、仁杉与力に掴みかからんばかりの勢いで叫んだ。そんなちあきとは対照的に、仁杉与力は冷たく言い放った。

「ああいう人間は、存在するだけで罪だ。世の平和をかき乱す可能性のあるものを作りうる可能性がある人間。もはや、それだけで罪と呼びうる」

「でも」ちあきは言った。「先生は、叛乱を企てるような人じゃないもん!」

思わず、ちあきは仁杉与力の襟に掴みかからんとした。だが、そんなちあきの手を難なくかわし、仁杉与力は続けた。

「さつきも言ったと思いますが、某は、変迅堂が、叛乱を企てるような人間であるか否かは知らない。某が問題にしているのは、あくまであの男が危険なものを多数所持し、密造している事実なのだから」

仁杉与力はもはやちあきを見てはいなかった。虚空を眺めている仁杉は、ぼそつと一言呟いた。

「あの男は、必ず獄門送りにしてやる」
そんな仁杉与力の言葉に、ちあきは嫌悪を覚えた。

だが、誤解してはいけない。仁杉与力の言葉は、変迅堂に対する私怨から出たものではないことに。仁杉の今の言葉は、正義感によるものなのだ。

江戸を騒がす者は悪。悪は排除する。そういう、融通の利かない「正義感」。

けれど、「正義感」とて、すべての人間をあまねく照らす概念ではないのだ。もし納得がいかないなら太陽を想像すればいい。全天で一番の大きさと、影響力を持つ太陽とて、必ずどこかに影を残す。

地表すべてをあまなく照らせるわけではない。

正義感とてそれは同じ。多くの人を救う概念の「正義感」だけでなく、すべての人間を救い取れるものではないのだ。事実、その「正義感」は、変迅堂の自由を奪い、命をも奪おうとしている。

だけれど、ちあきから見れば、仁杉与力の言葉を、認められるはずもない。

「ふざけないでよ！ 先生を獄門送りになんか絶対にさせないからね！！」

そう、今にも殴りかからんばかりの剣幕で、ちあきは叫んだ。

「ふん、やれるものならやるがいい。しかし」仁杉は、猛禽のように目を剥いて、それでも始終穏やかに言った。「江戸八百八町・100万の命を守る某、人に恨まれようが、戦う」

この頃には、変迅堂の部屋から色々のものが運び出されて、結構閑散とした光景になっていた。

「これで全部か！？」

仁杉が部下たちに大声で訊くと、部下の同心の一人が手を上げた。

「あのう……？」

「なんですか、佐々木さん」仁杉が訊くと、佐々木同心は答えた。

「あのう、あそこの茶箆筥、開かないんです」

「どういうことですか？」

「ああ、どうも……」佐々木同心は続けた。「鍵が掛かっていて開かないんです」

仁杉は頭を掻いた。「別に、律儀に鍵を開けようとしなくても、蹴破つてしまえばいいでしょう？」仁杉は、木目が目立つ茶箆筥に目を遣った。

「ダメなんです」

「え？」

「それが……」佐々木同心は恨めしそうに茶箆筥を睨んで続けた。

「どうも、鉄でも裏打ちされてるようで……、どうにも要領を得ないんです。どうしたものでしょう？」

仁杉の目が、途端に厳しいものになった。

「たかが茶筍筍に、鍵に鉄で裏打ち……？　もしかしたら、なにが見られちゃ不味いものでも入っているのかもしれないね。……だけれか、鍵職人を呼んできてください」

第四話「サスペンス八百八町」【9】

すると、同心の後ろに居た町人風の男が外に走っていった。きつと、あれは同心が私的に雇っている部下、つまりは岡っ引きなのだろう。

すぐに、岡っ引きは鍵屋を連れてきた。そして、仁杉与力はすぐに件の茶箆笥の鍵を開けさせたのだけれど、どうにも時間を食ってしまった。鍵職人が言うには、「こんな鍵、見たことねえよ。……え？ 何がだ、って？ ここまで細かい仕事をしてる鍵なんざ、見たことねえ、って言ったんでえ。……まあ、作れないほどのものじやねえけどもよ、ここまで細かい仕事となると、それこそ一月くらい掛からなきゃ出来ねえよ。それこそ、大名様とか、將軍様のご献上の品でもない、ここまで手間かけて作る気にはならねえな」とのこと。

ちあきも、その様子をただただ見守っていた。まさか、この中に変迅堂が叛乱を起こす証拠がある、とは思っていない。ちあきはむしろ、変迅堂のことを知りたい、ただそう思ったのだ。ちあきは、変迅堂の大事なものが入っているだろう、茶箆笥の一番下の棚を、まるで変迅堂の心の中を覗くかのような後ろめたさと興味を以って見つめ続けた。

だが、そんな茶箆笥の鍵も、一刻ほど掛けて、ようやく開いた。さつきまで太陽は斜め四十五度くらいで輝いていたはずが、もうほとんど地面とすれあうほどにまでに落ちていた。

「へへ、開きました」鍵職人が誇らしそうにそう言うと、仁杉は「ご苦労。こちらが謝礼の金子だ」と職人に紙に包まれた金子を渡した。職人は、中身も確認しないうちに、不満な顔を見せた。そりゃそうだ。2時間もかけた仕事に、「ご苦労」の言葉だけじゃ、どんなにお金を貰っても納得できるものではない。

だが、そんな人間の感情の機微を図るには、まだまだ仁杉与力は

大人になりきってはいないのだろう。

さて、仁杉与力は部下に命じ、茶箆筥の一番下を開かせた。

茶箆筥の一番下の棚には、刀袋が二つ入っていた。

「なんだ、これは。……中身を確認しましょう」

部下に刀袋を開かせると、当然のことのように、刀が入っていた。

一方の刀は定寸（平均の長さ）のもの。もう一方の刀袋には定寸の1/3くらいの刀、つまり脇差が入っていた。拵（刀の外装）から見て、そんないい刀ではないらしい。よく、下級武士が差している、みすばらしい拵だった。

「ほう、刀……」仁杉与力は少し唸った。

「いかがしますか？ 抜いて、中身を改めますか」同心は仁杉に訊いた。

刀、というものは、江戸時代、かなりありふれたものだった。というのも、当時、武士は二本差が許されていたことは言うまでもなく、町人として、脇差程度の刀を一本差すことは認められていたからである。

発明家の変迅堂のこと、もしかしたら、刀に偽装した何かである可能性も、ありえない話ではないのだ。

けれど、仁杉は言った。

「……他人の刀を抜くときには、持ち主の許可を得るのが不文律。

それに、武士の魂を押収するなどもつての外。元に戻しましょう」

「良いんですか」若い同心・佐々木が訊くと、仁杉は答えた。

「……ええ。構いません。変迅堂を有罪にするだけの材料は、もう揃ったでしょう。さ、元に戻してください」

仁杉がそう命令を下すと、同心たちは刀をまた元のように戻した。その作業を見守るちあきに、仁杉与力はまるで値踏みでもするように訊いた。「へえ、変迅堂さん、二本差しの武士だったんですね」

変迅堂がかつて二本差の侍だったなんて、ちあきも初耳だった。

きくと、ちあきはぼくとした顔をしていたのだろう。仁杉は続けた。

「あなた、変迅堂さんのこと、なにも知らないんですね」

そう吐き捨てる、仁杉与力は大音声で叫んだ。

「さあ！ 引き上げましょう！」

同心たちは、荷物を持って長屋から出て行った。

ちあきは、誰も居ない、ガランとした変迅堂の長屋の真ん中で、ぼおつと突っ立っていた。けれど、そのうち立つことさえ億劫になったかのように、その場に座り込んでしまった。そして、がらんとした部屋の静寂を埋めるようにして、嗚咽をもらした。最初は忍ぶように泣いていたちあきだったけれど、やがて涙が双眸から、次から次へとあふれ出て止まらない。そんな自分がいやになって、さらに涙があふれ出た。

夜の空気を孕む冷たい風が、子供のように泣くちあきの髪を撫でた。

第四話「サスペンス八百八町」【9】（後書き）

一身上の都合によりまして、ちょっと（約1週間）連載をストップさせていただきます。

「明日は晴れるだろ」を楽しみにされている皆様、ぶっちゃけどうでもいいや、と内心思っている皆様、ダメダメな文章を書いているじゃねえよ、と内心思っている皆様、お見捨てないように、切にお願いいたします。

多分、金曜か土曜には連載を再開しますので……………。

第四話「サスペンス八百八町」【10】（前書き）

ええと、久し振りに更新になります。お待たせいたしました。

第四話「サスペンス八百八町」【10】

3

ちあきが家に帰ると、春吉とお冬が待っていた。

「こんな夜遅くまでどこをほっつき歩いて……ち、ちあき!？」

「どどど、どうしたんでえ!！」

お冬と春吉は、ちあきの顔を見て、口々に声をかけた。いつものちあきは目を腫らせ、というか、目に涙を溜めて鼻水を垂らしたたまま、家に戻ってきたからだ。さすがに、日が暮れてから、目を腫らして娘が帰れば、どんな親でもこういう反応をするだろう。

……現代の親だって、きつとそうだろうけど。

ちあきは、しゃくりあげながら、今日あったことを二人に話した。

「え？ あの無粋者が、お奉行所に引っ立てられちゃった、って？

！ ななな、何で!！」

「あらあらまあ……大変ねえ」

それこそわが身のことに驚く春吉と、さして驚きもなく、むしろ他人事な反応を見せるお冬が、ちあきの前で見事なコントラストを見せた。

お冬は、あくまで他人事の姿勢を崩さずに続けた。「あらあらまあまあ、一体なんで引っ立てられたんだい？」

ちあきは、涙を腕でごしごし拭いながら答えた。「……最近江戸に出没する、火付けに疑われて……」

すると、お冬は鬼の首でも取ったように、がっはっはと笑いながら言った。

「ほらね、お母の言った通りでしょ！ あの人、やっぱりそういう人だったんだよ！ だからあの人とアンタが会うの、快く思ってたかったんだよ！ がっはっは!！」

そう、まるで怪獣のように豪快に笑うと、お冬は土間に下り、夕

食の支度を始めた。

ちあきは、ペタンと板張りの床に座り、さつきまで止まっていたいや、さつきまで何とかして瞳の辺りに留めていた涙を流した。頬を、生ぬるい水が流れていく感覚が、またいっそうちあきの心に小波を立たせる。結局、ちあきは顔を両手で覆って、ワンワンと泣くのだった。

一方、その横に居る春吉は、キセルの端をガリガリと遣りながらちあきの様子を横目で伺う。ちあきの家は今、お冬のトントンという包丁の音と、ちあきのワンワン泣く声、そして春吉のキセルをガリガリやる音が混じりあい、不協和音に満たされていた。

不意に、春吉はフウ、とため息を吐き、キセルをキセル箱に置いた。コトツという音を最後に、不協和音は協和音に変わった。つまり、ちあきの泣き声と、お冬の包丁の音が、見事に協和音だった、ということだ。つまり、裏を返せば、春吉のガリガリという音が、他の二人の音の調和を乱していた、ということなんだけども。

春吉は、開いた戸の外を見た。外は、もう真っ暗だ。

春吉は視線を動かさないまま、けれどどこかちあきのことを見遣りながら、ボソツと言った。

「お前は、何で泣いてるんでえ？」

「え？」

泣いていたちあきは、春吉の言葉が聞こえなかったので、顔を覆っている手を離して、もう一度言うように促した。

「だからよ」春吉は、もう一度言った。「なんで、お前は泣いてるんでえ？」

だって……ちあきは思った。そして、思ったことをそのまま口にした。

「……だって、先生が奉行所に連れてかれたんだもん」

すると、春吉は、不思議そうな声を出した。

「なんでそんな事で泣くんんでえ」

「……！ そんな事で、つてー！！」

そう言つて、掴みかかろうとするちあきに春吉は言葉を返した。

「だつてよ、お前の力で、変迅堂の無実を証明すりゃいいだろうがよ。あいつは、そんなことをするタマじゃない、っていうのは、お前が一番良く知ってるんだらう？ なら……」

それはその通りだ。でも……。

そんなちあきに構わず、春吉は続けた。

「いかに奉行所、つて言つてもよ、間違いはあらあな。その間違いを、お前の力で糺せばいいじゃねえか。泣いてるヒマがあったらよ。確かにそれもその通りだ。ていうか、それはちあきにも分かっている。でも、なんでだろう、涙が止まらないのだ。なんで、なんで？ なんであたしは涙が止まらないの？

キョトンとした顔で、それでも涙が頬を伝うちあき。それを、春吉は、怒るでもなく慰めるでもなく、ただただ見つめる春吉。

春吉は諭すように続けた。

「なあ、ちあき。お前が泣いているのは、変迅堂が捕まったからじゃねえんだろ？」

え？ ちあきは、ココロを直接掴まれたような衝撃を受けた。

春吉は、カラカラと笑つてから続けた。

「お前は昔からそうなんだよなあ」

「え？」

ちあきが訊くと、春吉は手持ち無沙汰なのか、またキセルを手に取り、手の中できくるくると弄ぶ^{もてあそ}。そして、ちあきの方に、父親らしい、優しい目を向けてから、続けた。

「お前よオ、子供の頃からそうだったよ。確か、お前、子供の頃、なんだっけか、あのゴボウみてえで、顔もはつきりしねえで、んで意気地もねえあの……」

「カツちゃんでしょ」

ちあきにはすぐ分かった。春吉が、ここまで人を悪し様に評するのは一人しか、つまりカツちゃんしかいないのだ。

「そうそう。ええと、負けちゃんだつたっけか？」

「だから。カツちゃんだつてば。……わざと？」

「ああ、まあ、あのヤロウと喧嘩したことあつたる」

「あつたつけ？ そんなこと」

……いやいや、客観的に見て、二人はしょっちゅう喧嘩しているような気がします……。

春吉は、まるで御伽噺でも話すかのように続けた。

「お前、覚えてねえのか？ まあ、子供の頃だったからしょうがないわな。……確か、今日みたいな暑い日だったな、お前は、泣きながら帰ってきた。どうした、って訊いたら、お前は“お父につくつてもらったおもちゃが壊れちゃった”って言う。そついうもんだから、オレはお前の右手にあつた、壊れたおもちゃを受け取つて、直したんだ。でもな……」

「でも？」 ちあきは、そんな春吉の顔を覗き込みながら話を訊いた。「お前は、泣き止まなかつたんだ」 春吉は、懐かしそうな顔を浮かべている。「ほれ、おもちゃを直したじゃねえか、って言つても、お前はワンワン泣くばかりだった。だからよ、オレも、さすがに変に思つてよ、お前に聞いたつけな」

「え？ 何て？」

「……お前、まだ思い出さねえのか。まあいい。オレはな、“お前、おもちゃが壊れたから泣いてるわけじゃねえんだな”って訊いたんだよ」

「そしたら？」

ちあきは、まるで御伽噺おとぎばなしの筋をせつつ子供のように、先を聞きながら話した。ただし、子供と違うのは、ちあきが目を腫らしている、という点である。春吉は、そんなちあきのリクエストに応えるように、話を進めた。

「そしたらよ、お前、もじもじしながら言つたんだよ。“カツちゃん、と喧嘩したのが哀しい”ってよ。だからオレは……」

春吉は遠い目をしながら続けた。「あいつの親に了承取つて、あいつを半殺しにして、お前に謝らせたんだ」

「う、嘘……」げんなりと訊くちあき。

「ホント」このときの、春吉の笑顔は値1000両なんじゃないかしら、っていう位、まっすぐで、朗らかな笑顔だった。

春吉は続けた。「いやあ、今にして思えば、大人げなかったとは思ってるけどもよ、確かあの時、アイツに海老反り極めたんだよなあ……。こう、ヤツの両手を後ろから持ってよ、んで、足でヤツの腰を蹴り上げて……。こうグニグニと」身振り手振りを交えながら、やけに嬉しそうに語る春吉。

「いや、カツちゃんを苛めた話はこの際どうでもいいからさ」ちあきはげんなりしつつも手を横に振る。

「……。あ？ そうかい？ これから面白くなるっていうのによ」春吉は、残念そうな表情を隠さずに続けた。「ま、とにかくだ、お前はいつも、本音を口に出さないんだな。結構本音を言ってるようで、結局一番肝心なことはまるで言わねえ。いつも、本音を隠す、もつともらしい理由で、手前の気持ちてめえを分かったつもりになっちゃう」「え？」

「お前はよ、何でかは知らねえけど、何で自分がこんな気持ちなのか、っていう理由を、見失いがちなんだな」

「どうすれば、分かるの？ あたしが、こんなに悲しい感じを感じている原因ってなんなの？」

すると、春吉は右手で回していたキセルをしっかりと握ると、ハツと鼻で笑った。

「なんで笑うのよ!!」

春吉は答えた。「馬鹿言っつてやがる、と思っつてよ。どうしてお前が哀しいのか、なんて、お前しか知らないんだ。オレに訊くなイ！」

「でも……」
困ったような顔を見せるちあき。その顔を見て、はあ、オレつてば、娘には弱いんだよなあ、と春吉は思いながら、そのヒントを言った。

「じゃあ、こう考える。“お前が泣き始めた瞬間”。その時に原因

がある。その時のことを、よく思い出さうとした」

そうぶっきらぼうに言うと、春吉は、足早にキセルにタバコを詰め火を付け、そっぽを向いて煙を吸い始めた。「もう話は終わりだ」
とでも言わんばかりの春吉の行動だったけど、ちあきは突き放された風には感じなかった。むしろ、一人にしてくれたのだ、とちあきは理解した。ちあきに、考えさせるために。

ちあきは、涙が溢れた瞬間を、必死に思い出そうとして、ゆっくりと目を閉じた。

第四話「サスペンス八百八町」【11】

あたしはいつ、泣き始めたんだろ……。ちあきは、必死に記憶の海から目的のものを浚いあげようとウンウンと唸った。そうだ、そういうえば。ちあきの心の海から、ある記憶が浚いだされた。

そうだ。あの時。

仁杉与力たち町奉行の人間が去って、一人になった瞬間。あのとき、あたしは泣き出したんだ。でも、なんで？ ちあきは、またもや心の海のサルベージを続ける。

そういうえば。ちあきの心から、また記憶が浚いだされた。

あの時、そう、泣き出したあの瞬間、あたしは悔しくてしようがなかった。でも、なんで？

ここまで思い出せば、後はもう楽だった。その「悔しい」という、当時の感覚が蘇るとともに、あの時の感情の機微をもありありと思い出していく。

そっか。あたしは、悔しかったんだ。先生のことを結局何も知らないことに。そして、そんなあたしに。

茶筍筥に入っていた二振りの刀。今まで先生の家に押しかけておきながら、あたしはまったく知らなかった。いや、それどころか、先生が、かつてはそんな刀を差す立場、つまり武士だったことも知らなかった。

それを、あの仁杉与力に指摘されたのが悔しかった。いや、むしろあの件で、まざまざと「自分がどれだけ先生のことを理解していないか」を見せつけられたのが辛かった。

そうだったんだ。

ちあきは、両目をしっかりと見開いた。

ちあきの眼前には、何かを煮ているお冬の姿と、相変わらず煙を吐き出す春吉の姿があった。

「お父」

ちあきは、そつぽを向く春吉の方に向き直って言った。

「ありがとう」

すると、春吉は、何も言わず、ただ煙を立てつつ、ニパッと笑って見せた。

「さて、夕飯できたよ!!」

お冬が、二人の前に食膳を持ってきた。今日の夕飯は、味噌汁と鰯らしい。

「おいおい、また鰯かよ……」

「文句言うなら、もつと稼いで来ておくれ!!」

「んだとオ!」

そんな両親の喧嘩の火花が散る横で、ちあきは心の中で決意を固めつつあった。

先生のことを、あたしはまだ理解していない。まだ、あの人のことを、あたしは何も知らない。でも、それでいいじゃないか。これから分かれればいいんだから。これから、どんどん理解していけばいいんだ。

だから。ちあきは心の中で続ける。これからも、ずっと先生のそばにいるためには、とにかくまずは、先生の無実を証明しなきゃ。

先生のことを、理解するために。

ちあきは、そう心に決めた。

「はあはあ、とにかく、飯食おうぜ」頬に引つかき傷をこさえながら、春吉は呟いた。

「ふん! 文句あるなら、食わなくてもいいんだよ!!」

一方、無傷のお冬は春吉にそう言い放った。

「まあまあ」そんな二人の間に立って、なんとか取り成そうとするちあき。

三人は、手を合わせた。そして、声をそろえた。「頂きます」

バクバクと夕飯を食べる春吉。春吉以上のスピードで、それこそグオオオオ! と音を立てるんじゃないかしら、というくらいに勢いよくご飯を吸い込んでいくお冬。そんな二人とは対照的にもぐも

ぐと、米の一粒一粒を噛みしめるように食べるちあき。

明日からは、また大変だ。朝から出かけなきゃ。

ちあきは、そう心に決めつつ、ご飯を飲み込み、お味噌汁を飲み下す。

ちあきの目には、もう涙は無かった。

そんなちあきの心の変化を好ましく思っているのか、ちあきの前に出された焼鰯は、口を開けて笑っていた。

第四話「サスペンス八百八町」【11】（後書き）

ようやく、「明日は晴れるだろ」、ユニークアクセスが10000を突破致しました。これもひとえに読者の皆様方のおかげでございます。心より御礼申し上げます。

第四話「サスペンス八百八町」【12】

4

次の日の朝、ちあきは文人長屋の門の前に立っていた。

変迅堂が犯人でないとすれば、火付はここに住んでいる人間の仕業だろう。そう思ったちあきは、この住人に話を聞こうと思いつたのだ。つまり、この長屋に居るだろう真犯人を捕らえることが出来れば、たとえ奉行所も変迅堂を捕らえたままには出来ないはずなのだ。

たとえそうじゃなくても、少なくとも変迅堂の無実を証明できればそれでいいのだ。

もちろん、変迅堂には、「危険物密造」の疑いもあるのだけれど、それは、すぐに無罪になるだろう。だって、先生は、とりあえず危険なものを造っていないはずだし……。ちあきは、とりあえず「危険物密造」の件は棚上げしよう、と丸投げを決め込んだのであった。

「ここに、真犯人が……」

ちあきは、文人長屋の門を、まるで地獄門でも眺めるように睨み付けた。先生、待っててね。必ず、疑いは解いてあげるから。そう、心の中で呟きながら。

そうやってちあきが文人長屋の前で、腰に手を当てて立っていると、門の中から男が一人出てきた。

それこそ見上げんばかりの大男。そして、筋骨隆々の、がっしりとした体型。これから何か肉体労働でもするのか、襷たすきを打って、ハチマキまでしている。おや？ 文人長屋に、こんな人がいるんだ、とちあきは心の中で驚いた。

その男は、ちあきに気づくと、声をかけてきた。

「おや？ どうしました？ この長屋に何か御用ですか？」

あんながっしりした体から出たとは思えないほど、礼儀正しく、

細めな声だった。でも、どうしたわけか声は大きい。

「あ、ああ……実はこの長屋の人たちに訊きたいことが」

ちあきが男の問いかけに気づき、男の方に振り向いた瞬間、男はちあきを指して、あわわわ、と心底驚いたような反応を見せた。

「あああああ、あなたは！！！」

「何よ？ あたしとあなたとは初対面のはずでしょ？」ちあきが訊くと、男は言葉を返した。

「ああああ、あなた、昨日、小鞠屋さんにいましたよね？」

「え？ ああ……居たけど？」

小鞠屋、とは、冷製汁粉を出すので有名な、甘味処である。昨日、カツちゃんに連れられて行ったけど……、なんでこの男が知ってるの？ とちあきは首を傾げた。

すると、男は震えた声で言った。

「だって、僕もいたんですから！ その小鞠屋に！」

「え？」

すると男は、ちあきへの畏れを隠さず、続けた。

「だって、小鞠屋で、あなた大暴れしてたじゃないですか！！ 卓を破壊したり連れの男の人をボコボコに殴りつけたり。評判ですよ、「暴力街娘」っていうんで」

あ……。そういえば……。ちあきは、カツちゃんを襟首掴んで持ち上げたことや、卓を見事二つに割ったことを思い出して苦笑いした。でも……ちあきは思わず叫んだ。

「あたしは、別に相方をボコボコにはしてないわよ！！！」

「うひゝ！ 怖いゝゝゝ！！！」

その男は巨体を丸めながら怯える。

そんな頃、こんな騒ぎを聞きつけたのか、長屋のほかの面々が顔を出した。

「……なにかありましたか？」

「おうおうおう！ こんな朝の早よから騒ぎやがって！！！」

出てきたのは、二人だった。

「それが……」巨体を丸めたままの大男は長屋から出てきた二人に助けを求めた。「ああ！ 写狂さんに半助さん！！ 助けてください！！ 殴りこみですよ！！」

「はあ！？」職人風の、半助と呼ばれた男は「殴りこみ」という言葉を読んで、ずいっと前に出た。「ほう、この泣く子も黙る文人長屋に殴りこみたあ、いい度胸してるじゃねえか……ってあり？」

半助は、かわいらしく佇むちあきの姿を見て、さつきからビビりっぱなしの大男に言った。

「おいおい、かわいいお嬢さんを指して、「殴りこみ」とはねえんじゃないか？」

すると、大男はそんな半助の言い分に反論した。

「だってこの女の人、昨日小鞠屋で暴れてた人なんですよ？！ わん！ 殺されるう！！」

「んつたくうるせえよ！！ タコ！！」
そんな二人に、もう一人の長屋の住人、写狂と呼ばれていた男が割って入った。

「まあまあ、小鞠屋で暴れてたって、ここで暴れるとは限らないんじゃない……」

けれど、そんな写狂の物言いは二人には聞こえないらしい。体が小さいこともあり、きつと写狂さんは目立他ないんだなあ……と、ちあきは一人得心した。

どうやら、写狂ではこの場を納められそうもない。さつきに輪をかけて、三人はギャーギャーと内輪で揉めている。しょうがないので、ちあきは叫んだ。

「こら！ 静かにしなさい！！ つつか、あたしを無視するなよ！！」

そんなちあきの叫びは、三人の作る喧騒を、ぱつと吹き飛ばした。三人は、ちあきの顔を見て固まり、まるで軍人の敬礼のときのように、シャキンと背筋を伸ばす。

「……ね、この人、すごい喝でしょ？」

「……ああ。式部、お前が殴りこみと勘違いするのも、しょうがねえかも……」

声を潜めながら小突きあう二人。そんな二人に、メンチを決めるちあき。この世のものとは思えないほどのメンチに、二人は息を呑んだ。

さて、と前置きしてからちあきは言った。「今日は、皆さんに聞きたいことがあってここまで来たの」

「へえ？ ……つつかよ、質問いいか？」

半助は、恐る恐るちあきに訊く。

「なによ」

「アンタ、そもそも誰だい？」

「え？ あたしは……」

不意に、思い出したように写狂が手を叩いた。

「ああ！ たしか、あなた、よく変迅堂さんの家にいらしていた、たしか変迅堂さんの恋人！！」

その瞬間、他の長屋の二人が一瞬固まったような表情を見せた。

まるで、地獄の淵でも覗き込んだ時のような、苦悶に溢れた、それでいて冷たい顔だった。それが、ちあきには印象的だった。ただ、二人はそんな顔を、すぐに追いやった。

そんな二人の表情が気になりながらも、ちあきは言った。

「ちちちちち、違うわよ！ あたしは、先生の……」

そういえば、あたしって。言葉を継ぎながら、ちあきはふと思った。あたしって、先生の何なんだろう？ 友達？ なんか違う。恋人？ まだ違う。むむむ……、ちあきは、言葉を継げずに一人固まる。

「……で？ その、変迅堂さんの恋人さんが、何の用でえ？ 変迅堂さんは……」半助は、口をへの字に曲げつつ、苦々しげに言った。

「昨日、火付けの嫌疑で捕まったぞ」

「ええ、知ってます」ちあきは心なしか下を向いて答えた。

「じゃあ、どうして、ここに……？」半助が訊くと、ちあきは答え

た。

「あたしは、どうしても先生が火付けをしたなんて信じられないんです。だから……」

「つまり」半助は、ハチマキの上から頭を掻きながら続けた。「変迅堂さんの、無実を証明しよう、ってか」

ちあきは、力強く頷いた。

「てえことは、お嬢さん」半助は、少し冷たい目をしてから訊いた。「お嬢さんは、この文人長屋の中に、火付けがいると思ってるのか」

いる、と思っっているちあきは、言葉が出なかった。

「おいおいお嬢さん、冗談じゃねえぞ」半助は続けた。「オレだって、変迅堂さんが犯人だとは、とてもじゃねえが思えねえ。変迅堂さんはたしかに変な人だけど、人に迷惑かけたりはしねえ人だっていうのは分かってるよ」

式部も写狂も、うんうんと頷いている。

半助は続けた。「でもな、それは変迅堂さんだけに限った話じゃない。文人長屋に住んでる皆が皆、そんな事をするとは到底思えねえんだ」

式部も写狂も、うんうん頷いている。

「頼むよ」半助は、まるで懇願するような口調で、言葉を継いだ。「この話で、嗅ぎまわるのはやめてくれないか。只でさえ、世間から、文人長屋への視線が厳しくなってるんだ。……確かに、アンタの気持ちは分かるよ。大事な人間が奉行所に引っ立てられて、その人を助けてやりたい、って気持ちは分かる。でもよ、アンタが動けば動くほど、オレたちの立場が無くなってくんだ」

ちあきは、不意に哀しい気持ちに襲われた

そんなちあきに、傷に塩でも塗りこむように、半助は続けた。

「あのな、オレたちは皆、結構評判命の商売でお飯食べてんだ。だからよ、あんまり変な噂を流して欲しくないんだよ。“火付けの疑いのあるヤツの恋人が、文人長屋を嗅ぎまわってる”なんて話が無くなってみな？ オレたち、ようやくありついた仕事、立場が無く

なっちまいかねないんだ」

式部も、写狂も、頷きこそはしなかったが、もし「自分の思いのままに感情を表現していいよ」と暗示をかけたら、きっと頷くだろうと思わせるに充分な、複雑な表情を見せていた。

第四話「サスペンス八百八町」【13】

「何よ」ちあきは、声を荒げた。もしそうでもしなければ、泣き声になつてしまつから、とにかく声を荒げたのだ。「自分の立場の方が、同じ長屋の仲間より大事なの?!」

「お嬢さん」

半助は、やけに優しい声で言葉を発した。だが、顔はいろんな感情を無理矢理かみ殺したような表情を見せていた。

「何よ!」

ちあきが喧嘩腰で訊くと、半助はいやに穏やかに言った。

「オレたちの立場、つてヤツはな、ようやく掴んだもんなんだ。それを、アンタ、否定できるのかよ」

「え?」

「例えばよ」半助は、式部を指した。「ここにいる式部。こんなガタイがいいが、こいつは絵師だ。だがな、こいつが絵師を名乗るまで、どんな苦勞を味わつたと思つてる? そして、どんな思いして絵師つていう立場を得ることが出来たと思つ?」

そう半助に言われた式部は、まじめな目で、ちあきを見つめた。

今も昔も、文化人、という商売は、なるのが大変な商売だ。そして、それ以上に、続けることが難しい。普通の勤め人とは違つ苦勞違つ生活。普通の生活を諦めた代償。それらは、きつと普通の生活をしている人間にはわからないものなのだ。

「んでよ」半助は続けた。「この文人長屋にいる連中は、変迅堂さん含め、みんなそう。式部は絵。写狂は書。変迅堂さんは発明品。そして俺は寿司。俺たちは、ようやく己の作つたものを、世に問えるような立場になれたんだ。俺たちがようやく手に入れたものに、アンタは無遠慮に横槍入れようとしてるんだよ」

「横槍を入れるつもりなんて……」

そんなちあきの言葉をさえぎるように、半助は続けた。

「わかってねえな。オレたちの商売は、人気商売、信用商売。式部は絵師。写狂は書道家。んでオレは寿司職人。皆がみんな、客の掌の上で成立する売手者なんだよ。そういう人間にとっちゃよ、自分の評判が下がるようなことは、できるだけ避けたいんだよ」

「そんな……」

ちあきは、下を向いた。けれど、すぐに半助に向き直った。ちあきのその目は、まるでぶれずに半助の顔を見つめ続ける。そのちあきの目を、半助は覗き込む。まるで、ちあきの心を、目を通して覗き込もうとするかのよう。

そんな沈黙が、しばし続いた。

「でもな」半助は、不意に言った。「一度だけ、つつうなら、嗅ぎまわってもいいぜ」

「？」事情が飲み込めないちあき。

「だから」半助は続けた。「俺たちだつて、変迅堂さんが犯人だとは思ってない。それに、変迅堂さんを助けたいとは思ってるんだ。だから。今日だけ、つつうなら、嗅ぎまわってもいいぜ、って言うてるんだ」

「へ？」まだまだ事情が掴めないちあき。

「だから」半助はイライラを隠さずに続けた。「今日だけ、つつうなら、ちよつと協力してやるよ、ってことだ！」

「ああ！」ちあきは、ようやく得心いつたらしく、手をポンと叩いた。でも、「え？ いいの？ 困るんじゃないの？」と、思わず訊く。

「しょうがねえだろ」半助は口元を緩めた。

「やった！ 話を聞ける！！ でも……ちあきは、浮かんだ疑問を、思い切って半助にぶつけた。

「どうして、あたしに、あんな話したの？」

「あ？ あんな話して？」今度は、半助の方が事情が飲み込めていない。

「あの、立場が云々、って話」

「ああ」半助は得心したのか、生返事のような声をあげた。「あれはな、アンタに覚悟を持つて欲しかったんだ。……いや、本音を言えば、あんまり嗅ぎまわって欲しくはないんだ。それこそ、興味本位とかでうるちよろされちゃ困るし、生半可な気持ちで嗅ぎまわられるのもな。だから、俺たちの立場云々の話をしたのさ。アンタがこの件を嗅ぎまわる、っていうのは、俺たち文人長屋の人間にとつては困ることだ、ってことを、知っておいて欲しかった。だが、アンタは多分、俺の言わんとしたことを、受け止めてくれた。アンタのそのまじめな目なら、大丈夫だろう。なら、こちらも協力してやらなくちゃな。変迅堂さんを助けてやりたいのは、皆一緒なんだ。だって、変迅堂さんは、大事なダチだしよ」

そう言つて、半助はニカツと笑った。

「ありがとう」ちあきは、思わず頭を下げた。

「礼はいい。……それより、みんな忙しいんでえ。早く、訊きたいことを話しな」

半助がぶつきらばうにそう言つと、文人長屋の他の二人は、うんうんと頷いた。

「何？ 4日前の夜、変迅堂さんがどこにいたか知りたい、つて？」
立ち話もなんだから、と、式部は自分の長屋に皆を通した。

式部の長屋は、変迅堂の部屋と比べれば、はるかに整理されていたけれど、なにか鼻に慣れない、草を煮詰めたような臭いが充満していた。「何？ この臭い」とちあきが聞くと、式部は「この臭いは、顔料の臭いですよ」と笑顔で説明してくれた。どうやら、半助の説明通り、式部は絵師らしく、机の上には絵の具を溶くのに使うのだらう絵皿と、描きかけの不動明王の絵が置かれていた。

半助は、首をかしげた。「4日前？」

ちあきは頷いた。「そう、4日前」

半助は頭を掻いた。「すまねえが、わからねえな。実はその日、不意にお金が入ったもんで、呑み歩いてたもんでな」

「え？　ひとりで？」

ちあきが訊くと、半助は笑って頷いた。

「ああ。酒ってよ、あんまり大人数で呑みたいもんじゃねえんだ。

……ま、アンタみたいなお子供に、酒の話なんかしてもしょうがないけどな」

多分五歳くらいしか年齢が変わらない半助に子供扱いされたあたりまであるが、ここで怒って話の方向を変えてしまうのもまずいので、うんうんと半助の言うことに頷くことにした。

「どこで呑んだの？」ちあきが訊くと、半助は頭を掻いた。

「ああ、まるで覚えてないんだ。……オレよ、酒は好きなんだが、どうにも弱くてよ。呑むと記憶が消し飛んじまうんだよなあ」

「それじゃあ」ちあきは嘆息した。「先生が、その日どこにいたか、なんてわからないわね」

「め、面目ない」半助は頭を下げた。

「そういう意味では」頭を下げる半助の横で、式部が声を上げた。

「僕もお役に立てないと思いますよ」

「どういうこと？」

ちあきが訊くと、式部はアゴに指を添わせながら言った。「4日前の夜ですよ？　確かあの日は……僕も外出していたはずですか

ら……」

「どこに？」

「どこに、と言われてしまうと困るんですが……、ちょっと風景画の勉強に河越の方に行ったもので……」

河越というのは、現代で言う埼玉の川越のことである。街並の美しさから、今も昔も「小江戸」とか呼ばれる、なかなか風情・情緒のある街である。

「だれかに会ったの？　河越で」

式部は、大きな手を横に振った。

「いえ、風景を写し取る練習をするために行ったものですから、だれに逢ったとかはなくて……。夕方まで河越に居りまして、それで

夜は野宿して、朝帰ってきたんですよ」

「のの、野宿!？」

ちあきが身を乗り出すと、式部は恥ずかしそうに巨体を丸めながら続けた。

「ええ。あんまりお金がないんですよ。旅籠は高いですし、かといつて夜を徹して江戸まで帰るのもキツイので、どうしても野宿せざるを得ませんでした」

「ってことは、あなたも先生があの日どこに居たかは知らないわね」「申し訳ないです……」

しゅんとする式部。そんな式部を軽くフォローしてから、ちあきは写狂の方に向き直った。

「さて……ええと、写狂さん？ 4日前の夜、どこに？」

写狂は、少し考えたような顔を見せてから言った。「4日前の夜なら、ずっと長屋に居ましたよ。長屋ですつと書を書いてました……」

「ほ、本当!？」ちあきは思わず身を乗り出した。

「え、ええ……」ちあきの剣幕にちよつと身をのけ反らせる写狂。

「で、先生が居たかどうか知ってる？」

写狂は、申し訳ない、と顔に書いてあるかのような顔をした。「いや、正直、変迅堂さんがいたかどうかは分からないですよ」

「そ、そうなんだ……」ちあきは肩を落とした。

「あ、でも」写狂は思い出したように言った。

「なにになに？」

「ええと、そういうえば、気配はあったんですよ」

「え？」

「誰かが居るなり、っていう気配はあったんです。ただ、それが誰かは分からないんですけれどね」

「そ、そうなの？」ちあきは不思議な顔をした。

「ただ」写狂は続けた。「その気配、途中までは一人だったんですけど、そのうち増えて二人になったんですよ……。多分、あの日、

長屋には僕以外にもう一人誰かが居て、途中で誰かが戻ってきたんじゃないかな、って思うんですけど」

「誰かは分からないの？」ちあきは写狂に訊いた。

「……分からないです。だって、僕だってずっと部屋に籠もっていたわけですし……」

「だよね……」ちあきは肩を落とした。けれど、すぐに持ち直す。

「結局」ちあきは三人を見渡した。「三人とも、先生が4日前どこに居たかは知らなかった、ってことね」

「すみません……」3人は、頭を下げた。

第四話「サスペンス八百八町」【14】

「まあいいわ」ちあきは笑顔を見せた。「協力してくれて、ありがとう」

「ああ、お役に立てず済まないな」半助は八チマキを締めつつ言った。

「ねえ」ちあきは、不意に訊いた。「この長屋、他に住人いないの？」

その質問には式部が答えた。

「え？ 居ますよ？ 鵜狩さんと、修静庵さん」

「どこに居るの？ その二人」

ちあきが訊くと、式部は答えた。

「うーん、二人が二人、あんまりここに居ついている人じゃないからなあ……」

式部の顔には、困惑が浮かんでいた。

「でも、居場所くらいわかるんでしょ？」

式部は、頭を掻いた。

「そうですねえ。修静庵さんなら、吉祥寺きつしよつじの近くに塾を開いているはずですから、文人長屋ぶんちやうにいないなら、きっとそこに居るんじゃないかな、と思いますけど……」

煮え切らない式部の言葉に、ちあきは口を尖らす。

「じゃあ、もう一人はどこに？」

「それが……」

式部が言うには、もう一人の住人・鵜狩借遥は、本当にどこに居るのか分からない、という。その人は、一ヶ月のうち10日は文人長屋で過ごし、残りは他のところで過ごし、というライフスタイルを取っているらしい。だから、式部はこう言った。

「多分、あの人に変迅堂さんのことを訊いても、訊くだけ無駄だと思いますよ」

むむむ……、ちあきは腕を組んで唸った。

「ま」半助は立ち上がった。「とりあえず、まずは修静庵さんに話聞きにいったらどうだい？ あの人なら、きつと吉祥寺界限にいるからさ」

「……そうですね」写狂も立ち上がった。「……でも、修静庵さん、結構気難しい人だから」

そんな写狂を小突いた半助は、着物をパンパン叩いた。

「さて、オレはもう仕事だ。……じゃ、お嬢さん、頑張れよ」

それだけ言い残すと、半助は土間で下駄を履いて出て行ってしまった。あ、稲荷寿司のお礼を言うのを忘れた、と、ちあきは九十九里浜で食べた稲荷寿司のことを思い出すのだった。

「……僕も、これにて失礼します」

写狂も、着物をパンパン叩いた。半助といい写狂といい、まるで式部の部屋が汚いとも言いたげな仕草だな、と思いつながら部屋を見渡したちあきだったが、確かに汚い。床に、黒っぽい砂のようなものが転がっている。そんなちあきに気付いたのか、式部は苦笑いして言った。

「はは……すみません、あまり掃除をしていないもので……」

「ふうん……」

ちあきは、指でその黒い砂を掬い上げ、じっと見つめた。けれど、すぐに目を離れた。あれ？ そういえば……？ ちあきは式部に訊いた。

「ねえ、写狂さんは？」

「え？ 写狂さん？ いらっしやるでしょ……って、いない!!」

「あの人、すごい影が薄いわね……」

なんと、目に入っているにも関わらず、写狂の行動はまるで注意を払われていない。逆にここまで行くと、写狂、恐るべしである。

式部は苦笑いにも似た笑顔を覗かせた。

「ええ……あの人、すごい書を書くんですけどね。どうにも、本人の影が薄くて。……そういえば」

「そういえば？」

ちあきが訊くと、式部は指を立てて続けた。

「大家の長介さんにお会いしたらどうでしょう」

「大家？ ああ！ この文人長屋の大家さん？ そういえば、まだ顔見てないけど、どこにいるの？ ここに住んでるんでしょう？」

普通、長屋の大家、というのは、その長屋の中で、比較的大きなところに住んでいるものだ。と、いうのも、大家は長屋の管理をせねばならないからである。だから、ちあきも「大家」という言葉を聞いたとき、この文人長屋にいるのではないか、と思ったのだ。しかし、式部はちあきの予想を裏切るように言った。

「いえいえ、大家さんは、ここに居ませんよ。大家さんは、別のところに土地を持って生活しているんです」

「えー！」ちあきは思わずのけぞった。「それって、滅茶苦茶な金持ちじゃない？ 一体どういう立場の人なのよ？ 商人かなにか？」

「元、ですけど商人です。僕もあんまり知らないですがね、確か、さる大店の旦那だったものが、後進に店を譲って楽隠居、ってことらしいですよ」

「で、その大家さん、ここには来るの？」

「いえ、あまり来ませんよ。というか、大家さんがここに来たのは今まで指折り数えるくらいじゃないですかねえ。だから、大家さんの家に訪ねていった方が確実だと思いますよ」

え！？ 大家さんが今まで指折り数えるほどにしかここに来ない！？ ちあきは目を白黒させた。

普通、大家というものは、頼みもしないのに長屋に侍り、「ほら、火付けっぱなしだよ」とか、「ほれほれ、子供たちを喧嘩させたままにしておくもんじゃないよ」とか、「廁トイレをもつと綺麗に使っとくれよ！」と口やかましい存在なのだ。そして手が空けば箒片手に路地の掃除。そのときも店子の動向に目を光らせている、嫌な存在、それが大家である。

そんなちあきにとって、文人長屋の大家・長介という人は「脅威」

である。指折り数えるほどしか長屋に来ない、ということはそのうった口やかましい人でないのは確かだ。

「うーん、うらやましいかも」

ちあきが呟くと、式部は手を振った。

「とんでもない！」

式部が言うには、長屋の管理、例えば掃除などは店子が持ちまわりでやっている、という。だから、店子同士で当番を決めてそういう雑務をしているのだけれど、あんまり皆その当番を果たしてくれないのだという。

「結局、僕と変迅堂さんの二人で持ちまわっているんですよ」とは式部の弁。

「て、ことは、戸締りなんかも？」

ちあきが訊くと、式部は答えた。

「戸締り？ ああ、長屋の入り口の門ですか？ あそこは……」式部は舌をペロツと出した。「実は戸締りしてないんです」

「えー！？」

「いや、実は……」

式部が言うには、門の戸締りも持ち回りの当番らしいのだけれど、貧乏長屋に入る泥棒がいるわけもなし、だったら開けといたほうが遅く帰ったときなんかに便利じゃないか、ということになっているのだという。まあつまりは、始終開けっ放し。

「それ、不味いんじゃないの？」

ちあきが怪訝な顔を隠さずに訊くと、式部は笑った。

「平気なんですよ。だって、泥棒だって、文人長屋の面々が貧乏なことは知ってますから」

へえ……。ちあきは、これまで聞いたことを心に刻み込むと、訊いた。

「そういえば、その件の大家さん、どこにいるの？」

「ああ。長介さんは、日本橋界隈に住んでいますよ……」

「えー！？ に、日本橋！！ すごい金持ちね！！」

日本橋界限。東海道のスタート地点であり、町人地の中心でもある。三井などの大店が表通りで軒を連ね、少し裏に入ればそういった大商人や大店の隠居が生活する「高級住宅街」が現れる。今で言う、田園調布みたいなものだろうか。いや、むしろ銀座？

「金持ちなんです」式部はうんざりするように言った。

第四話「サスペンス八百八町」【15】

吉祥寺。
きつじょうじ

現在で言う文京区にある寺である。ここは曹洞宗の寺なのだけけれど、学僧が非常に多く、江戸の中でもあまり俗っぽさのないところだ。べらんめえ口調で怒鳴り散らす江戸っ子も居なければ、お金に目がない商人もいない。周りを見渡しても学僧・学僧・学僧の山なのだ。

そういった環境では、町の人口組成にも影響が出る。自然と学問を志す学者の類がこの町に集まるのだ。そうやって、吉祥寺界隈は「学問の町」として成長していくことになる。この時代には、一大文化サロンにまで成長していた。

なお、現代、吉祥寺と書いて「きちじょうじ」と読む東京の地名があるけれど、その「きちじょうじ」のことではないことを留意されたい。

ちあきがここには理由がある。

ここに、文人長屋の住人、修静庵がいるのだ。

「ええと……」

ちあきは、式部に描いてもらった地図を頼りに、昼だというのにまるで喧騒のない吉祥寺界隈をすたすたと歩いていく。

式部が言うには、その修静庵という人は、かなり気難しい人だという。なので注意が必要らしいのだけれど……。ちあきは、式部に無理やり持たされた徳利を眺めた。

式部は別れ際に、「修静庵さんに会うつもりでしょう？ なら、これを持っていかないと」と、この徳利を寄越したのだ。なんでもんなものを、と訊くと、「あの人、酒が好物なんです。どんなに機嫌が悪かろうと、とりあえずこれを渡せば機嫌がよくなるはず」と、式部は言った。

でも、この徳利、重いなあ！ ちあきは、割と大振りの徳利を少

し持ち上げ、ため息を吐いた。

当時、徳利は「発明」されて日の浅いものだった。だから、まだ洗練されていない。なにが言いたいのかといえば、当時の徳利はまだ無駄が多いデザインで、容器の厚みが相当あるために重いのだ。そんなこんな言っているうちに、修静庵の居る、「修静庵」にやってくる。

修静庵の住んでる家が、「修静庵」？ と訝いぶかしがる向きもあるだろう。なんだかややこしいな、と。けれど、当時はこんなものだ。例えば、隠居した元将軍のことを「大御所」というけれど、これは、徳川家康が隠居した場所、駿府城を指している。それに、公家さんなども、よく居住地域の名前で呼び習わす。このように、人をその人が住む地名や建物名で呼ぶという習慣は、当時は特段珍しいものではない。

とにかく、ちあきは戸をとんとん叩いた。

「修静庵さん、いらっしやいますか？」

すこし待つと、中から声がした。酒焼けをしている、ガラガラ声。

「ああ？ 今日塾は休みだ。講義を受けたくば明日来い」

顔も出さない無礼さに、少しイライラしながらも、ちあきは続けた。

「あ、いえ。式部さんに修静庵さんがここに居る、って訊いて……」
中で、ドタドタ走る音が聞こえた。そして、入り口の戸がガラッと開いた。白髪交じりの学者風、中年。黒っぽい着流しに、茶色の薄い羽織をまとっている。いかにも学者風ないでたちだ。

その男が言った。

「式部、ということはお前、文人長屋の関係者か？」

「あ、はい。変迅堂先生の知り合いの、ちあきって言います」ちあきは、丁寧に頭を下げた。

「ああ、変迅堂の」修静庵は指をアゴに沿わせた。「確か、お前、変迅堂の家を訪ねてやってくる子だな。だが、私に何か用か？ ここには変迅堂は居ないぞ？」

この茶化すような口ぶり、そしてニヤニヤとした顔。そんな修静庵の顔を見た瞬間、「ああ、こいつ、何も知らないな」と思い至った。ちあきであった。

急に無言になったちあきを怪訝に思ったのか、修静庵は言った。

「まあ、立ち話もなんだ、入りなさい」

修静庵に促されるまま、ちあきは修静庵の家に入った。

部屋は、かなり綺麗に整えられていた。ただ、あまり生活の臭いがしない。部屋の三方を本棚に囲まれ、真ん中に卓が置いてあった。「狭いところだがな、まあ座ってくれ」

ちあきは、促されるままストンと腰を落とした。

「で？」

「え？　で？　って？」修静庵の言葉を聞きなおすちあき。

「だから」修静庵は続けた。「なんで、変迅堂の“知り合い”のお前が、私を訪ねてくる？　何か、あったのか」

「それが、先生が南町奉行所に捕まっちゃったんです」

「なんだと？」修静庵は顔をしかめた。

「それが……」

ちあきは、これまでのいきさつを話した。ただ、ちあきが話したのはあくまで事実関係のみで、他の文人長屋の面々から訊いたことや、カツちゃんから聞いたことは伏せておいた。

「ま、まさか……あの変迅堂が、火付け？　何かの間違いだろう？」

修静庵は、ちあきに詰問するように問いかけた。

「あたしだって信じられません。だから、あたしなりにこうやって色んな人から話を聞いて回っているんです」

「変迅堂は、ズレたヤツではあるが、決して犯罪に手を染めるような男ではない。ちょっと礼に反する行動を取ることもあったが、これは若さゆえのもの、悪気なあってのことではない」

アンタだって、「礼に反」した行動取ってるじゃん、と、さつき顔も出さずに応対した修静庵を、心の中でちあきは咎めたのだった。「で」ちあきは、本題を切り出した。「4日前の夜、変迅堂先生を

見ませんでしたか？」

「4日前の夜？」修静庵は、腕を組んだ。

「ていうか、修静庵さん、文人長屋に帰ってないんですか？」

修静庵は頷いた。「ああ、私はな、あそこにはあまり帰らないのだ」

修静庵が言うには、修静庵は月に10日はこの吉祥寺に、10日はどこかの郊外の寺に教授に出向き、もう10日は文人長屋で生活する、というサイクルらしい。最近吉祥寺で学僧たちに儒学を教えているという。

「じゅがく？」ちあきは首をかしげた。

「ああ。唐土の国の孔子さまが皆に伝えた学問だ。……お前、町人のようだが、儒学は勉強しておくときよいぞ。何せ、今の世は儒学の理屈で動いているからな」そう言っ、修静庵は笑った。

徳川家康はじめ、諸国の大名たちは、己の権力の裏づけに「儒学」を使った。と、いうのも、儒学には「名分」と呼ばれる、立場に応じた振る舞い、というものが規定されていたからだ。つまり、王は王らしく、臣は臣らしく、その本分を踏み外さないように、という教えである。この教えはつまり、戦国時代以来続いていた下克上の空気を一掃するのに役に立った。そして、その儒学は將軍や大名の裏押しを受け、この時代でも大きな影響力を持っていたのである。

あ、しまった。話が横道に逸れた。ちあきは頭を掻いた。

「で、修静庵さん、4日前の夜、変迅堂先生を見たんですか？」

「すまんなあ」修静庵は白髪交じりの頭を掻いた。「4日前は、変迅堂には会っていないんだ」

「どこに居たんですか」

「そうだな、確か4日前は……そうだ！一人で酒を飲んでいたはずだな。最近両国の方に、新しく十六文呑み屋が出来たものでな、そこに行っただが……」

十六文呑み屋、とは、この時代に流行った呑み屋で、料理をすべて16文で頼めるのでそういう風に呼ばれている。どうい店もそ

うだろうけども、この手の店は、主人の腕一つで人気が決まる。酒好きな江戸っ子たちは、まだ誰も知らない“隠れ家”を探すのを無上の楽しみにしていたのだけれど、修静庵も例外ではないようだ。「だが？」さて、ちあきは訊いた。

「いや、私な、酒を呑むと……」修静庵は、少年が悪戯をしたときのような無垢な笑顔を見せた。「記憶を失くすものでなあ……どうにもこうにも、思い出せない」

「あ、そうなんですか……」ちあきは肩をがっくり落とした。「す、すまん……。で」

修静庵は、ちあきの横にチョココンと座る徳利を指差した。ちあきは、事情が分からず、大きな目をパチクリとさせている。

修静庵は言った。

「その徳利は、なんだ？」

「ああ！！」持つてきていた割に、すっかり忘れていたちあきであった。「これ、式部さんからの差し入れで、お酒だそうです」

「やはりか！！ やはり式部！ 分かってるなあ！！」

何が分かっているのかは知らないが、分かることは一つ。修静庵、ものすごく嬉しそうだ。

修静庵は、近くにある椀を引き寄せ、徳利の蓋を引き抜いた。そして、椀にトクトクと中の液体を注ぐ。中の液体は、水のように透明で、キラキラと輝いていた。

「おお！！ 清酒か！！！ 濁酒なんかより呑みやすくいいんだよなあ！」

まだ酔っ払ってはいないはずだけれど、修静庵、すでにあまり呂律が回っていない。多分、酒の放つ芳醇な香りにもう当てられているのだろう。

はあ。ちあきは心の中でため息を一つ吐くと、立ち上がった。

「お邪魔でしょうから、これで……」

「ん〜！ うむ！ 式部によるしく言っておいてくれ！」

そう言うと、修静庵は手の中にある椀を一気に飲み干した。

ちあきは、はあ、とため息を吐き捨てると、玄関の方に向かった。そして、出て行くこととしたその瞬間、別れの挨拶の代わりに、「酒、サイコー……！」という、修静庵の叫びを浴びる羽目になったちあきなのだ。

ちあきは、またもや深いため息を吐いた。

第四話「サスペンス八百八町」【16】

日本橋。

東海道の始点にして、江戸の経済の中心。両替商や呉服商が軒を連ね、現代でも金融・商業の中心地である。当時は、三井呉服店などの大店が大きく幅を利かせていた。

なので、表通りは江戸でも一・二を争うほどに雑踏と喧騒に溢れた地域である。

だが、そんな華やかな大通りを一本逸れると、閑静な住宅街に至る。日本橋に近いこういふ地域に住める人間というのは、職人や小商人といった人間ではない。大店の旦那やその家族、あるいは大店の楽隠居、そういつた、「特権階級」のみなのだ。

そんなハイソでハイカラな町・日本橋の住宅街を、やはり式部に描いてもらった地図を頼りに、ちあきはカラコロと歩く。

吉祥寺もかなり気後れしたけれど……。と、ちあきはハイソな日本橋界隈の住宅街をキョロキョロと見渡して思うのだった。……このの方が、気後れは上だわ、と。

やっぱり、自分の住んでいる地域と、明らかに違う空気をまとった地域、というのには、たとえ歩いているだけでもものすごい気後れがあるものだ。気後れしているほうは、「あたしみたいなもんが、ここ歩いていいのかしら……」と内心ビクビクものなのだけれど、実はだれもそんな田舎者を気にしてはいない。たとえるなら、お金を720円しか持ってない状態で、シャネルの直営店に入るようなアウエー感、とでも言えば良いだろうか、とにかく、そんな感じである。

とにかく、ちあきはこのハイソな空気に押しつぶされそうになりながらも、ようやく、目的の家にやってきた。それほど大きくはないにせよ、上品にまとまった門構え。むむむ……この先に居るのか……。大家さん。

ちあきは、「大家」という言葉の響きと、この門構えの家のアンバランスさにニヤニヤするしかなかった。

そんなニヤニヤはさておいて、ちあきは門の外から声を掛けた。

「長介さ〜ん!」

すると、中から声が響いてきた。

「ん〜? 誰だい?」

大家には似合わない穏やかな、それでいて暖かい声。

「あ、あたし、式部さんに言われて来て……」

部屋の奥から、またその優しい声が響いた。

「ああ、式部さんから? じゃあ、入りなさい、開いているから」

ちあきは、その門をくぐり、家上がりこんだ。

意外に狭いな。それがちあきが廊下を歩きながら思った感想だった。とはいっても、長屋なんかと比べればはるかに広いのだけれど、こんな日本橋の高級住宅街の一角にある一軒家なのだから、もっと広いもの。ちあきは早合点していたのだ。けれど、長介が隠居の身であることを考えれば、このくらいの広さが適当なのだろう。

そんな事を考えながら廊下を歩くうち、突き当たりが光に溢れていた。きつと、この廊下の先に部屋があるのだろう。ちあきは、その光に向き合うようにして足を進めた。

「やあ」

果たして、光の先は畳敷きの南側に面した部屋だった。そしてその部屋には、眠そうに腰を屈めて座る、老人の姿があった。この人が……。ちあきは訊いた。

「あなたが、長介さん?」

「ああ。いかにも。私が長介だが……」 間延びした、眠そうな声を挙げた。

「ええと……式部さんに言われて……」

「ああ、式部さんの知り合いかね。しかし、あなた、何か特殊技能はお持ちかな。……申し訳ないが、あなたからはそういう二オイを感じないのだけれどねえ」 間延びした声で、長介は続けた。

「あ、え？ ど？ どういうこと？」

「ん？」今度は長介が変な顔をした。「なんだ、あなた、文人長屋の人居希望者ではないのかね？」

ちあきは全身でその言葉を否定した。「ち、違いますよ！！ただ、お話を聞きに伺ったんです」

「なんだ、そうだったのか」長介は少しさびしそうな顔をした。「で、何用かねえ？ 私みたいな爺に、あなたみたいな若い娘が聞きたいような話が出来ますかねえ」

あまりに穏やかな口調に、ちあきは変な気分になった。変迅堂が奉行所に捕まった、ということは、その長屋の主人であるこの老人にも、その話が届くはずだ。それに、あの文人長屋の管理運営を見るに、その件で奉行所に引つ張られかねない。

ちあきが変な顔をしていると、ほっほっほ、と長介は笑った。

「私の顔に、何か付いていますかな？」

「あ、いえ……」

突然、長介の目が鋭くなった。そして、畳の方を見ながら呟くように言った。「聞いてますよ」

「え？」

「変迅堂さんが、火付け及び武器密造の疑いで引つ張られていることくらい」

あ、やっぱり話だけは行ってるんだ、とちあきは思った。

長介は続けた。

「まあ、普通は知る由もない情報なのですがね」

「え？ どういうことですか？」

すると、長介はほっほっほ、と老人そのままの笑い声を発した。しかし、目だけは笑ってない。長介は続けた。

「いやね、商人、ってやつは、どうしてもお役人様とお付き合いはしなくちゃならないんですよ。仕事を辞めてもまた然り。いつもは煩わしいものですが、こういうときには役に立ちますなあ」

言っている意味が分からないので、ちあきは話を先に促した。

「ほっほっほ。今回の件は、あまりに事が大きいので、どうやら変迅堂さんの拿捕たはを含め、この事件に関する全ての出来事を隠すことに決めたようですなあ」

「？」

「つまり」長介は言った。「今回の件、どうやら、奉行所は秘密裏に事を運ぼうとしているようですな。もっと端的に言えば、お白洲もなしに、処理するつもりだろうねえ」

お白洲、とは現代でいう裁判のことだ。それを抜きにして処理するということとは……。

「先生……！？」

ちあきは、思わず手を組んで、祈るようなポーズを見せた。

「まあ、そう心配しなくともよいよ」深刻そうなちあきとは裏腹に、やけに落ち着き払っている長介。

「なんで、そんな落ち着き払っていられるんですか！？」

「まあまあ」長介は、そんなちあきを宥めて、言葉を継いだ。「しつかり、こちらも手を打っているから」

そう言って、長介は袖から紙包みを取り出した。

「これってもしかして……」ちあきは、楕円形の紙包みを指差した。「そう、お金」長介は続けた。「お役人、というものは、懐柔が簡単でねえ。こうやって、黄金色の紙包みを渡してやるだけで、ころりと態度を変えよる」長介は、事も無げに言つてのけた。

「それって、賂まいないですよね？」ちあきは、汚物でも見るような目で、その紙包みを見た。

「ほっほっほ」長介は飄々とした顔で続けた。「あなた、商人の娘さんではないね？」

「え？ あたしは鳶の娘だけど」

「なら、知らないねえ。……賂、っていうのは、職人さんや小商人あるいはお百姓にとつてはまさに悪でしょう？ でもねえ、商人と武士にとつては、賂は大事な大事なお挨拶。物事がうまく進むための、ね」

この長介の言い分は、現代でこそアウトな発言だけれど、当時はそんなに突飛な発言ではない。

当時、賄賂、というものに対する意識は、現代のそれとはだいぶ違った。例えば、町奉行所などは、「賄賂の有無次第で事件の立件か否かが決まる」というほど、賄賂が当たり前のものになっていた。けれど、それを払う側も受け取る側も、あまり罪悪感を感じていなかったようなのだ。払う側は「お目こぼし料」、受け取る側は「役得」程度の認識だったという。

だけれど、そんなことが出来ない普通の町人に見たら、そういった役人と大商人の癒着構造はまさに悪なのだった。そんなわけで、

役人の 子にはぎにぎを よく覚え

と、皮肉られてしまうのである。

第四話「サスペンス八百八町」【17】

長介は続けた。

「とにかくねえ、あの、変迅堂さんを引つ張った与力、仁杉さんだつたかな？ 彼はそこまで潔癖な男ではないから、私の差し出したお金を受け取ったよ。少なくとも、証拠もなしに如何どうこうする、なんてことはないでしょうな」

「え、あのクソ与力、賂を受け取ったの！？」

あまりに汚いちあきの言い草に、苦笑いしながら長介は続けた。

「ほつほつほ、お嬢さん、そういうものなのですよ。逆にこの場合は、感謝すべきでしょうなあ」

「え？」

「仁杉さんが、話の分かる男だ、ということにね」

当時、賂賂に対してあんまり罪悪感がなかった、ということは書いたけれど、裏を返せば賂賂に対して多少の罪悪感があった、ということである。ある意味、現代で言えば信号無視に似ている。累積すればペナルティになるけれど、一回一回はそんなに重くない。そんな受け取られ方だった。

現代でも「信号無視くらいいいじゃねえか」という人もいる一方、「信号無視は悪いことだ」と言う人もいる。そういうノリで、「賂賂は悪いことだ」と考え、突っぱねる役人もいるにはいる。

そういう役人を、商人たちは「話の分からない役人」と呼び、逆に賂賂を受け取り、便宜を図ってくれる役人を「話の分かる役人」と呼ぶのだ。

そういう意味で、仁杉与力は「話の分かる男」なのだ。

長介は続けた。

「そんなわけで、そこまで心配する必要はないよ、お嬢さん。向こうも、賂を受け取っておいてそれを反故は返しにするような真似、絶対にしないからね」

だけれど、ちあきは、仁杉与力の顔を思い出しては、心配が止まないのだった。あの時仁杉は、「変迅堂を獄門送りにしてやる」と息巻いていた。あの男が、そう簡単に懐柔されてしまうものなのだろうか。

「……本当、ですか？」ちあきは訊いた。

「ああ、大丈夫」

ちょうどその時だった。入り口の戸を叩く音が響いた。

「ん、入ってかまいませんよ」

長介がそう言うと、戸が開き、廊下を歩く音が響いた。そしてしばらくして、部屋に男が入ってきた。

「おお、辻村さんではありませんか」

部屋に入ってきた、黒い羽織にねずみ色の着流し、刀を二本差した中年の侍を、長介は親しげに呼んだ。

「あ！ アンタ！！！」

ちあきは、その顔に見覚えがあった。変迅堂を逮捕していった連中の中に居た、中年の同心だ。

辻村同心は大声を上げて指を指すちあきを無視して、話を進めた。

「ちょっと、大変なことになりました……ここまで来た次第」

「ん？ どうしたのだい？」

「それが……、仁杉様は、あの発明家を、何としても立件するつもりですよ」

一瞬、部屋の中の空気が凍りついた。

「どういうことだね？」平静な口調で、長介は訊いた。

「仁杉様は、“変迅堂の罪は明白、なればそれは立件せねばならぬ。長介殿には心づけを頂いたが、それは、長介殿の大家としての管理責任を問わない、という意味でのものと解されたい”と仰っております」

長介は、微笑みながらも目は笑っていなかった。

「ははあ、確かに、私は大家。もし店子が問題を起こしたら連座をしかねない立場なんですがねえ。しかし、仁杉殿も面白いお方だ」

「は？」

長介は、穏やかな顔を見せながら、威圧感をみなぎらせて続けた。
「賂を受け取っておいて、便宜を図らないとは」

「……………」長介の眼光に射竦いすくめられ、声が出ない辻村同心。

「……………」分かりました」不意に、長介は言った。

「へ?!」

「仁杉殿が、うちの店子を手にかけてようとしていること、よく分かりました。……………」申し訳ないのですが、仁杉殿に伝言を頼めますかね」「な、なにを……………」

「こつ伝えてくださいな。ならば、正面から行かせて頂きます」と「か、かしこまりました」

それだけ言うと、辻村はすぐすごと逃げるように部屋を辞しについて。

長介は、ため息を吐いた。

「大変なことになりましたねえ」

ちあきに話しかけたつもりだった長介だったが、ちあきから返答がない。む？ 長介はちあきの顔をのぞき見た。

ちあきの顔は、血の気がまったく引いてしまっている。そして、歯を少しガクガク言わせて俯いている。むむむ……………。長介は腕を組んだ。

「ええと、お嬢さん？」

何かを訊くように、語尾を上げて話しかける長介。ちあきは、首をブンブン振って、長介のほうを向き直った。

「やっぱり、あたしが先生の無実を証明しなくちゃだめなんだね」

長介は、一瞬笑った。

「そうだねえ。ま、私もがんばるつもりですけれど」

「え？」

「訊いてなかったかえ？」長介は言葉を足した。「さっき、同心様に伝言をお願いしたでしょう？ “正面から行く”と。それはつまり、変迅堂さんの無実を証明してやる、という意味表示ですよ」

「ああ、そついうこと！」

「けれど……」長介の顔が曇った。

「けれど？」ちあきが訊いた。

「どうやら、文人長屋の住人の中に、火付けが居るのは確かなよう
ですな」

え?! なんで、この人その事を!? だって、このことを知っ
てるのは……。

長介は続けた。

「ああ、昨日、勝次さん、とかいう火消しさんがここにやって来て
ねえ。その人から訊いたよ。“多分、犯人は文人長屋の住人のうち
のどれかだ”ってね。まあ、その火消しさんも、どうしたわけか変
迅堂さんを犯人だと思っているようでしたかね」

カツちゃんだ。ちあきは、大きなため息を一つ吐いた。

「それ、知り合いです」ちあきは、ちよつとげんなりとした声で言
った。

カツちゃんめ。ちあきは思った。もう、おしゃべりなんだから!

! ちあきは心の中でそう毒づいた。

「その火消しさんによると」長介は指をアゴに当てながら続ける。
「火付けをしようとしたヤツを追いかけたら、犯人が文人長屋に逃
げ込んだ、つてもんだからねえ」

知ってます、とはとても言えないちあき。

「だがねえ」長介は、深く思索するような表情を浮かべた。「変迅
堂さんを含め、文人長屋の全員が全員、そんな犯罪に手を染めるな
んて信じられないんですよ。どの子も、皆良い子ですからねえ」

「んじゃあ、長屋の皆を信じて、何も言わないって言うんですか」
言うてから、しまった、今の言葉はとげがあったな、と少し後悔
するちあき。そんなちあきを知ってか知らずか、長介は手を横に振
って応じた。

「いやいや。信じてはいるけれど、かといって調べないわけにはい
かないでしょう? 火付けは天下の大罪ですからな」

「でも、どうやって?」

「そう、それなんですよ」長介は、鋭い視線を宙に泳がせて続けた。「困ったものです。こういうときだけ、自分が爺になってしまったことを怨みますなあ」長介はおどけるように、頭巾をちよいと直した。

「どういうこと?」

長介は、ほっほっほ、と笑ってから続けた。

「いやね、こういう内密にせにやいけない話は、人に頼まず自分の足で調べるのが鉄則なんですよ。じゃないと、他人に知られちゃ不味いことが、知られてしまつかもですからね。つまり、本来なら私が歩き回って調べるのが筋なんです。しかし……」

「しかし?」

長介は、鼻で笑った。

「私は足腰が弱いものでねえ。もう、そんな事は出来ません。それに、私は商売をやった関係上、どうにも顔が広くて、目立ってしまうのですわい」

自慢のようにも聞こえかねない長介の言葉だったけれど、ちあきにはそんな嫌な感じは受けなかった。

「さて、そこで、だ」長介は、ちあきに向かって指を差した。「あなたに、その仕事、頼んでいいかね? と、いうか、そもそも、あなたもそのつもりなのでしょう?」

ちあきは、ただ頷いた。すると、長介も、満足そうに頷いた。

「ふふ、あなたならそう言うてくださると思った。ならば善は急げ、ですな。……ところで、文人長屋の連中とは、もうお会いなすったかな?」

ちあきは頭を掻いた。「いや、それが……」

長介は変な顔をした。「おや、まだ会ってないのですかな?」

「あと一人だけ、会ってないんです」

第四話「サスペンス八百八町」【18】

「ほう、あと一人？」長介はアゴをポリポリと掻いた。「今までに会った人を、言ってみてくれませんか？」

ちあきは指折り数えながら挙げていった。

「ええと……半助さん、式部さん、修静庵さん、あと……ああ、写狂さん」

「と、いうことは」長介の目は、元の優しい目に戻っていた。「残るは鵜狩さんだねえ」

「どこにいるか、ご存知ですか？」と、ちあきは訊いた。

「あいつは、どうにも風来坊なところがある奴でしてなあ。私たちでも会えるのは結構稀なんですよ。……ただ」

「ただ？」

「いえね、昨日、その鵜狩が私を訪ねてきたんですよ。家賃を払いに来たんですが……。確か、ヤツ、“明日版元に行く”とか言っていましたから、もしかしたらそこに……」

「はんもと？」聞きなれない言葉に、ちあきは首を傾げた。

「ああ、鵜狩さんは戯作者なんです。それで、版元、っていうのは、戯作者が書いた戯作を版に彫って、刷って、売る業者さんのことですよ」

現代で言う、「出版社」だと思えばほぼ当たる。

「で、その版元、つてどこにあるんですか？」

「そうねえ、ここから近いですよ。“成迫屋”つて言えば、皆教えてくれますよ」

「へえ！ それじゃあ、行ってみますね！」

そう言つと、ちあきはすくつと立ち上がった。

「ちよつと待った！」長介は、不意に張りのある声を出した。

「？」

「ああ、あなたに言っておかなくちゃならないことがある」

「え？ 何ですか？」

「ムリは、しちやいけませんよ。決して」

「どういう意味ですか」ちあきは、長介の顔を覗き込んだ。

長介は続けた。

「さっきの同心、辻村さんが言っただんですが……」

「もったいぶらないでください」爺じゃなかったら、正拳が飛んでるところよ、とちあきは心の中で毒づいた。

「うむ、どうやら、奉行所の連中が、あなたを監視しておるようですなあ」

「え？ なんで?!」ちあきは、大げさなくらいに驚いた仕草を見せた。

「ほら、変迅堂さんと一番付き合いのあった人間があなたでしょう？ もしかしたら、共犯関係を疑っているのやも知れませんなあ」

「そ、そんな！」

「まあ、そんなにビクビクしなくてもよいとは思っけれど、頭の隅には置いておいてください」

ちあきは、無言で頷いた。

「うむ。では、お頼み申す」長介は、ちあきに頭を恭しく下げた。

「任せて！ 先生の無実は、絶対に証明してあげるから！」

そう満面の笑みで言い捨てると、ちあきは挨拶もそこそこに、玄関に向かってダッシュで行ってしまった。一人部屋に残された長介は、頭を上げ、腕を組んだ。

そして、誰に言うでもなく、呟くのだった。

「……変迅堂さんの無実だけじゃなく、文人長屋の皆の無実を証明してくれるといいのにおう」

長介は立ち上がり、縁側の前にまで歩を進めた。日差しが照りつける庭。その庭のどこかで、ジージーとうるさく鳴くセミ。そして、もわっと湿った空気。その全てが今の長介にはうざったい。

「どうなるんでしょうかね、この事件は」

セミが、そんな長介の独白に答えるように、ジ、と一鳴きして地

面に落ちた。

一方、外に出たちあきは、成迫屋を探していた。

とはいっても、長介の言うとおり、道行く人に訊くと、快く教えてくれた。教えてくれた職人さんに「成迫屋の場所を知らないとは、お嬢さん遅れてるねえ！」と馬鹿にはされたけれども。

とにかく、日本橋の近く、大店とはいかないまでもそれなりに大きな店が集まる地域に、成迫屋は建っていた。

「ここに、鵜狩さんとやらが……？」

ちあきは、店の前に立った。

この手の版元、という店は、斜めに立てかけられた板の上に、浮世絵や版本などの印刷物が置かれている。もちろん、成迫屋も例外ではなく、極めて一般的なスタイルで版本を置いている。

「へえ、この店……」

役者絵とか、相撲絵みたいな浮世絵がないなあ、とちあきは思った。

普通、版元は様々なものを作る。江戸時代、識字率、特に都市部での識字率は相当に高かったらしいけれど、本にお金を出す層は限られていた。だから、版本だけで生計を立てる版元は稀で、やはり普通の版元は、視覚的に見栄えのする、浮世絵なども売っていたのである。

でも、この成迫屋には、そういった浮世絵の類のものが一切ない。ちあきが、そんな事を思いながら版本とにらめっこをしていると、店の奥から、腰当を巻いた中年の男がゆっくりと出てきた。

「おや、お嬢さん、見ない顔だねえ。……ああ、お嬢さん、その本はきつとお嬢さんには難しいよ。こっちの、“日暮夢淀湖”の方が面白いと思うよ」

そう言われたちあきは、今の今にらめっこをしていた本をまじまじと眺めた。どうやら、葉草に関する本らしい。確かに、ちあきには用がない本だ。

「とうか、そもそも、ちあきにとっては、本そのものに用はない。ちあきは切り出した。」

「あ、あの、こちらに、鶺鴒さん、いらっしやいますか？」

「ああ、鶺鴒さんに御用ですか」中年男は顔を訝しげに歪め、続けた。「しかし、お嬢さん、鶺鴒さんと一体どういうご関係で？」

「ここで本当のことを言うのもまずい気がしたので、ちあきは適当に答えた。」

「ああ、鶺鴒さんとうとう、って訳じゃなくなつて……。実は、鶺鴒さんの長屋の大家さんに頼まれてこちらに……」

「え！ それつて、つまり、長介さんのお使いかね！？」明らかに動揺の色が見える中年男。

「ええと……まあ、そういうわけで……」

「こりゃ、失礼しました！ 狭いところではありますが、お入りください！」

むむむ……、名前を出しただけでこんなに商人が恐縮するなんて……。一体、長介さんつて、何者なんだらう……。とちあきはふと思いつつ、その恐縮しきつた中年男に促されるまま、店の奥へ足を進めた。

結局、ちあきは客間に通された。

とはいっても、普通にイメージする客間と比べればはるかに狭いし、薄暗い。それに、変な臭いが充満している。中年男は茶を運びながら、「これは、版木を刷るときの、墨の臭いなもので、我慢くださいまし」と、卑屈にさえ見えるほど恐縮して教えてくれた。

「さて」ふかふかの座布団に座るちあきに茶を勧めてから、中年男はちあきの前にすつと座った。「申し遅れました。私が、成迫屋主人、清でございます」

「はあ」ちあきは、あいまいに頷いて置いた。

「そういえば、長介さんはお元気ですか？」主人は笑顔を浮かべつつ訊いてきた。

「え？ 長介さんとお知り合いなんですか？」

「知り合いもなにも」主人は、遠い目をして続けた。「私は、もともと浮世絵画家志望でしてねえ。その頃、長介さんにお世話になったんですよ。……まあ、才能が無かったみたいで、大成はしませんでしたけれど。けれど、長介さんは、そんな私にも目をかけてくださって。私がこの仕事を旗揚げするときに、有形無形のご援助を下さったんです。あの人には、足向けて眠れませんかよ」

「ああ、そうだったんですか」

ちあきは、“ああ、この人、まるつきり先生たちと同じだったんだ”とふと思った。そして、あんなにも長介の名に恐縮するわけも分かった気がした。

「で、長介さんはお元気ですか」

「あ、ああ！ 元気です。今でもかくしゃくとなさってますよ」

「そうですか、それは良かった」主人は、安堵の笑みを浮かべた。

ちあきは、茶をすすった。そして、茶碗を置くと、本題を切り出した。

「ところで、鵜狩さんは、いらっしゃいますかね、今日」

店主は、分からない、という表情を浮かべた。「うくん、あいつは、どうにも一つ所に居ない男ですからね。けれど、今日は原稿をあげる日ですから、必ず来るはずですよ」

「何時頃来るかは……？」

「わかりませんねえ。いや、あいつは、時間で動くのが苦手な男ですからねえ」

「うくん」ちあきは、腕を抱えてしまった。

「ところで」主人は顔を近づけてきた。「もしや、鵜狩、家賃を滞納したままなんじゃ？」

「え？」

「いえね」店主は続けた。「昨日、鵜狩がここに来たんですよ。“実は、家賃をずいぶん滞納しているから、稿料を先にくれないか”ってねえ。……いや、普通はそんなことしないんです。でも、鵜狩は一部ですごい人気のある作家さんだから、信用で……。まさか、

そのお金、使い込んだんじゃあ……」

顔面蒼白な店主にちあきは言った。

「大丈夫です。今日は、そういった用事じゃないです」

「はは、なら良かった」店主の顔に、血の気が戻り始めた。

第四話「サスペンス八百八町」【19】

「実は、今日鵜狩は」店主・清は続けた。「昨日払った分の原稿を持ってくるはずなんです」

「踏み倒す、なんてことはないんですか」

「ははは」店主は言った。「この世界は信用の世界。信用を失った戯作者は食っていけないんです。いくら鵜狩が生活がだらしない奴でも、それは分かっているはずですよ。それに」

「それに？」

ちあきが訊くと、店主はまじめな顔をして続けた。

「版元と付き合いのある戯作者は、成功している部類に入るんですよ。だから、戯作者という生き物は、なんとしても、その成功を手放そうとはしません。そういうものなんです」

昔は、自分の創作物を世に問える人間は限られていた。現代でこそ、インターネットというお手軽なメディアのおかげで、世界中に自分の創作物を発信することが出来るけれど、当時はそういったお手軽なメディアは存在しなかった。鵜狩のような戯作者の場合、世に出るためには版元というメディアを使うことになるが、版元に気に入られて文章を書いていける人間はごく少数であった。つまり、自分の文章を発表できる立場にある人間、というのは、それだけで勝ち組なのである。

「ふ〜ん？」いまひとつ実感を持って聞けないちあきは、曖昧に頷いた。

「まあ、とにかく」店主は茶を濁すように続けた。「鵜狩は必ずこちらに顔を出しますから、安心してください」

そんな頃だった。

「お〜い、旦那あ！」

店の方から若い男の声がした。

すると、店主はにこっと笑って立ち上がった。

「はは、噂をすればなんとやら、ですな」

「え？ てことは」

ちあきが訊くと、店主は店の方に向けていた足を止め、振り返って言った。

「ええ。鵜狩、来ましたね」

店主はそれだけ言うと、表の方に出て行ってしまった。

どうやら、鵜狩と店主は店先で話しているらしく、わいわいと議論しているようだった。けれど、そんな声はすぐに止み、一人一人分の、廊下を歩く足音が聞こえてきた。

やがて、ちあきが侍している部屋の戸がガラッと開いた。

「お？ 長介さんの使いだっていうから、爺様を想像していたんだが、可愛らしいお嬢さんで」

店主ではない。黒い着流しに手ぬぐいを肩にかけている。結構若く、そして、イケメン。その男、ちあきの顔を見て少々驚いたようにも見えたが、きつと気のせいだろう。

「ええと、鵜狩借遥さん？」

ちあきが恐る恐る訊くと、その男はイケメンをクシャッと歪めた。

「ああ！ オレが鵜狩だ。そういうアンタは？」

「あ、あたし？」

「ああ。長介さんの使いにしちゃ、アンタ若すぎだよ。まさか、長介さんの孫、つてことはねえだろ？」

鋭い眼光。嘘はつけそうもない。

「実はあたし、変迅堂先生の知り合いで……」

「おお、変迅堂さんの！ これか？」

そう言っつて、鵜狩は少しいやらしい顔をしながら小指を立てた。

「……ち、違います！！」今はね、と心の中で付け加えるちあき。

「そうかい。ま、いいけどな」鵜狩は、不意に真面目な顔を見せてから続けた。「……そういえば、どうやら、変迅堂のヤツ、奉行所に引つ張られたらしいな」

「え？ 知ってるんですか？ それじゃあ話が早い！」

「話？」

「実は、鵜狩さんに、お聞きしたいことがあるんです。それは……」
鵜狩がちあきの言葉を遮った。「変迅堂が、四日前、どこにいたかを知りたい、ってことだろ？」

「え？なんでわかるんですか？！」

すると、鵜狩は指を一本立てて、チツチツチ、と振って、ニコツと笑った。「オレは戯作者。しかも、犯人当て物を書いている戯作者だぜ？ それくらい分かるってもんさ」

「犯人当て物？ 読本とか滑稽本じゃなくて？」ちあきが訊くと、鵜狩は続けた。

「犯人当て物、っていうのはな、物語の中で、例えば殺人が起きる。その下手人を当てる、そういう判じ物みたいな文章のことだ。オレが始めた」

つまりは、現代で言う推理小説である。ちなみに、「判じ物」というのは、文字や絵などと使った謎々である。

「へえ」あまり興味ないちあきは、軽く聞き流した。

「さて、本題。……実はな、オレにもよく分からないんだ」

「え？」

「だから」鵜狩は続けた。「四日前の夜、変迅堂がどこにいたか、知らないんだ」

「そうなんですか……」明らかに落胆を見せたちあき。

「ああ、あの日はな、確か、一人で酒を飲んでたからな。つうか、オレ、この数日、文人長屋に帰ってないな」

「え？ そんなに？」ちあきが訊くと、鵜狩はニコツと笑って続けた。

「ああ、オレよ、あんまり一つどころにいるのが好きじゃないんだ。つうか、嫌い。だから、あの文人長屋は江戸の拠点程度に捉えてるのさ」

「そ、そうなんですか」饒舌な鵜狩に押される形のちあきは愛想笑いを振りまくしかない。

「まあ、そんなわけだ。オレにも分からない。ごめんな。あんまり協力できなくて」

「ああ、いや、別に……」ちあきは、明らかに肩を落とした。

うゝむ。ちあきは、夕闇迫る江戸の町を、腕組しながら歩く。

結局、殆ど何にも分からなかったな。ちあきは思った。けれど、一つだけ分かったことがある。それは、「絶対に変迅堂先生は無実だ」ということ。

文人長屋の皆に話を聞いて、皆が皆「変迅堂」の名を、親しみを込めて語っていた。そして、皆、「アイツはそんなことをするヤツではない」と言ってくれた。それだけで、ずいぶん励みになる。

それに、写狂の証言も気になる。

写狂が言うには、「当夜、自分の他に長屋に一人居る気配がしたが、そのうち二人に増えた」というものだ。けれど、その日は結局、皆が皆外出していたようだから、明らかにおかしい。人二人も気配がするはずもないのだ。

と、すれば、長屋の住人の誰かが嘘をついている。でも、こんな場面で嘘をつくということは、それはつまり、嘘をついた人間が犯人である可能性が高いということだ。

もちろん、写狂が犯人で、その証言がまるっきりの嘘、という可能性もある。けれど、仮に写狂が犯人だったとして、そんな嘘をつく理由が見当たらない。

とにかく、変迅堂が犯人でない蓋然性はかなり高いといえる。

でも、決定打に欠けるな。ちあきは首をかしげた。

そうなのだ。まだ、状況証拠のようなものしか揃っていない。確実に、「変迅堂が犯人でない」証拠が見当たらないのだ。

明日も頑張らなきゃ。

ちあきは、そう夕日に誓うのだった。

第四話「サスペンス八百八町」【20】

5

その日の夜、江戸の町に、半鐘が鳴り響いた。

そこは町火消「お組」の管轄区域だったから、「お組」の火消し連中はその消火に向かった。当然、その中には、お組の期待の星・カツちゃんも含まれていた。

だが、火の発見が早かったこと、燃やされたのが納屋だったこともあり、被害はさほどでもなく、すぐに鎮火された。だが、納屋一軒は完全に燃え、柱が数本、まるで卒塔婆のように立ち尽くし、その根元に黒い梁が、プスプス音を立て、熱を持って転がっていた。「納屋の火事、か。こりゃ、火付けか」

お組の勇左爺さんは、煤臭い現場でそう呟いた。

爺さん、とはいっても、勇左はまだそんな年ではない。まだまだ29歳、働き盛りである。

そう、勇左が仲間内で呼ばれるのは、常に「腰が痛い」の「肩が上がらない」のだと、まるで年寄りみたいなのを言うからだ。それに、物事を見る目が、他の若い連中よりはるかに優れている、という点も、彼が年寄り扱いされる要因なのかもしれない。

「ど、どういうことでえ、勇左爺さん？」

隣で焼け残った木材を片付けるカツちゃんが訊いた。すると、勇左はしかめ面をしてから続けた。

「よく考えれば分かるだろ。納屋に、火の気があるか？」

「あー！」

「……そう、納屋に火の気はねえ。ってことは、火付けの可能性が高いだろ」

「で、でも……タバコの火が燃え移ったりした火事なんじゃ？」

勇左は首を横に振った。「この納屋の位置を考えてみる」

この納屋は、袋小路の一番奥に立地していた。もし、この納屋が

ものすごい勢いで焼けたら、ここら一帯が延焼して、この一帯に住む連中が焼け出されてしまったことであろう。

「袋小路の一番奥に、用のあるヤツなんていない。……たとえば、歩きタバコの不始末だとするだろ？ そうだとしたら、往來で火事になるはず。どこにも続かない袋小路でこんなことが起こるはずはない」

「難しいこたあ分からねえけどもよ」カツちゃんは火で真つ黒の木材を、鳶で引つ張りあげながら続けた。「こりゃ、火付けだ、つてことかい」

「ああ、さつきからそう言ってる。……だが、この火付け……」
「え？」

勇左は左手を開いて見せた。「最近流行の、臭水で焚き付ける、火付けかもな」

勇左の左手には、どろつとしてねばねばした、黒い液体が乗っかっていた。これは……。カツちゃんは、四日前に拾った臭水のことを思い出した。

「勇左爺さん、これ、どこで？」

「ああ、一番焼けている近辺で見つけた。多分、焼け残ったヤツだ」
「でも、おかしいじゃねえか！」いつからか、カツちゃんの作業の手は止まっていた。

「何が」ぶつきらばうに、勇左は聞き返す。

「その、件の火付けは、捕まったんじゃねえのか?!」

今日の朝、南町奉行所より「件の火付け逮捕」の知らせが届いた。「捕まえたから、もう安心されたし」とのことだったから、いささか今日の火事は面食らった。

しかも、その火事が、火付けで、その犯人が奉行所で捕まっているはずのヤツ!? カツちゃんは、頭がぐるぐる回るのを自覚していた。

そんなカツちゃんを、勇左は鼻で笑った。

「なにがおかしいんでえ」

「ああ、すまんすまん。……こういう場合、いろんな可能性を考えたことが出来る。例えば、共犯が居る、って可能性だが……」

「共犯？」

「ああ。一緒に火付けをしてるヤツがいる可能性。だが、火付けに共犯なんて、聞いたことないな。普通、火付けは愉快犯、要は単独犯だ」

「じゃあ、他の可能性は？」

まるで、親に昔話の続きをせがむ子供のように、話を促すカツチャん。

「至極簡単」勇左は指を立てた。「今、奉行所に捕まっている火付けが無実で、本当の火付けが居る、って可能性だな」

「ま、まさかあ」間延びした声でカツチャんは言った。「奉行所が間違いを犯すもんか？」

「へへ、そりや当たり前さ」勇左は言った。「お奉行様だって人間。与力様だって人間。同心様だって人間。その同心が雇ってる岡つきも、その部下の下っ引きも人間。だったら当然、間違いを犯す可能性はあるさ」

「で、でもよお」

「かの、名奉行・大岡越前守様だって、どこぞの代官してたころ、罪の無い人間に罪を着せちまって、終生後悔してた、っていうじゃないか」

「むむむ……」

講談なんかで伝説の、名奉行・大岡越前守を引き合いに出されては、カツチャんも納得するしかない。

「とにかく」不承不承に納得しようとしているカツチャんを尻目に、勇左は続けた。「多分、火付けはまだ、この江戸の町に隠れてる。

……俺たち火消は、気を払わなくちゃな」

「うん」

カツチャんは、頷いた。そして、いつからか止まった手を、また動かしはじめた。鳶を木材に引っ掛け、引っ張る。だが、びくとも

しない。

「んぬぬぬぬぬ！」顔を真っ赤にして引っ張っても、まるで動く気配がない。

カツちゃんが横を見ると、相変わらず勇左は難しい顔をして考え込んでいる。

「おい、勇左爺さん！」

「ん？」明らかな生返事。

「ちよつと、手伝ってくれ。これ、一人じゃ重くて!!！」

すると、ちよつと考えるポーズをとってから、勇左はしれつと言った。

「すまん、四十肩で……」

「んなわけあるか！ アンタ、まだ二十歳台だろ!!！」

「ごほつごほつ！ 持病の癩しかが!!！」大げさに咳き込む勇左。

「おい……」

結局、件の木材はカツちゃん一人で運びました、ハイ。

第四話「サスペンス八百八町」【21】

6

次の日の朝、長介のところに吉報が舞い込んできた。

それこそ、突然のことだった。朝、長介の所に奉行所の人間がやってきて、「疑いが晴れたよって、変迅堂の身柄を引き取られたし」と何の前触れもなく伝えてきた。こういうとき、店子の身柄の引受人の役割も負っていた大家である、長介は出向かなくてはならない。まったく、朝の早くから……、これだからお役所仕事は……。と、閉口しながらも、長介は町人の正装である着流しをまとった。

朝の日本橋界限は、少しモヤがかかり、先の景色が霞んでいた。まだ人もまばらで、せいぜい朝を告げる豆腐屋が歩いている程度だった。その中を、モヤを掻き分けるように、前に向かい歩く長介。しかし……。長介は腕を組みながら思わず口について疑問が出た。「なんで、変迅堂さんが、釈放されるのだろう」

あれだけ、賂をちらつかせてもなお強硬姿勢を取っていた奉行所なのに、なんでここに来て釈放なのだ？ 釈然としないし、要領も得ない。

「もしか……」長介は呟いた。「火付けの件、何か事が動いたのかな？」

そんなこんなと思案するうち、南町奉行所の前までやってきた。いつもドンと構えている門。この門の横に、「南町奉行所」と大書された表札が掛けられている。いつもの事だが、どうにもこの門は好きにはなれないな、と長介は少し思った。

長介はその大門の脇にある通用門を叩き、中に入った。

通用門の門番に咎められそうになったけれど、「身柄引受人です」と長介が断ると、門番はむっつりと黙り込んでしまった。

さて、奉行所の同心詰め所に行くと、辻村同心が詰め所前に立つ

ていた。

「おや、辻村さん、ご精勤ですなあ」

「ああ、これはこれは」辻村同心は恭しく頭を下げた。「こんなに朝早くお呼びたてして申し訳ありません」

ほっほっほ、と笑ってから長介は言った。「いやいや、店子の面倒を見るのは大家の務め。それに……。お奉行所のメンツを潰すのは、私も不本意ですよ」

辻村同心は嫌な顔を隠さなかった。「それは穿ちすぎでしょう」長介は続けた。「きつと、ウチの変迅堂は容疑不充分なんでしょう？ だから、こうして朝早く……」

が、これ以上言葉を継ぐのを、辻村の目が制した。

おや、さすがに言い過ぎたかな、と長介は心の中で舌をペロリと出した。

「失礼しました。……とにかく、変迅堂さんをお迎えにあがりまして」

「ええ、では、こちらです」辻村は手で歩く先を指すと、先導し始めた。

変迅堂は、牢屋ではなく、奉行所内の畳の間にいた。これは、相当に異例の措置である。

変迅堂は既に平服に着替えて、畳の上に座していた。顔を見るに、やつれた様子もない。それに疲れているような感じも無い。

部屋で座っていた変迅堂は、長介の方に向き直ると、微笑みを見せた。

「ああ！ 長介さん！ こんな朝早く、申し訳ありません」

出た言葉にも、疲れややつれはない。ひとまず、長介は胸を撫で下ろした。

「ほっほ、元気で良かった。変迅堂さん、随分とお元気そうですね」

変迅堂は頭を掻いた。「いや、思いのほか、丁重な扱いをされまして……。石抱きとかさせられるのかと思ってたんですが……」

長介には、変迅堂のあまりの平静さにおかしくなった。「普通、石抱きを覚悟したならもつと憔悴とするもののはずですがね……？」

石抱き、というのは、当時行なわれていた拷問である。断面が三角の木材を並べ、その上に人間を正座させる。これだけでもかなり痛いだけけれど、さらにその上、膝の上に板状の石を載せていくのである。

これをやると、大抵の人間は足をバキバキに砕かれ、一生立てない体になってしまう、という代物である。

もちろんこんな拷問は、恒常的に行なわれていたわけではない。石抱きのような重い拷問の場合は、その容疑者の容疑がとんでもない重罪である場合、または犯人が完全に特定されており、もはや犯人の自白だけ欲しい場合に用いられた。

しかし、今回の変迅堂の件は、微妙な件だった。

何せ、変迅堂の両肩にかかっていた嫌疑は火付けに武器の秘匿、という重罪だったのである。気の早い、あるいは乱暴な、あるいはその両方の与力が担当していたら、間違いなく石抱きに処せられていたことだろう。

「そういう意味では、あの与力さんに感謝ですかね」

変迅堂は、ニシシシ、と笑って見せた。

「まあ、こんなところでなんだから」長介は、変迅堂に言った。「話の続きは私の家でやろう」

「こんなところで、って……」辻村同心は、嫌な顔をしながら頭を掻いた。

「あ、いやいや、そんなつもりじゃあ……」

長介が頭を掻くと、辻村同心は人懐こい笑顔を見せた。

「はは、冗談です。とにかく、ご迷惑をおかけした」

辻村同心は、二人に頭を下げた。

それを、長介は咎めた。「辻村さん、お武家様が町人に頭を下げるものではありませんよ」

辻村は言葉を継いだ。「いや、迷惑を掛けた時に頭を下げるのは、

人としての務めです。それに、もはや」

「もはや？」長介と変迅堂は先に促した。

「武家も町人も、あつたもんじゃないんじゃないですか」辻村は、自分のよれよれの着流しを眺めて、自嘲気味に言った。

この時代には、武士はかなり貧乏になっていた。

色々な理由があるのだけれど、その理由の一番には武士が、貨幣経済という時代の波に巻き込まれた、というものが大きい。武士の給料、つまり禄は米で支払われるものだったけれど、人は米だけで生活できない。当然、米を換金して、その金で生活することになる。そうやって貨幣経済に巻き込まれていった武士たちは華美に走り、やがては没落していった。この時代には、武士の台所は大体が火の車だった。

特に、下級武士の生活は本当に厳しかった。

元々貰いが少ない上に、物価の高い江戸暮らしをしているこの時代の同心など、そこらの町人よりはるかに貧乏な暮らしをしている。事実、辻村同心の姿からは、どことなく貧乏神のおいがする。

そうなってくると、武士の身分なんてもの、あつてないようなものである。「武士は食わねど高楊枝」といえども、やはり武士は物を食わずにはいられない。けれど、先立つものがない。ということ、当然、商人からお金を借りることになる。

このころには、町人と武士の間の交流が進み、あまり身分の差が意識されなくなっていたのだ。

辻村が、自嘲気味に語った言葉の裏にはそういう意味がある。

「……そうですね」

まさか、そうですねと相槌を打つわけにもいかない長介は曖昧に答えた。

「ま、そんなこととはにかく」辻村同心はよれよれの着流しの襟を正した。「勝手な言い分なのですが、出来るだけ人目がつかない朝の内に、お引取りください」

「はは、そうですね」

長介はそう言うと、変迅堂に立つように促した。そして、辻村同心に目礼すると、変迅堂を連れ立ち、朝の奉行所から、まるで逃げようにコソコソと出て行った。

長介の家に帰ったころでも、まだ江戸の街はまどろんでいた。

「長介さん」と、変迅堂は椀に盛られたご飯をかつ込みつつ、合間に言葉を掛けた。

「ん、なんですか」同じくご飯をかつ込む長介。

変迅堂は箸を止めた。「朝ごはんを頂くのはありがたいんですけどね」

長介も箸を止め、変迅堂の顔を覗きこんだ。「ん？ なんだね？

……ときに、ご飯粒」

「ああ」長介に箸で頬を指差された変迅堂は、頬を手で拭いた。「で、なんで私をここに連れてきたんですか」

「ここは日本橋界限・長介の家である。」

別に、釈放になったのだから、変迅堂はどこに行ってもよいはずだ。なのに、どうしたわけか長介は変迅堂を長介の家に迎えたのだ。「おやおや」悪戯っぽく唇を伸ばし長介は続けた。「朝ごはん、不服かね」

「いえいえ、とんでもない！」

長介が用意してくれた朝食は、とても豪華なものだった。それこそ、変迅堂の一日分の食費分くらいは掛けたんじゃないか、というくらいに豪華なものだった。

「ほっほっほ、これは変迅堂さんが釈放されるといってもんで、料理人に作らせたものでねえ。不服なんて、あるはずないねえ」長介は笑った。

長介は金持ちだから、色々な業者が出入りする。だから、朝早くでも一声掛ければ料理人が動くのだ。けれど、金持ちだからと言えど、変迅堂にそんな料理を出してくれたのは、長介の優しさなのだろう。

第四話「サスペンス八百八町」【22】

「で、なんですが……」変迅堂は言葉を継いだ。

「……うん？ せつかくの料理が冷めるではないか。黙って食べなされ」

「いや……それよりも……」変迅堂は頭を掻いた。

「ん？ なんだね？」

「なんで、食膳が一つ多いんですか？」

変迅堂は、誰も手をつけていない食膳に目を遣った。長介さんは一人暮らし。それに変迅堂を加えても二人。なのに、食膳は三つある。これいかに？

「ほっほっほ、すぐにわかりますよ」長介は、汁物をズズズ、とすすった。

「すぐに？」変迅堂は首をかしげた。

そんな頃だった。

「あのう！ 長介さん！？ 呼ばれてきましたけど、なにかあったんですか？」

若い、伸びやかな女の子の声が、玄関の方から響いた。

「ん？ この声……」

変迅堂は、聞き覚えのある声に、長介の顔をまるでなにかを伺うように覗き込んだ。

「ほっほっほ」長介は声を張り上げた。「ああ、はいつておいで！」

「はい！」

そんな声が響いたと思うと、今度は廊下を歩く足音が響いた。

「あの、長介さん、何で……」

「ん？ なんだい？」

そんな会話を二人で繰り返した頃、戸がガラリと開いた。

「長介さん、おはようございます……、って、え！？」

「あ」

変迅堂は、思わず声をあげた。予想はしていても、やっぱりダメである。思わず声が出てしまう。

「せ、先生……！」やっぱり、その客はちあきだった。

ちあきは、最初呆然とした顔だったけれど、そのうち顔に血色を取り戻していった。そして、目は次第に充血していき、涙がたまっていく。

「先生！」

ちあきは、これぞダイブ、というくらい見事なダイブを変迅堂に放った。腕を思い切り広げ、体を宙に浮かせて。そう、このまま、変迅堂の胸に飛び込もう、というのがちあきの算段なのだ。

「え！ え！ え!?!」

……だけれど、そのダイブに、なんとなく恐怖を覚えた変迅堂は、思わずそのダイブを思いっきり避けてしまった。結果。
ズザザザ。

ちあきは、畳に思いっきり頭をぶつける羽目になってしまった。

「ぐえ!!」と、女の子らしからぬ声を上げて。

だけれど、ちあきはすぐに立ち上がると、変迅堂の頬にグーを一発入れた。

今度は、変迅堂がぐえ！ と、主役らしからぬ声を出す番だった。

「なんで避けるのよ!!! もう、馬鹿!!! つつか無粋者!!!」

ちあきはバカスカと変迅堂を殴り続けた。変迅堂は避けもせず、そのパンチを受け続ける。ちあきは、涙を流しながらも、笑顔でバカスカと変迅堂を殴り続ける。そして変迅堂も、笑顔で……とは行かなかった。

「ぐえ!!! いや、本当にキツイ!!! ぐ、ぐふっ!!!」

ちあきの馬鹿力のせいで、まさに彼岸を臨みそうになっている変迅堂。無論、変迅堂のそんな叫びなど、あのちあきに届くはずもない。

「あのう、痴話喧嘩はよそでやってくれんかね……」

見るに見かね、長介がそう呟くと、ちあきはグーの矛先を長介に変じようとした。

「いや！ それはまずいよちあき殿！！ おじいちゃん殴っちゃ！！」

変迅堂は思わずそう叫んだ。

「なにおう！！」今度は長介が声を張り上げた。「私はね、まだまだ還暦回ってないんですよ！！」

「え！ そうなんですか！？」

「もう、長介さんのバカ……！！」

なんだが、てんてこ舞いでドタバタな様相を呈してるのだった。

……しばらく、お待ち下さい……。

「……なんだか、疲れちゃった」肩で息をして、ちあきはげっそりと呟いた。

「ええ、もう何がなんだか」変迅堂もげっそりとしている。

「……ま、なんにせよ」長介は言った。「ご飯、食べないかね？」

三人は、さっきまでのドタバタを棚上げして、とりあえずご飯を頂いた。バクバク。

「しかし、良かったねえ。変迅堂さん、釈放されて」

「ご飯を食べ終わって、長介は楊枝をシーシーさせながら言った。すると、変迅堂は複雑な表情を浮かべた。

「どしたの？ 先生？ 釈放されて嬉しくないの？」

ちあきが訊くと、変迅堂は頭を掻いて答えた。

「いや、それが……」

変迅堂は、意外なことを話し始めた。

変迅堂は、奉行所に引つ立てられてから、仁杉与力の取調べに遭ったという。とは言っても、拷問の類は一切なく、あくまで尋問だった、という。しかし、本来の罪状であるはずの火付けの件にはあまり触れず、むしろ「これはなんだ」とか「これはどう使う」とい

った、変迅堂の発明に対する尋問が主だった。

もちろん、変迅堂の発明したものだから、「雨を消す尺玉」だあ、周りの景色をそのまま紙の上に透写する機械だあ、ただの水鉄砲だあ、という答えしか出ない。

そんな受け答えを一刻ほど繰り返すうち、やがて仁杉与力は、ため息を一つ吐いたのだという。

そして、さじを投げたように言った。「尋問、終わりにしましゅう」

そして、そのまま、一日奉行所に軟禁されたのだという。

「ほう……」長介は、話を聞きながらアゴを撫でた。

「どういうことかしら？」

長介は、己の頬をピシヤリと叩いた。「きつと、仁杉与力様とやら、最初っから、変迅堂さんを別件逮捕するつもりだったんですね」

「え、どういうこと？」ちあきは長介の顔を覗きこんだ。

「つまりは」と前置きして長介は言った。「火付け騒ぎにかこつけて、変迅堂さんを別の件で尋問したかったのでしょうか」

「ああ、発明の件ですか」変迅堂は、長介に向き直った。

「そう。きつと、あの与力様、変迅堂さんの作った発明の類を、武器か何かだと勘違いしておられたのでしょうか……けれど、変迅堂さんも変迅堂さんですよ」

「？」ちあきと変迅堂は首を傾げた。

「きつと、与力様はあの水鉄砲を見たんですよ」長介は言った。「私に見せてくれた、あの実物と見紛うばかりの水鉄砲。確かにアレを江戸界隈で持ち歩いていれば、それは目立つだろうし、奉行所だつて目をつけないわけにはいかないでしょう？」

「そういうもんなんですか？」変迅堂が訊くと、長介は苦々しく言つた。

「そういうものです」

「んじゃあ」変迅堂は舌をペロリと出した。「今度から気をつけま

す

長介は、ちよつと部屋を不意に見回した。そして、深くため息を吐いた。風が吹き、風鈴を鳴らし、三人の髪も揺らす。

「どうしました？」変迅堂は、長介に訊いた。「なにか、ありましたか」

「うん……。実はね……」

「どうしたのよ」ちあきが重ねて訊いた。

「ああ、実は……。もしかすると、なのだけれどね」苦悶の表情を浮かべる長介。

「あまり焦らさないで下さいよ」

「ああ、済まないねえ。……しかし、あんまりいい話ではないものでねえ」

「え？」ちあきと変迅堂が、同時に声を出した。

目を細めながら、長介は言った。

「火付けは、きつと、文人長屋にいる。この事実は揺るがし難いんだと思うんですよねえ」

「……やっぱり、そうなんですか」ちあきが訊いた。

長介は目をシパシパさせながら言った。「ん、私も気になってね、色んな人に訊いてはいたんですよ。すると、状況的に、文人長屋の面々の内、誰かが火付けだ、というのは揺るがし難い事実に思えましてなあ」

「そ、そんな」変迅堂は狼狽気味に言葉を継いだ。「文人長屋の人たちは、皆が皆、気持ちのいい人たちじゃないですか！ なんてそんなことを言うんですか」

「私だってね、そんなこと言いたくないんですよ」長介は心なしか俯きながら言った。「ましてや、私は大家。文人長屋に住むのは、私の店子。店子と言えば子も同然。一体どこの親が、「わが子」が犯罪に手を染めた、なんて言いたいと思うのですか。けれど、状況は、「わが子」の内、誰かが火付けをしている、ということを示している。ならば、親として、やることはやらねば」

そんな、悲壮な決意を胸に秘めていたなんて。変迅堂もちあきも、長介の俯いた顔を、ただただ眺めた。

「どうする、おつもりですか」変迅堂は、長介の顔を覗きこみながら言った。

「決まっているでしょう」長介は弱々しく答えた。「自分の手で、犯人を見つけるしかないでしょう」

「そんな」

ちあきは何かを言いかけようとしたけれど、長介がそれを目で制した。

「これは、私がやるしかないんです」長介は言葉を継いだ。「子の不始末は親の責任。店子の不始末は、大家の責任なんです」

一瞬の、沈黙。空気が、一瞬ひんやりと、まるで白刃のように鋭く冷えたのを変迅堂とちあきは感じた。きつと、この空気は、長介の覚悟が成せるものなのだろう。

第四話「サスペンス八百八町」【23】

けれど、そんな空気に、真つ向から変迅堂は挑んだ。

変迅堂は、長介の両肩をがっしと掴んだ。そして、長介の目を見据え、言った。

「その仕事、私にさせてください」

「な、なんですか？」長介は変迅堂に訊き返した。

「でも、先生、意外だなあ」ちあきは、変迅堂の横でそう呟いた。

「ん？何が？」変迅堂は、江戸の界隈を眺めながら、言葉を返した。

「だって」ちあきは言葉を継いだ。「長介さんとあんなにやりあうなんて。先生が、あんなに食い下がるのはじめて見たよ」

「……そうかな？むむむ」

あの後、長介と変迅堂は喧嘩になった。

「だから、これは大家の仕事です！！」「いいえ、私にやらせてください！！」の押し問答。変迅堂も長介もガンとして折れなかった。けれど、この頑固者決定戦は変迅堂の方に軍配が上がったらしい。長介は諦めたように首を振ると、たった一言「……それじゃあ、変迅堂さん、お願いしますよ」と呟いた。

そして長介の家をお暇して、今こうして二人で江戸の巷ちまたを歩いているわけだ。

「でも、先生」

「ん、なんだい？」

「先生は、文人長屋の店子さんたちのうち、誰かが火付けだと思ってるの？」

ちあきは、昨日出会った、気持ちのいい文人長屋の面々の顔を思い出した。すると変迅堂はアゴを手でさすって、空を仰いだ。

「……状況的にはね、文人長屋の面々のうちの誰かなんだ」

「やっぱりそうなの？」

「うん」変迅堂は言った。「ちあき殿の話によると、勝次殿が文人長屋に火付を追い詰めたらしいとのことじゃないか。けれど、長屋には犯人らしき影はなかった」

「うん。カツちゃんが言うには、空家までは改めた、って」

「ってことは」変迅堂は言った。「裏を返せば、勝次殿は人が住んでいるところは改めていない、ってことになる。と、いうことは、犯人は、人が住んでいる長屋に逃げ込んだ、ってことです。そうすると、文人長屋のうち誰かが犯人で、自分の部屋に逃げ込んだ、っていう可能性が高いんだと思うんです」

ちあきがここで疑問を差し挟んだ。「え？たまたま追い詰められた犯人が、人の住んでいる長屋に逃げ込んだ、っていう可能性はないの？」

変迅堂は答えた。「いや、それはないね」

「なんで？」

「それはね」変迅堂は答えた。「例えば、ちあき殿が犯人だとして、生活臭のする、つまりは人がいるかも知れない長屋に逃げ込むかい？　しかも、近くには空家があるにも関わらず」

「あ、そっか」ちあきは手をポンと打った。「もし犯人がこの長屋に関係ない人だったら、空家に逃げ込むのが筋よね」

「そう。つまり」変迅堂は、抑揚を込めずに言った。「これらの状況から、犯人は文人長屋の面々のうち誰か。つまり、式部さん、修静庵さん、半助さん、鵜狩さん、写狂さん、そして……わたし。その六人に絞られるわけです」

「先生、字分が犯人っていう可能性は考えなくて良いんじゃない？　だって、先生はやってないんでしょ？」

そうちあきが言うと変迅堂は笑った。「もちろんです。でも……」「でも？」

「例えば、ちあき殿から見たら、私が犯人か否かは釈然としないわけです。そうであるからには、公平を期すために可能性を残してお

くべきなんだろうね」

「ちあきは唇を伸ばした。「でもさ、先生、やってないんでしょ？」
「もちろん！」

「だったら「ちあきは言った。「あたしは信じる」

「ちあきは、今の言葉に全身全霊を込めたのだけれど、
「うん」

と、変迅堂は曖昧に頷いた。きっと、変迅堂はちあきの言葉の本当の意味をつかめなかったのだろう。

「でもさ、先生」

「なんだい？」

「自分がやってないなら、はっきりと言わないと、犯人にされちゃうよ。何事もはっきり言わなきゃダメだよ」

この「何事もはっきり言わなきゃダメだよ」というちあきの言葉は、春吉の言葉の受け売りである。でも………どういつ文脈で言われた言葉だったかなあ……。と、ちあきは記憶を浚いだそうと考え込む。

「でもね」変迅堂は、そんなちあきに言った。「自分が無実だ、つて叫ぶためには、無実だ、つていう証拠を出さなきゃダメなんだよね」

そんな変迅堂の言葉を、ちあきは聞き流していた。

なぜなら、ちあきは記憶の底からまさにこの瞬間、春吉に言われた言葉を、どのシチュエーションで言われたかを思い出そうとしていたからだ。

あ！ 思い出した。

春吉があんなことを言ったのは、変迅堂と九十九里に行った前日だった。

ルンルンと翌日のことを楽しみにしているちあきに、春吉はこう言ったのだ。「何事も、はっきり言わなきゃ相手に伝わらねえぞ、特に物分りの悪いやつにはな」って。

ちあきが「どういう意味よ」って聞いても、春吉はキセルをガジ

ガジ噛むばかりで、何も答えてくれなかった。ちなみに、グーをかまして、まるで答えてくれなかった。というより、ちあきのグーをモ口に食らい、春吉はノックダウンしてしまったのであるが。

「ちあき殿？ 聞いてる？」

「え?! え?!」ちあきは、変迅堂の言葉で、ようやく追憶の世界から元に戻ってきた。

「ああ、聞いてなかったみたいだね」変迅堂は、ちよつとため息をついた。

「ああ、ごめん、先生」

「ああ、いや、どうでもいいことだったから、まあ良いんだけど…

…」

「なによ、そんな言い淀まないで言ってよ」

ちあきは食い下がった。こういう風に、変迅堂が言い淀んでいるときには、ちあきにとって聞く価値のあること、ちあきにとって嬉しいことを、変迅堂は話そうとしているときだ、ということを理解している。

「ああ、うん。この事件が落ち着いたら、甘いものでも食べに行こうか、って」

「……え？」ちあきは思わず訊き直した。

「いや、だから」変迅堂は言った。「この事件が落ち着いたらさ、甘いものでも食べに行こう」

「ほ、ホント!？」ちあきは目を輝かせた。

「ホント」変迅堂はニコツと微笑んだ。「ただし、この事件が解決したら、の話だけだね」

「むむむ……」ちあきは、ちよつとさびしそうな顔を浮かべた。

「ま、とにかく」そんなちあきの表情の変化に気付かず、変迅堂は言った。「まずは、やることをやらなきゃ」

ちあきは、ため息を飲み込んだ。

……はあ。じゃあ、しばらくお預けか。先生との、逢引。

ちあきが夏の陽光に萎れた草のように、しなしなと肩を落とした

のは言うまでもない。

「でもさ」ちあきは、肩を落としたまま訊いた。「これから、どうするの？」

「実はね」変迅堂は道行く往来に目を向けながら言った。「犯人の目星はついてるんだ」

ちあきは、驚愕の顔を見せた。「え！？ そうなの！？」

変迅堂はちよつと憂いを秘めた微笑みを見せながら頷いた。「ちあき殿から訊いた話を総合して、ね」

実はさつき、長介の家で、これまでのことを確認したのだ。その中で、ちあきが集めた情報も変迅堂の耳に入ることになったのだ。そして、変迅堂自身が持っている情報を加味すれば……。きっと、火付けはあの人だ、という目星がついているのだ。

「でもさ」変迅堂は続けた。「正直、信じられないんだ」

それはそうだ。同じ長屋の住人といえば、それこそ隣近所、いや、むしろ兄弟にも等しい濃密な関係を持つ。今、変迅堂の頭を掠めている人物も、変迅堂にとっては兄弟も同然なのだ。そんな人が犯人だなんて、どうして信じられる？

「でも」ちあきは言った。「その人を止めないことには」「分かってるよ」

そんなころ、道の往来から、二人を、いや、正確にはちあきを弱しい声で呼び止めた者が居た。

「……おお、ちあつちゃん。こんなところで奇遇じゃねえかあ……あ、なんだ、変の字もいるのかよ……」

それは、カツちゃんであった。

よれよれの半纏、くたびれた股引。そして、目には隈。そして、カツちゃんの周りを取り巻くどんよりとした空気。そのどれを取っても、明らかに「朝帰り」の面であった。

「ど、どうしたの？ すごい眠そうだよ？」

ちあきがそう訊くと、カツちゃんはどんよりとしたテンションで言葉を返した。

「あ、ああ……昨日、火付け騒ぎがあつてなあ……。徹夜で作業さ……、ははは。んで、今終わったトコなんだ……。ああ、眠い……だるい……」

「だ、大丈夫？」

「ダメ。今すぐ寝れそう……。でも、今日もきつと……仕事があるはずなんだ……」

「え？ なんで？」

ちあきが訊くと、カッチちゃんは地獄の底のような深く暗い目のまま、答えた。

第四話「サスペンス八百八町」【24】

「ああ、きつと、今日も火事が起こるからさ。……ここだけの話なんだがよ。奉行所が、例の臭水の火付けと思しきヤロウを一回捕まえたらしいんだけどよ」

あ、それって、先生のことだ。と、ちあきは変迅堂の顔を眺めた。カツちゃんは続けた。「だつつうのに、その火付けの仕業っぽい火事が起こつちまつた。どうやらよ、奉行所がしょつ引いたヤツはシロだつたみたいなんだよ。……だからよ、きつと火付けはまだ江戸に居て、火をつけて回るだろう、ってんで、今日も出勤しなくちゃなんだよ。……ときに」

カツちゃんは変迅堂の顔を、眠気に支配されかけた顔で覗き込んだ。
だ。

「変の字。おめえ、昨日の夜、どこに居やがつた？」

変迅堂は、ちよつと考えてから苦笑いで答えた。

「昨日……ですか？ 昨日は、南町奉行所に……」

「ほお、奉行所ねえ……ご大層なこつて……、え？！ 何て言つた！？」

カツちゃんの顔から、一瞬で眠気の色が消えた。

「だから、南町奉行所に……」

困つた顔で変迅堂が言葉を重ねると、カツちゃんはパチコンと手を打った。

「てえことは何か！？ さては、奉行所がしょつ引いてたのは、変の字だつたのかよ！」

あ、やつぱりカツちゃん、知らなかつたんだ……。と、ちあきは心の中でため息を吐いた。

そのちあきの横で、カツちゃんは、あからさまに残念そつな顔をした。

「ああ、なんだよ、つてことは、変の字が犯人じゃなかつたのかよ

？ じゃあ、一体誰が？」

あまりにカツちゃんがあからさまな顔をしたので、ちあきは口を尖らした。

「何よ！ カツちゃん！ 先生は無実なの！ 分かった!？」

「……ああ、分かった」

ちえ、残念な。と、カツちゃんは心の中で舌打ちをした。

「だがよ」カツちゃんは言葉を重ねた。「変の字が犯人でないとする、一体誰が犯人なんだろうな？」

二人は、心臓を射抜かれたような気分になった。そして、鈍い痛みがちくちくと二人の胸を刺した。

「ああ、その話なんだけどね……」という、ちあきの浮かない言葉に、カツちゃんは割って入った。

「もし犯人が捕まないと、死んだ子も、浮かばれねえよなあ」

「え？ どういうこと？」

ちあきが訊くと、カツちゃんは少し神妙な顔をして答えた。

「ああ。数日前の火事るとき、逃げおくれた子供が居たんだよ。まあ、オレ達お組の火消しが火の中に飛び込んで何とか助けたんだけどもよお、その子、大火傷を負っちゃまってなあ」

「え……」ちあきも、顔を曇らした。

「しかもだ。今日知ったんだがよ、その子、昨日死んだんだよ」

「死んだの」ちあきは思わず下を向いた。

「ああ。んで、その火事、やっぱり臭水が使われているってんで、例の火付けの犯行だ、ってことになってたんだよ。まったく、浮かばれないよなあ」カツちゃんの目には少し涙が溜まっていた。「罪のねえ子供がよ、どこの誰とも知れないヤロウに焼き殺されるなんてよ、不条理にも程があらあな」

「なあ」不意に、変迅堂が口を開いた。「勝次殿。今の話、本当か」普段と、口調が違う。ちあきは、変迅堂の口調の変化を敏感に感じ取った。

「本当に決まってるだろ!!」

「ああ、そつだよな。放っておくわけには行かないんだよな」
「？」カツちゃんは首を傾げた。

だが、ちあきには分かった。変迅堂の、今の言葉の意味が。多分、変迅堂は少なからず悩んでいたのだ。犯人を告発することを。けれど、ようやく吹っ切れたのかもしれない。このまま、犯人を放っておいたら被害者が増える。こう思ったのだろう。

「勝次殿」変迅堂は、どこまでもまっすぐな目でカツちゃんを捉えた。

「ああ？　なんでえ」そんな変迅堂を、まじめな顔で見返すカツちゃん。

「悪いんだが、付いてきてくれないか」

いやだよ、だって眠みいもの、と喉から出掛かったけれど、カツちゃんはそれらの言葉を飲み込んだ。なにせ、変迅堂の目が、どこまでも強く、まっすぐだったからだ。だから、カツちゃんはこう答えるしかなかった。

「……ああ、わかった」

そんなカツちゃんの答えに満足したように頷くと、変迅堂はちあきに言った。

「……ごめん、ちあき殿。ちょっとこれから、勝次殿と裏を取ってくる」

勝次殿と、というところにアクセントを置いて、変迅堂は言った。察しのいいちあきには、それがどういうことかわかった。

「要は、あたしは邪魔、ってことだね」力なく、ちあきは呟いた。

「ごめん」

「うん、いいんだ」

先生の邪魔だけは、絶対にしたくないんだ。先生の、枷にだけはなりたくないんだ。ちあきの口から出るはずだったこれらの言葉は、行き場を失ってちあきの心の海に沈んでいった。

「じゃあ」変迅堂は言った。「行こう。勝次殿」

「お、おう」

ちあきの悲しそうな顔と、変迅堂の顔を見比べていたカツちゃんだったが、早足で歩き出した変迅堂の後をやはり早足で追う。

ちあきは、そんな二人の後ろ姿を目で追った。悔しさを心の隅に隠しながら。

「で、よ」

道すがら、カツちゃんが変迅堂に訊いた。

「なんで、ちあっちゃんを突き放したんだ？」

「突き放した？」

変迅堂がさも心外そうに呟くと、カツちゃんは非難の色を滲ませながら口を尖らせる。

「あんな言い方したら、そりゃあ突き放したも同然だろ！」

変迅堂は、にぎやかな往来を眺めた。「突き放したつもりはないんだけど」

ち、つと舌打ちしてからカツちゃんは訊いた。「じゃあ、なんであんなことを言ったんだよ。ちあっちゃん、傷つくに決まってるじゃないか」

「でもね」変迅堂は言った。「もし、ちあき殿を、これ以上この話に関わらせたら、きつと傷つくと思うんだ。きつと、この事件の犯人は、ちあき殿が会ったことある人だから。わざわざ、ちあき殿が傷つくようなことを強いる必要は無いでしょ？」

「……でもよ、お前、あんな突き放し方したら、嫌われるかもしれないじゃないか、ちあっちゃんに」

カツちゃんの問いに、変迅堂は、頷いた。まるで、「承知している」と言わんばかりに。そして、変迅堂はポツリと呟いた。

「それはそれで、しょうがないね」

「え？」

「私は」変迅堂は、少しうつろな目で言った。「ちあき殿の泣き顔は見たくないんだ。あの娘は、本当に笑顔が似合う子だから。……だから、あの子をこれ以上巻き込みたくないんだ。勝手な言い分だ、

っていうのはわかってる。もしかしたら、ちあき殿が望んでいるのは“守られる”ってことじゃないのかもしれない。でも、私は、あの娘の笑顔を守りたいんだ。……って、かっこつけすぎかな？」

そう、変迅堂はおどけて見せた。

負けたな。と、カツちゃんは心から思った。

オレと、えらい違いじゃねえか。ひよっとしたら、変迅堂のほうが、ちあっちゃんのことをより深く想っているのかもなあ……。

そんな、淡い敗北感に苛まれつつもカツちゃんは、胸の痛みを我慢しながら訊いた。

「でよ、これから何をするんだ？」

「ああ、文人長屋に戻ります。それで……」

「それで？」

「裏を取る」変迅堂の目から、虚ろさが消えた。

「つつてもよお」カツちゃんは素直に訊いた。「どうやって？」

変迅堂は、指を一本立てた。「心配ご無用！」

第四話「サスペンス八百八町」【25】

7

その日の夜。

江戸・入谷の鬼子母神。

現代で言う台東区にある、鬼子母神を祭る社である。江戸っ子の言葉で、「恐れ入谷の鬼子母神」という言い回しがある（現代で言う「当たり前前田のクラッカー」みたいなものである）のだけれど、そんな言い回しが通用するほどに、江戸っ子の間ではポピュラーな社である。

昼は、繁華街・浅草が近いこともあり喧騒に支配されている入谷近辺であるが、夜ともなると静かになる。近くにある吉原などはそれこそ「不夜城」なのだけれど、入谷は他の江戸市中と同じく、まるで鯨に飲み込まれたような宵闇に支配されていた。しかも、今日はうす曇。月光も、今日は雲に遮られ、まったく姿を現さなかった。そんな、入谷・鬼子母神の境内に、妙な人影がうろついていた。その人影は、きよろきよろと辺りを見渡しながら、境内を歩いていた。しかし、その人影はやがて境内の奥まったところにある納屋の前で足を止めた。

一瞬、南風が吹いた。

「ふん、南風、か。もしかしたら、延焼するかもしれないな。だが、まあいい。あと、二箇所だしな……」

その人影は妙なことを口走りながらも、小脇に抱えた徳利の蓋をキュポンと開いた。そして、徳利を傾けると、徳利の中に入っていた粘性の強い、宵闇のように真っ黒な液体が地面に広がり、黒い水溜りを作る。その水溜りはどんどん広がり、遂には納屋の、木製の壁にまで達した。

「はは」その人影は、嗤った。

やがて、傾けられていた徳利の内容物は、すべて地面に流れ落ちた。まるで、人の心の滓おりのように暗く沈んだ液体が、地面に沁みこまずに黒い黒い、水溜りを作っている。

一瞬、また風が吹いた。

そんな風に着物を揺らしながら、その人影は呟いた。

「全て、燃えてしまえばいいんだ」

そして、その人影は、懐から石を二個取り出した。光彩を放つ黒い石。火打石だ。その火打石を、その人影が構えた、その瞬間だった。

バーーン！！

まるで、雷のように響く轟音。そして、空気を切り裂くような音。その人影は、今まで鉄砲の発射音は聞いた事がなかったけれど、鉄砲はこんな音がするのだろうか、いや、むしろ、花火の音に近いかとやけに落ち着いた感想を持っていたのだった。

けれど、音が近い。

もしかしたら、誰がいるのか？ こんなに暗い、境内にか？

その人影が、念のため周りを見回ろうとした、まさにその瞬間だった。

ポツ、ポツ。

人影の頬に、冷たい水の粒が当たった。これは……。その人影が自らの頬を拭ったのが早いのか、天から落ちてきた水の粒たちが、地面を鳴らし始めた。そして、その粒たちは、丸く黒い染みを、地面に作る。

「これは」自らの頬を拭いたあと、人影は呟いた。「雨、だと？」

そう、雨が降ってきたのだ。

しかも、ただの雨ではない。最初はポツポツだった雨が、やがてザアザアと音を立てて地面にぶつかるようになり、さらには滝のような大雨になった。

「馬鹿な」

人影は、体中をびしょびしょに濡らしながら空を睨んだ。

だが、人間に睨まれた程度で雨足を抑えるほど、雨雲は人間に優しくないので。けれど、そんな優しくないはずの雨雲から落ちてくる雨は、どうしたわけか優しくげだった。まるで、子供を叱る母親のような、厳しさと優しさを湛えて、水の粒たちが地面に向かって落ちていく。

「だが」人影はニヤリと笑った。「臭水の火は、こんな雨程度じゃあ消えんぞ。火さえつけてしまえば……！」

「確かに、臭水に火を放てば」突如、境内に男の声が響いた。伸びのある、若い男の声だった。「雨程度では消えませんが。それくらいに強烈な油です」

人影は、思わず声のしたほうに振り返った。

振り返った先には、赤い唐傘を差した男が、確かに立っていた。しかし、夜の闇と雨によって、その男の表情などは伺えなかった。

だが、人影にはその男が誰なのか分かった。文人長屋の住人……。

「変迅堂、か？」人影は、思わず、訊いた。

「ええ。そうです」

唐傘を差した男は、歩を人影に進めながら言った。やがて、人影の目にも、唐傘を差した男の顔が見えてきた。その顔は、見慣れた顔、変迅堂の顔のそれだった。

「邪魔を、しにきたのか」

「はい」変迅堂は力強く言った。

人影は笑った。「だが、何が出来る。臭水は一度火がついてしまえば、例えこんな大雨でも、その火を抑えることは出来ないんだぞ？」

変迅堂は言った。「ええ、確かに、臭水を燃料にした火は、そうそう消えませんが。でもそれは……」

「ん？」人影は、イヤに自身有りげな変迅堂を見遣る。

「火が点いていれば、の話ですけどね」

「なんだと？」

変迅堂は、人影の手にある火打石を指して言った。

「そんなに濡れた火打石で、臭水に着火できますか？　いくら燃料が可燃性の高い物質だとしても、火種がないんじゃ、そもそも火は点きませんよ」

人影は、思わず手にある火打石を眺めた。どちらの石も、自身と同じくびっしょりと濡れていた。不意に人影は火打石を、雨でじつとりと濡れる地面に落とした。それが、故意によるものなのか、それとも茫然自失の結果なのかは変迅堂からはよく分からなかった。

「…運がいいなあ、変迅堂。こんな、おあつらえ向きに、雨が降るなんて」人影は、ぼそりと呟いた。

「いいえ。これは、私の発明です」

「な、なんだと？」

「この雨は」変迅堂は空を優しく眺めながら言った。「私の発明、雨を降らせる尺玉」で作ったものなんです」

「!？」

変迅堂はきししし、と笑った。「上空の気温を下げてその場にとどまらせることで、空にある水気を全て雨に換える、という発明なんです」

人影は感心したように呟いた。「へえ、この雨が」人影は、雨が降りしきる空を、浮世の悲しさを湛えた目で眺めた。「お前の発明なのか。本当だとしたらすごいな。世のため人のために役に立つ」
「いえ、まだ試作品ですよ。だってこれは、空に水気がないところして雨は降りませんから」

人影は、もじもじと恥ずかしそうに手を振る変迅堂を睨んだ。そして、訊いた。

「なぜ？　分かった？」

「ん？　何がですか」

「なぜ、ここがわかった？　それに、なぜオレが犯人だと分かった？」人影は、まったく抑揚を込めずに言った。

「ああ、それは」変迅堂は言った。「簡単ですよ、鵜狩さん」

変迅堂の目の前に居たのは、文人長屋の住人にして戯作者の、鵜

狩借遙だった。

「簡単だったのか」鵜狩は力なく言った。「よかった」

「え？」変迅堂が思わず訊くと、鵜狩は答えた。

「オレの、意図通りだ」

「ど、どういうことですか？」

鵜狩は答えた。「この事件は、迷宮入りされちゃ、困るんだ」

「つ、捕まることも辞さない、と？」変迅堂が訊くと、

「ああ」

と、鵜狩は頷いた。さっきまでは雨で見えなかったけれど、まるで全ての物事を覚悟してしまったような、暗く固い顔の鵜狩だった。

「で？」鵜狩は続けて訊いた。「何でお前は、オレが犯人だと気付いたんだ？」

変迅堂は、鵜狩の覚悟を帯びた顔に戦慄を覚えながらも答えた。

「まずは、例の火付けが、臭水を使っている、という点でした。そこが、最初の取っ掛かりでした」

鵜狩は、何も言わなかった。

「臭水は、手に入りにくいんです。それこそ、日本広しと言えども数箇所ですしか手に入らないものでしょう。でも、犯人はそれで火を点けている。まずはそこでした」

「ああ、それでか」

「ええ。鵜狩さん、臭水の産出する越後出身じゃないですか。しかも、火付けが流行する直前に越後に帰っている。そりゃ怪しいですよ」

「ふんふん、それで？」

鵜狩は、ちよつと嬉しそうな顔を見せて、話を先に促した。

第四話「サスペンス八百八町」【26】

「しかも、ある筋から、『火付けは文人長屋の住人の誰か』だ、つていう話を聞いたので」

「ああ、あの若い火消から聞いたのかな。数日前、あいつに追いかけ回されて大変だったよ」と、鶺鴒は苦笑いを浮かべる。

「そうです」変迅堂も、苦笑いを浮かべて頷いた。「それからですよ。そこに気付いてからは、あなたが本当に怪しくしてしょうがなくなつてしまつた」

「ふ〜ん、続けて続けて」

どこか、他人事のようなスタンスを見せ、話を先に促す鶺鴒。その鶺鴒に急かされるようにして、言葉を継ぐ変迅堂。

「あとは、あなたがちあき殿と会つたときの反応もおかしかった」

「ちあき殿？ ああ、あの長介さんの使いの、かわいらしい女の子か」

変迅堂は続けた。「あのとときの、あなたの受け答えもおかしかったんです」

「は？」鶺鴒は心外そうな顔を見せた。「いや、そこではボ口を出していないはずだけれどな」

「いや、あなた、ちあき殿が何も言わないうちに、こう言つたそうじゃないですか。“変迅堂が、南町奉行所に引つ張られたらしいな”つて。あれが、おかしいんです」

「え？」

「実は」変迅堂は言った。「私が奉行所に引つ張られた話は、ごく一部の人間しか知らないはずなんです。どうやら、奉行所のほうで緘口令かんこうれいが敷かれていたらしくて。なんで、その事を知つたのは奉行所の人間に、ちあき殿、そして、あの逮捕のときに文人長屋にいた人間のみなんです。なのに、あなたは知つていた。おかしいんですよ」

「なに言ってるんだ」鵜狩は反論した。「別に、おかしいことは何も無いだろ？ だって、オレだって文人長屋の住人なんだ。知らないはずはないだろ」

「いいえ」変迅堂は首を振った。「あなたは、ちあき殿にこう言ったらいいですね？ “この4日間、文人長屋には帰ってない” ってすこし頭をひねった鵜狩だったが、すぐにしまった、という顔を見せた。ただし、その顔に悲壮感はあるで無く、まるで悪戯を咎められた子供のような、穏やかな顔だった。

変迅堂は続けた。「わかったようですね。そう、4日間ずっと文人長屋に帰っていないはずのあなたが、どうして知っているんですか？ 私が捕まったことを」

「またもや鵜狩は押し黙った。」

「実は、最初は私にも分かりませんでした。なんで、私が奉行所に捕まったことを知っているのか。そう、あなたが知るはず無いんです。たとえ、あなたが犯人であっても。でも」変迅堂は続けた。「もしかしたら、鵜狩さんは、私が奉行所に捕まったことを知ってたんじゃないか、奉行所に捕まるように仕向けたんじゃないか、って考え始めたんです」

「ふんふん、いい推察だ」

「……茶化さないで下さい。……そこで思い出したのが、与力様が言っていた、投げ文の存在です。与力様が言うには、“変迅堂が火付けだと示唆するものだった”とのことでした。でも、おかしいんですよ、投げ文なんて。……そもそも、誰かを犯人だと告発するんなら、しかるべき方法があるはずですよ。なのに、投げ文なんていうまどろっこしい手段で告発している」

「ふんふん、それでお前は考えたわけか。“犯人に嵌められたんだ”って」

「まあ」変迅堂は曖昧に頷いた。「そうです。きっと、犯人が投げ文をしたんだな、って思いました。そうじゃなきゃ、考えられないんですよ。投げ文をする理由が。もちろん、鵜狩さんが私の事を恨

みに思っていて、私を陥れよう、とした可能性も勿論あつたんですけどね。でも、どうしても、鵜狩さんみたいな直截ちよくさいな人が、そんな陰湿な手を使うとは思えませんでした。鵜狩さんだつたら、嫌いな人間には面と向かつて嫌い、つておっしやる方だから」

鵜狩は笑った。ハハハ、と雨を突き抜けそうな笑い声。そして言つた。

「えらい言われようだな。ま、当たつてるけどな」

変迅堂も笑った。けれど鵜狩ほどには笑えなかった。

鵜狩は鼻をフンと鳴らした。「笑つてくんな、変迅堂」

「笑えませんよ」

「そうか。じゃあ、話を続けてくれ」

「…はい。とにかく、考え始めたんです。なんで、鵜狩さんが、私を陥れたんだろう、つて。でも、いくら考えても、その理由は一つしか思い浮かばなかった。それは、あなたが火付けだ、つていう可能性。だつたら、私を犯人に仕立て上げる可能性があるな、つて思つたんです」

「ほう、お前は、どう理解してる？ 俺がお前を犯人に仕立てた理由」

「多分、時間稼ぎ、でしょ？」 変迅堂は訊いた。

鵜狩はちよつと憂いを秘めた顔を見せつつ、頷いた。「うん、その通り」

「火消に追い掛け回されて、自分の家の近くにまで迫られたあなたはきつと危機感を抱いたんでしょ？ すべて事が済む前に、捕まっちゃ困るつて」

「ほう、お前のその口ぶり、お前、全て知っているんだな？」 鵜狩は、感心したように、あるいは呆れたように声を上げた。

「だから」 変迅堂は、鵜狩の言葉に答えず、続けた。「私を仕立て上げたんでしょ？ 犯人に。そうすれば、しばらくは自分の行動は撃肘せいかうつされない。そういうことでしょう？」

「ああ、そうだ」

「けれど」変迅堂は訊いた。「なんで、私だったんですか？」

「ああ、それは」鵜狩は答えた。「正直、なんとなくだ」

「え？」

「いやいや、冗談」鵜狩は笑った。こんなときに冗談とは、食えない男である。

「じゃあ、なんで……」

「理由は」鵜狩は指を立てた。「二つある。一つはあの夜に、確実に文人長屋に居た人間だった、ってことだ。適当に誰かを仕立てたんじゃない、ダメだったんだ。もし、その場にいなかったことがあとで証明されちまつたら、結局疑いの目がそらせなくなっちゃうから」現代語で言い換えるなら、アリバイの無い人間だったから、ということだろう。

「あとは」鵜狩は続けた。「ちょっと小耳に挟んだことがあってな」
「え？」

「ほら、長介さんの家で会った日。あの日だ。長介さんにしこたま怒られた後、オレは式部と連れ立って甘味処に行ったんだ」

「ああ、そういえばそんなことを言っていましたね。……って、本当に行っただんですか？ 男二人で連れ立って？」

鵜狩は少し頷いて、続けた。「ああ。まあ、オレも甘いもの好きだし、式部もけっこうイケる口だからなあ。ま、そんなことはさておき。行った甘味処で小耳に挟んだんだよ」

「え？ 何を？」

「たまたま行った店で、大騒ぎしていた火消し風の男と、ちあき、だっけか、とにかく件の女の子が大騒ぎしてたんだ。いやあ、本当に内心ビクビクものだった。なにせ、その火消、オレを追い掛け回したヤツで、しかもその話をしてるんだからな。だが、話を盗み聞いているうちに、どうやらその火消は変迅堂を疑ってるようだった」
「まあ、そうでしょうね」変迅堂は言った。「その火消さん、どうしたわけか私のことが気に食わないらしくて……仲良くしたいんですけど」

鵜狩は心外な顔を見せて続けた。「いや、その火消、お前のごことが気に食わないから疑ってる、ってわけじゃないと思うけども？」

「そうなんですか？」

「むしろ、その火消が変迅堂を疑っていたのは、変迅堂が臭水を持っていたからだったようだが」

「ああ」

「臭水を、お前が持っている。それを知ったオレは、渡りに舟だと思っただ」

「確かに、臭水は珍品ですからね。犯人に仕立て上げるにはおあつらえ向きだった、ってことですね」変迅堂は、どこか他人事のように言った。

「悪かったな、変迅堂」鵜狩は頭を下げた。鵜狩の髪から、水滴がまるで涙のように滴り落ちている。「お前に私怨があったわけじゃない。だけれど、どうしてもあそこで捕まるわけには行かなかったんだ」

「頭を上げてください」恐縮したように変迅堂が言うと、鵜狩はそれに応じた。

雨は、まだまだ上がりそうな気配もなく、ザアザアと泣いていた。「でもな」鵜狩は濡れた顔を手で拭いてから言った。「お前に罪を着せて、逃げおおせるつもりはなかったんだ。全て事が終わったら、お前の無実が証明されるように取り計らうつもりだったし、本当に時間稼ぎだったんだ」

「でしようね」変迅堂は言った。「じゃないと、ほとぼりが冷めるまえに、また火をつけたりはしないですよね」

「ああ、昨日の火付けの話か」

「ええ」変迅堂は頷いた。

「確かにあれは急いでやったんだ。火付けは重罪だから、拷問にかけられる可能性もあった。もしお前が火付け盗賊改に捕まっていたら、それこそ一生物の傷を付けられかねないからな」

火付け盗賊改、というのは、老中の下にある警察組織である。け

れど、町奉行所のように人を裁く権限は持たず、常に罪人の裁判は老中の裁可に寄っていた。けれど、彼らはよく自白を得るために拷問を使った。だから、江戸っ子たちも火付け盗賊改を本当に恐れていた。

「でも、良かったよ」鵜狩は変迅堂の姿を眺めて言った。「お前を取り調べた連中は、そこまで手荒な連中じゃなかったようだな」

「ええ。そうみたいです」

「だが」鵜狩は、分からない、という顔をした。「なぜ、オレが犯人だと確信した？」

「え？」

「だって」鵜狩は首を傾げたまま続けた。「お前がここまで話した話では、お前はオレを犯人だという決定的な証拠は掴んでいないよ。うだ。だが、なぜお前はオレが犯人だと？」

「いえ、怪しいだけで十分でした」

「は?!」

「怪しいだけで十分だったんです」

「どういうことだ？」

「犯人の当てがつけば、別にいいんです」

「ま、まさか……」

「申し訳ないんですが……」変迅堂は頭を掻いた。「鵜狩さんの長屋、家捜しさせていただきました」

第四話「サスペンス八百八町」【27】

「え…、嘘だろ……………」げんなりと鵜狩は呟いた。

「本当です」変迅堂はきつぱりと言った。「こんな場面で冗談を言うほど、私の肝は太くありません」

「ってことは、あつたる？」鵜狩は、頭を振りつつ訊いた。

「ええ。たくさん」変迅堂はにこつと笑った。「あなたが犯人だという証拠。臭水の入った徳利が一つ。しかも、犯行に使われた、未精製の黒い臭水」

「でもさあ、お前、それは卑怯だろ！」

「え、何がですか」

「いや、卑怯なんだよ」

鵜狩が言わんとしていることを、現代語に直すとすれば、「アンフェアだ」ということだ。犯人を追い詰めるからには、決定的な証拠を掴んだ上で追い詰める必要がある。これが、現代的な考え方であり、「犯人当て物」という、現代で言う推理小説を書いている鵜狩の視点である。

けれど、変迅堂を始めとして、江戸時代の人間たちにはそういう感覚は皆無である。そもそも、「決定的な証拠を掴んで云々」という理屈は、あくまで「疑わしきは罰せず」という、現代的な法律運用の理論に基づくものだからだし、「権利の尊重」という現代的な概念の賜物でもある。

だが、当時にはそんな感覚はまるでなかった。「疑わしきは罰せよ」とはいかないまでも、それに近い空気はあつたし、また、「権利の侵害」という意識のない当時、犯人と思しき人間の家に入り込んで家捜しするのも、道義的にはともかく、法律的にまずい行為ではないのである。ま、もちろん、非常識ではあります。

「それで、さらに」変迅堂は指を立てた。

「ん？ なんだ」げんなりとしながら、鵜狩は訊いた。

「割と、決定的な証拠があるんですよ」

「わ、割と？」

「ええ。実は、この話は、長介さんと私しか知らないんですけどね……」

「なんだよ」

「実は、目撃者が居るんですよ。まあ、“者”と表現するのは間違いな気もしますが」

「？」鵜狩は首を傾げた。

「実は、長介さんに頼まれたんです。“夜に、長屋を見張れるような道具が欲しい”って」

「どういうことだ」

「ええ、どうやらですね」変迅堂は頭を掻いた。「長介さん、皆が夜、長屋に帰らないのを気にしていたようなんですよ。やっぱり長介さんも大家さんですから、やっぱり店子の素行は気になってたみたいですね。それで、抜き打ちに調べて叱るおつもりだったんですよ」

「は、長介さんめ」鵜狩は笑った。「抜け目がないジジイだ」

「……そこで、私が利用したのが、かつて作った風景記録器なんです」

「ふ、風景記録器？」

「簡単に言うと」変迅堂は指を立てた。「ある一瞬の風景を、紙の上に透写する、そういう発明なんです」

現代で言う、カメラである。

「でも」変迅堂は続けた。「それだけの機能じゃないんです。実は、人間の気配を感じると、パシャッと透写するような仕掛けがしてあるんです」

「それが？」

「ええ、それを、奉行所に逮捕される直前に、文人長屋唯一の門のところ仕掛けておいたんです」

「それで？」

「ええ。昨日の夜。つまり火付けのあつた夜、文人長屋の面々で、唯一足取りが不明なのがあなたなんです。他の面々は、夕方までには長屋に帰ってきて、それ以降外に出た形跡がないんです。……なのに、あなただけは夕方頃長屋にやってきてすぐに外出し、帰ってきたのが朝でした。つまり……」

「ちよつと待て。後学の為に聞きたいんだが」鵜狩は話を遮った。
「なんででしょう」

「別に、文人長屋は監獄じゃないんだから、門を通らずとも外には出れるだろ？ 例えば、塀をよじ登るとかさ。たしかに、塀は結構高いけど、はしごなり何なり準備しておけばなんとか登れるんじゃないか？」

変迅堂は頷いた。

「だったら、オレだけが足取りがわからないわけじゃないだろ？

他のヤツが、夜、はしごなんかを使って塀をよじ登ったのかも知れないからな。その風景記録器とやらを警戒して」

変迅堂は、首を横に振った。「いいえ。その理屈には無理がありません」

「どういふことだ」

「当然のことなんですけどね、長介さんに頼まれたんですよ。“そういう素行調査は、抜き打ちじゃないという意味がないから、風景記録器を置いていることがばれないように”って。だから、私も必死でバれないように偽装しました。事実、皆さん気づいた様子もありません。…それにそもそも、皆、発明家ではないのですから、風景記録器がどういふものか、なんてわからないでしょ？ それに、“風景の記録が出来る発明”なんて、想像できますか？」

「あ、そっか」得心した様子の鵜狩。

「わかりましたか」

「ああ。風景記録器、なんてものは、そもそもまだ江戸中の誰も知らない。唯一その形を知っている変迅堂はその時点で南町奉行所にいるんだから、江戸中の誰も、風景記録器なるものを知らない。つ

まりは、犯人も門を監視されていることを知らない。なら、犯人は塀をよじ登るなんてまどろっこしいことはしないで、普通に門を通るよなあ」

「そういうことです」

「ははあ。そういえばそうだな。……変迅堂、すげえな」

「ええ、まあ……とにかく」変迅堂は話を元に戻した。「文人長屋の住人で、かつあの日、火付けができたのはあなただけなんですよ、鵜狩さん」

鵜狩はデコをパチパチ叩いた。「なるほどなあ……」

「でも、なんで、こんなことを……」

「あ？ 何言ってるんだ」鵜狩は頓狂な声を出した。「お前、ここに来た、ってことは、オレの動機も全て知ってるんだらう？ だって、この火付けは……」

「ええ。あなたが書いて、版元さんに渡してある戯作の筋そのままですからね」変迅堂は言った。

「だが、まさか、そこまで調べるとはね」

「いえ、ただ、あなたの居場所がわからなかったもので、あなたが行きそうなところを探し回ったんですけどね」

「そして、版元にたどり着いた、ってことかい」

変迅堂は頷いた。「ええ。そしたら版元さん、真つ青な顔してました。“ああ、君、鵜狩さんの知り合いなんだって!?””って。話を聞くと、“この前預かった戯作の原稿、どう読んでもこのところ江戸を騒がしている火付けの話で、その犯人の特徴が、どう読んでも鵜狩さんなんですよ”って。なんで、その原稿を見せてもらったら、犯人は次にこの」

変迅堂は薄暗い、雨が降りしきる境内を見渡した。「入谷の鬼子母神に火をつける、って筋だったもので、ここに網を張って待っていたんです」

「ち、版元め」鵜狩は少し忌々しげに言った。「夏の終わり頃になるまで読むんじゃない、って言ったのにな」

「でも」変迅堂は言った。「なんで、こんなことをしたんですか。なんで、自分の書いた戯作の筋そのままに、火なんかつけて回ったんですか。…鵜狩さんの戯作、読ませてもらいましたけれど、その答えはどこにも書いてなかった。教えてください。なんで……」

「ああ、それは……」

鵜狩は、空を眺めつつ言った。暗く沈んだ空には、何も無いというのに、鵜狩はまるでそこに答えでもあるかのように、雨が次から次へと落ちてくる空を凝視していた。

「やめた」

「え？」変迅堂は思わず訊いた。「どういうことですか」

「オレは戯作者。戯作者は己の意図を話さないものさ。意図のすべては、俺の戯作の中にある」

「ふざけないでください」

「ふざけてなんていないさ」

「いいえ、ふざけてます。あなたのつけた火のせいで、人が一人死んでるんです」

鵜狩はため息を吐いた。「ああ、一人しか死ななかったか。実は、街をもつと焼いて殺すつもりだった」

「な……！？」怒りと困惑が混じる変迅堂に、鵜狩は言った。

「江戸ってさ、変な街だよなあ。そもそも、大火が起ることを織り込み済みで建造されてる街なんて、おかしいだろ？」

江戸、という街は、火事が多かった。

だから、江戸という街には多くの建設業者がいた。それこそ、ひしめきあるように。過剰なまでに。それは、造る建物が火事ですぐに焼失してしまう、という事情がある。それに、江戸の街の中にはわざと空き地を造り、火の燃え広がりを防ぐような仕組みも織り込んであった。江戸、という街は、どこか「火事」という出来事によって活況を誇っていた、という見方も否定は出来ない。

鵜狩は続けた。「おかしいだろ？ そんなの」

変迅堂は、答えなかった。いや、答えられなかった。

鵜狩は続けた。「こんな街、なくなっちまった方が、世のためだ。火事の焼け残りの上にまた街を造り、人の焼けた骸の上にまた新たな生活を作る。こんな街、尋常じゃねえよ」

第四話「サスペンス八百八町」【28】

正直、変迅堂には鵜狩が何を言っているのかわからなかった。

いや、わかるにはわかるのだ。確かに、江戸という街は、「火事」を最初から織り込んだ街だ。だから、鳶を始めとする建設業者がそれこそ肩をぶつけ合うようにして江戸市中に存在している。つまり、火事なくしてそれらの建設業者は立ち行かないのだ。

けれど、鵜狩の言うことはびた一文理解できないのだ。確かに、「火事の焼け残りの上にまた街を造り、人の焼けた骸の上にまた新たな生活を作る」というのは、江戸の本質を見事なまでに言い表している。けれど。変迅堂には、それが「尋常じゃ」ない、とはとても思えないのだ。だって、そういう営みこそ、人間の営みだと、変迅堂には思えてしょうがないからだ。人は、目の前にある圧倒的な不幸に対し、いつまでも涙を流す生き物ではないのだ。江戸の人間達は、大火という不幸に際して、かつて活況を誇った街を想いながら新たな街を造り、火に飲み込まれた人の事を想いながら、その人の分まで新たな生活を作る。それは、素晴らしいことではないのだろうか。そう、変迅堂には思えてならなかった。

そんな変迅堂にとつて、鵜狩の言い分は奇妙な論理に映った。そんなの、詭弁でしかないだろう、と。

「ふん、その顔、理解できない、ってツラだな、変迅堂」鵜狩は、ぼそつと言った。

変迅堂は何も言わなかった。

「まあいい。お前に理解してもらおうとは思っていない」

「……そうですか」

雨が、また一段と強くなった。変迅堂の傘も、強く降りしきる雨に撓み、遂には壊れてしまった。変迅堂も、降りしきる雨に濡れていく。

変迅堂は、ダメになった傘を地面に投げ捨てた。まるで、何かに

決別するように。

「……一つ、訊いていいですか」変迅堂は力なく訊いた。

「ん？ なんだ」変迅堂よりは力のある声で、鵜狩は訊き返した。

「あの戯作の筋にそって、鵜狩さんはここまでやってきたわけですが、まさか、最後まで戯作の筋と同じ道を辿るおつもりですか」

「ああ」即答だった。

「ってことは……」

「ああ」抑揚なく、鵜狩は言った。「あの戯作と同じく、火付けの犯人は。“おのぼりさんの田舎者で、野暮な男は”」皮肉っぽく、鵜狩は続けた。「谷保の天神様の境内で火を放ち、そこで火に捲かれて死にましたとさ。めでたしめでたし」

「行かせると、お思いですか」

「いいや、思わないな」鵜狩は笑った。「お前ってば、変迅堂とか名乗ってる割に、案外普通の正義感を持ち合わせた人間だからな」

変迅堂は言った。「あなただつて、そうでしょう」

「はっは、オレは違うよ」鵜狩は、ブンブンと首を振った。その勢いで、鵜狩の顔についている水滴がバラバラと辺りに飛んだ。「オレは、自分さえよけりゃあいい人間だよ」

「いいえ、それは違いますよ」変迅堂も、水滴を辺りに飛ばしながら首をブンブン振った。「じゃあどうして、あなたの周りにはあなたを慕う人間ばかり、いるんですか」

鵜狩の周りには、常に彼を笑顔で迎える文人長屋の面々がいた。

版元さんがいた。大家さんがいた。鵜狩借遥という人は、いつも笑顔に囲まれているように見えた。

「……ふん」そんな変迅堂の言い分を、鵜狩は鼻で笑った。

「なんですか？」

「……いや、甘ちゃんだな、と違ってな」

「甘いですか」

「ああ、極甘」そう言って、鵜狩は少し嬉しそうに笑った。

「でも、少なくとも」変迅堂は言った。「私は鵜狩さんのことが好

きなんです。……ああ、いやいや、恋愛対象とかそういう意味じゃなく、ね?」

「当たり前だ」

変迅堂は頭を掻いた。「とにかく、私は私の好きな人に、道を誤ってほしくないんです」

「悪いな」鵜狩は肩を落とす。「お前の厚意はありがたい。だけど、オレはやるんだ」

鵜狩の目は、本気だった。

「そうですか」

変迅堂も、覚悟を決めた。

「じゃあ、しょうがない。私は、あなたを止める」

変迅堂は、そう言うと、懐から火縄銃のようなものを取り出し、銃口を鵜狩に向けた。

「おいおい」鵜狩は笑った。「火縄銃は、こんな雨じゃ発動しないだろ」

「いいえ、これは火縄銃じゃないですよ」変迅堂は言った。「これは、人を損なうものではありません」

変迅堂の構える“銃”は、確かに火縄銃とは到底呼びにくいものだった。まず、その外観からして、鈍い銀色をしていて、しかも角ばっている、というものだった。ただ、取っ手と“銃口”の位置関係が、銃を連想させるだけのものである。

「じゃあ、それはなんだ」

「これ、ですか。これは……」変迅堂は言いよどんだ。

「なんだっていうんだ」

「これは、人の記憶を損なうものです」

「…な、なんだと? バカな」

「いいえ。本当です。昔、いろいろあつて作ったものなんですけどね。その“効果”は、既に検証済みですよ。これは……、正直使いたくないんですよ」変迅堂の目が、暗く光った。

「ほづ?」

「鵜狩さんならわかってくれると思うんですけどね」変迅堂は言った。「記憶、っていうのは、誰もが持つていて、誰も干渉できない、自分だけの世界なんですよ。それに干渉する発明っていうのは、何物よりも酷いものだと思うんです」

「ああ。そうかも、な」

変迅堂は、“銃”を鵜狩に向けつつ言った。「これは、それが出来る銃なんです。これで撃たれた人間は、頭から記憶が弾き飛ばされてしまうんです」

「すげえ発明だな。でも、どうしてお前がこれを？ 確か、お前の発明は、奉行所に引つ張られちまっただら？」

「そうしてそれを？」

「あの娘から訊いたんだ」

「ああ、ちあき殿から。……この銃、奉行所が押収し損ねたんです。たまたまぶち抜かれた床に入り込んでいたおかげで」

「ほう、で、それを使ってどうするつもりだ」

「もし、私のこれから言うことに従ってくれないなら、容赦なく撃ちます」変迅堂は氷のように冷たく言い放った。

「はは、結局は脅しに使うのか」鵜狩は言った。「撃たれない為には、どうすれば、いいんだ？」

「それは」変迅堂は銃口を鵜狩に向けつつ言った。「一つは、これ以上、火付けをしないこと。そして、二つ目は江戸から出て行くこと。いや、正確には、江戸から逃げてください」

「ほう、穏健な要求だな。オレはてつきり、“奉行所に出頭しろ”と言うかと思っただがな」

変迅堂は首を横に振った。「私は、あなたに死んでほしくないんです。でも、あなたの罪を見過ごすわけにも行かないんです」

「そうか。その答えは、お前なりの妥協案、ってことだな…」

「そうです」

罪を許すことは出来ない。でも、助けたい、という、変迅堂なりの、妥協案。

「だが」鵜狩は言い放った。「お前の妥協案、到底呑めるものじゃないな」

「え？」

「撃つてくれ」

「は？」

「こう言っちゃなんなんだけどな」鵜狩は感傷混じりに言った。「オレの人生は、江戸を離れては存在しえない。オレは、江戸で死ぬんだ。いや、江戸で死にたいんだ」

「意味がわかりませんよ」いつからか、変迅堂の声はかすれ始めていた。

「オレは」鵜狩は言った。「戯作者なんだ。戯作者の成功は、江戸でしかありえない。どんなに嫌いな街でも、戯作者のオレは、江戸に居なくちゃならない」

「だから、意味が判りませんよ！」

「判んなくてもいい。撃つてくんな。じゃないと……」雨の中、鵜狩は叫んだ。「オレは止まらないし、止まれないんだ。もう、な」

「なんで！　なんで！」変迅堂の持つ銃口は、いつからか地面を向いていた。

「だからさ、江戸を離れるくらいだったら、江戸で死にたいんだ。

……というより、江戸で成功したいんだ」

「逃げてくださいよ！　簡単でしょ！？　記憶を失うよりも！」

変迅堂は、鵜狩の言うことを訊かず、ただ叫んだ。

「撃て」

「……！！」

変迅堂は、膝をついてしまった。膝をついたその瞬間、バシヤつと水溜りがはじける音が辺りに響き、変迅堂の下半身を濡らした。

第四話「サスペンス八百八町」【29】

「俺はさ、おれ自身の成功が見たいんだよ」鵜狩は言った。「たとえ、墓の下でも、な」

「でも、火付けなんて大それたことをしちゃったんですから、もうダメですよ」

「いや、大丈夫なんだ」

そう言つと、鵜狩は変迅堂に駆け寄り、変迅堂の手から銃を強引に奪い取つた。

「え！？ なにを！？」

変迅堂の目の前で、その銃を、己の頭に向ける鵜狩。そのまま、鵜狩は言つた。

「記憶を失くしてでも、オレは江戸に居たいんだ」

それだけ言つと、鵜狩は、銃の引き金を、引いた。

バキユン。

まるで、何かを祝福する礼砲のような音が、境内に響いたかと思うと、一瞬遅れて鵜狩が仰向けに地面に崩れ落ちた。やっぱり、バシヤン、という水溜りが弾ける音が、響いた。

しかし、そんな音たちも、雨の音に飲み込まれ、消えていく。

変迅堂は、雨が降りしきる空を眺めた。

「終わったのか？ 変の字」

物陰から、変迅堂とは別の人影が出てきた。

「見届けてくれて、ありがとう、勝次殿」

変迅堂は、人影にそう言葉を投げた。すると、その人影、カツちゃんの変迅堂に言葉を投げた。

「いや、礼にや及ばないけど……コイツ、死んだのか？」

カツちゃんは、仰向けに倒れる鵜狩を指した。変迅堂は首を振つた。

「いいえ。記憶を消した副作用で、しばらく目覚めないだけです」

「そうか」

「でも、勝次殿」変迅堂は、膝をついたまま暗い空を仰いだ。

「ん？」

「これで、良かったんでしょうか」

「ああ？」何言ってるんだ、という風に、声を唸らせるカツちゃん。

「私は、鶉狩さんを止めたかった。だから、最終的に彼の記憶を消した。でも、その選択は正しかったんですか？」

カツちゃんは一言答えた。「記憶を消し飛ばしたのは、鶉狩自身だろ」

変迅堂は首を振った。「いいえ。あの」変迅堂は未だ鶉狩の手にある銃、「記憶消去銃」を指した。

「あの銃を、持って来たのは私だったんです。もし、彼を説得できなければ、彼を撃つつもりで……。そして、逃がすつもりだった。

この結末を望んだのはあるいは私なんです。いや、私が、悪いんです」

「言ってる意味が鏗びた一文わからねえな」

「わからないかも、知れませんか」変迅堂は、淡々と呟いた。

「ああ？」

「人間、全ての選択に責任が持てるほどには強くない、ってことでしょう。きつと」変迅堂は視線を地面に落とした。「最善を尽くしてみてください、やっぱり後悔はあるんです」

変迅堂の言う「後悔」が何に当たるのか、まだまだ子供なカツちゃんには釈然としなかった。

と、そんな頃だった。

「ふん」

建物の影から、唐傘を差した人影が現れ、変迅堂たちの元へ歩を進めてきた。

「なるほどな」

その人影は、仁杉与力だった。

「な、仁杉様、なんでここに……」変迅堂は思わず声を上げた。

「決まっているだろう」仁杉はニヤッと笑って続けた。「与力の仕事を果たしに、な」

「え？」変迅堂とカツちゃんは青い顔を見合わせた。

悠然と二人の前まで歩を進める仁杉与力は、余裕たっぷり言葉を継いだ。

「ああ、実はな、変迅堂が無罪だ、って判った後、ずっとあの「仁杉は鵜狩を指した。「男を嗅ぎまわっていたんだ」

「そうなんですか」変迅堂は感慨も無げに訊いた。

「ああ。そもそも、変迅堂を陥れる内容の投げ文。あれが怪しかった」

「あ？ どういうことでえ？」

カツちゃんはそもそも投げ文云々を知らないのです、ただ首を傾げるしかなかった。

「変迅堂が犯人でないとすると、あの投げ文、犯人が書いたものである可能性がすごく高いんだ。っていうのも、基本的には犯人しか知りえない情報、“臭水を使った火付け”という情報が書かれていたからだ。変迅堂が犯人で、近い人間、具体的には共犯者が告発したんじゃないかと最初は思ったんだ」仁杉は頭を掻いた。「だけどなあ、変迅堂はそんな大それたことをするようなヤツではないことが判ったし、我々が共犯と目していた、あの女の子、ええと……ちあきとか言ったか？ その子もシロだった」

「何だと！？」カツちゃんは声を荒げた。「ちあつちゃんを疑ったのかよ！」

「それはそうだろ？」仁杉は続けた。「主犯の男と親しい女。共犯の可能性なら一番高いだろ」

「むむむ……」カツちゃんは言い返せなかった。

「続けるぞ」そんなカツちゃんを横目に、仁杉は話を続けた。「だから、変迅堂を解放したんだ。別に犯人がいる以上、無罪の人間を捕まえておくわけには行かないからな」

「ふんふん」変迅堂もカツちゃんも、赤べこのように頷く。

「で、だ」仁杉は続けた。「そうになると、臭水のことを書いてあったあの投げ文がよく判らなくなる。どう考えればいいのか、悩んだよ。……ま、一刻ほど」

「一刻かい……」カツちゃんは頭を掻いた。

「当たり前だ。これでも、私は与力だぞ？」仁杉は笑った。「……とにかく、あの投げ文をどう位置づけるか、それを考えた。その結果だ。思い至ったんだ」

「犯人が、私を嵌めようとしている可能性、ですか？」変迅堂は訊いた。

すると、仁杉は頷いた。「その通り。犯人が、お前を犯人に仕立て上げている可能性に思い至ったんだ」

「それで、鵜狩さんに行き着いた、と？」

「ああ」仁杉は強く頷いた。「投げ文があつた時分に、奉行所近辺をうろろろしている人間がいた、つてことが判つてな。その人間を捜査していくうちに、変迅堂と同じ長屋に住んでいる人間だということも判つた。つまり、変迅堂が臭水を持っていることを知りうる可能性のある人間だ、つてことだ」

「つまり、とにかく鵜狩さんに目を付けたわけですね」

「その通りだ。そして、こうやって尾行しているうちに……」仁杉は辺りを見渡した。「こういう事態だ」

雨が一瞬弱くなり、境内の中の風景が一瞬だけ浮かび上がった。けれど、またすぐに降る雨が、風景を押し隠す。

第四話「サスペンス八百八町」【30】

「……鵜狩さんを、捕まえるんですか？」変迅堂は、そのままの姿勢で訊いた。

すると仁杉は笑った。

「いや、そうしたいのはヤマヤマなんだけれどなあ、ここは寺社地。町奉行は、寺社地に手を出せないんだよなあ……。しかも、逮捕するには証拠がないし……」

当時、寺社領内での犯罪は、寺社奉行という、町奉行とは別の奉行に捜査権があった。だから、入谷の鬼子母神内での火付け未遂は、町奉行の人間である仁杉には手が出せないのである。

ただ、変迅堂を捕まえるときには投げ文なんていう曖昧なもので逮捕したくせに、「証拠がなくて逮捕できない」とは、どういふことだろう、と変迅堂は首を傾げた。他の火付けの嫌疑が、まだ上がっていないとでも言うのだろうか。

「では訊こう」仁杉は言った。「変迅堂、お前は、どうする気だったんだ？ 鵜狩の記憶を消して、どうする気だったんだ？」

「ええ、記憶を消して……、どこかの寺にでも預けるつもりでした。とにかく、江戸から出させるつもりだったんです」

「過去形、か？」仁杉は薄笑いを浮かべた。

「そりゃそうでしょ？」変迅堂は言葉を継いだ。「だって、奉行所の与力様の前で、犯人をかばうような行動をしたら、どうなってしまうんですか？」

「ああ、共犯扱い、だな」

「でしょ？ でも」変迅堂は頭を下げた。「お願いします、見逃してください。もう、火付けは居なくなりました。それでいいじゃないですか」

「いいや、叶わぬな」仁杉はキツパリと言った。「罪を犯した人間には、しかるべき罰を与える。それが我々奉行所の仕事だ。……だ

が

「だが？」変迅堂は訊いた。

「ここは寺社地。手が出せない。それに……」仁杉は、大げさな苦笑いを浮かべつつ、両手をヒラヒラさせて続けた。「どうやら十手やら捕縄やらを持ってくるのを忘れたようだなあ。捕まえたくても捕まえられない」

「え？」与力が十手を？変迅堂は首を傾げた。

独り言のように、仁杉は続けた。「……さて、そんなわけで、今日は捕まえられない。きつと、日を改めてソイツを捕まえに行くことになるかと思うんだが……。多分、逃げられるだろうなあ、犯人に顔見られてるし」

「え？ 顔を見られて……」

「バカか！ お前は！！」カツちゃんは、変迅堂の言葉を遮った。

「与力様の言わんとしていること、まだわからねえのか！！ 要はこの与力様……鵜狩をお見逃しになろう、っておっしゃりたいんだよ」

「え？」ハツとした顔で、変迅堂は仁杉を見た。

仁杉は頭を掻いた。「おいおい、火消し。そんな誤解されては困る。だが、そう聞こえたのなら、それはそれでいい。私が言いたいのは、たとえ、火付けの重要参考人が江戸から消えても、お前達を逃亡幫助に問うことはない、ということだ。……まあ、本当は、鵜狩を捕まえたいところだが、町奉行の管轄はあくまで江戸市中。その外に逃げられてしまったては、捕まえようがない。そういうことだ」

なんだ、結局言ってることは同じじゃねえか、とカツちゃんは心の中で呟いた。

だけれど、こういうものなのだ。役所の人間というものは、建前を何よりも重要視する。たとえ、犯人を事実上見逃そうとしていたとしても、それを口には出さない。あくまで自分の保身を図りつつ、結果的に犯人を見逃してしまったような言い方をするのである。

「だが」仁杉は言った。「どっちにしる急いだ方がいい。いくら

ル捜査で有名な寺社奉行と云えど、夜が明けるまでには嗅ぎ付ける
かも知れない」

「ええ」

変迅堂はようやく立ち上がると、仰向けに倒れたままの鵜狩を肩
で担ぐ。それを、カツちゃんもささず手伝う。カツちゃんは、「
結構重いな」と、どうでもいい感想を述べた。

「仁杉と力様、感謝します」変迅堂は、鵜狩の肩を担ぎつつ、仁杉
の方を向いて言った。

「ん？ なにをだ？」

「見逃してくれて」

「だから言っているだろう」仁杉は言った。「結果的に鵜狩を見逃
してしまっただけで、感謝される謂われはない。……あ、雨が」

雨が、上がり始めた。さっきまではまるで滝のように降っていた
雨が、今は殆ど小降りになっている。

「おあつらえ向きじゃないか。今逃げずして何時逃げる？ さあ、
早く」

「……一つ、いいですか」変迅堂は訊いた。

「ん？ なんだ？」

「あのう、仁杉様、初めて会ったときには始終敬語を使ってたじゃ
ないですか。なのにな……」

「ああ、敬語？ あれは、仕事の上でだけの言葉使いだ。やはり、
メリハリはつけないとな」そう言って、仁杉は笑った。とても与
力という要職にいるとは思えないほどに幼く、そしてまっすぐな笑
顔だった。

「そ、そうだったんですか？」

「あ、あともう一つ」仁杉は言った。「どうも、私は“様”を付け
られるとむず痒くてしょうがないんだ。んなわけで、これからは“
様”を使わずに呼んでくれないか」

「ええ。わかりました。仁杉さん」

“仁杉さん”というところに変迅堂がアクセントを込めて言うと、

仁杉は満足そうに微笑んだ。だが、すぐにその笑顔を引っ込めた。

「おい、早く逃げろ」

「ああ、そうでした！」思い出したように変迅堂は声を上げた。

そう言うと、変迅堂たちは鵜狩を引っ張っていった。そして、やがて変迅堂たちの姿は、宵闇の中に消えていった。そしてしばらくして、雷のような轟音がドーンと響き、その音が特定の律動を響かせながらどんどん遠ざかっていった。

「変迅堂……逃げるときまで、まったくうるさいやつだ」

仁杉はため息を吐いた。

「逃げるときまであんな音を立ておって……」

仁杉は笑った。

「だが、あの男……」

仁杉は、一人宵闇の中でくすくすと笑った。「すごいな」

第四話「サスペンス八百八町」【30】（後書き）

これにて、第四話終幕。おそまつさまでした。

第五話「さらば暑かった日々よ」【1】

「せくんせい!!」

文人長屋の一番奥、変迅堂の長屋の戸を、ちあきは勢いよく開けた。

「ああ、ちあき殿！ よく来たね」

いつものような口調でちあきを迎えた変迅堂は、黒い油に顔を染めながら、イナバ君の整備をしていたところだった。

「もう、先生、子供じゃないんだから……」

ちあきは母親のようなことを言うと、懐から手ぬぐいをシュツと取り出し、変迅堂の頬を拭った。油と一緒に、汗まで拭い取った。

「ちよつと、先生！ また戸を閉めっぱなしにしてるの?!」

「え？ そうだけど、なんで？」 変迅堂が、アゴを腕で拭いながら訊いた。

「だって、もう外は結構涼しいんだよ？ 戸を閉めっぱなしにでもない限り、こんなに汗は出ないもん」

そう、江戸の町は、かなり涼しくなってきた。

ちよつと、火付け騒ぎが収まったところから、毎日のようにうだるような暑さだったものが、急に収まりだしたのだ。まあ、とは言っても収まって平年通りだったのである。つまり逆を言えば、この年の夏は相当暑かったのである。

しかも、今はもう秋に差しかかろうとしていた時期だった。だから、気温が上がる日も少しはあるものの、基本的には涼しくなってきた。

「もう、秋なんだねえ……」 変迅堂は、額の汗を拭いながらふと呟いた。

「なに言ってるのよ!!」 ちあきは言った。「それでも、まだ日差しは強いんだから、戸を閉めっぱなしにしたら暑いに決まってるじゃないか!! もう!!」

「はははは、そうかもね」変迅堂は他人事のように笑った。
そんな変迅堂の態度に、ちあきはキレそうになりながらもこらえ
る。

「……まあいいわ」ちあきは諦めたように呟いた。

「うん？ ちよつと待って。そろそろ……」変迅堂は、イナバ君の
ボディのねじをぎゅつと締めた。「よし、これで大丈夫だ。これで
完成！」

「え？ 何が？」

変迅堂は指を一つ立てて答えた。「前にも話したじゃないか。イ
ナバ君の音がうるさいからさ、その音を消す装置を取り付けたんだ」
「あ、そうなんだ」

「うん、これからイナバ君に乗って何処かに行こうかと思ってるん
だけど、一緒にどう？ イナバ君の試運転もかねてさ」

「え、試運転！？」試運転、という言葉に引っかけかきを感じるちあ
きは、つい言葉にもそういう空気が出てしまった。

変迅堂は笑った。「はっはっは、平気だよ、心配しなくて。だっ
て、消音機は、あんまり推進系の装置とは関係ないからさ。だから、
走り方とかは前と同じだよ」

「じゃあ、行く」

「よし、決まり」

そう言って微笑むと、変迅堂はイナバ君の耳、つまりはハンドル
を押して、外に出た。ちあきも、それに続く。

「さ、ちあき殿、^{またが}跨って？」変迅堂は、イナバ君を指して言った。

「あのさあ……」呆れたようにちあきは言った。

「ん、なに？」変人堂はちあきの言葉を待つ。

「跨れるわけじゃないでしょう！？ あたし小袖なんだよ！！ もう！
！」

しばらく考えてから、変迅堂は言った。「じゃあ、横乗りでいい
ね」

変迅堂は、ひょいっとちあきを抱きかかえると、イナバ君の鞍に

ちよこんと乗せた。変迅堂は、そんなちあきの後ろに跨る。

「でもさあ」ちあきは、変迅堂の方を振り返りつつ訊いた。「どこに行くの？」

「うーん、そうだなあ、実は、あんまり決めてないんだ」

「え、そうなの？」

ちくしょう、女の子を誘うなら、その場所まで決めておきやがれ、この無粋者、とちあきは心の中で毒づいたものの、変迅堂が何処かに誘ってくれることは結構まれなので、とりあえず黙っておく。

「でもね」変迅堂は言った。「行きたいところはあるんだ」

「なんだ」ちあきは声を上げた。「行きたいところあるんなら、そこでもいいじゃん」

「いや、さ」変迅堂は申し訳なさそうに言った。「多分、あんまり面白いところではないよ？」

「別にいいよ。先生が行きたいところならどこでも。あたし、ついでくからさ」

ちよつと本音を込めてみたちあきだったけれど、それに変迅堂が気付いた様子はない。変迅堂はちあきが期待したような反応も見せずに言った。

「ん、じゃあ、行こうか」

変迅堂は、イナバ君の腹を足で叩き、イナバ君を走らせた。

イナバ君に乗った二人は、文人長屋の細い路地を抜け、その先に続く路地を抜け、大通りに出た。

「おわっ！！ なんだありゃあ！！」

「う、うさぎさんだ！！」

「人が乗っているぞ！！」

町に行く江戸っ子たちの声を後ろに聞きながら、イナバ君はまさに脱兎のごとく走っていく。風の音や鳥のさえずりも、すぐに後ろに流れていってしまう。

「やっぱり、イナバ君は速いね」ちあきは、変迅堂の方を振り返り言った。

「速いだけかな？」変迅堂は謎々を問いかけるような口調で言った。
「え……？　ほかに？」

「うん」

「ええと……あー！」ちあきは、ようやく思い至ったようだ。

「うん、わかった？」前を見て運転しながら、変迅堂は訊いた。

「わかった。前と比べると…随分静かになったよ！」

そうなのである。イナバ君が、以前と比べてはるかに静かになっているのである。それこそ、江戸っ子のどよめきや風の音、鳥のさえずりが聞こえるくらいに。

それに、以前はしつかり聞き取れなかった変迅堂の声もクリアに聞こえる。

「ははは。これが新発明、消音器。成功だね」変迅堂は笑った。

そんな二人を乗せたイナバ君は、大通りに入った。さっきまでの通りとは違って、かなり活況に溢れている。

「えっと、この通りって、もしかして…」ちあきは変迅堂に訊いた。
「うん？　この通りはね……」変迅堂は言った。「甲州街道だよ」

甲州街道、というのは、現代の地名で言うと東京から山梨まで、当時の地名で言うと江戸から甲斐まで延びている街道で、東海道・中仙道・日光街道・奥州街道と合わせ五街道の一角を成している。

「甲州街道、ってことは、先生、もしかして、甲州に行くの？」西に頭を向けるイナバ君の上で、ちあきは変迅堂に訊いた。

「いやいや、そんなに遠くはないよ。結構すぐに着くところだし」

「ドコ行くのか、教えてよ」

「内緒」

「バカ！」

めきや。

「ぐふうー!!」

もちろん、今の“めきや”が、ちあきの鉄拳によって、変迅堂の頬が鳴ったその音であることは言うまでもない。

二人を乗せたイナバ君は、甲州街道をひたすらに駆け抜けていっ

た。

第五話「さらば暑かった日々よ」【2】

大体、半刻（一時間）イナバ君を甲州街道に走らせたあと、変迅堂は不意にイナバ君の速度を落とすとした。

「え？ 先生、なんでイナバ君を止めちゃうの？」

変迅堂は答えた。「ああ、もうそろそろ、目的地だからさ」

「え？」ちあきは怪訝な顔をした。「こんなところに？」

ちあきが怪訝な顔をするのは無理もない。ちあきたちの目前には、どこまでも広がる畑や田んぼ。こんなド田舎に、変迅堂は用があるという。どういうことよ、とちあきは頭をひねった。

「はっはっは」変迅堂は笑った。「噂には聞いていたけれど、田舎だなあ、ここ」

ちあきは速度を落とすつつあるイナバ君の上で訊いた。「ねえ、そもそも、ここ、どこ？」

変迅堂は答えた。「ここは、谷保だよ」

谷保、とは、武蔵国の多摩郡にあった地名で、今でも市の名前として残っている。ただ、当時は「やほ」と読んでいたものが、現代ではどうしたわけか「やほ」と濁点が滑落した形で呼ばれている。

現代でこそ住宅街だけれど、当時は江戸の消費を支える他の多摩の村と同じく、延々と畑が続く結構なド田舎である。

「え、谷保……？ ってことは、もしかして……」ちあきは、谷保に思い当たるものがあるらしい。

「ん？」

「ひょっとして、野暮の天神様？」

「そう！」変迅堂は、ちあきに微笑みかけた。

野暮の天神様、とは、谷保に鎮座する天神、谷保天満宮のことである。

菅公の三男が開基したという社伝があり、関東三大天満宮にも数えられる天満宮である。けれど、ちあきを始めたとした江戸っ子連中

にこの名が知られているにはわけがある。

大田南畝、という人がいる。

この人は幕臣ながら狂歌を良くし、どうしたわけか幕臣としての活躍よりも狂歌師としての活躍が後に広く知られるようになったという奇特な人物である。

この大田南畝の作品の中に、「調布日記」という紀行文がある。

大田南畝が多摩郡近辺を散歩しながらその感想を書き連ねたものなだけけれど、その中に谷保天満宮を詠った狂歌がある。以下に引用しよう。

神ならば 出雲の国に 行くべきに 目白で開帳 やぼのてん
じん

意識すれば、「こんなド田舎で開帳するなんて、谷保の天神様は野暮だなあ」と詠ったわけである。

この狂歌が、江戸っ子の流行語になった。

だから、野暮な人のことをこの歌を引いて「野暮の天神様」、縮めて「野暮天」と呼ぶようになった。それに、この歌のヒットにより、谷保のイメージも、「なんだか野暮なところ」という、住んでる人間からしたらたまったもんじゃなものになっていた。

「先生、野暮天なんて、見に行く必要あるの？ きつとしよばいよ？」ちあきが言うと、変迅堂は言葉を返した。

「でも、ちあき殿、どうしてちあき殿は谷保の天神様をシヨボイと思うの？」

「え？ だって、大田南畝がそう詠ってるし……」

すると、変迅堂は少し唇を尖らせた。「いや、あの天神様を“野暮”って歌ったのは、あくまで大田南畝。まだ見ないうちにシヨボイと決め付けるのは早いよ」

なんだか、変迅堂のこの言葉には目に見えないトゲがあった。ちあきとしては軽口を叩いたつもりだったのに、そんな軽口そのもの

を非難されたような、そんな感じ。ちあきは、思わず変迅堂の顔を伺った。

「先生、もしかして、怒ってる？」

「え？」

「だって」心なしか弱く、ちあきは言った。「なんだから、今の言葉、トゲがあつたよ」

変迅堂は頬を叩いた。「…………い、いや、怒ってるわけじゃないよ」

「ホントに？」

「…うん」変迅堂は頷いた。

「嘘ついたらヤダよ？」

「うん」変迅堂は、ちあきのまつすぐな目から目を離した。「あ、

ちあき殿、見えたよ!!!」

「え？」ちあきは、思わず変迅堂から視線を外し、変迅堂の視線の先を追った。

二人の目前には、まるで大海に浮かぶ島のように、畑の中に浮かぶ林が見えてきた。あの感じは…………。まさに神社なんかの杜である。

「ほら」変迅堂は言った。「あれが、谷保天満宮だね」

「へえ。あれが…………」

畑の只中を突っ切る甲州街道。そして、その街道沿いに、まるで海に浮かぶ島のように浮かぶ杜。変迅堂は「見てからものを言え」と言っただけれど…………。ちあきは思った。いや、これは確かに野暮でド田舎だね…………。

変迅堂も同じ感想を持ったらしく、苦笑いを浮かべ呟いた。「あ

あ、これは…………。本当にド田舎だね…………」

「うん…………」ちあきも力なく頷いた。

谷保天満宮は、噂に聞く以上に野暮な天神様だった。

そもそも、その立地からしておかしい。普通、街道沿いの神社とというのは、街道の北側に沿って作るのが通例である。なのに、この谷保天満宮は街道の南側に立地している。と、いうことは、である。

鳥居や参道が、北に延びている、ということである。皆さんも地元
の神社を思い浮かべて頂けるとお分かりになると思うけれど、普通
鳥居や参道は南に延びるものだ。

それに、普通神社の本殿というのは高台に造営するものだけれど、
なぜかこの谷保天満宮の本殿は低いところにある。というか、鳥居
が一番高い位置にあり、本殿が一番低い位置にある、という、普通
に考えてありえない造り方をしている。

しかも。天神様なのに、権現造の社殿。これは、大田南畝が「や
ぼのてんじん」と詠ったのもしょうがないよなあ……、と南畝の狂
歌に対して、説得力を与えるに十分な要素を持ち合わせた神社であ
る。

「へえ、変わった神社だね」ちあきは、杜の中で思わず呟いた。

「うん、そうだねえ」変人堂は、イナバ君を杜の中に停めつつ、相
槌を打った。

ちあきは、杜の中を歩き始めた。変人堂も、そのあとを追う。

うつそうと茂る杜。その杜ですらも防ぎきれないほどの陽光が、
ちあきの頬を少し焼いた。けれど、もう、その日差しは夏のそれ
ではなかった。

「もう、秋なんだね」ちあきは、頬に残る日差しの感触を思い出し
ながら呟いた。

「うん。江戸だと、四季を忘れがちだから、つい見逃しがちだけど
ね」変人堂は辺りを見渡した。「そういえば、蝉の声も、結構まば
らだね」

夏の頃には「ああ、うるさいなあ」とぼやきながら聞いていた蝉
の聲が、現金なもので夏の終わりになると懐かしくなる。でもそれ
は蝉の聲が懐かしいのではなく、蝉の鳴く頃が懐かしいのである。
ま、とにかく、この時期には、まるで、人々の夏への名残を代弁す
るように、蝉がまばらに鳴いていた。

ちあきは、はあ、とため息を吐いて肩を落とした。「はあ。結局
今年の夏も、楽しめなかつたなあ」

「そう？」変迅堂は訊いた。「でも、花火も見だし、海にも行ったじゃないか。結構楽しんだんじゃないのかな？」

「それはそうだけど」ちあきは頬を膨らました。「でも、あれは夏の前半だもん。後半はほとんど楽しめなかったもの。だって、先生が忙しくしているせいで、まったくどこにも行けなかったんだもん」

「ああ…そういうば…でも、遊びに行くんだったら、別に私など抜きでもいいじゃないのかな。それこそ同年代の…勝次殿と遊べば良かったんじゃないかな？」

頭にきたちあきは、思わず変迅堂の頬にグーを出した。

「先生のバカ！」

「グフウツ!!」

………まったく、変迅堂も分からんちんですね。ちあきの気持ちにまったく気付いてない。

「先生さあ」ちあきは、恨めしそうに言った。「もっと、女心を勉強した方がいいと思うんだよね。つつかさ、発明ばっかりしてないでさ」

「お、オンナゴコロ？」変迅堂は頓狂な声をあげた。ちなみに、腫れた頬を撫でつつ。

「だからさ」ちあきは頬を少し染めて、もじもじしながら言った。

「あたしはさ、先生と遊びにいきたいんだからさ。そこらへんのこと、わかってよ。バカ」

「むむむ……？」

変迅堂は腕を組んで考え込んでしまった。あちゃあ、これは筋金入りの……。無粋者ですね。

「もう、ここまで言っただけからないか!! この、無粋者!!」

ちあきのグーが、またもや変迅堂の（腫れている方の）頬に突き刺さった。

第五話「さらば暑かった日々よ」【3】

その瞬間、ちあきのグーの威力により、変迅堂の頭はぐるんと回され、なんだかイヤゝな音が響いた。あえてその音を文章化するとこんな感じである。

メキヤ、ゴリ。

いや、地味な音ですねえ。でも音というのは、そもそもが物体の運動の際に、その運動に乗り切らなかつた力が空気を揺らす現象なので、音がないほうが物体の運動効率がいいといえる。……え、何が言いたいのか、って？それは……。地味な音の方が、殴られたときのダメージが案外大きいんです。

「……………！……………！……………?!」

変迅堂、もはや声にもならない声を出してるし。

「フンだ!!」ちあきは、首を横に振ってしまった。

「い、痛いんですけど……………ちあき殿……」ようやく、変迅堂から出た言葉は、自らの状況説明だった。

「知りません！ 先生が悪いんだもん」

「そ、そんなご無体な。暴力反対!!」

「ああ？」ちあきの、値一千両のメンチが炸裂した。「これ以上文句言つと、殺すよ」

「ぐぐぐぐぐ、ごめんなさい」

「うん、よろしい」

ちあきはうんうんと唸った。いや、何がよろしいのかはわからないけれど。

そんなこんなしているうちに、二人は杜を抜け、階段を下り、谷保天満宮の社に出た。

「へえ、案外綺麗だね」

「うん」

二人は、結構な威容を誇る、谷保天満宮の拝殿を見上げながら呟

いた。

「でも、大きいね」変迅堂は呟いた。

「え？ この社が？」ちあきが訊くと、変迅堂は首を振った。

「いや、まあ、それもそうなんだけどね。この谷保の天神様が、大きい心をお持ちの神様だな、ってさ」

「は？」

変迅堂は、ある種の感慨を目に込めながら言った。「いや、野暮の天神、って笑われながら、それでもここに鎮座する神様って、大きいと思わない？」

「は？」ちあきは、変迅堂の言っていることがまったく分からなかった。

「確かに」変迅堂は続けた。「神様なら出雲、っていうのが定石なんだよね。なのに、この天神様はこんなところで開帳している、って大田南畝さんは笑ったわけだけど、私は思うんだだよ」

「？」

「それはそれで、すごいことなんじゃないか、って」

「言っていることがわからないよ、先生」ちあきは口を尖らせた。

「ははは、判るように喋っちゃいけないから」

「だったら口にするな！」ちあきは頬を膨らませると、少し変迅堂は寂しそうな顔をして続けた。

「……はは、そうだね。けど、判って欲しいんだよ、きつと」

「ふうん？」ちあきは曖昧に頷いた。

「……きつと、彼もそんな気持ちだったんでしょ」

「彼？」

ちあきの問いかけに、変迅堂は首を振った。

「いや、なんでもない、独り言、独り言」変迅堂は、苦笑いを浮かべつつ言った。

「変な先生。……ま、今に始まったことじゃないけど」

境内には、夏の終わりを告げるように、セミの死体が腹を見せて転がっている。実は、「セミの死体」など、夏の間中見られるのだ

けれど（セミの寿命は7日なのだから当然だ）、夏の終わりに限って目立つものだから不思議なものだ。夏を生ききったセミ達が、まるで変迅堂に問いかけるように暗い瞳を空に向けている。

「ねえ、夏も終わりだね」ちあきは、セミの死体を見ながら、呟くように言った。

「ええ」

「先生」ちよつとトーンを落として、ちあきは言った。「セミって、幸せなのかな？」

「え？」

「七日しかない人生に、意味なんてあるのかしら」

変迅堂は、ちあきに答えるでもなく、答えた。

「七日しかなくても、天に向かつて己の声を響かせることが出来るんなら、それで幸せなんじゃないかな。……多分だけど」

変迅堂は地面に転がる一匹のセミに目を合わせ、続けた。

「人間もそうだけど、誰もが認められたいものなんだよ」

「先生も？」

変迅堂は、力強く頷いた。

「セミは」変迅堂は続けた。「声、という手段で認められようとする。だから、あんなにうるさく鳴くんのだ。“オレは、ここにいます”って。人間もそうなんだ。ある人は、“父親”“母親”っていう何物にも変えがたい肩書きを手に入れることで、認められようとする。またある人は、“武士”とか“大店の旦那”とかの肩書きで認められようとする。またある人は」

「また、ある人は？」

「発明とかいう、世間から見たら何やっているのかよく判らないことで、認められようという人もいる。そういうものなんだ」

「うん……」

ちあきは、曖昧に頷いた。正直、数え年15歳の少女には、難しい話だ。

変迅堂は続けた。「それに比べたら、セミはまだ幸せだよ。セミ

はその声で、何物にも変えがたい、番^{つが}う相手を見つけることができ
るんだから。けれど、人間はそうはいかない。人間は、よっぽど卓
越したものがないと、外の人間の間にもうずもれてしまうんだ。きつ
と、彼も……」

「だから」ちあきは言った。「彼って誰よ」

「あ、いやいや、独り言」

「もう！」

変迅堂は、ため息を一つ吐いた。

「さて、帰ろうか」

「え！？ もう！？」ちあきは子供のよな声を出した。

「でも」変迅堂は言った。「もう見るだけ見ちゃったしね。意外に、
狭かったから」

「…うん、そりゃそうだけど……」

「それに」変迅堂は言った。「約束を果たさなきゃね？」

「や、約束？」

「あれ、覚えてないの？ じゃあいいか」変迅堂は、悪戯っぽい笑
顔を浮かべた。

「ええ！？ なによ、先生！！ なになに？」ちあき、ここは食
下がる。

「どうしよっかな」

「言わなきゃシバくよ」ちあき、遂に脅しに入った。

「はい、言います」変迅堂は、背筋を伸ばした。

「で、何よ」グーをチラつかせながら、ちあきは訊いた。

「ほら、約束したじゃないか。“今度甘いものでも食べに行こう”
って」

「あー！！」思い出した、と言わんばかりの声を発したちあき。

「…忘れてたんだね」変迅堂はちよつと声のトーンを落とした。

「「じいじい」、ごめん！！」でも、随分前の約束じゃない？だから…」

変迅堂は笑った。

「まあ、しょうがない。……行くでしょ？」

「行く行く!!」

あまりに興奮し過ぎて、「いぐいぐ」に近い発音になっているちあき。

「じゃあ、もう、行こうか」

変迅堂は、ちあきを手でイナバ君のほうに促して、境内の方に振り返った。

あの人が、最後に火をつけようとした場所。そして、自らの命さえも、その炎に捲かせて、消えようとしていた、まさにその場所。あの人が、自らの命を賭してまで成したかったこと。様々な思いが、変迅堂の頭を駆け巡った。

「せんせ〜い!! 早く〜!!」ちあきは既に、杜へ続く階段の真ん中辺りを上って変迅堂を見下ろしていた。

「ああ、今行くよ〜!!」ちあきにその声をかけると、変迅堂は誰に言うでもなく呟いた。「私は、生ききれんでしょうか」

けれど、境内には、己の生を生ききったセミたちの抜け殻しかなかった。

変迅堂は踵を返すと、ちあきの待つ、階段に足を向けるのだった。

エピソードその一「版元さんと発明家」

「いやあ、夏も終わりましたなあ」

成迫屋主人・清はそう呟いて、陽光が弱まった外の景色を眺めた。「そうですね」

つられて、外の景色を眺める変迅堂。なんとなく秋の足音が聞こえてきた外の景色に、二人は早くも秋の哀愁を感じ始めているのだ。つた。

「で？」変迅堂は本題を切り出した。「大丈夫でしたか」

清はちよこつと笑った。「ええ。いい時代になったものです。昔だったら」清は手を交差させ続けた。「これものですからね」

「はは、そうですね」変迅堂は笑った。「松平定信様がご老中だった頃は、本当に厳しかったですからね」

「まったくまったく」清もウンウンと頷いた。

「で、売れているんですか？」

ホクホク顔で清は答えた。「ええ。売れてますよ！ 鵜狩借遣作「業火」！ 実際の事件を材にとっているだけあって、江戸っ子たちの評判も上々で……」

そう、成迫屋は、鵜狩の作品を、なんと出版したのである！ あの江戸を騒がせた火付け自身が書いた、実録物の小説を、である。これ、なかなか勇気のあることである。

と、いうのも、「言論の自由」のなかった当時、ちよつとしたことを書いただけでも奉行所に引つ張られてしまうからである。例えば、版元のビツクネーム・蔦谷重三郎という人などは、恋愛小説を発行していた、という「風紀を害した罪」で罰を食らっている。

変迅堂は言った。「いや、そうじゃないですよ。奉行所のほうは何も言っつきませんか？」

清は手を振った。「ええ、ええ！ それどころか、奉行所のお侍

さままで、あの本を買っていかれますよ」

「やっぱり、ご老中さまの性格によつて、出版業界はずいぶん影響を受けるんですね」変迅堂は、呟いた。

「まったくですよ」清はにじしし、と笑った。「松平定信様のご時世のときは、本当にひどかったですな。けれど、今のご老中さまは、あまり風紀にうるさい方じゃなくて助かってますがね」

「けど、今回は結構やばかったんじゃないですか？」

清は暗く瞳を光らせた。「え、いえいえ。これでも、お奉行様とつながりがありましたなあ。実は、南町奉行の根岸様と知り合いなのですよ」

「え？ 根岸様って、根岸肥後守様ですか？」

「そう。根岸様は下級役人出身で、結構な昵懇じっこんでしたので、話が通りやすく……。いえね、根岸様に見せたんですよ、あの戯作。もしたら、“ああ、これ程度のもの、問題なかるうよ” って笑つておられましたよ」

根岸肥後守、とは当時の南町奉行・根岸鎮衛である。元々は下級役人の子（農民の子という説もある）のだが、気がつくとも旗本になっていた、という江戸時代にはありえない出世を見せた男である。下積み時代が長いこともあり、町人たちの暮らしぶりを知っているから、「ものわがりのいいお奉行様」として江戸っ子から慕われている人物だ。

「けれど」清は嘆息した。「まさか、鵜狩さんがあんなに思いつめていたなんてねえ……」

「ええ」変迅堂も頷いた。

鵜狩は、あの時、江戸に火をつけた動機を話してくれなかった。けれど、答えはすっかり彼の残した戯作の中にあつた。

清は、パラパラと鵜狩の戯作「業火」をめくつた。「この話に出てくる主人公・烏は間違いなく鵜狩さんのことでしょうかからねえ」
「ええ」変迅堂も頷いた。

「変迅堂さんはご存知でしょうけど、この話の主人公・烏は駆け出

しの戯作者なんですよね。でも、どんな話を書いても鳴かず飛ばず……多分鵜狩さんは、自分の境遇を、そのまま戯作に流用したんでしょうな」

「ああ、でしょう」

「しかも、この話の中で、鳥は……」声を詰まらせた清の代わりに、変迅堂が言葉を継いだ。

「“江戸”に恨みを持つようになるんですよね、確か。自分の戯作を、いや、自分自身を認めてくれない“江戸”に。そして、どんどん、江戸に対して嫌悪感を抱いていった鳥は……」いや、正確には、鵜狩は。

「火をつけ始めるんです」清は言った。「まるで、堰を切ったように」

「ええ」

「そして、最後は……」

「谷保の天神様に火をつけて自害」変迅堂は呟いた。

一瞬の間。その沈黙を、清が壊した。

「実は、今日お呼び立てしたのは、あなたに、お聞きしたいことがあつたからなんです」

「え？ けれど私なんかでは……」

「ええ、全てのことは、鵜狩が残した戯作に書かれています。けれど……鵜狩はどうしたわけか、詳しく書いてくれないところがあるんです」

「それは」変迅堂は言った。「きつと、戯作者・鵜狩の、矜持でしょう。きつと、そこは読み手のために残してある所なんだと思いますよ」

「けれど」清は言った。「私は、知りたいんです。なんで鵜狩があんなことをしたのか。私は、彼の一番近くに居た、もしかしたら彼の凶行を止められたかも知れない人間なんです。ならば、彼から目を背けてはいけない気がするんです」

「……ならば、答えられる範囲で。私だって、鵜狩さんじゃありま

せんから」変迅堂はそう言って、控えめに笑った。

「じゃあ…」少し間をおいて、清は訊いた。「なんで、鵜狩さんは火をつけるのに、臭水を使ったのでしょうか？ だって、おかしくないですか？ 臭水は江戸では手に入りにくいものだそうではないですか。しかも、鵜狩さんの故郷、越後に良く産出するそうじゃないですか。どうしてそんな、あからさまに足のつきやすいものを使っただんでしょうね」

変迅堂は、少し間を置いて答えた。「越後国では、臭水を灯明に使う人も居るそうなんですが、そのせいで火事が絶えないそうです。多分、そういう連想もあつたのかな、とは思いますが」

「いや、でもその連想だけじゃ、理由にならないでしょう？ だって、わざわざ、足のつきやすいものを使うなんて……。だって江戸には、もっと手に入りやすい菜種油が、相当出回っているんですから」

「多分、ですけどね」変迅堂は言った。「きつと、足のつきやすいものを、好んで選んだんですよ、鵜狩さんは」

「え？」怪訝な顔を浮かべる清を尻目に、変迅堂は続けた。

「きつと、鵜狩さんは、自分が犯人だと気づいて欲しかったんですよ」

「ま、まさか。だって、火付けがバレたら……。」清は言った。「火あぶりですよ？ 彼は、死にたかった、とでも？」

「ええ、死にたかったんでしょう」変迅堂は言った。

「ど、どういうことですか？」

「彼は」変迅堂は続けた。「きつとこの連続火付けを計画している時点で、多分死を覚悟していたんです。いや、正確には」

「正確には？」

変迅堂は、あの雨の鬼子母神を思い出しつつ言った。「命を賭すつもりだったんでしょう」

「言っていることがよく分かりませんが…」

変迅堂は頭を掻いた。「そうですね……。ちよつと順を追って説

「明しましょう」

「おねがいします」

「……そもそもですね、この事件を起こした、鵜狩さんの動機って何なんでしょうね？」

「え？ それは……江戸に嫌気が差して……」

変迅堂は言った。「果たして、それだけでしょうか？」

「え？」

変迅堂は続けた。「鵜狩さんは、きつと……」

「きつと？」

「振り向いて欲しかったんですよ」

「は？」

「戯作者として、鵜狩さんは成功したかった。命を懸けてでも。そう考えれば、つじつまが合う気がするんです」

「と、いうと？」清は訊いた。

「清さん、ところで、この鵜狩さんの戯作、売れてるんでしょう？」

「ああ、売れてますよ。それが何か？」

「何でそんなに売れてるんだと思います？」

「え？ それは……話題性、でしょうね。実在の、犯罪が書かれている、という」

変迅堂は手を叩いた。「そう！まさに話題性なんです。……もし、ですよ？もし、何か大きな事件の犯人が、自分の犯行について書いた本が出たら、どうでしょうね」

「ああ！清も手を打った。「ものすごい、話題性ですよ！」

「そういうことです。きつと、鵜狩さんはそれを狙っていたんです」

「なるほど、そうすれば」清は言った。「絶対に売れますからね」

「多分、そのために、足のつきやすい臭水を使っただけです。そうすれば、自分が死んだあとでも、犯人である自分の名が、あるいは自分の戯作が、江戸中に知れ渡りますから」

「ああ」弱く、清は頷いた。

「でも、それだけじゃないような気もするんです」

「え？」

「私には」変迅堂はボソつと続けた。「彼なりの、自己顕示に思えるんです。“オレは、ここにいるぞ”っていう」

百万都市・江戸。そこは、卓越した人間でなければ、百万人の中に埋もれてしまう町。そんな町で存在感を示すためには、卓越するより他にない。あるいは、奇矯な行動をとって、世間を驚かすしかない。鵜狩は、卓越しようと努力したが果たせず、世間を驚かせる道を選んでしまった。

変迅堂は、深くため息をついた。

「で」清は変迅堂に訊いた。「鵜狩さんは、今どこに……」

「ええ。詳しくは言えないんですが、今は、修静庵さんの紹介で、ある寺で雲水（お坊さんのタマゴのこと）をしています。記憶は、全てないんですけどね。その寺の法師さんは、「なかなか頭のいい男だね」と喜んでくれているようですけど」

「そうですか」清はため息を吐いた。

「どうしましたか？」

「いえね、もつたいたい、と思いましてね」清は言った。

「？」

「どんな道でもそうなのでしょうけれど」そう前置きして、清は続けた。「戯作、というのは、書き続ければ書き続けるだけ腕が上がるものなんです。それに、彼には才能があった。多分、あと五年も頑張れば、きっと江戸中に名が知れ渡るような戯作者になったはずです。……けれど彼は、結局そこまで待てなかった。それが、もつたいたい、って思えるんです」

変迅堂は、何も言えなかった。

「まあ」清は言った。「彼が、生きている。それだけで良しとしなくてはいらないのでしょうかね」

清の顔には、深い後悔が刻まれていた。

暑い夏。その夏は去った。

そして、あの男も江戸から去った。

二人はしばし、あの洒脱な黒い着流しをまとった気持ちのいい男
のことを、まるで暑かった夏を思い出すかのように思い馳せたのだ
った。

エピソードその二「夏の最後っ屁」【完結】

「よし！ 出来たぞ！！」

陽光が弱まり涼しくなった江戸八百八町。その片隅、文人長屋の中でそう叫ぶ変迅堂。

変迅堂が居るのは変迅堂の長屋の一室、らぼである。らぼの中で、「出来たぞ！」と叫ぶ、ということは……。はは、ん、また変迅堂さん、何か作りましたね、ってなもんです。

「もう！ 先生！ ずっとあたしを待たせっぱなしなんて、どういっつもり！！」

ちあきが、ぶち破るような勢いでらぼの戸を開けた。

「ああ、ちあき殿！ 出来たんだ！ 新発明が！！」

「ししし、新発明！？」

変迅堂はウキウキ顔で続けた。「そう！ また作ったんだ！！

これは我ながら、すごい発明だよ！！」

「まったく！ あたしより発明！？」

と言いたいちあきだったけれど、変迅堂の浮かべる子供っぽい笑みに、毒気が抜かれてしまう。そして、結局こう訊いてしまうのだ。

「……………どういう発明なの？」

結局のところ、ちあきは発明とかいうガラクタをこねくり回して作る変なものに目をきらきら輝かせる変迅堂が好きなのだ。

「これ？ これはね……………」変迅堂は言った。「太陽の香りを粉末状に加工したものさ」

「た、太陽の香り？」どうでもいいが、さっきから訊いてばかりのちあき。

「うん、太陽の香り。ほら、布団を晴れた日に干すと、あつたかい、いい香りがするでしょ？ あの香り」

ちあきは、ふと日干しから仕舞って畳まれている布団に倒れこんだときの、あの暖かい香りを思い出していた。鼻腔を刺激して、眠

りの世界へ導く、あの安心するような、心地良いような、そんな香り。

変迅堂は続けた。「あの香りって、嗅ぐと安心するでしょ？　そこで、考えたんだ。その香りを抽出できないかな、ってさ。あの匂いをかけば、きつと悪事を働こうかな、って思っている人だって、きつと思いとどまってくれるだろうから」

「ふんふん」

「で」変迅堂は、おもむろに試験管をちあきの前にかざした。「出来たんだ！　香りの抽出！！」

試験管の中には、黄色い粉末が2分目くらいまで入っていた。

「これが、その香りなの？」ちあきは、あきらかに胡散臭い、という顔をした。

「うーん、まあ、一応……。あと、これに熱を加えると、あの臭いが発生するんだ」

「熱？」ちあきが訊いた。

「そこで」変迅堂は続けた。「尺玉を使って、江戸中にこの香りを散布しようと思うんだけど……」

「だけど？」ちあきは身をすこし乗り出した。

「一緒に行く？」

「うん！」

ちあきは、首を折れんばかりにブンブン振った。犬か。

空き地。

ここは、江戸各所にある「火除地」という、火事の燃え広がりを防ぐために作られている空き地の一つで、文人長屋に一番近いところにあるものだ。

その中で、変迅堂は尺玉の台座を据え、「太陽の香り」をセットした尺玉を台座に納めた。

「へえ、手馴れてるんだね、先生」

「……あ、ああ、この前、鍵屋さんを手伝ったから……」

「ああ、なるほど」ちあきは、気付かなかったようだ。変迅堂の受け答えの端々にあった違和感に。

「さ、いくよ！ ちあき殿、耳塞いで！」

片耳を塞いだ変迅堂が、そう叫んだ。少し離れたところにいたちあきが言われたとおりに耳を塞ぐと、変迅堂は台座から飛び出ている導火線に火をつけた。

じじじじじじ……、どーん！

季節はずれ。しかも、まだ日は傾いていない。そんな、色んなものから外れまくった花火が、ヒューという風きり音を立て、やがて空中で破裂した。

「……さて、ちあき殿、帰ろうか」

「え！？ もう！！！」

「うん、多分効果が出始めるのが四半刻（三十分）くらいあとだからさ」

「あ、そうなんだ」

ちあきは、おとなしく文人長屋に帰ることにした。

四半刻後。

「あぢ〜！！」ちあきは、団扇で顔をあおいだ。

「あれ？ おかしいなあ……、何でこんなに」

秋の香りさえ感じ初めていた江戸の町に、なぜか夏の空気が襲ってきたのだ。つまりは、モーレッツな残暑。

「決まってるじゃん！」ちあきは汗を拭いながら言った。「先生の発明のせいだよ！！ ああ、あぢ〜！！」

「うん、実際そうかも……。うん、また失敗か」

変迅堂はがつくりと肩を落とした。その拍子に、ちょっとメガネがずれる。

「もう！！」ちあきは変迅堂の顔を、恨めしそうに一瞥したあと、不意に笑った。

「ん？ どしたの？」変迅堂はメガネを上げた。

「え？ なんでもない！」ちあきは、ごまかし笑いをした。

本当は。ちあきはこう言いたかったのである。

「また、頑張ればいいじゃん。あたしは、頑張る先生が大好きだからさ」って。

でも、ちあきは、その言葉を先のために取っておくことにしたのだ。これから先にあるだろう、そういう言葉をかけるべき時のために。

「そのうち、教えてあげる！」

「ふうん？」

変迅堂は首を傾げて、戸の外に広がる、今年最後の夏模様を見やっただ。

江戸っ子たちは、変迅堂の作った「夏」を、「夏の最後っ屁」と呼んだとか呼ばなかったとか。

……さて、夏という季節が終わっても日々の暮らしは続くように、二人の関係は、これからも続きます。けれど、このお話は、とりあえずここでおしまい。

けれど、また機会があればお話することもあるつかと思います。では、これにて、いったん終幕。

エピソードその二「夏の最後っ屁」【完結】（後書き）

これにて、「明日は晴れるだろ」完結です。2ヶ月ほどでしたが、最後まで読み進めていただいた方、ありがとうございます。切に御礼申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2191d/>

明日は晴れるだろ

2010年10月8日13時09分発行